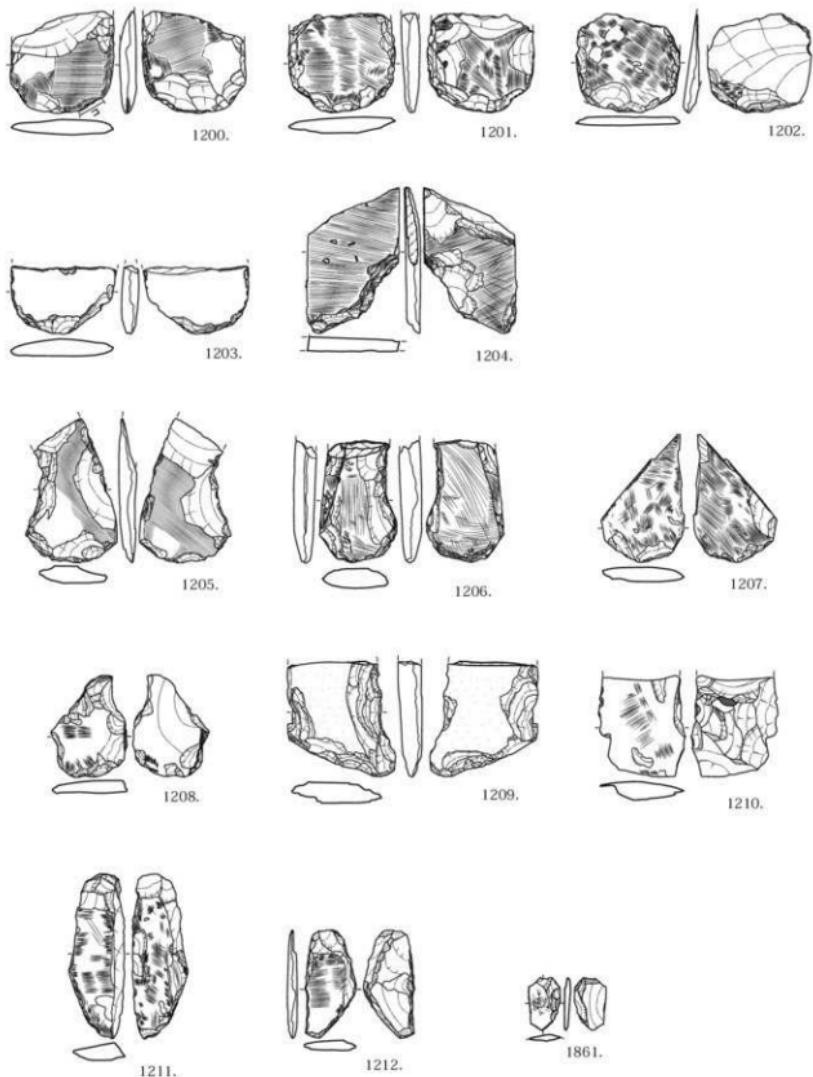


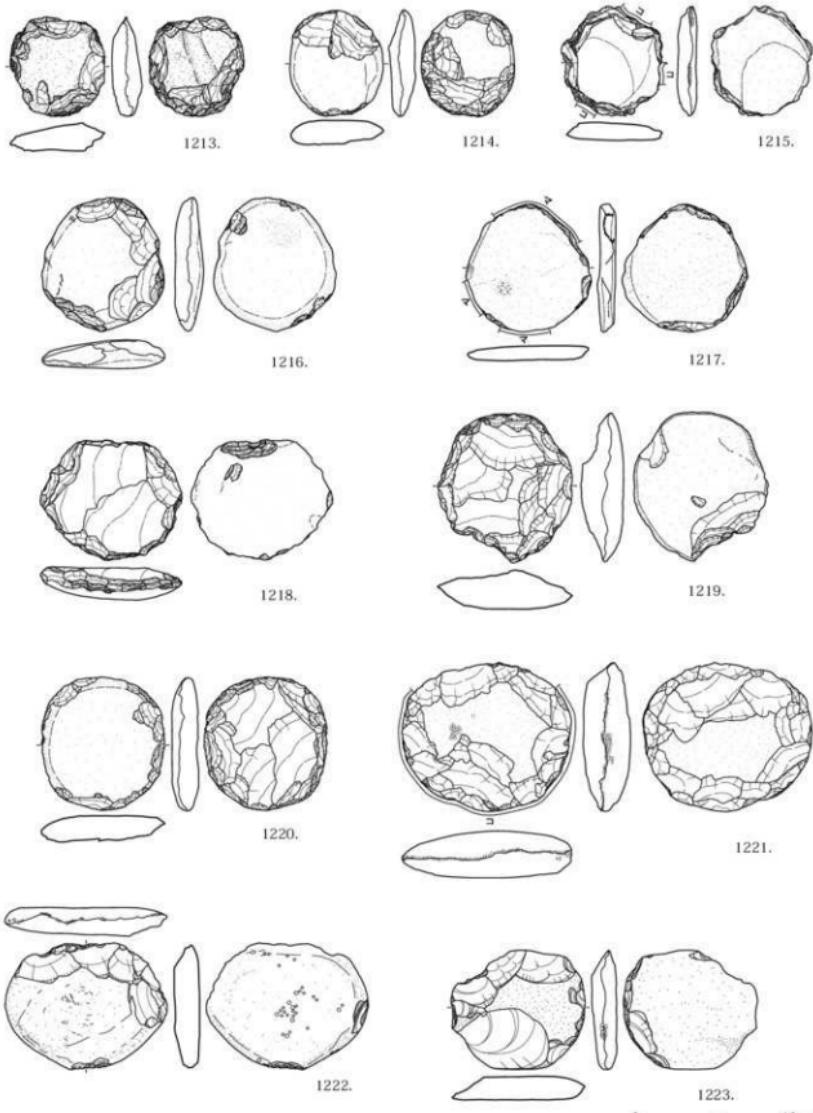
第149図 磨製石製品(2) S=1/3

0 1:3 10cm

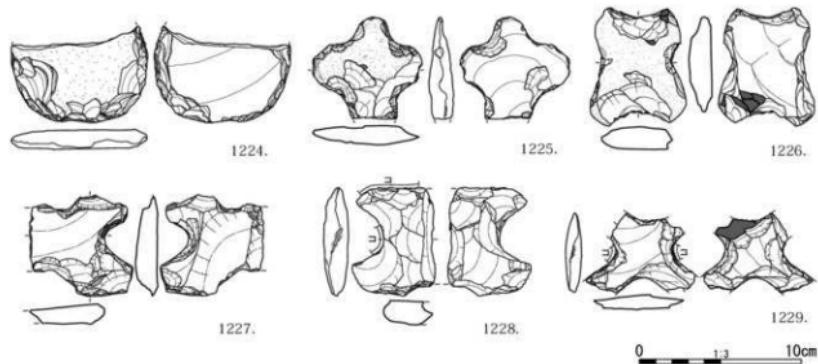


第150図 磨製石製品（3） S=1/3

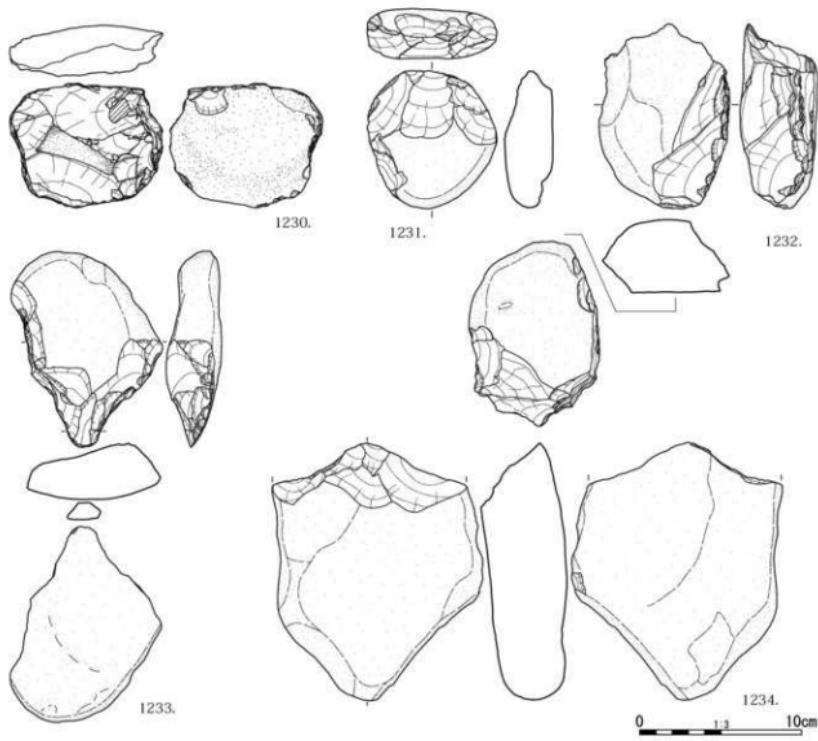
0 1:3 10cm



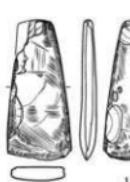
第 151 図 円盤形石器 (1) S=1/3



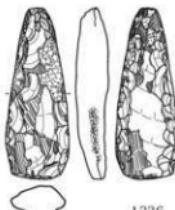
第 152 図 円盤形石器 (2), 十字・X 字形石器 $S = 1 / 3$



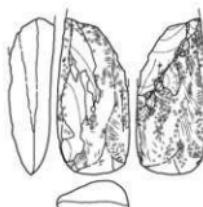
第 153 図 碟器 $S = 1 / 3$



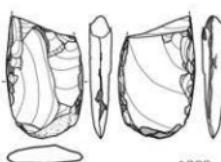
1235.



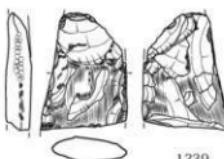
1236.



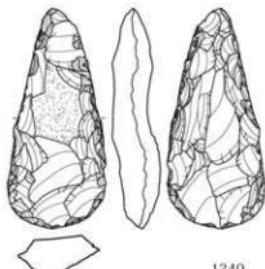
1237.



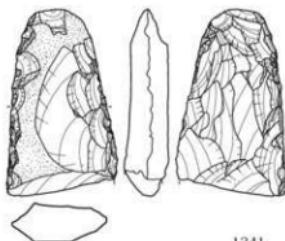
1238.



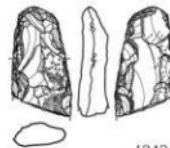
1239.



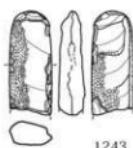
1240.



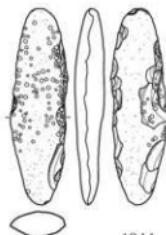
1241.



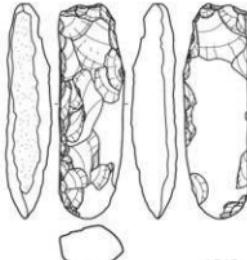
1242.



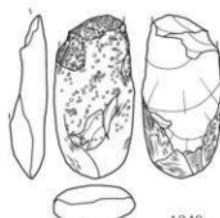
1243.



1244.



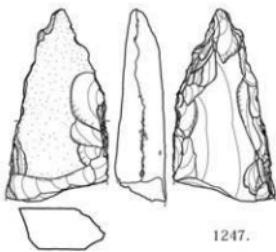
1245.



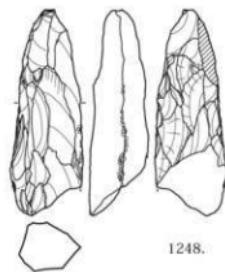
1246.



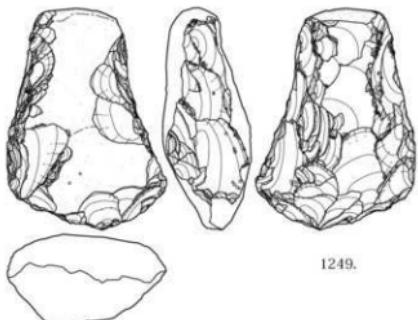
第154図 磨製石斧 (1) S=1/3



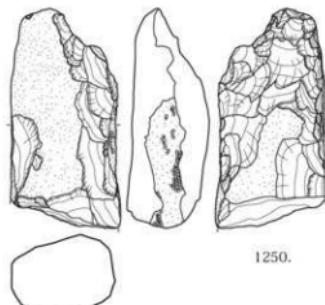
1247.



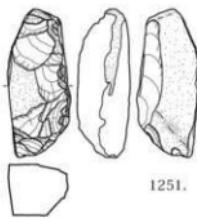
1248.



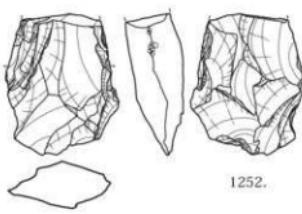
1249.



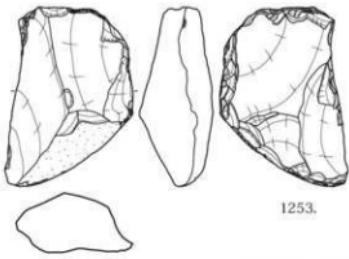
1250.



1251.



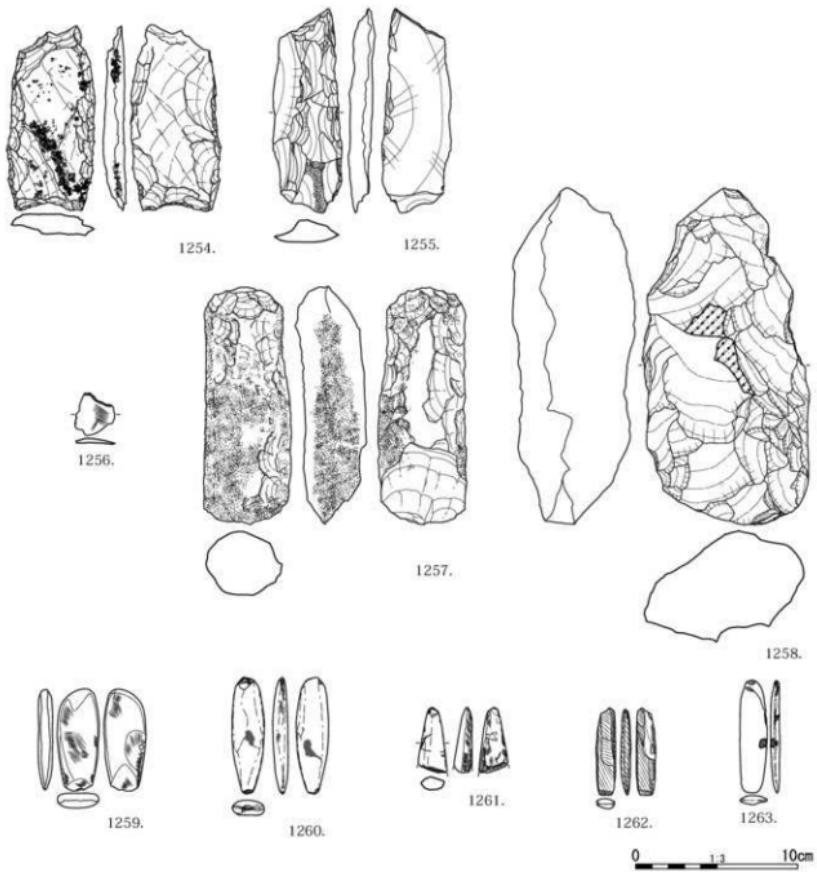
1252.



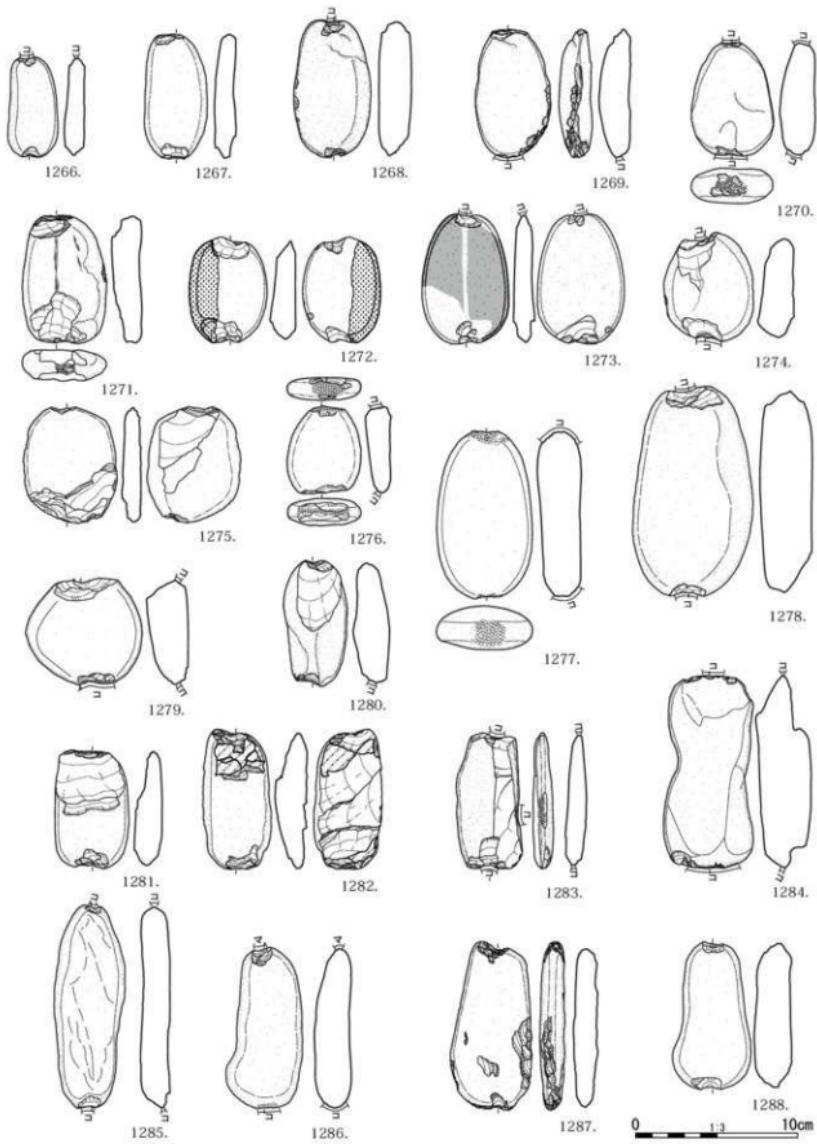
1253.



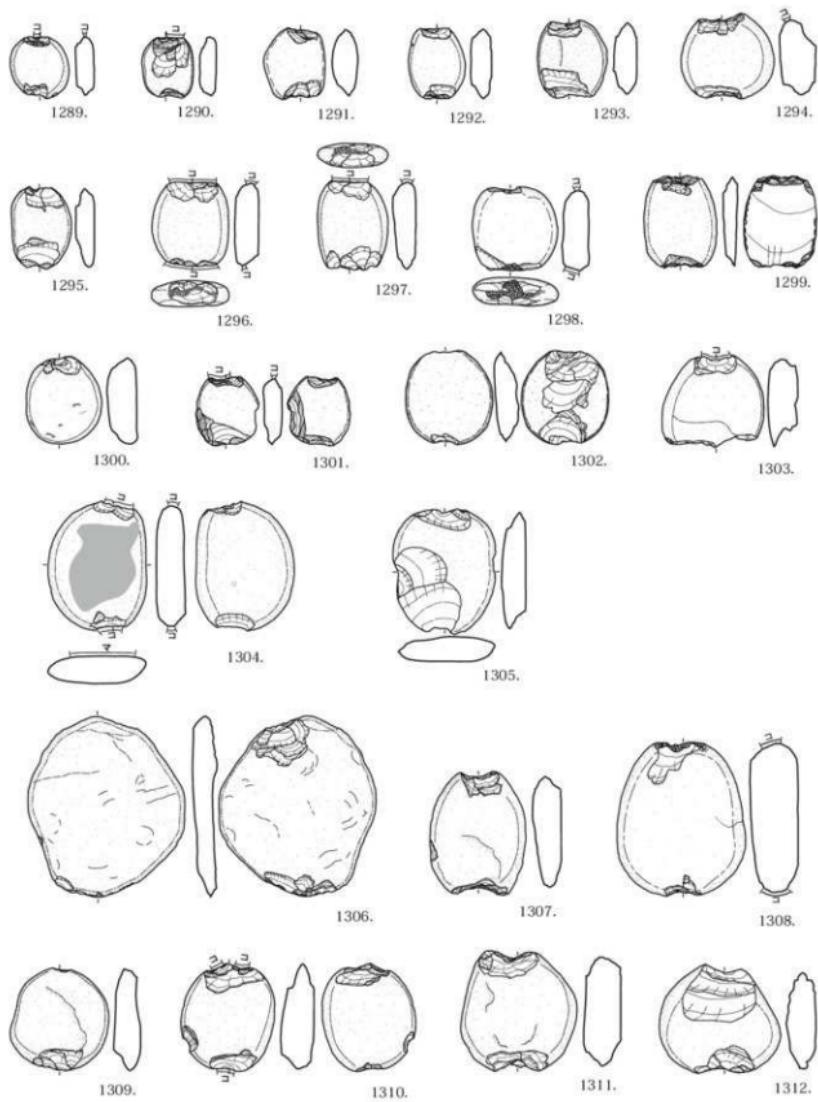
第155図 磨製石斧(2) S=1/3



第156図 磨製石斧（3） S=1／3

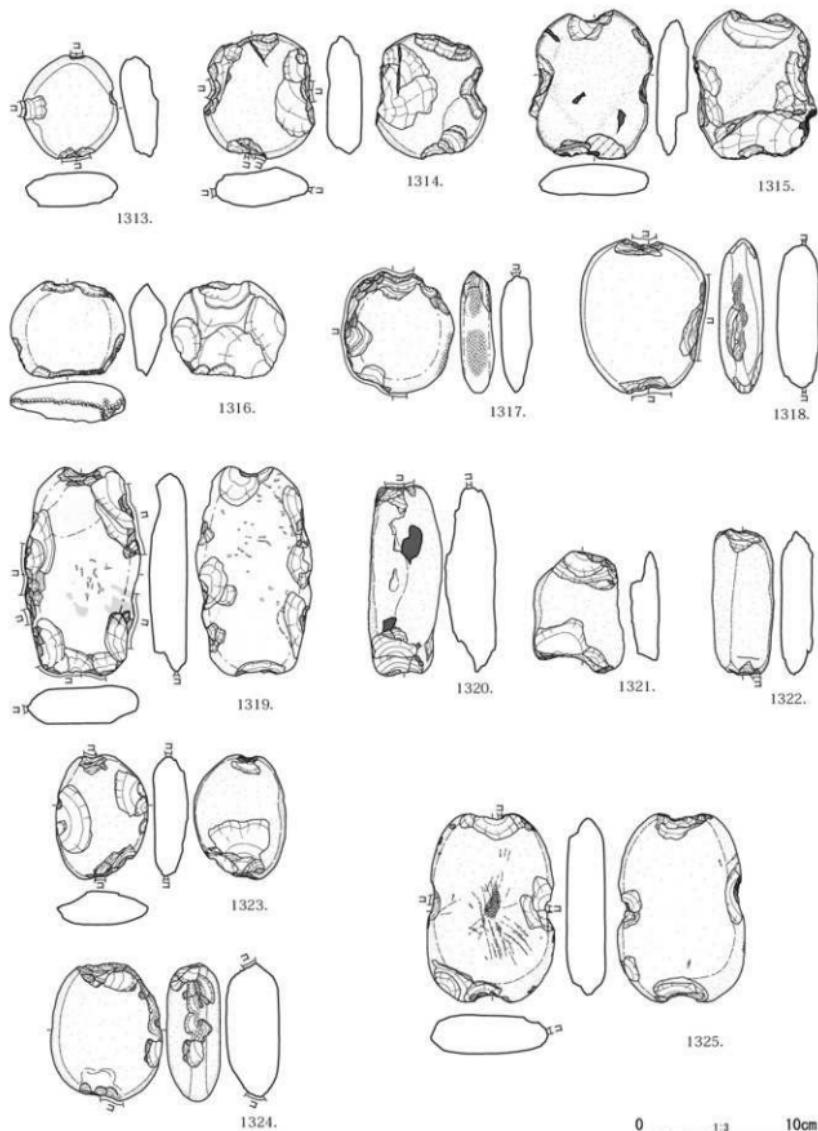


第158図 打欠石錘(1) I類:長軸打欠(1) S=1/3

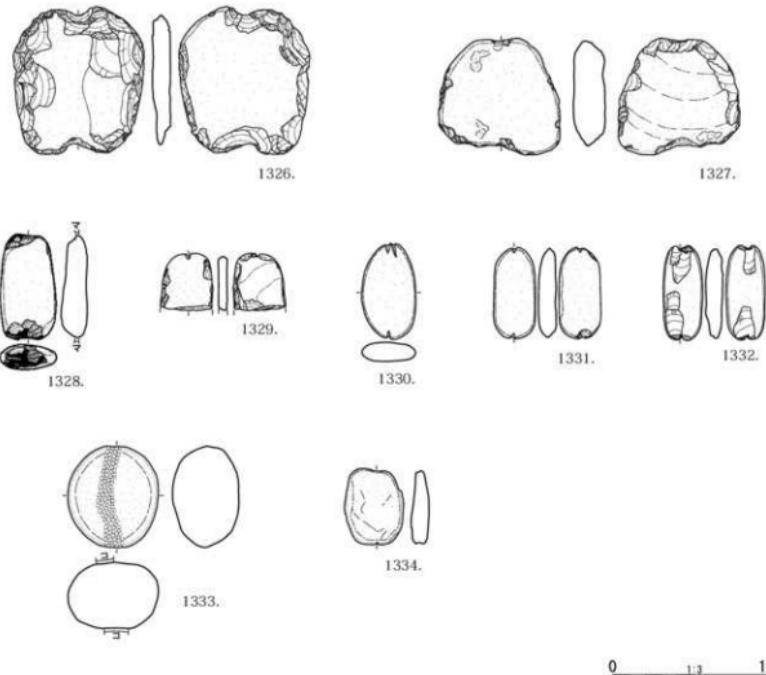


第159図 打欠石錘(2) I類(2), II類: 短軸打欠 S=1/3

0 1:3 10cm



第 160 図 打欠石錘 (3) III類：双軸打欠 (1) S = 1 / 3



第161図 打欠石錘（4）Ⅲ類（2），切目石錘，有溝石錘，自然礫石錘 S= 1 / 3

□凹石（第166～168図）

概要 本書では、主に円盤を素材とし、その比較的平坦な面の一部に主に敲打による凹部が形成された石器を凹石と規定した。これにしたがって資料を抽出した結果、數十点を認めることができた。うち22点を図示した。

ほとんどの資料が円盤を素材とすること、専ら砂岩を選択すること、などが共通点として挙げられるが、様態は変異に富む。また、敲打による産みだけではなく、磨石や敲石、砾器、台石、石皿といった他器種が担う行為の痕跡も残される。1369・1374などは敲石として、1371～1373は磨石としても使用されている。1380は台石ないし、石皿の役割を果たしたものであろう。

したがってここで凹石と呼ばれるカテゴリー

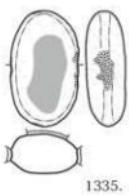
は、他器種とも共有される諸行為の交叉点的な意味合いを持つものであって、石錘や打欠石錘などよりも独立性の低い器種名と言える。

敲打痕には円形のものと、線状に走るものとが認められる。

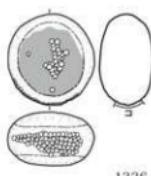
□敲石（第169～172図）

概要 本遺跡からは200点以上の敲石が出土している。うち、38点を図示した。

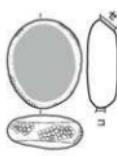
当該器種も変異に富むが、大きくは二つのグループに分けられる。一つは砂岩の棒状砾を素材とするもので、長軸の端部に敲打痕が残される資料が多い（第169～171図）。いま一つは尾鈴山産溶結凝灰岩の扁平円盤を素材としたもので、先に磨石の記載に述べたライフサイクルが推定される一群である（第172図）。この他には球形砾



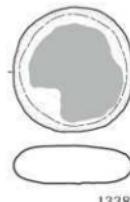
1335.



1336.



1337.



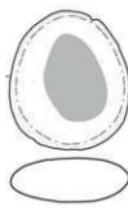
1338.



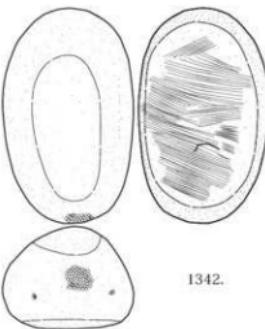
1339.



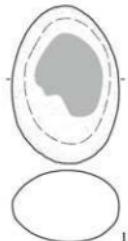
1340.



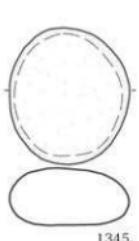
1341.



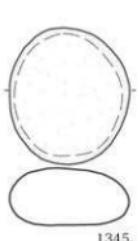
1342.



1343.



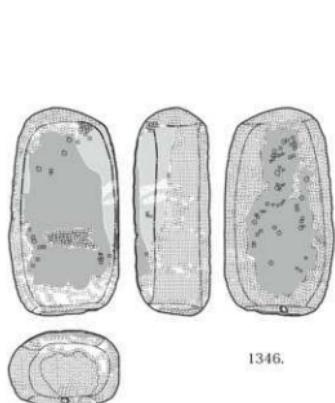
1344.



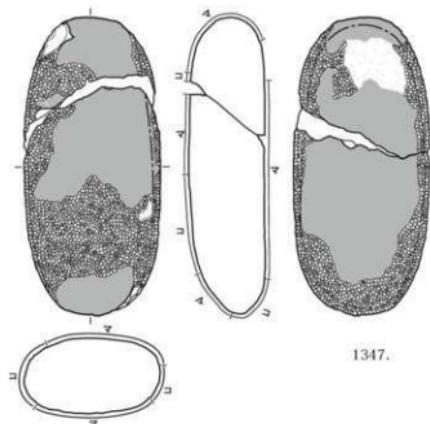
1345.

0 1:3 10cm

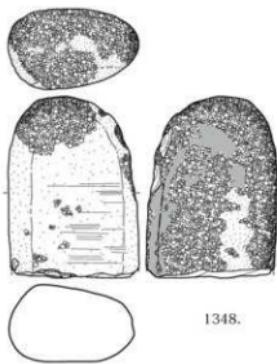
第 162 図 磨石 (1) S= 1 / 3



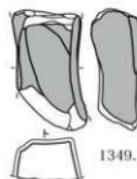
1346.



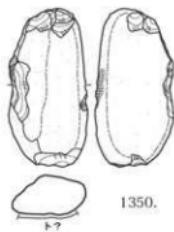
1347.



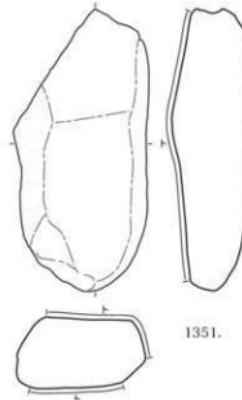
1348.



1349.



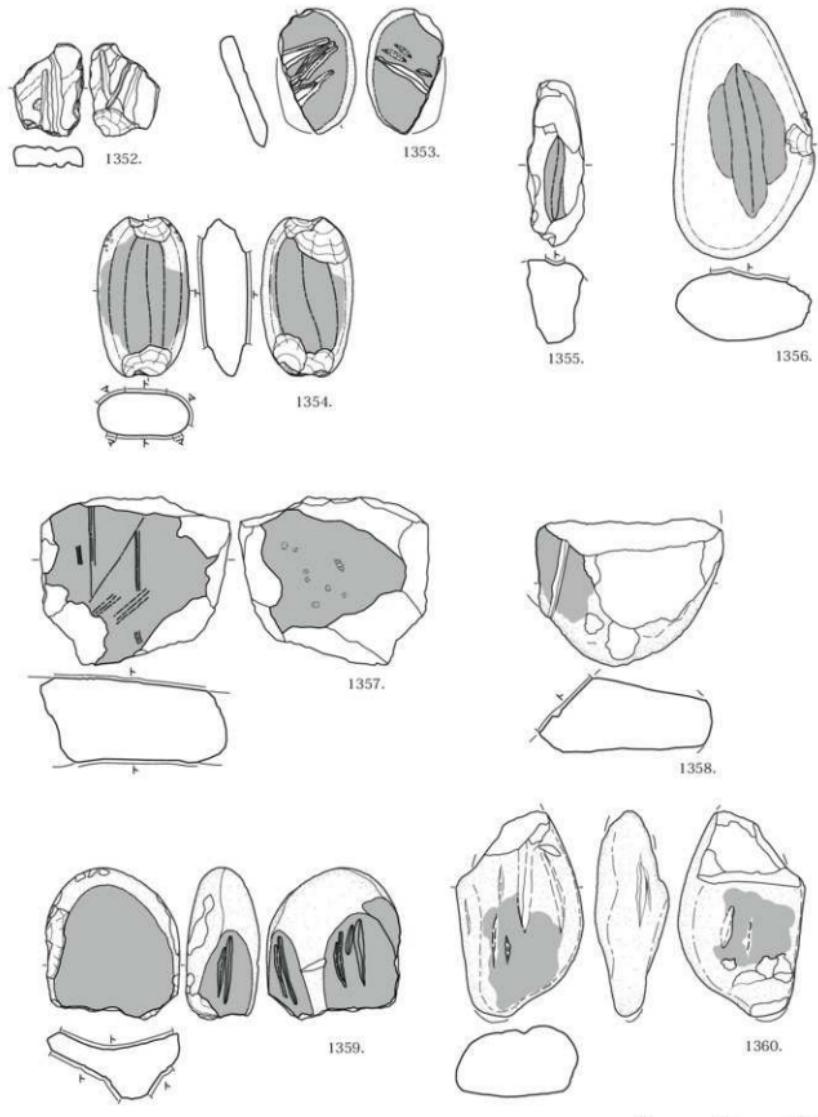
1350.



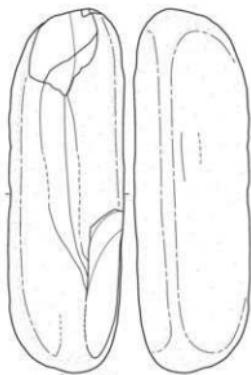
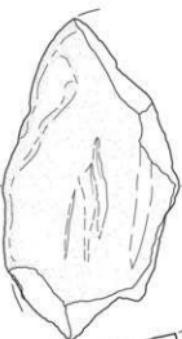
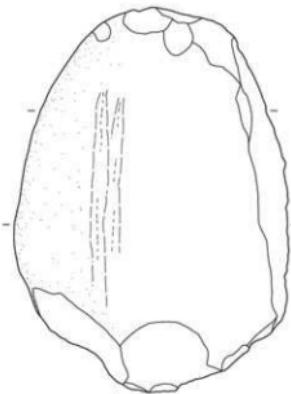
1351.

0 1:3 10cm

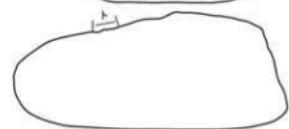
第163図 磨石(2)・砥石 S=1/3



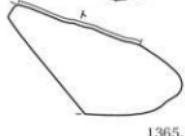
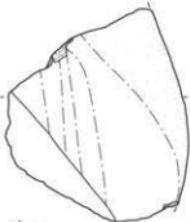
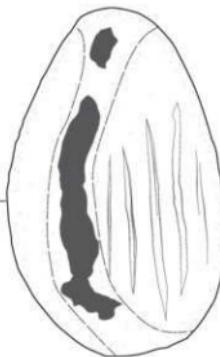
第 164 図 磨石、筋砥石 (1) S= 1 / 3



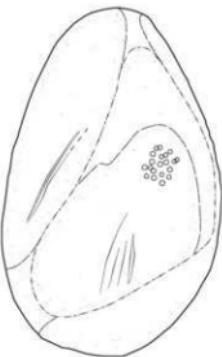
1364.



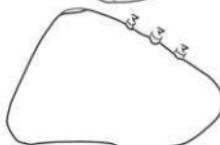
1362.



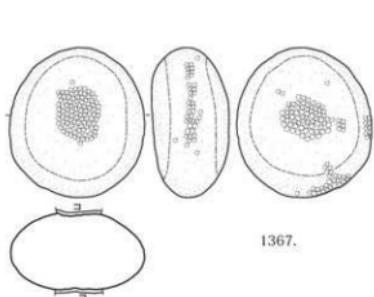
1365.



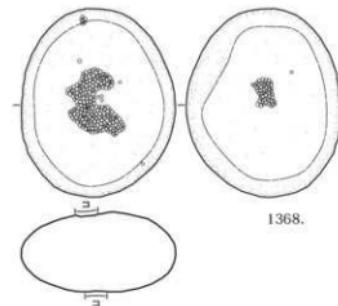
1366.



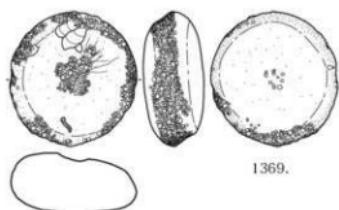
第165図 筋砥石(2) S=1/3



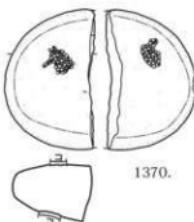
1367.



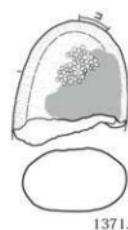
1368.



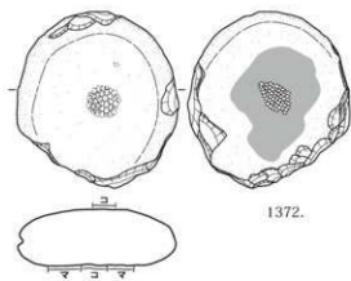
1369.



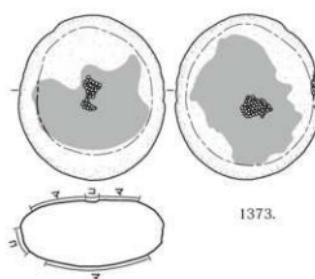
1370.



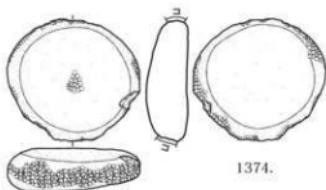
1371.



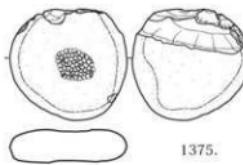
1372.



1373.



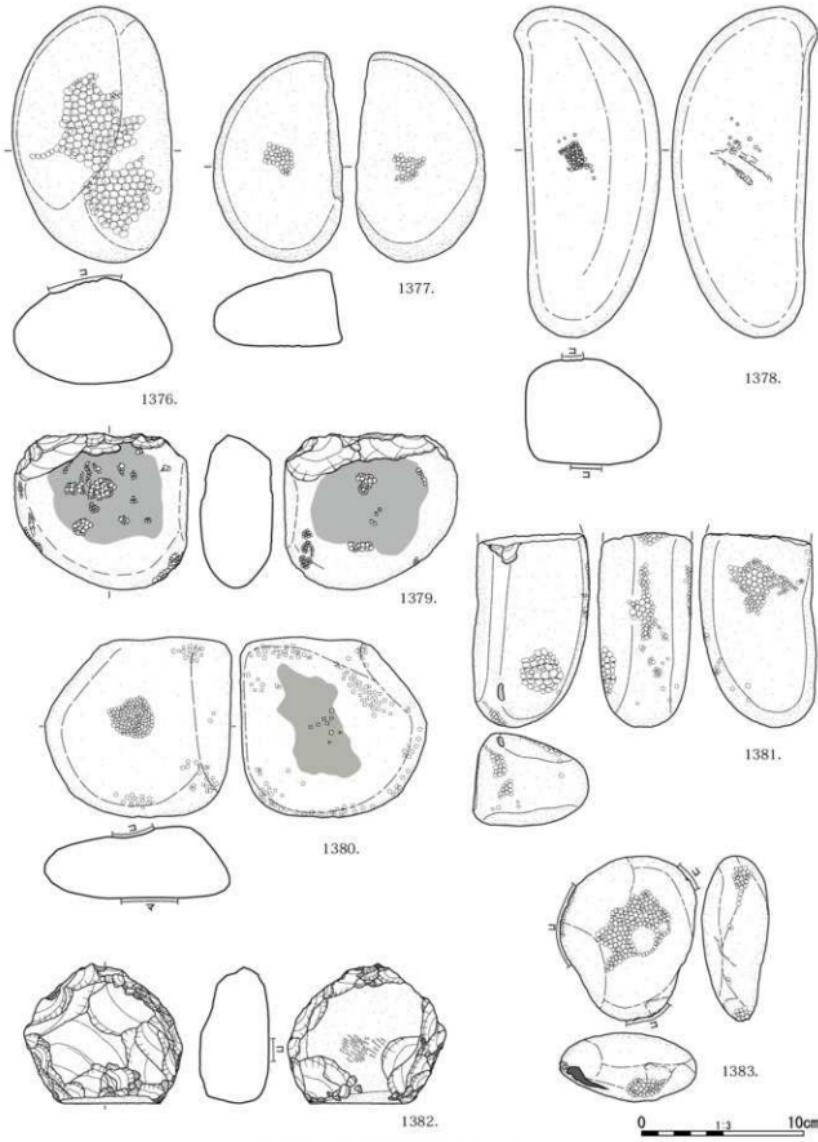
1374.



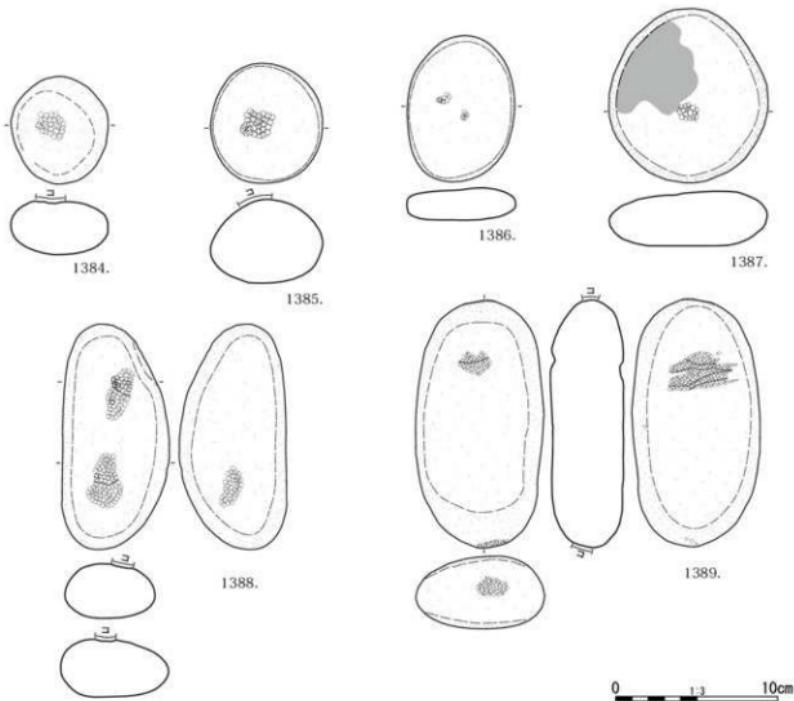
1375.

0 10cm

第166図 包含層出土の凹石 (1) S=1/3



第167図 包含層出土の凹石 (2) S=1/3



第168図 包含層出土の凹石（3）・敲石（1） S=1/3

を素材として、敲打面が多面体状に消耗するもの（1396・1398など）、ストーンリッチャーワーク的な用途が想定される小形品（1412～1414）、棒礫を素材とし長軸に沿う側縁に連続した敲打・剥離痕が観察される資料（1406）などが注目される。

□石皿・台石（第173・174図）

概要 包含層中から多くの当該器種関連資料が出土したが、大多数が破損している。使用石材は砂岩が量的に多く、次いで尾鈴山産溶結凝灰岩が多用される。ほとんどが自然礫の形状をよく残しており、有縁と呼べる資料は存在しない。以下、個別資料に即して、変異を概観する。

観察所見 1428は尾鈴山産溶結凝灰岩製で、一方の平坦面に疊らな敲打痕を残す。大きく破損する資料であるが、周縁を大降りな剥離で整形し

ている点は注目される。

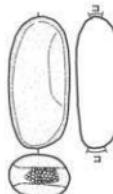
1429は砂岩製の小形品であるが、表裏の平坦面に顕著な線状痕が残される。

1431は尾鈴山産溶結凝灰岩製で、大きく破損しているが、大型の石皿である。注目すべきは、表裏いずれの面もが、激しく磨耗して凹みを生じている点である。管見の限りではあるが、これほどまでに使い込まれた事例は周辺地域における類例に乏しい。

1432・1433は大形で太めの棒状礫を素材とするもので、いずれも表裏ないし三方の平坦面に疊らな敲打痕と磨滅痕を残す。注目されるのは、長軸の一方の端部に敲打・剥離痕を残す点である。重量から判断して、片手で軽々と扱える敲石とは考えにくく、両手で持つ敲石を想定するにしても、



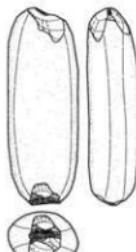
1390.



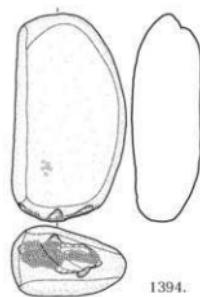
1391.



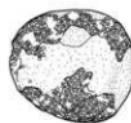
1392.



1393.



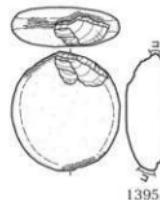
1394.



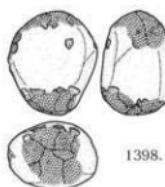
1396.



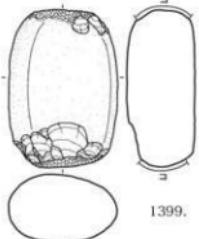
1397.



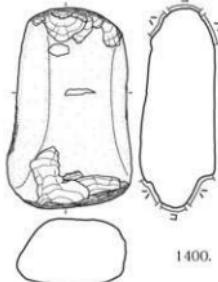
1395.



1398.



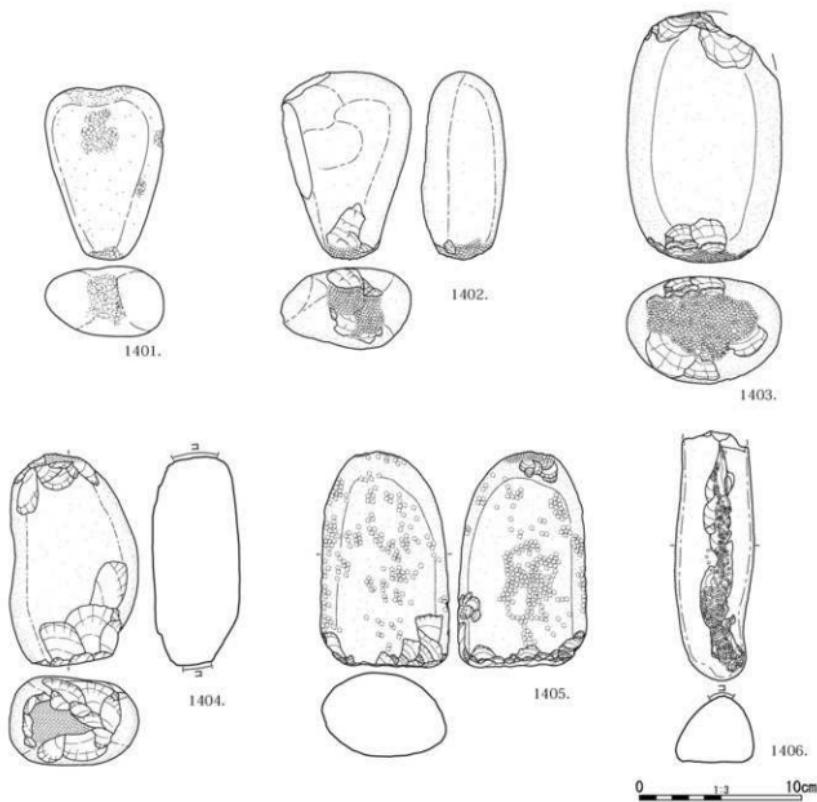
1399.



1400.



第169図 敲石(2) S=1/3



第170図 敲石(3) S=1/3

対象物や具体的な行為を推定することは難しい。 深い。

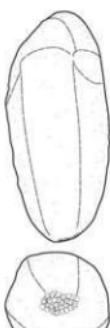
1435・1436は完形に近い状態の大形品である。

1435は砂岩製で、図左側に配置した面は図下側に向かって傾斜するように、磨滅範囲が形成されている。この裏面は自然面ではなく、剥離された、あるいは剥落した面を平滑に仕上げようとしたようみえる。

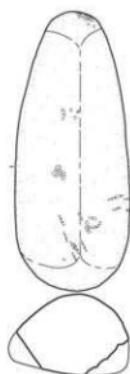
1436はA区における第2号溝状遺構の埋土中から出土した資料である。表裏両面ともに、中央付近に若干の窪みが形成されている。より消耗の少ない一方の面だけに敲打痕が残される点は興味



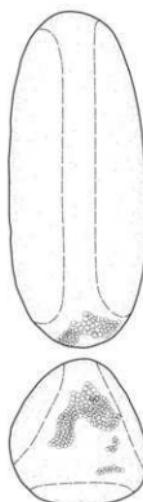
1407.



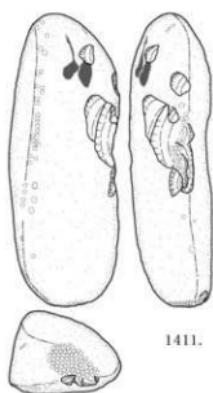
1408.



1409.



1410.



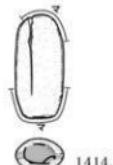
1411.



1412.



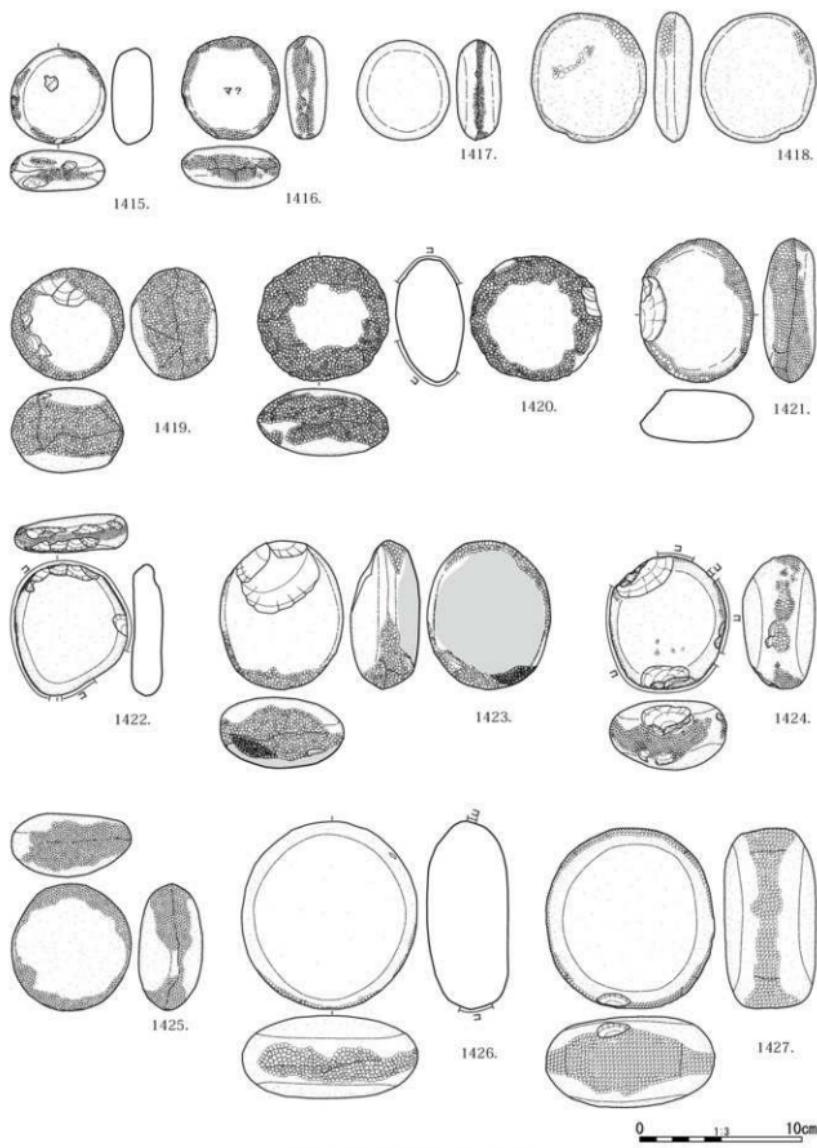
1413.



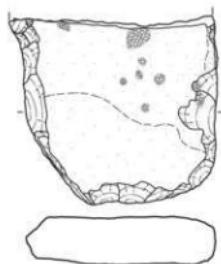
1414.

0 1:3 10cm

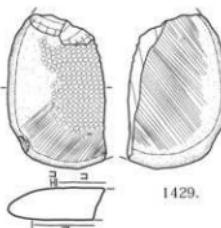
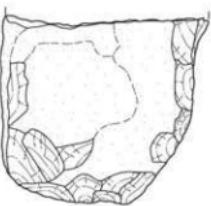
第171図 敲石(4) S=1/3



第172図 敷石(5) S=1/3



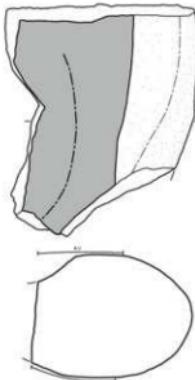
1428.



1429.



1430.



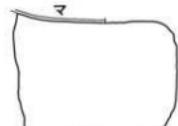
1431.



1432.



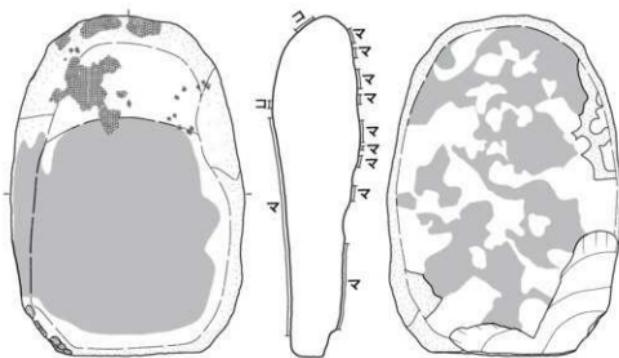
1433.



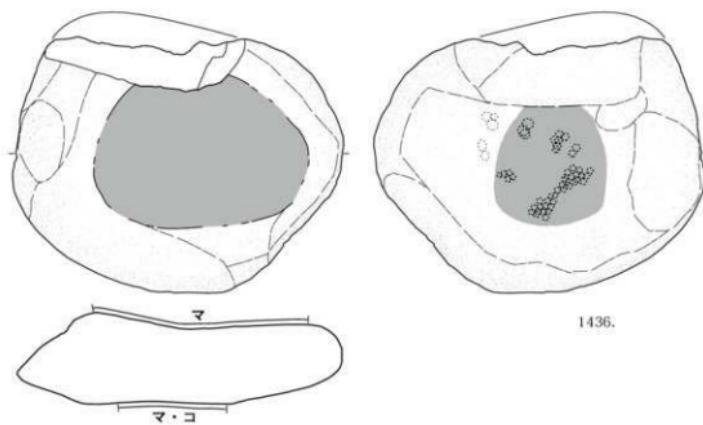
1434.

0 1/4 20cm

第173図 台石・石皿(1) S=1/4



1435.



1436.

第174図 台石・石皿(2) S=1/4

0 1/4 20cm

第3節 弥生時代

(1) 概要

当該期の遺物は、第1層および表土中から縄文時代後・晚期の遺物に混在する状況で出土しており、この時期の所産と考えられる遺構は確認されなかった。弥生時代後期の土器片がわずかに認められ、弥生時代に帰属する可能性が高い石器として磨製石鎌・打製石斧がある。その他、断定は困難であるが、当該期の打製石斧、磨製石斧およびその未成品と考えられる資料がある。総体的に評価して、前後の時代に比較して人類活動の痕跡に乏しい。

(2) 包含層中の遺物

■土器

□壺（第175図1437・1438）

2点図示した。いずれも壺の口縁部付近である。

■石器

□磨製石鎌（第175図1439～1441）

計6点確認し、うち3点を図示した。A・B（D）区の包含層および他の時代・時期遺構からの出土である。

使用石材は5点が淡緑色の赤色頁岩製、1点が暗灰褐色の頁岩製である。いずれも全面磨製で、器體中央に浅い凹部を有するものが多い。

頁岩製の1439は当該期に帰属すると判断したが、縄文時代早期または草創期の所産である可能性も排除できない。平面形は聖三角形に近い。

1440・1441は平面形が二等辺三角形で、基部は浅い凹基である。

□打製石庖丁（第175図1442・1443）

計3点確認し、うち2点を図示した。いずれもやや変成した頁岩製で、層状に剥離する傾向を持つ石質である。3点ともに長軸両端に抉りを入れる。

1442は短軸両縁がいずれも先鋒で刃部として機能しうるが、一方の側縁が研磨により丁寧に刃付けされている。

1443の刃部は破損しているが、研磨整形はなされていないようである。

図示していないもう1点は、片面に礫面を残す剥片を素材とし、短軸の一端に刃部を設ける。研

磨整形はなされない。

なお、東和幸氏によれば九州地方の一部（福岡県や宮崎県）では、古墳時代に至るまで石庖丁が使用され続ける可能性が指摘できるという（文献37）。本遺跡でも、本章第5節に後述するSAO2の床面から出土した石庖丁（第189図1470）を考慮すると、包含層出土資料3点も古墳時代の所産である可能性も排除できない。特に1442はSAO2出土資料と技術・形態的に共通する点が多い。また、これらが出土したA区では弥生土器の分布は確認されなかった。

□打製石斧（第176図）

遺構や共伴遺物を根拠に、弥生時代の打製石斧と明確に認定できるものはないが、他遺跡の事例を参考に形態上、可能性を指摘しうる資料を抽出した。抽出の対象となったのは有抉群・有柄群である。1444・1449のように基部側に近い箇所に抉りを入れたものや、1445のように尖刃の有抉群（有抉群VIb類）、同様に尖刃を持つ1446・1447などの有柄群に着目した。このように多分に恣意的な基準で抽出した資料群であるため、あくまでも可能性の提示にとどめておきたい。

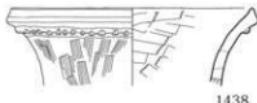
□磨製石斧（第177図）

確実に弥生時代の所産と言える資料はないが、可能性を持つ資料を一応提示しておく。

1451は磨製石斧の基部側を転用した敲打具である。本遺跡の縄文時代後・晚期の磨製石斧類に比べて厚みがあり、弥生時代所産である可能性が指摘できる。1452～1454は磨製石斧の未成品である可能性が指摘できる資料である。1454は砂岩の大形棒状礫に敲打による整形痕が面的に観察される。



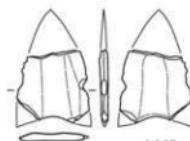
1437.



1438.



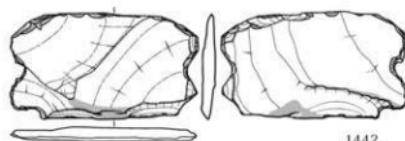
1439.



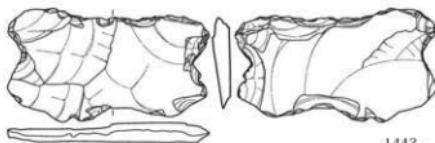
1440.



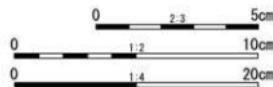
1441.



1442.

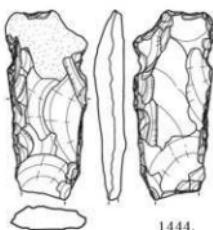


1443.

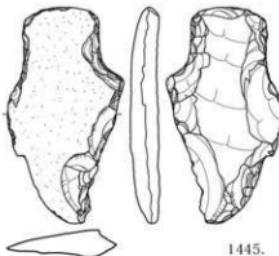


第175図 弥生時代の土器・石器(1)

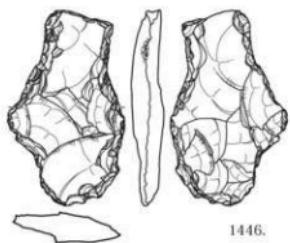
1437・1438: S = 1/4, 1439～1441: S = 2/3, 1442・1443: S = 1/2



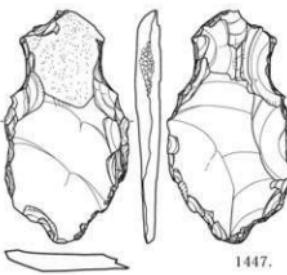
1444.



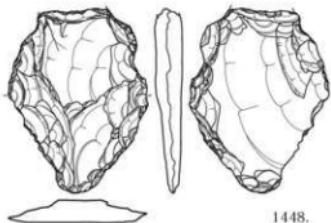
1445.



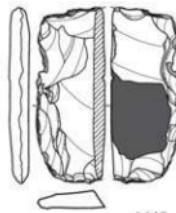
1446.



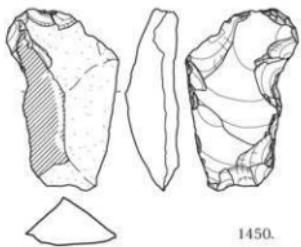
1447.



1448.



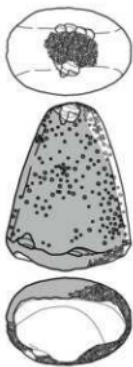
1449.



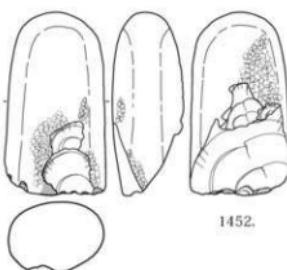
1450.

A scale bar marked at 0, 1.3, and 10cm.

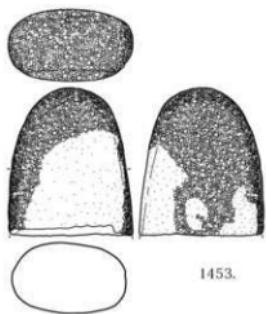
第176図 弥生時代の石器（2） 打製石斧：S=1/3



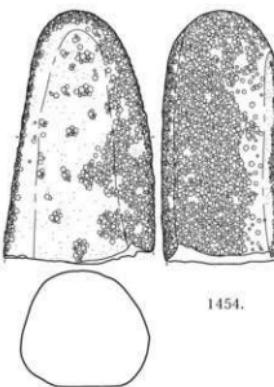
1451.



1452.



1453.



1454.

0 1:2 10cm

第177図 弥生時代の石器（3） 磨製石斧：S = 1/3

第4節 古墳時代以降の土器の器種分類および類型化

(1) 土師器

本項では古墳時代・古代の土師器について器種分類および類型化の詳細を記す。

完形資料に恵まれたとは言い難いが、器形の全像がある程度把握する事が出来たため、まず器形の分類を行なった。次に、各器形の文様帯を設定し、その文様パターンの組み合わせで各器形の細分を試みた。この資料操作により、最終的には野首第2遺跡における各器種の消長とセット関係、それに伴う文様を把握する事に努めた。

a 器種

甕・壺・高坏・鉢・浅鉢・塊がある。これらの器種は、次の器形に細分される。

b 器形

■甕

口縁部・底部の形状を細分し、その組み合わせで器形分類を行なった。各部位の分類は以下の通りである。

□口縁部 口縁部から頸部にかけての形状により分類する。

A類 「く」の字状。頸部の稜線が明瞭。

B類 A類よりも、立ち上がり角度が大きく、直立気味に緩やかに広がる。頸部の稜線が不明瞭。

C類 B類よりも立ち上がり角度が大きい。直立気味で頸部の稜線が不明瞭。



第178図 甕口縁部の類型分類

□底部 底部の断面形状により分類する。

a類 わずかに平坦面がある丸底

b類 丸底

c類 凸レンズ状



第179図 甕底部の類型分類

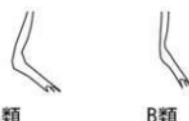
■壺

口縁部・底部の形状を細分し、その組み合わせで器形分類を行なった。各部位の分類は以下の通りである。

□口縁部 口縁部から頸部にかけての形状により分類する。

A類 直口、わずかに内湾する

B類 やや外反する



第180図 甕口縁部の類型分類

□底部 底部の断面形状により分類する。

a類 わずかに平坦面がある丸底

b類 凸レンズ状



第181図 壺底部の類型分類

■高杯

杯部の形状と脚部の形状を基準に分類した。

□杯部

- 1 明瞭に屈曲し、外反しながら広がる。
- 2 明瞭に屈曲し、口縁部で外反する。
- 3 屈曲が無く、やや外反する。

□脚部

A エンタシス状。

□器形 杯部と脚部の組み合わせのヴァリエーションとしては以下の三通りがある。

- 1類 杯部1と脚部Aの組み合わせ。
- 2類 杯部2と脚部Aの組み合わせ。
- 3類 杯部3と脚部Aの組み合わせ。



第182図 高杯器形の類型分類

■塊

口径と胴部最大径の比率で分類した。器形のヴァリエーションとしては以下のとおり。

- I 口径>胴部最大径
- II 口径<胴部最大径

■小型丸底壺

器形のヴァリエーションとしては以下のとおり。

- 1類 体部は鉢状で、口縁部が長い。
- 2類 体部は球状で、口縁部が長い。
- 3類 体部は球状で、口縁部が短い。



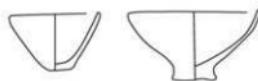
第183図 小型丸底壺器形の類型分類

■鉢

器形のヴァリエーションは以下のとおり。

1類 底部から、やや広がり気味に口縁部が開く。

2類 開き気味の口縁部に、高台付の底部



1類 2類

第184図 鉢器形の類型分類

■皿

器形のヴァリエーションは以下のとおり。

- 1類 体部が広く
- 2類 体部が内湾

第5節 古墳時代

(1) 概要

総計34軒の竪穴住居跡、これらに付随する土坑が検出された。遺物として土師器・須恵器・玉類などが出土した。

(2) 遺構および遺構出土の遺物

a 竪穴住居跡

竪穴住居跡の平面形は全て方形ないし長方形に近いものであり、小形（一辺2~3m）と大形（一辺5~6m）に大別される。なお、本書に掲載する第一次調査では、A区の南西端において、切り合う2軒の竪穴住居跡を認識し、これを第8・10号竪穴住居跡と称したが、遺構の大部分は南側の調査区外に残されたため、軒数および切り合いの真偽については確証が得られなかった。この検証は、平成19年に開始された第二次調査の成果に委ね、本書では遺構分布図におけるプランと第一次調査から得られた一部の遺物の提示に留めたい。

■第1号竪穴住居跡 (SA01 第186図)

概要 A区北西端に位置し、SA02・03に近接する。遺構の平面形は東西にやや長い方形で、プランの北西端は縄文時代早期の第8号集石遺構を破壊しているが、礫を完全に除去するまでにはいたっていない。また、床面中央部付近にも後期旧石器時代(AT上位)の礫群の一部が露出しているこのためもあってか、古墳時代当時の生活痕跡に乏しい。

規模は長軸3m、短軸2.5mを測り、A区における古墳時代竪穴住居跡の中で最も規模が小さい。壁の残存高は30cm程度で南側はほぼ垂直に、北側はゆるやかに立ち上がる。

覆土を構成する層は第1~3層である。各層とも黒褐色ブロック土を含んでいる。主にその径粒・堅さを基準として分層した。

床面は概して平坦で、硬化面・焼土等は確認されていない。また柱穴は検出されなかった。

竪穴部から出土した遺物は少なく、特に土器は土師器の細片があるのみであった。

出土遺物

■石器 (第187図) 縄文時代の所産を含め、コ

ンテナ1箱分ほどの石器を確認した。本来的にこの竪穴住居に伴う可能性が高い資料として、砥石1点、台石・石皿類3点があるが、他は石鎚やホルンフェルス・砂岩・尾鈴山産溶結凝灰岩などの剥片・石核を中心とし、縄文・弥生時代遺物の混入と推定される。あるいは古墳時代における竪穴住居跡への廃棄行為に関わるかもしれない。以下、代表的な遺物について記す。

□砥石 (第187図1455)

淡黄白色の凝灰岩を用いる。本来は中央部が括れる平面糸巻き状の形態をなすものと思われるが、破損している。4面がいずれも平滑で研ぎ面として利用されたことを示す。

□石皿 (第187図1466)

およそ人頭大の扁平な砂岩円盤を用い、一方の面が平滑で、もう一方の面は自然面を残す。自然面を上にした状態で出土した。

■第2号竪穴住居跡 (SA02 第188図)

概要 A区北西部に位置し、SA01・03・04に近接する。遺構の平面形は東西に長い長方形で、規模は長軸約5m、短軸約4m、床面積約20m²を測る。これはA区の古墳時代竪穴住居跡においては平均的な規模である。壁の残存高は30cm程度でほぼ垂直に立ち上がる。北~西部において壁溝がわずかに検出されている。

出土遺物

■土師器 (第189図)

甕・小型丸底甕・ミニチュア土器でセットを構成する。甕は、ほとんどが細片での出土であり、器形の全体像が分かる程度まで接合できなかった。

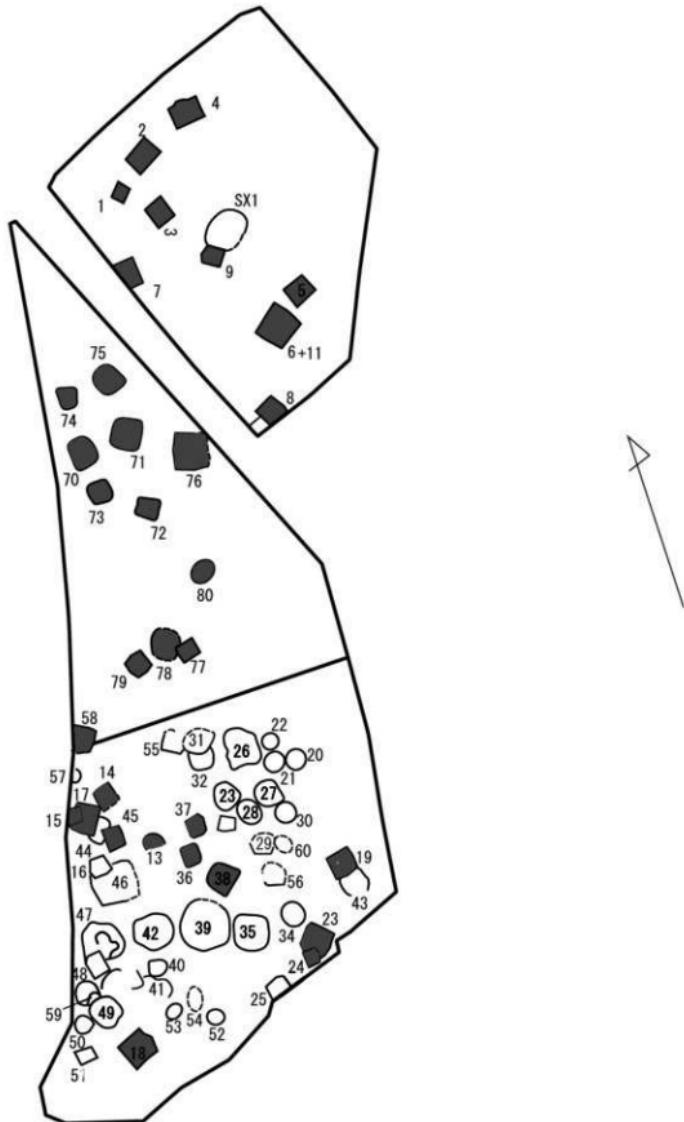
1457~1460が甕である。うち1457がB類の口縁部、1458がC類の底部に該当する。

1464~1465は小型丸底甕である。1466~1467はミニチュア土器であり、いずれも手捏ねにより整形されている。

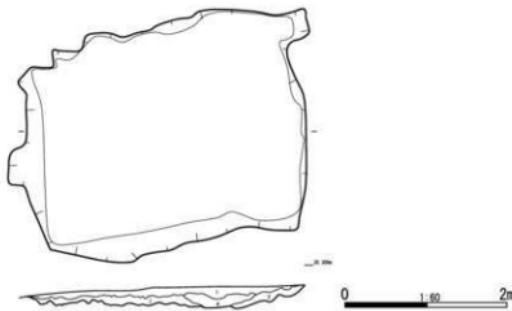
遺構の廃絶時期であるが、時期を推測できる遺物の出土に乏しく、判断できない。

■石器 (第189図)

床面からは棒状礫6点、打製石庖丁1点、他にホルンフェルス・砂岩製の剥片などが出土し、覆



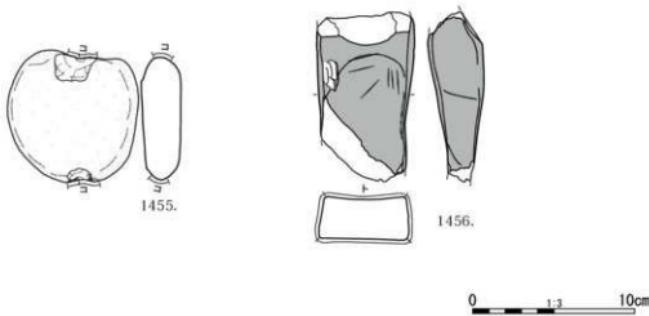
第185図 古墳時代の竪穴住居跡分布模式図



SA01 土層注記

- 1：黒色（10YR2/1.5）粘質土。粘性・しまりともに普通。第III層起源のブロックを織らに含む。
- 2：黒褐色（10YR3）粘質土。粘性やや強く、しまりは普通。第III層起源のブロックをまばらに含む。
- 4：暗褐色（10YR3/4）粘質土。しまりが強い。

第186図 第1号竪穴住居跡 (SA01) S=1/60



第187図 第1号竪穴住居跡出土の石器 S=1/3

土中からは台石、凹石、敲石、筋砥石、石鐵、打欠石錘などのトゥールやホルンフェルス・砂岩・尾鈴山産溶結凝灰岩製の剥片・石核類など、縄文時代の所産と考えられる資料も含んで、およそコンテナ1箱分の石器が認められた。

以下、床面から出土した資料および覆土中の遺物のうち古墳時代に帰属する可能性のあるものについて、その一部の観察所見を記す。

□打製石砲丁（第189図1470）

非常に風化した頁岩1群を用いた小形・粗製の資料である。長軸両端に抉りが観察される。第3節に報告した第175図1442と共に、短軸の一方の側縁が研磨により刃付けされている。弥生時代の所産である可能性を残すが、床面からの出土である点、東和幸氏の言及（文献37）も考慮し、ここではこの竪穴住居跡に本来的に伴うものとして理解したい。

□筋砥石（第189図1472）

大形品と小形品の2点が認められた。1472はおよそ人頭大の不整形で厚みのある砂岩亜円礫を素材とし、その片面を中心に筋状研ぎ面が形成され、一部はもう一方の面にも及ぶ。研ぎ面が多く残される面には敲打痕が集中する部分も観察される。床面からの出土である。

図示していない小形品のもう1点はおよそ鶴卵大の扁平不整形の砂岩亜円礫を素材とし、その両面に筋状研ぎ面を残す。携帯用砥石であろうか。

覆土中の出土であるが、床面出土の1472を考慮し、本来的にSA02に伴う可能性を推したい。

□凹石（第189図1471）

およそ掌大の扁平不整形のホルンフェルス亜円礫を素材とし、片面に敲打による凹部が形成される。床面からの出土である。図示していないが、覆土中からもう1点、幼児頭大の扁平砂岩亜円礫製の両面に凹部を持つ凹石1点が出土している。

□棒状礫

図示は削愛したが、床面から棒状礫が6点出土した。うち1点は、尾鈴山酸性岩類の一種（木城花崗閃緑岩か）と思われる棒状円礫を素材とし、片面に研磨面が認められる。他の5点のサイズは

様々で、使用石材も砂岩・頁岩・ホルンフェルスなど多様である。わずかな敲打痕が観察される資料も含む。

■第3号竪穴住居跡（SA03 第190図）

概要 A区北西部に位置し、SA01・02・07・09に隣接する。遺構の平面形は方形で、規模は長軸（南北方向）約4m、短軸（東西方向）約3.7m、床面積約14.8m²である。壁の残存高は40cm程度でほぼ垂直に立ち上がる。

柱穴は確認されず、床面は概して平坦である。

出土遺物

■土師器（第191図）

ほとんどが細片であり、図示できる遺物は少ない。甕・壺・塊・高坏でセットを構成しているが、甕は陶化できる範囲まで接合できなかった。塊の出土量の多さが目を引く。

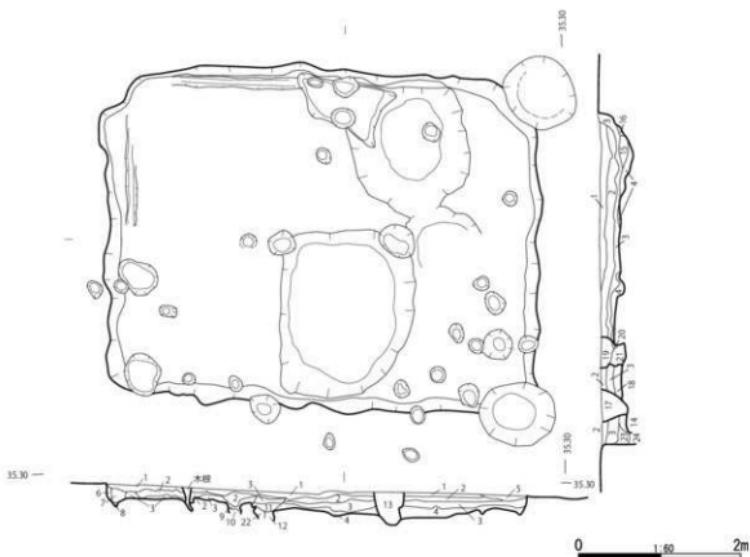
1473はA類の壺、1474は高坏であるが、破片であり分類できない。1475～1477は塊である。法量や調整具に微妙な差異があるが、基本的には同じ作りである。

遺構の廃絶年代としては、壺及び塊類の形態から5世紀後半が推定される。

■石器 床面からは棒状礫7点、石皿・台石類3点、凹石1点。覆土からも棒状礫4点、敲石2点、打欠石錘4点、磨製石斧未成品1点などのトゥール、剥片・石核類など縄文時代の所産と考えられる資料も含むおよそコンテナ2箱分の石器が出土した。以下、床面から出土した資料および覆土中の遺物のうち古墳時代に帰属する可能性のあるものについて、その一部の観察所見を記す。なお、図示を割愛した資料であるため、参考までの注記名を用いて記載を行なう。

□石皿・台石類（SA03-ユカF75）

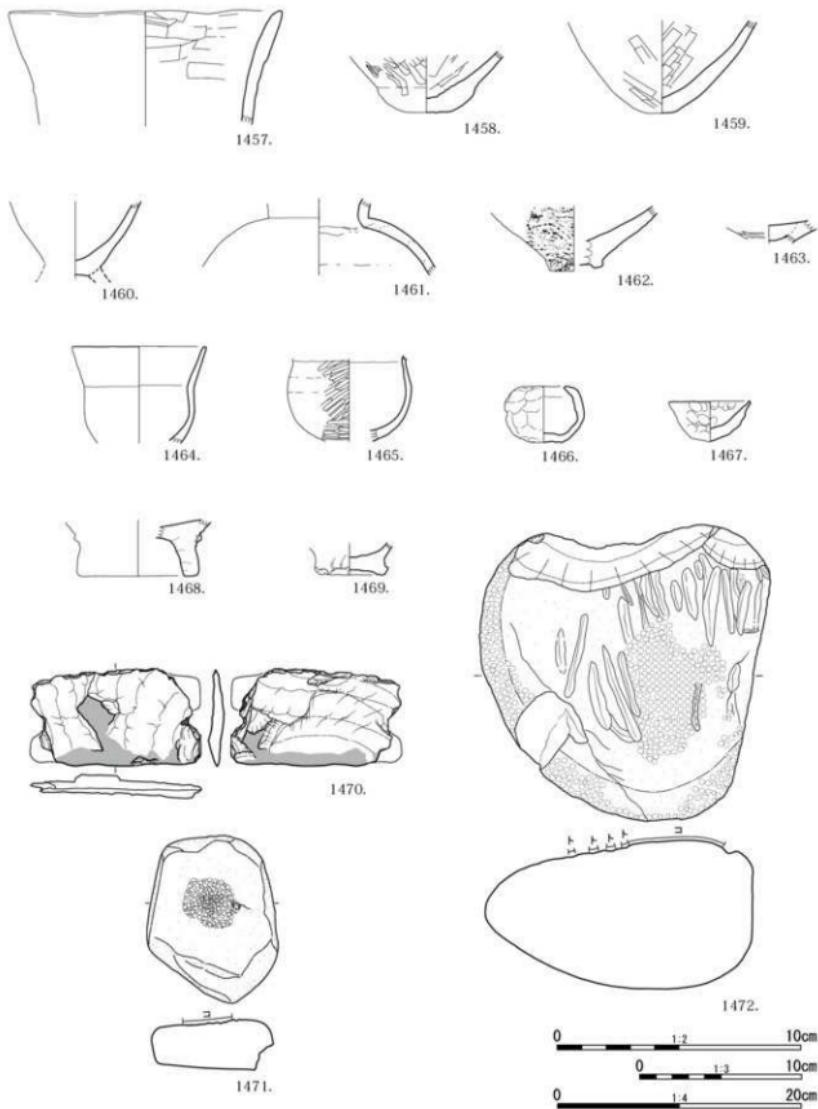
床面から出土した石皿で、不整円形の尾鈴山産溶結凝灰岩亜円礫を素材とする完形品である。両面とともに浅く磨耗しており、中央部には敲打による深い凹部が形成される。図示していない他の2点は不整形の砂岩亜円礫の片面に平滑な磨耗面を残す石皿（SA3-ユカF38）と不整形の尾鈴山産溶結凝灰岩亜円礫の片面に敲打による広い凹部を形成する台石（SA3-ユカF20）である。



SA02 土層注記

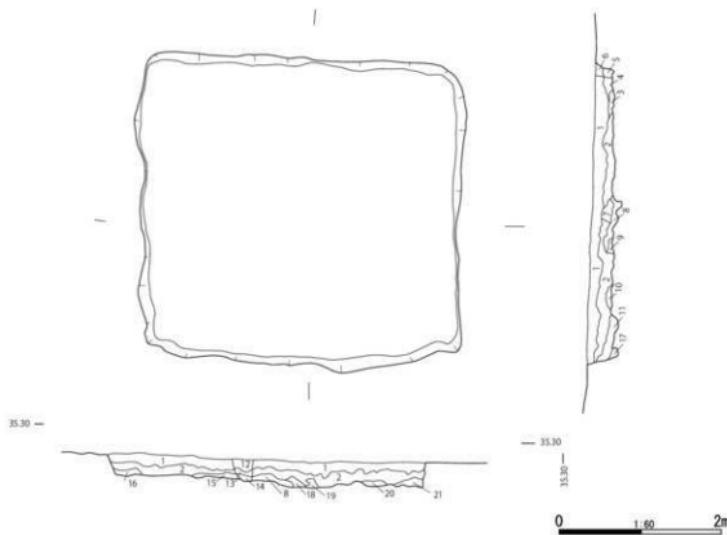
- 1 : 黒褐色 (10 YR 2.5/2.5) 極細砂質土。軟質で粘性やや強い。
- 2 : 黒褐色 (10 YR 3/3) 極細砂質土。軟質で若干粘性有り。Ⅲ～IV層ブロック (径3～5m) をわずかに含む。
- 3 : 黒褐色 (10 YR 3/3) 極細砂質土。軟質で若干粘性有り。
- 4 : 黒褐色 (10 YR 3/3.5) 極細砂質土。軟質で若干粘性有り。Ⅳ層をマトリックスに3層がまばらに混じる。
- 5 : 黑褐色 (10 YR 2/1.5) 極細砂質土。硬質で若干粘性有り。
- 6 : 黑褐色 (10 YR 2.5/3) 極細砂質土。軟質で若干粘性有り。
- 7 : 黑褐色 (10 YR 3.5/4) 極細砂質土。軟質 (6層より硬質) で若干粘性有り。燒土粒 (径1～3mm) を多く含む。
- 8 : 黑褐色 (10 YR 3/3) 極細砂質土。やや硬質で若干粘性有り。燒土粒 (径1～3mm) をごくわずかに含む。
- 9 : 黑褐色 (10 YR 2/2) 極細砂質土。軟質 (7層と同程度) で粘性あり。Ⅳ層ブロック (径1～7mm) をわずかに含む。
- 10 : 黑褐色 (10 YR 2/3.5) 極細砂質土。軟質 (7層と同程度) で粘性に富む。Ⅳ～V層ブロックを一部マーブル状に含む。
- 11 : 黑褐色 (10 YR 2/2) 極細砂質土。やや硬質で若干粘性に富む。Ⅳ層ブロック (径1～5mm) をごくわずかに含む。
- 12 : 黑褐色 (10 YR 2/L5) 極細砂質土。やや軟質で若干粘性に富む。炭化物粒 (径1～10mm) をごくわずかに含む。
- 13 : 黑褐色 (10 YR 2.5/1.5) 極細砂質土。やや軟質で若干粘性有り。Ⅴ層ブロック (径1～7mm) をまばらに含む。
- 14 : 黑褐色 (10 YR 2.5/2.5) 極細砂シルト質土。やや硬質で粘性に富む。Ⅳ～V層ブロック (径1～10mm) を一部マーブル状に多く含む。
- 15 : 黑褐色 (10 YR 2/2) 極細砂シルト質土。軟質で粘性に富む。
- 16 : 黑褐色 (10 YR 2/1.5) 極細砂ヘシルト質土。軟質で粘性に富む。
- 17 : 黑褐色 (10 YR 2/1.5) 極細砂質土。軟質で若干粘性有り。
- 18 : 大砂
- 19 : 黑褐色 (10 YR 2/2) 極細砂質土。軟質で若干粘性有り。Ⅲ～IV層ブロック (径1～3mm) をわずかに含む。
- 20 : 黑褐色 (10 YR 2.5/2.5) 極細砂ヘシルト質土。やや硬質で若干粘性有り。Ⅳ層ブロック (径1～10mm) を一部マーブル状に多く含む。
- 21 : 黑褐色 (10 YR 2.5/2.5) 極細砂ヘシルト質土。軟質で粘性に富む。Ⅳ～V層ブロック (径1～10mm) を一部マーブル状に多く含む。
- 22 : 黑褐色 (10 YR 2.5/2.5) 極細砂ヘシルト質土。やや軟質で (12層と同程度) 粘性に若干富む。Ⅳ～V層ブロックを一部マーブル状に多く含む。
- 23 : 黑褐色 (10 YR) 極細砂ヘシルト質土。やや硬質で粘性に若干富む。Ⅲ～IV層ブロック (径1～10mm) を一部マーブル状にわずかに含む。
- 24 : 黑褐色 (10 YR 2/2) 極細砂ヘシルト質土。軟質で粘性に若干富む。Ⅳ層ブロック (径1～3mm) をわずかに含む。

第188図 第2号竪穴住居跡 (SA02) S=1/60



第189図 第2号竪穴住居跡出土の土器・石器

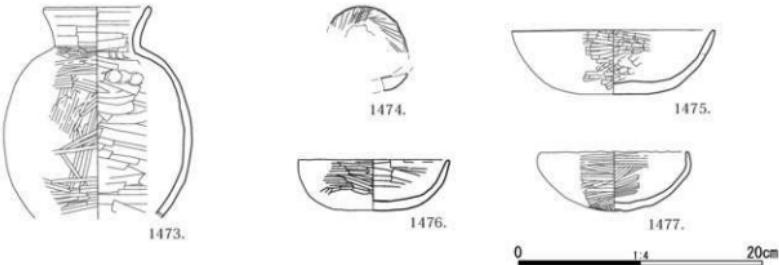
1470: S = 1/2, 1471: S = 1/3, 1457~1469・1472: S = 1/4



SA03 土層注記

- 1 : 黒色 (10 YR 2 / 1.5) 極細砂質土。軟質で粘性やあり。Ⅲ層ブロック (径1~2mm) をまばらに含む。
- 2 : 黒褐色 (10 YR 2.5 / 2) 極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層ブロック (径1~5, 10~40mm) をまばらに含む。
- 3 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2.5) 極細砂質土。やや硬質で粘性あり。Ⅲ層ブロック (径1~10mm) をわずかに含む。
- 4 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2) 極細砂質土。やや硬質 (3層より硬質) で粘性あり。Ⅲ~IV層ブロック (径1~3, 7~10mm) をまばらに含む。炭化物 (径1~3mm), 焙土粒をわずかに含む。
- 5 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2) 極細砂質土。やや軟質で粘性あり。Ⅲ~Ⅳ層ブロック (径1~2mm) をまばらに含む。
- 6 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2.5) 極細砂質土。軟質 (1層より硬質) で粘性あり。Ⅲ層 (径1~5mm) をごくわずかに含む。
- 7 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2) 極細砂質土。軟質 (1層より硬質) で粘性あり。Ⅲ~IV層ブロック (径1~10mm) をまばらに含む。燒土粒 (径1~3mm), 炭化物 (径1~3mm) をごくわずかに含む。
- 8 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2.5) 極細砂質土。やや硬質で粘性あり。Ⅲ~V層ブロック (径1~15mm) をまばらに含む。燒土粒, 炭化物 (径1~3mm) をわずかに含む。
- 9 : 褐色 (10 YR 3.5 / 4) シルト～粘土質土。硬質で粘性強い。軟質な黒褐色土 (10 YR 2 / 3) がまばらに入る。
- 10 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2) 極細砂質土。やや硬質で粘性あり。Ⅲ~Ⅳ層ブロック (径1~3mm) をわずかに含む。
- 11 : 黑褐色 (10 YR 2 / 1.5) 極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ~Ⅳ層ブロック (径1~1.5mm) をわずかに含む。
- 12 : 黑褐色 (10 YR 2 / 3) 極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層 (径1~2mm) をごくわずかに含む。
- 13 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2) 極細砂質土。軟質 (12層より軟質) で粘性あり。
- 14 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2.5) 極細砂質土。やや軟質で粘性あり。Ⅳ~V層ブロック (径1~3mm) がまばらに入る。
- 15 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2.5) 極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ~V層ブロック (径1~2.0mm) を含む。
- 16 : 黑褐色 (10 YR 2 / 1.5) 極細砂質土。やや硬質で粘性あり。Ⅳ~V層ブロック (径1~3mm) をまばらに含む。
- 17 : 黑褐色 (10 YR 2.5 / 3) 極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅳ~V層ブロック (径1~1.0mm) をマーブル状に含む。
- 18 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2) 極細砂質土。軟質で粘性やや強い。Ⅲ~V層ブロック (径1~3mm) をわずかに含む。燒土粒, 炭化物粒をわずかに含む。
- 19 : 黑褐色 (10 YR 2.5 / 2.5) 極細砂～シルト質土。軟質で粘性あり。
- 20 : 黑褐色 (10 YR 1.85 / 1.5) 極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅳ~V層ブロック (径1~3mm) をわずかに含む。
- 21 : 黑色 (10 YR 1.85 / 1) 極細砂質土。やや硬質で粘性あり。Ⅳ~V層ブロック (径1mm) をごくわずかに含む。炭化物粒 (1mm) をごくわずかに含む。

第 190 図 第 3 号竪穴住居跡 (SA03) S = 1 / 60



第191図 第3号竪穴住居跡出土の土器 S=1/4

□凹石 (SA03-ユカF1)

幼児頭大の砂岩円礫を用いた大形の凹石である。両面に敲打による浅い凹部を形成する。台石として使用されたものか。

□棒状礫 (敲石) (SA03-ユカF195)

床面出土の7点のうち、敲石として使われた可能性が指摘できる資料である。砂岩製で長軸の一端に顕著な敲打痕と剥離痕が観察され、敲石と認定される。もう一方の長軸端部にもわずかながら敲打痕が認められる。他の6点もホルンフェルス製の1点をのぞき、全て砂岩を使用している。また、覆土中の4点も全て砂岩を用いる。

■第4号竪穴住居跡 (SA04 第192図)

概要 A区北側に位置し、SA02に隣接する方形プランである。規模は長軸(東西方向)約5m、短軸(南北方向)約4m、床面積約20m²である。

壁の残存高は30cm程度ではほぼ垂直に立ち上がる。床面は概して平坦で、主柱穴は検出されなかつた。プランの北辺に張り出す部分があり、当初は竈の存在も予想したが、その構造は認められなかつた。ただし、その付近の床面(第192図トーン部分)には顕著な焼土の拡がりが確認されたことから、この部分が火廻として利用されたことは疑いない。

出土遺物

■土師器 粘・高环・小型丸底壺でセットを構成している。

1478～1485は粘である。このうち1478がB類の口縁部とa類の底部の組み合わせである。胴部の長胴化が見て取れる1480も同じくB類の

頭部である。1482・1483がb類の底部である。1485が1類の小型丸底壺であり、1486は同じく2類の小型丸底壺である。1484は高环の脚部である。

遺構の廃絶年代であるが、竈の口縁部の屈曲が緩やかであり、まだ直立気味に至っていない事から5世紀中頃と推定される。小型丸底壺の口縁部が体部より短い事も、この点と矛盾しない。

■石器 床面から棒状礫4点、敲石1点などが出土し、覆土中からは打欠石錐1点、打製石斧破片などが確認された。遺物は図示していない。

■第5号竪穴住居跡 (SA05 第194図)

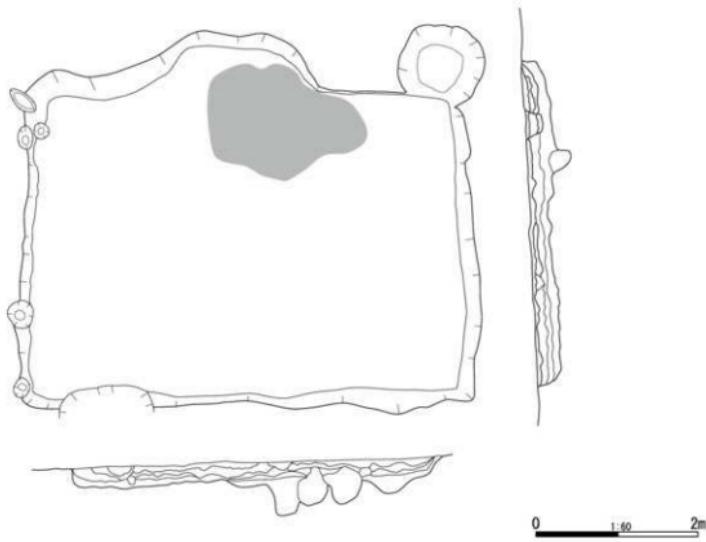
概要 A区南側で検出され、SA06に隣接する。

遺構の平面形は東西にやや長い方形で、規模は長軸約5m、短軸約4.5m、床面積約22.5m²である。壁の残存高は40cm程度ではほぼ垂直に立ち上がる。床面は概して平坦であり、主柱穴は検出されなかつた。

出土遺物

■土師器 (第195～199図) A区の竪穴住居跡の中で最大の遺物出土量を誇る。粘・壺・高环・小型丸底壺でセットを構成する。このうち最も出土量が多い器種は粘である。粘は形態的、製作技術的に齊一性が非常に高い。

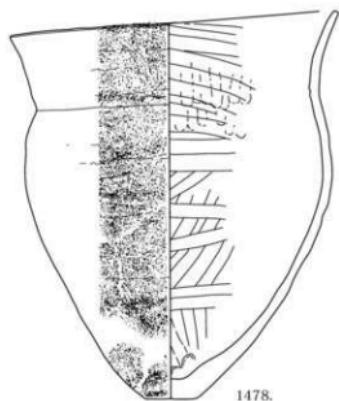
1488～1521が粘である。うち1488～1508がA類、1509がB類に相当する。A類に関しては、外面にタタキ調整を施し、内面はハケにより調整を行っているものが多い。口唇部は丸みを帯びるものが多いが、大半はユビでつまみあげて整形している。外面に輪積みの痕跡を残す資料が多



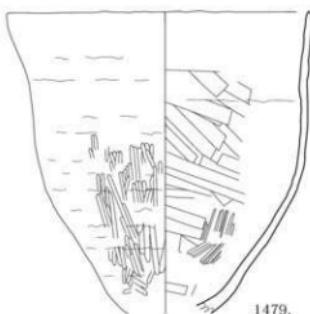
SA04 土層注記

- 1: 黒色 (10 YR 1.85 / 1) 極細粒砂質土。軟質で粘性はほとんどない。Ⅲ層ブロック (径3~5mm) をまばらに含む。
- 2: 黒褐色 (10 YR 2 / 1.5) 極細粒砂質土。軟質で粘性は1層よりあり。Ⅲ層ブロック (径10~30mm) をまばらに含む。炭化物 (径3~5mm) をまばらに含む。
- 3: 黑褐色 (10 YR 2 / 1.75) 極細粒砂質土。硬質で粘性あり。Ⅲ層ブロック (径10~15mm) をまばらに含む。炭化物 (径2~3mm) をまばらに含む。
- 4: 黑褐色 シルト～粘土質土。軟質で粘性は若干あり。Ⅲ～IV層ブロック (径10~20mm) をまばらに含む。
- 5: 黑褐色 (10 YR 2 / 3) シルト～粘土質土。硬質で粘性は1層同様はほとんどない。Ⅲ～IV層ブロック (径5~10mm) をまばらに含む。
- 6: 黑褐色 (10 YR 2 / 2) 極細粒砂質土。軟質で粘性は1層同様はほとんどない。植物痕を含む。
- 7: 黑褐色 (10 YR 2 / 2.5) 極細粒砂質土。軟質で粘性は若干よりある。植物痕を含む。
- 8: 黑褐色 (10 YR 3 / 3) 細粒砂質土。軟質で粘性はほとんどない。植物痕を含む。
- 9: 黑褐色 (10 YR 2 / 3) 細粒砂質～シルト質土。軟質で粘性は若干あり。植物痕を含む。
- 10: 黑褐色 (10 YR 2 / 3.5) シルト～粘土質土。軟質で粘性あり。植物痕を含む。
- 11: 黑色 (10 YR 1.7 / 1.5) 極細粒砂質土。軟質で粘性は若干あり。Ⅲ層ブロック (径2~3mm) をマーブル状に含む。
- 12: 黑色 (10 YR 1.7 / 1) 細粒砂質土。軟質で、やや粘性あり。植物痕を含む。
- 13: 黑色 (10 YR 2 / 1.5) シルト～粘土質土。軟質で粘性あり。植物粒 (径2~3mm) をまんべんなく含む。炭化物 (径2~3mm) を含む。
- 14: 黑褐色 (10 YR 2 / 2) 極細粒砂質～シルト質土。軟質で粘性は若干あり。Ⅲ層ブロック (径3~5mm) をまばらに含む。植物痕を含む。
- 15: 黑褐色 (10 YR 2 / 2.25) 極細粒砂質～シルト質土。硬質で粘性は14層よりある。Ⅲ層粒 (径2~3mm) をまばらに含む。
- 16: 黑褐色 (10 YR 2 / 2.25) 極細粒砂質～シルト質土。軟質で粘性は14層と同様。
- 17: 黑褐色 (10 YR 3 / 3.5) シルト質土。軟質で粘性は14層と同様若干より。Ⅲ層粒 (径2~3mm) をまばらに含む。
- 18: に赤い黄褐色 (10 YR 4 / 3.5) 土。シルト質～粘土質土。軟質で粘性あり。ところどころに黒色 (10 YR 2 / 1) の極細粒砂質土を含む。
- 19: 黑色 (10 YR 2 / 1) 極細粒砂質土。軟質で粘性あり。ところどころに、に赤い黄褐色 (10 YR 4 / 3.5) の幾土や炭化物 (径2~3mm) をまばらに含む。
- 20: に赤い黄褐色 (10 YR 4 / 3.5) 土。シルト～粘土質土。軟質で粘性あり。Ⅲ～IV層ブロック (径20~30mm) や炭化物 (径2~3mm) をまばらに含む。
- 21: 黑褐色 (10 YR 2 / 1.5) 細粒砂質土。軟質で粘性があり。植物痕を含む。
- 22: 黑褐色 (10 YR 2 / 2) 極細粒砂質～シルト質土。軟質で、やや粘性あり。植物痕を含む。
- 23: 黑色 (10 YR 2 / 1.5) 極細粒砂質土。軟質で2層と同程度の粘性あり。Ⅲ層粒 (径2~3mm) をまばらに含む。
- 24: 黑褐色 (10 YR 2 / 2.3) 極細粒砂質～シルト質土。23より硬質で、粘性も23層よりある。Ⅲ層ブロック (径3~5mm) をまばらに含む。
- 25: 黑褐色 (10 YR 3 / 3) 極細粒砂質～シルト質土。軟質で粘性あり。植物痕を含む。
- 26: 黑褐色 (10 YR 3 / 4.25) 極細粒砂質～シルト質土。非常に硬質で、粘性あり。壤土粒 (径2~3mm) をまばらに含む。
- 27: 黑色 (10 YR 2 / 12.5) シルト～粘土質土。やや硬質で粘性あり。Ⅲ層ブロック (径3~5mm) や炭化物 (径2~3mm) を含む。

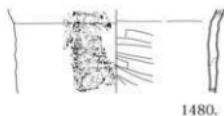
第192図 第4号竪穴住居跡 (SA04) S=1/60



1478.



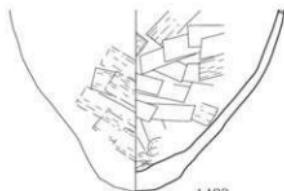
1479.



1480.



1481.



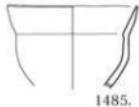
1482.



1483.



1484.



1485.



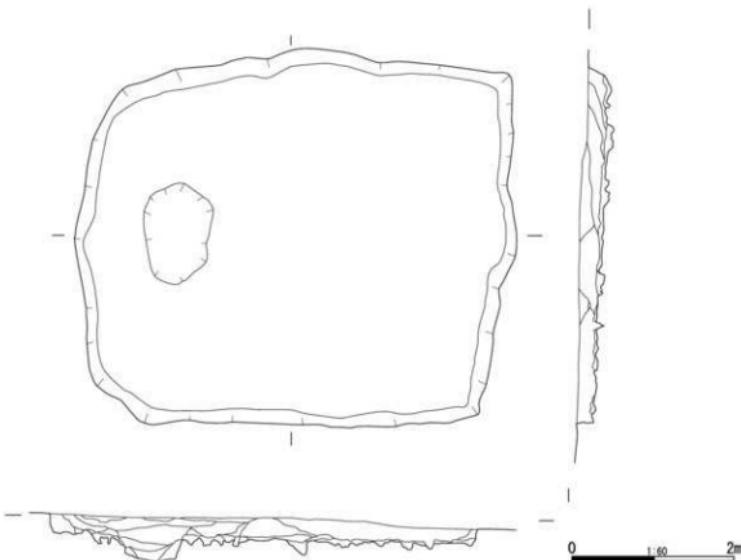
1486.



1487.

0 1/4 20cm

第193図 第4号竪穴住居跡出土の土器 S=1/4



SA05 土層記述

- 1: 黒褐色 (10YR2.5) 極細砂質土。硬質で、やや粘性強い。さらに層分される可能性もある。第Ⅲ層起源のブロック（径1～3mm）を複数に含む。
- 2: 黒褐色 (10YR2.5/2)。極細砂シルト質土。粘土質。やや硬質～硬質。粘性普通。部分的に、直線的に突き固めたような印象を受ける硬化面あり。
- 3: 黑褐色 (10YR 2 / 2) 極細砂質土。硬質で粘性ややあり。
- 4: 黑色 (10YR1.85 / 1) 極細砂質土。硬質で粘性あり。
- 5: 黑褐色 (10YR2.5 / 2.5) 極細砂質土。やや硬質～硬質で粘質あり。色調以外は2層に類似。
- 6: 黑色 (10YR 2 / 1) ピット。極細砂質土。やや硬質（2層、5層より軟質）で粘性あり。
- 7: 黑色 (10YR1.7 / 1) 木根混入。極細砂質土。硬質で粘性あり。
- 8: 黑褐色 (10YR 2 / 1.5) 極細砂質土。硬質で粘性が若干あり。
- 9: 黑褐色 (10YR2.5 / 2.5) 極細砂質土。硬質で粘性が若干あり。IV層ブロック（径1～10mm）をわずかに含み、一部マーブル状に堆積している。焼土粒（径1～2mm）をまばらに含む。
- 10: 2に類似
- 11: 木根混入。
- 12: 黑褐色 (10 YR 2 / 2) 極細砂質土。軟質で粘性ややあり。
- 13: 黑褐色 (10 YR 2 / 1.5) 極細砂質土。軟質で粘性ややあり。Ⅲ層ブロック（径1～3mm）をごくわずかに含む。
- 14: 黑色 (10 YR 1.85 / 1.5) 極細砂質土。軟質で13層より粘性あり。
- 15: 黑色 (10 YR 1.85 / 1) 極細砂質土。軟質で粘性あり。
- 16: 黑褐色 (10 YR 1.85 / 2) 極細砂質土。軟質で粘性あり。炭化物（径1～3mm）をごくわずかに含む。
- 17: 黑褐色 (10 YR 2.5 / 2) 極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層ブロック（径1～2mm）をごくわずかに含む。
- 18: 黑褐色 (10 YR 2 / 2) 極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層ブロック（径1～5mm）を一部マーブル状にまばらに含む。
- 19: 黑褐色 (10 YR 2 / 1.5) 極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層～Ⅳ層の漸移層か。燒土粒（径1～2mm）と炭化物（径1～2mm）をごくわずかに含む。
- 20: 黑色 (10 YR 1.7 / 1) S A 5 - S C 1 理土。極細砂質土。軟質で粘性やや高い。炭化物（径1～2mm）をごくわずかに含む。
- 21: 黑色 (10 YR 2 / 1) S A 5 - S C 1 理土。極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層ブロック（径1～5mm）をまばらに含む。炭化物（径1～3mm）をわずかに含む。
- 22: 黑褐色 (10 YR 2 / 2.5) S A 5 - S C 1 理土。極細砂シルト質土。軟質で粘性あり。Ⅳ層ブロック（径1～20mm）をマトリックスとするマーブル状に堆積している。
- 23: 黑褐色 (10 YR 2 / 2) S A 5 - S C 1 理土。極細砂質土。軟質で粘性強い。Ⅲ層、Ⅳ層ブロック（径1～15mm）を一部マーブル状に多く含む。
- 24: 黑色 (10 YR 1.7 / 2) S A 5 - S C 1 理土。極細砂質土。軟質で粘性に富む。Ⅲ層、Ⅳ層ブロック（径1～10mm）を一部マーブル状に多く含む。完形土器多数を含む。
- 25: 黑褐色 (10 YR 2 / 2) 極細砂質土。軟質で粘性ややあり。
- 26: 黑褐色 (10 YR 2 / 1.5) 極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層ブロック（径1～3mm）をごくわずかに含む。
- 27: 黑褐色 (10 YR 1.85 / 1) 極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層ブロック（径1～5mm）をわずかに含む。
- 28: 黑褐色 (10 YR 2 / 2) 極細砂質土。しまり軟質で粘性あり。
- 29: 黑褐色 (10 YR 1.85 / 2) 極細砂質土。軟質で粘性あり。

第194図 第5号竪穴住居跡 (SA05) S=1/60



1488.



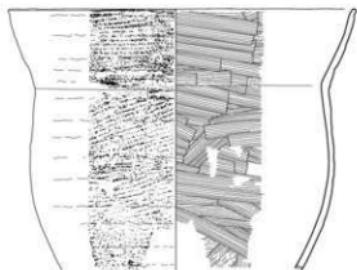
1489.



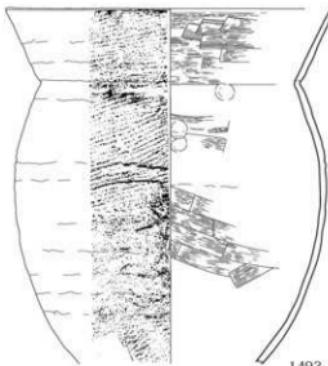
1490.



1491.



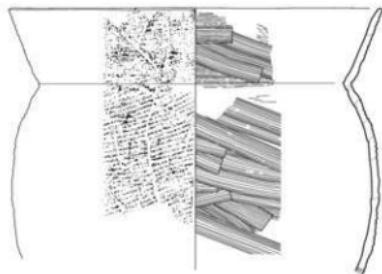
1492.



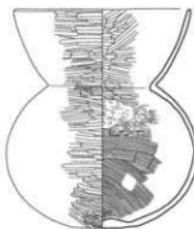
1493.

0 14 20cm

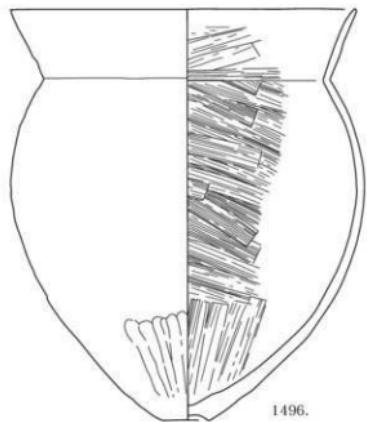
第195図 第5号竪穴住居跡出土の土器 (1) S=1/4



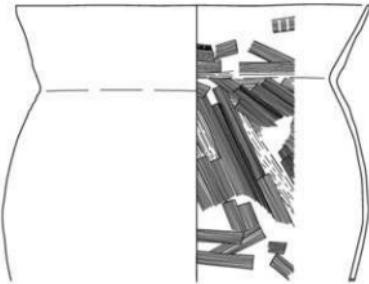
1494.



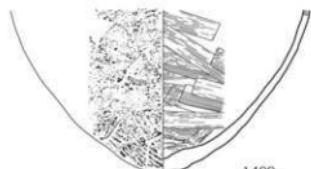
1495.



1496.



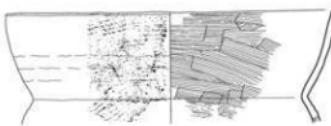
1497.



1499.



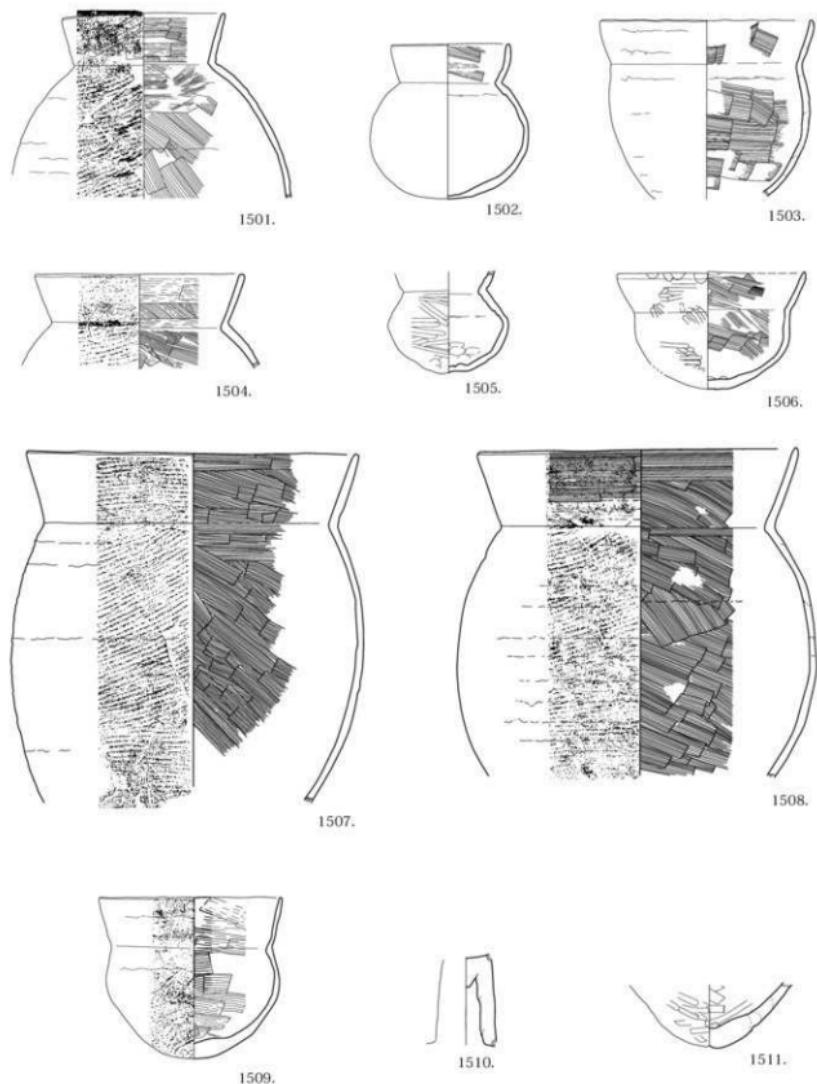
1498.



1500.

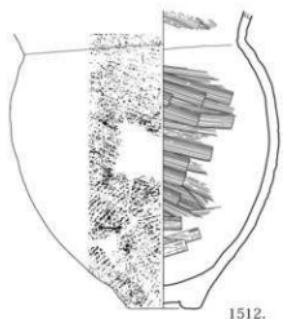
0 1/4 20cm

第196図 第5号竪穴住居跡出土の土器 (2) S=1/4

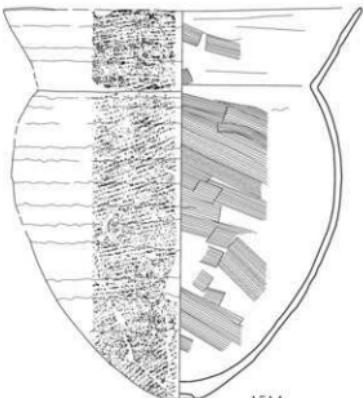


0 1/4 20cm

第197図 第5号竪穴住居跡出土の土器 (3) S=1/4



1512.



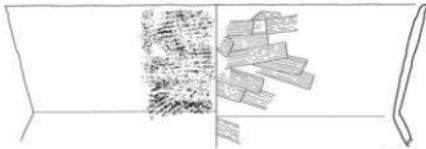
1514.



1513.



1517.



1515.



1518.



1519.



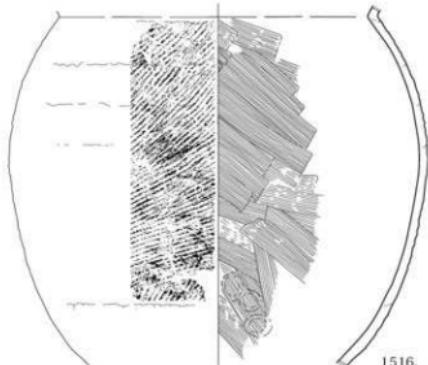
1520.



1521.



1522.



1516.

0 1/4 20cm

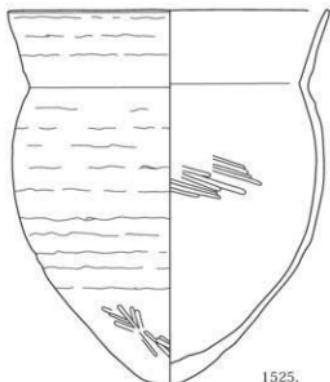
第198図 第5号竪穴住居跡出土の土器 (4) S = 1 / 4



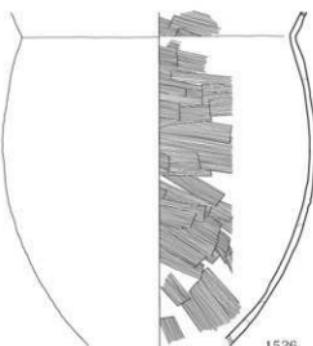
1523.



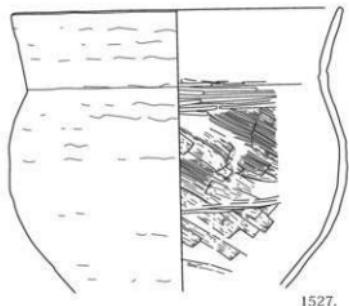
1524.



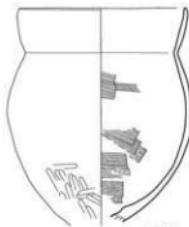
1525.



1526.



1527.



1528.



1529.

0 1/4 20cm

第199図 第5号竪穴住居跡出土の土器(5) S=1/4

い点も特徴の一つであろう。

1522はA類の壺である。1522・1523は高环、1495・1502・1505・1506・1529は小型丸底壺で、3類に相当する。

遺構の廃絶年代であるが、甕の口縁部が明確に屈曲する事から、野首第2遺跡の集落の中では比較的古手の4世紀後半から5世紀初頭の範囲が推測される。しかし、これらの土器が1家族で使用されたとは考え難く、近隣の住居を廃絶した時に、SA05に土器の廃棄を集中させた可能性が高い。ただし遺物の（特に甕の）形態差に乏しいため、比較的短時間に廃棄が集中したものと考えられる。

■石器

床面から磨石2点、打欠石錘1点などが出土し、覆土中から円盤形石器1点、敲石1点、打欠石錘3点、磨製石製品1点などが確認された。棒状礫は認められない。遺物は図示しなかった。

■第6・11号竪穴住居跡 (SA06・11 第200図)

概要 SA05に隣接して検出された。東側の壁面に沿って、床面より一段高いテラス状の構造が確認された。このため、2軒の住居が切り合う可能性も考慮して、当初は第6号と第11号に分けて掘り進めたが、検討の結果、1軒の竪穴住居跡と判断するにいたった。一辺約5m×5mの大形竪穴住居跡である。床面からは多くの土師器が出土した。

出土遺物

■土師器 (第201図)

甕、高环、ミニチュア土器でセットを構成している。遺物の形態的な齊一性は高い。

1530・1531はA類の甕である。1532も甕であるが、前者よりも法量が小さい。

1534～1536は高环である。1573はミニチュア土器で手捏ねにより整形される。

遺構の廃絶年代は土師器の様相から判断して、概ねSA05と近い年代が推定される。

■第7号竪穴住居跡 (第202図)

概要 A区西端で検出された。プランの西側は調査区外のため未調査である。

未調査部分があるため、規模を窺い知る事は適

わないが、方形プランであることは疑いなかろう。検出面からの壁面の残存高は約70cmと深めで、垂直に立ち上がる。床面は平坦である。明確な主柱穴は確認できないが、検出された複数のピットがその候補となろう。

出土遺物

■土師器 (第203図)

器種ごとの形態差が大きく、一括性に欠ける。甕、塊、鉢でセットを構成するが、甕は図示に耐えられない。

1541はB類の甕である。1544は1類、1543は2類の塊である。1542は鉢である。

遺構の廃絶時期であるが、甕の口縁部が緩やかに外反する事や、銘々器である塊の出土と、その形態から5世紀後～末と推定しておきたい。

■須恵器 (第203図)

1545は壺の蓋である。須恵器はこの1点のみが出土した。

■石器

特筆すべき石製遺物としては玉がある。別項に後述するので、参照されたい。

■第8号竪穴住居跡 (SA08)

概要 A区南側において検出された。第一次調査では検出時の遺構の輪郭から2軒の切合関係を考慮し、切るプランをSA08、切られるプランをSA10として記録した。SA10と仮想した竪穴住居跡については、その大半が調査区外に残されたため、本書ではSA08の出土遺物の一部を提示することにしたい。なお、第二次調査の結果では、1軒の竪穴住居跡である可能性が強まっている。

プランの詳細は第二次調査に譲る。第一次調査時の検出面からの壁の残存高は約70cmである。

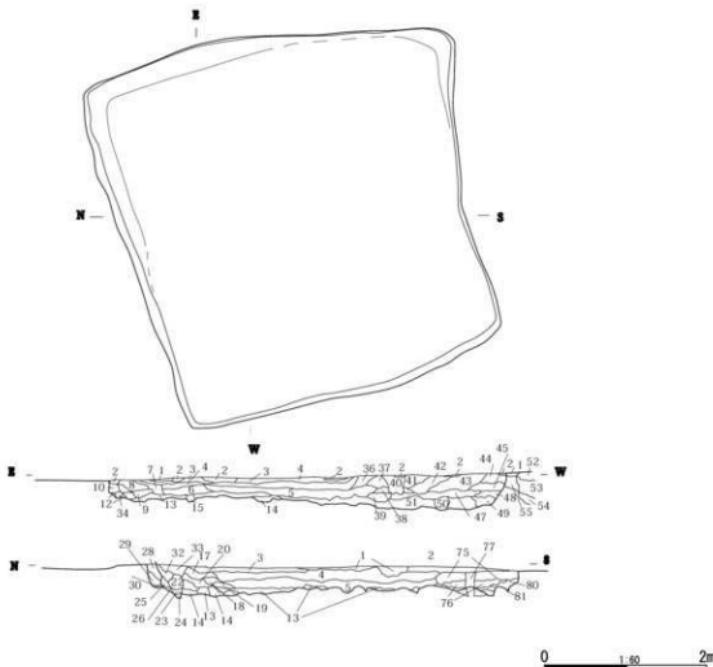
壁溝は壁面北側から東側沿いに巡っている。幅約20cm、深さ約10cmで掘られている。

出土遺物

■土師器 (第204図)

甕・高环でセットを構成している。甕には二つの形態が見られるが、これは切り合い関係にあると考えられたSA10の遺物が混入した可能性も考慮しておきたい。

1546～1552は甕である。うち1546がA類、



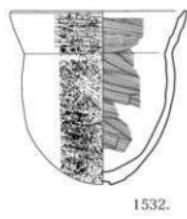
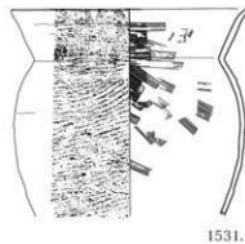
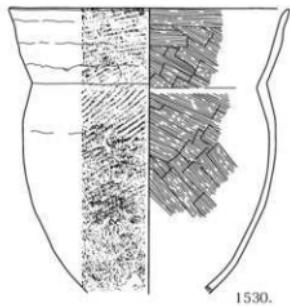
SA06 土層注記

- 1 : 黒色 (10 YR 1.85 / 1) 極細砂質土。軟質で粘性あり。
- 2 : 黒褐色 (10 YR 2. / 1.5) 細砂質土。やや軟質で、若干粘性あり。
- 3 : 黒色 (10 YR 2 / 1) 極細砂質土。やや軟質 (2層より硬質) で、粘性あり。Ⅲ層 山東来ブロック (径1~3mm) をごくわずかに含む。
- 4 : 黑色 (10 YR 1.7 / 1) 極細砂質土。やや軟質 (3層と同硬度) で粘性あり。Ⅲ層 山東来ブロック (径1~3mm) をごくわずかに含む。
- 5 : 黑色 (10 YR 1.7 / 1) 極細砂～粘質土で4層よりも黒味が強い。やや軟質 (3層と同硬度) で粘性あり。Ⅲ層 山東来ブロック (径1~3mm)、炭化物 (径1mm) をごくわずかに含む。
- 6 : 黑色 (10 YR 1.85 / 1) 極細砂質土。やや軟質 (3層と同硬度) でやや粘性あり。Ⅲ層 山東来ブロック (径1mm) をごくわずかに含む。
- 7 : 黑色 (10 YR 1.7 / 1) 極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層 山東来ブロック (径5~20mm)、燒土粒もしくは、土器片片粒 (径1mm) をごくわずかに含む。
- 8 : 黑色 (10 YR 2 / 1) 極細砂質土。粘性あり。しまり軟質。Ⅲ層 山東来ブロック (径1mm以下) をごくわずかに含む。
- 9 : 黑色 (10 YR 1.85 / 1) 極細砂質土。粘性あり。しまりや半硬質。Ⅲ層 山東来ブロック (径1~3mm) をわずかに含む。
- 10 : 黑色 (10 YR 1.85 / 1) 極細砂質土。硬質。
- 11 : 黑色 (10 YR 2 / 1) 極細砂質土。10層より硬質で粘性あり。Ⅲ層 山東来ブロック (径4mm) をまばらに含む。
- 12 : 黑褐色 (10 YR 1.85 / 1.5) 極細砂～粘土。SA 10刷床の可能性あり。硬質で層質をマトリックスとする遷移層と考えられる。粘性あり。
- 13 : 黑褐色 (10 YR 1.85 / 2.5) 極細砂質土。貼り床土。硬質で粘性あり。Ⅲ層 山東来のブロック (径3~15mm) を多く含む。
- 14 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2.5) 貼り床土。極細砂質土。軟質で粘性ややあり。Ⅲ層 山東来のブロック (径1~20mm) を多く含む。
- 15 : 黑色 (10 YR 1.7 / 1) ピットか?極細砂～粘土質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層 山東来のブロック (径1~5mm) をわずかに含む。
- 16 : 黑色 (10 YR 1.7 / 1) 極細砂質土。硬質 (10層より軟質) で粘性あり。Ⅲ層 山東来のブロック (径1mm) をごくわずかに含む。
- 17 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2) 極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層 ブロック (径1~3mm) をまばらに含む。
- 18 : 黑褐色 (10 YR 2 / 1.5) 極細砂質土。やや砂質で粘性あり。Ⅲ層 ブロック (径1~5mm) をまばらに含む。
- 19 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2) 極細砂質土。やや軟質で粘性あり。Ⅲ層 ブロック (径1~15mm) を多く含む。
- 20 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2.5) 極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層 ブロック (径1mm) をわずかに含む。

第 200 図 第 6 号竪穴住居跡 (SA06) S= 1 / 6 0

SA06 土層記載

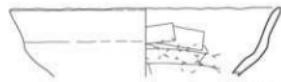
- 21：黒褐色（10 YR 2 / 2）極細砂質土。やや硬質で粘性あり。Ⅲ～IV層由来のブロック（径1～3mm）をまばらに含む。
- 22：黒褐色（10 YR 2 / 1.5）極細砂～粘土質土。軟質で粘性あり。
- 23：黒褐色（10 YR 2 / 2.5）極細砂～粘土質土。軟質で粘性に富む。Ⅲ～IV層由来のブロック（径1～20mm）を多く含む。
- 24：黒褐色（10 YR 2.5 / 3）極細砂～粘土質土。軟質で粘性に富む。Ⅲ～IV層由来のブロック（径5～25mm）を2.3層よりも多く含む。
- 25：黒褐色（10 YR 2 / 1.5）極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層由来のブロック（径1～5mm）をわずかに含む。
- 26：黒褐色（10 YR 2.5 / 2.5）極細砂～粘土質土。軟質（25層より軟質）で粘性あり。Ⅲ～IV層ブロック（径1～5mm）をまばらに含む。
- 27：黒褐色（10 YR 2.5 / 3.5）住居構築時に変更したビット埋土？極細砂質土。軟質で若干粘性あり。Ⅲ層由来のブロック（径5～25mm）を多く含む。
- 28：黒褐色（10 YR 2 / 1.5）極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅰ層に粗粒が明確に分離できる。
- 29：黒色（10 YR 1.7 / 1）極細砂質土。やや軟質で粘性あり。
- 30：黒褐色（10 YR 2 / 1.5）極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層ブロック（径1～5mm）を多く含む。
- 31：黒褐色（10 YR 2 / 2.5）ビット（古墳時代式）埋土。極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ～IV層由来のブロック（5～25mm）をわずかに含む。
- 32：黒褐色（10 YR 2 / 1.5）極細砂質土。軟質で粘性あり。
- 33：黒色（10 YR 1.85 / 1.5）極細砂質土。やや硬質で粘性あり。Ⅲ層由来のブロック（径2～10mm）をわずかに含む。炭化物粒をごくわずかに含む。
- 34：黒褐色（10 YR 2 / 1.5）S A I O 帯溶溝埋土。極細砂～粘土質土。やや硬質で粘性あり。Ⅲ層由来のブロック（径5～20mm）を多く含む。
- 35：黒色（10 YR 1.85 / 1）ビット（範囲～範例）極細砂質土。軟質で粘性あり。
- 36：黒褐色（10 YR 2 / 1.5）極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層ブロック（径1～3mm）をわずかに含む。
- 37：黒褐色（10 YR 2 / 1）極細砂質土。軟質で粘性あり。Ⅲ層ブロック（径1～2mm）をごくわずかに含む。
- 38：黑褐色（10 YR 2 / 2）極細砂質土。やや硬質。Ⅲ層ブロック（径1～3mm）をごくわずかに含む。
- 39：黒褐色（10 YR 1.85 / 1.5）極細砂質土。やや硬質（38層より硬質）で粘性有り。Ⅲ層ブロック（径1～15mm）をわずかに含む。
- 40：黒色（10 YR 1.7 / 1.5）極細砂質土。やや硬質で粘性あり。
- 41：黒褐色（10 YR 2 / 2.5）極細砂質土。やや硬質（40層より軟質）で粘性あり。
- 42：黒褐色（10 YR 2 / 2）極細砂質土。軟質で粘性有り。
- 43：黒褐色（10 YR 2 / 2）極細砂質土。やや硬質で粘性あり。Ⅲ層ブロック（径1～25mm）をわずかに含む。炭化物粒（径1～3mm）をごくわずかに含む。
- 44：黒褐色（10 YR 2 / 1.5）極細砂質土。やや硬質（43層より軟質）で粘性有り。
- 45：黒褐色（10 YR 2 / 1.5）極細砂質土。やや硬質（44層と同程度）で粘性有り。
- 46：黒褐色（10 YR 3 / 3）極細砂質土。やや軟質（40層より軟質）で粘性あり。
- 47：黒褐色（10 YR 2.5 / 1）極細砂質土。やや硬質（39層と同程度）で粘性有り。
- 48：黒褐色（10 YR 2 / 1.5）極細砂質土。やや中硬質（47層より硬質）で粘性有り。Ⅳ層b層（小林軒石）ブロック（径1～15mm）をわずかに含む。
- 49：黒褐色（10 YR 2 / 1.5）極細砂質土。やや中硬質（39層と同程度）で粘性有り。Ⅲ～IV層ブロック（径1～30mm）を多く含む。
- 50：黒褐色（10 YR 2 / 2.5）極細砂～シルト質土。やや硬質（39層と同程度）で、やや粘性に富む。Ⅳ～V層ブロック（径1～30mm）を多く含む。
- 51：黒褐色（10 YR 2.5 / 2.5）シルト質土。やや硬質で、若干粘性に富む。Ⅲ～IV層ブロック（径1～30mm）を50層より多く含む。
- 52：黒褐色（10 YR 2 / 2）極細砂質土。やや軟質で、若干粘性に富む。
- 53：黒色（10 YR 1.7 / 2）極細砂質土。やや硬質で粘性あり。
- 54：黒褐色（10 YR 2 / 2.5）極細砂～シルト質土。軟質で、やや粘性に富む。一部IV～V層ブロック（径1～30mm）をマーブル状にまばらに含む。
- 55：黒褐色（10 YR 2 / 1）極細砂質土。やや中硬質で粘性やや弱い。Ⅲ層ブロック（径1～20mm）をごくわずかに含む。
- 56：黒褐色（10 YR 2 / 1.5）極細砂質土。軟質で粘性有り。
- 57：黒褐色（10 YR 2 / 2.5）極細砂質土。軟質で粘性有り。Ⅲ層ブロック（径3～7mm）を多く含む。
- 58：黒褐色（10 YR 3.5 / 3）極細砂～シルト質土。やや硬質で、若干粘性に富む。Ⅲ～IV層ブロック（径3～30mm）を多く含む。
- 59：黒色（10 YR 2 / 1.5）極細砂質土。軟質で粘性有り。
- 60：黒色（10 YR 2 / 1）極細砂質土。やや硬質で粘性有り。
- 61：黒色（10 YR 1.85 / 1.5）極細砂質土。やや硬質で粘性有り。Ⅲ～IV層ブロック（径1～7mm）をわずかに含む。
- 62：黒色（10 YR 2 / 1）極細砂質土。やや中硬質（61層より軟質）で粘性有り。しまりⅢ～IV層ブロック（径1～30mm）をわずかに含む。
- 63：黒色（10 YR 2 / 2）極細砂～シルト質土。軟質で粘性有り。Ⅲ～IV層ブロック（径1～35mm）を一部マーブル状に多く含む。
- 64：黒色（10 YR 2 / 1.5）極細砂質土。軟質で粘性有り。Ⅲ層ブロック（径1～20mm）をまばら、炭化物（径1～10mm）をごくわずかに含む。
- 65：黒色（10 YR 1.85 / 1）極細砂質土。軟質で粘性有り。Ⅲ～IV層ブロック（径1～2mm）をごくわずかに含む。
- 66：黒色（10 YR 2 / 1）極細砂質土。軟質で粘性有り。Ⅲ～IV層ブロック（径20～30mm）をわずかに含む。
- 67：黒褐色（10 YR 2.5 / 1）極細砂質土。やや軟質で若干粘性有り。
- 68：黒褐色（10 YR 2.5 / 1.5）極細砂質土。軟質で粘性ややあり。Ⅲ層ブロック（径20mm）をわずかに含む。
- 69：黒褐色（10 YR 2 / 2）極細砂質土。粘性有り。
- 70：黒褐色（10 YR 2 / 2）極細砂質土。粘性有り。Ⅲ～IV層ブロック（径1～15mm）一部マーブル状にまばらに含む。
- 71：黒褐色（10 YR 2 / 1）極細砂。粘性有り。Ⅲ～IV層ブロック（径1～2mm）をごくわずかに含む。
- 72：黒褐色（10 YR 2.5 / 1）極細砂質土。粘性有り。
- 73：黒褐色（10 YR 2.5 / 2）極細砂質土。粘性有り。Ⅲ層ブロック（径1～25mm）をまばらに含む。
- 74：黒色（10 YR 2 / 1）シルト質土。軟質で粘性強い。
- 75：黒褐色土（10 YR 2 / 1.5）極細砂質土。軟質（4層と接する部分では4層より硬質）で粘性有り。Ⅲ層ブロック（径1～3mm）をまばらに含む。
- 76：黑色土（10 YR 1.85 / 1）極細砂質土。軟質（75層より軟質）で粘性有り。
- 77：黑色土（10 YR 1.7 / 1）極細砂～シルト質土。軟質で、やや粘性に富む。
- 78：黑色土（10 YR 1.7 / 1）S C 埋土。極細砂質土。やや硬質で、若干粘性に富む。
- 79：黒褐色土（10 YR 2.5 / 1.5）S C 土。極細砂質土。軟質で、やや粘性に富む。Ⅲ～IV層ブロック（径5～30mm）をまばらに含む。
- 80：黒褐色土（10 YR 2 / 1.5）S C 埋土。極細砂質土。やや硬質で粘性有り。
- 81：黒褐色土（10 YR 2.5 / 1.5）S C 埋土。極細砂質土。やや軟質で粘性有り。Ⅲ層ブロック（径1～3mm）をわずかに含む。
- 82：黑色土（10 YR 2 / 1.5）S C 埋土。極細砂質土。やや硬質で粘性有り。Ⅲ～IV層ブロック（径1～10mm）を多く含む。



1533.



1534.



1535.



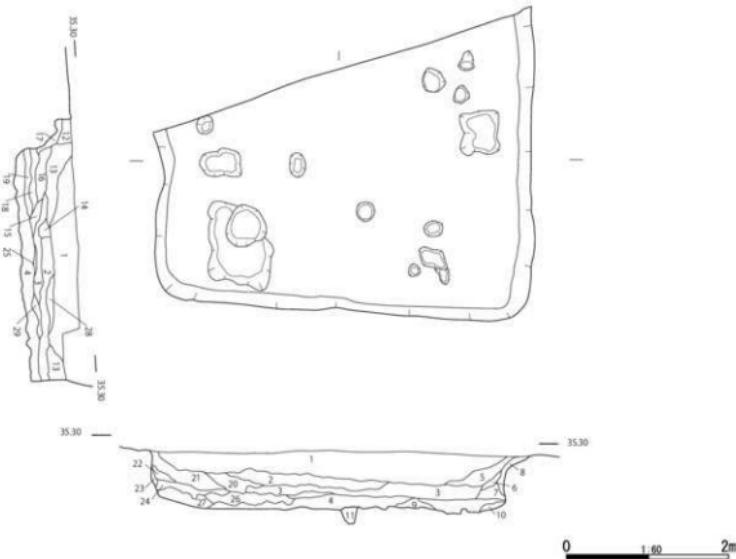
1536.



1537.

0 1/4 20cm

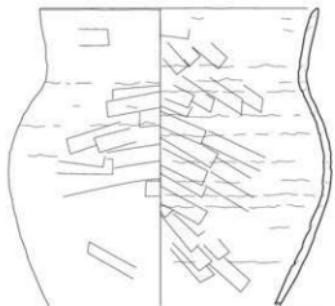
第201図 第6号竪穴住居跡出土の土器 S=1/4



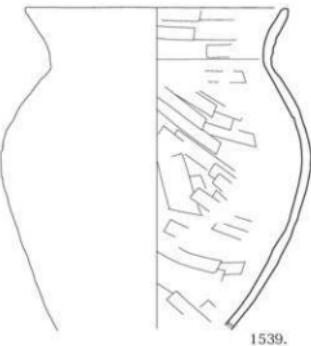
SA07 土層注記

- 1 : 黒褐色 (10 YR 3 / 2.5) 極細砂質土。軟質で粘性やや有り。Ⅲ層ブロック (径1 m) をわずかに含む。
- 2 : 黒褐色 (10 YR 2 / 2) 極細砂質土。軟質で粘性やや有り。燒土粒 (径1 ~ 3 mm) をごくわずかに含む。
- 3 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2.5) 極細の質土。軟質で粘性やや有り。Ⅲ層ブロック (径1 ~ 10 mm) をわざかに (1層より多く) 含む。
- 4 : 單褐色 (10 YR 2.5 / 3) 厚い層 極細砂質土。やや硬質で粘性有り。Ⅲ~Ⅳ層ブロック (径3 ~ 30 mm) をまばらに含む。
- 5 : 黑褐色 (10 YR 3 / 2.5) 極細砂質土。軟質で粘性やや有り。Ⅲ層ブロック (径1 ~ 30 mm) をわずかに含む。
- 6 : 單褐色 (10 YR 3 / 3.5) 極細砂質土。軟質で粘性やや有り。Ⅲ層ブロック (径10 ~ 60 mm) を多く含む。
- 7 : 單褐色 (10 YR 2.5 / 2.5) 極細砂質土。軟質で粘性やや有り。Ⅲ~N層ブロック (径1 ~ 2 mm) をわざかに。燒土粒をごくわずかに含む。
- 8 : 單褐色 (10 YR 3 / 3) 極細砂質土。軟質で粘性やや有り。Ⅲ層ブロック (径10 ~ 30 mm) を多く含む。
- 9 : 單褐色 (10 YR 2.5 / 3) 極細砂質土。やや硬質で粘性有り。Ⅲ~V層、V層ブロック (径20 ~ 40 mm) を多く含む。
- 10 : 單褐色 (10 YR 3 / 3) 極細砂質土。軟質で粘性有り。Ⅲ層ブロック (径40mm) まばらに含む。
- 11 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2.5) 極細砂シルト質土。やや硬質で、若干粘性に富む。Ⅲ層ブロック (径1 ~ 30 mm) をまばらに含む。
- 12 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2) 極細砂質土。軟質でやや粘性有り。
- 13 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2) (黒味> 11) 極細砂質土。軟質で若干粘性に富む。Ⅲ~IV層ブロック (径1 ~ 3 mm) をごくわずかに含む。
- 14 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2) 極細砂質土。軟質で若干粘性に富む。Ⅲ~V層ブロック (径3 ~ 10 mm) をまばらに含む。13層より薄い色調。
- 15 : 黑褐色 (10 YR 1.5 / 1.5) 極細砂シルト質土。軟質で、若干粘性に富む。
- 16 : 黑褐色 (10 YR 2.5 / 1.5) 極細砂質土。少し軟質で粘性有り。Ⅲ~IV層ブロック (径1 ~ 3 mm) をまばらに含む。
- 17 : 單褐色 (10 YR 2.5 / 2.5) 極細砂質土。軟質で粘性有り。Ⅲ層ブロック (径10 ~ 15 mm) を多く含む。
- 18 : 單褐色 (10 YR 2 / 2) 極細砂質土。軟質で粘性に富む。Ⅲ~IV層ブロック (径1 mm) をまばらに含む。
- 19 : 黑褐色 (10 YR 2.5 / 2) 極細砂質土。軟質で粘性に富む。Ⅲ~V層ブロック (径1 ~ 5 mm) をわざかに含む。
- 20 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2) 極細砂質土。軟質で粘性有り。V層ブロック (径1 ~ 5 mm) をごくわずか (一部マーブル状) に含む。
- 21 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2) 極細砂質土。厚い層は20層よりある。軟質で粘性有り。V層ブロック (径1 ~ 15 mm)、炭化物 (径1 ~ 2 mm) をごくわずかに含む。
- 22 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2.5) 極細砂質土。軟質で、21層より粘性有り。炭化物 (径1 ~ 2 mm) をごくわずかに含む。
- 23 : 單褐色 (10 YR 2.5 / 3) 極細砂シルト質土。やや硬質で粘性やや有り。Ⅲ~V層ブロック (径1 ~ 20 mm) を一部マーブル状に多く含む。
- 24 : 黑褐色 (10 YR 2.5 / 2.5) 極細砂質土。軟質やや硬質で若干粘性有り。炭化物 (径1 ~ 3 mm)、M層ブロック (径1 ~ 25 mm) をごくわずかに含む。
- 25 : 單褐色 (10 YR 2 / 3) 極細砂質土。硬質で粘性やや有り。M層ブロック (径1 ~ 30 mm) を一部マーブル状にまばらに含む。
- 26 : 黑褐色 (黑味< 2.4) (10 YR 2.5 / 2.5) 極細砂質土。硬質で (25層より軟質) 粘性やや有り。V層ブロック (径1 ~ 20 mm) を一部マーブル状に、まばらに含む。
- 27 : 單褐色 (10 YR 3 / 3.5) 極細砂質土。軟質で粘性有り。V層をマトリックスとし。V層と26層のブロック (径1 ~ 30 mm) を一部マーブル状にまばらに含む。
- 28 : 單褐色 (10 YR 2.5 / 3) 極細砂質土。軟質で粘性やや有り。V層ブロック (径1 ~ 5 mm) をわずかに含む。炭化物 (径1 ~ 3 mm) をわざかに含む。
- 29 : 黑褐色 (10 YR 2.5 / 2) 極細砂質土。軟質で粘性やや有り。V層ブロック (径1 ~ 25 mm) をわざかに含む。炭化物 (径1 ~ 3 mm) をわざかに含む。

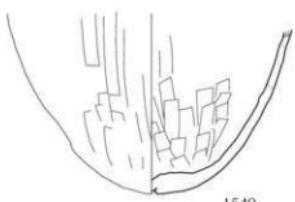
第 202 図 第 7 号竪穴住居跡 (SA07) S = 1 / 60



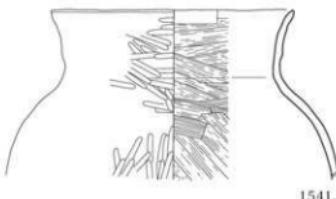
1538.



1539.



1540.



1541.



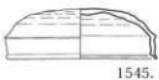
1542.



1543.



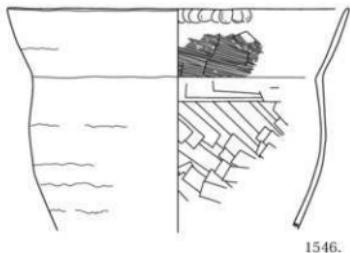
1544.



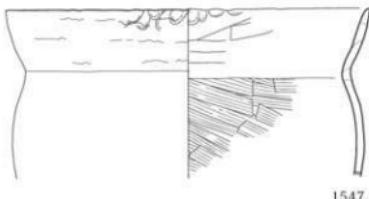
1545.

0 1/4 20cm

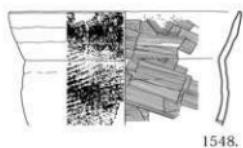
第203図 第7号竪穴住居跡出土の土器 S=1/4



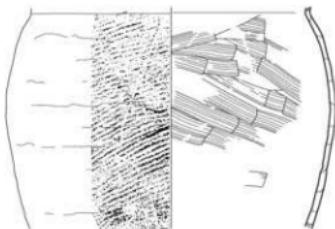
1546.



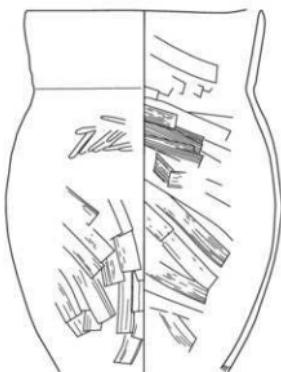
1547.



1548.



1549.



1551.



1550.



1552.



1553.



1554.



第204図 第8号竪穴住居跡出土の土器 S=1/4

1548～1551がB類に該当する。1553～1554は高环である。

遺構の廃絶時期であるが、甕A類のようにな
口縁部の屈曲部から判断すると5世紀初頭、甕B
類のように、口縁部の屈曲部が緩やかなものから
推測すると、5世紀中頃となる。

■第9号竪穴住居跡（第205図）

概要 A区中央部に位置し、SX01を切る。規模
は長軸約4m、短軸約4m、床面積約16m²を測
る方形プランである。検出面からの壁の残存高は
40cm程度で、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は概して平坦であり、主柱穴は検出されな
かった。

出土遺物

■土師器（第206図）

甕・鉢でセットを構成している。

1535はC類の甕、1556はB類の甕である。
1559は鉢である。

甕を基準に遺構の廃絶時期を推定するならば、
甕の口縁部の直口化が認められることから、5世
紀中頃～後半と考えられる。

石器の図示は割愛したが、本来はSX01に帰属
させるべき資料も一定量含まれる可能性が高い。

■第13号竪穴住居跡（第207図）

概要 C区北西部から検出された、プランの南側
半分を後世の搅乱土坑によって破壊されている。
覆土の残存状況も10cm程度と良好ではない。検
出されたピットも浅く、柱穴とは考えにくいため、
構造には不明な部分が多い。

残存する状況からは一辺が約2.5mの隅円方形
プランが推定される。プラン内からは土師器の出
土はほとんど見られず、縄文時代後期の集落と分
布が接するためか、縄文土器の出土が目立った。

■第14号竪穴住居跡（第208図）

概要 C区北西部に位置し、第17号竪穴住居跡
(SA17)に接する状態で検出された。SA13と同
様に、プランの南側に後世の搅乱土坑があり、全
容は明らかでない。一辺約3mの方形プランであ
る。床面からは複数のピットが検出されたが、
主柱穴などの配列は不明である。覆土中には炭化
物および焼土が多く含まれ、火処なし、焼失住居

であった可能性も考えられる。プラン内からは土
師器の出土はほとんど見られず、SA13と同様に
縄文土器の出土が目立った。

■第15・17号竪穴住居跡

(SA15・17 第209図)

概要 C区北西部から2軒切り合う状態で検出さ
れた。規模の小さなSA15が相対的に規模の大き
いSA17を切る関係にある。SA15は一辺約2.5
mの方形住居と推定されるが、西側の広い範囲が
調査区外に残されたため、詳細は不明である。床
面からはピットも検出されず、主柱穴などの配列
も明らかでない。SA17の平面形は長軸約4.5m
×短軸約3.6mのやや長方形を呈す。壁面はほぼ
垂直に立ち上がる。床面には主柱穴を構成した可
能性が指摘できるピットが3基検出されている。
出土遺物

いずれも遺物の出土量は少ない。図示は割愛した
が、遺構廃絶時期であるが、時期が推定できる遺
物に乏しく、判断に躊躇する。

■第18号竪穴住居跡（SA18 第210図）

概要 C区南西部のSA51・53に隣接して検出さ
れた。周辺は縄文時代の竪穴住居が検出された
エリアである。プランは方形であり、規模は一辺
約4mを測る。壁の残存高は30cm程度でほぼ垂
直に立ち上がる。

床面は概して平坦である。プラン内で多数の
ピットが検出されているが、ほとんどが遺構廃絶
以降の所産であると考えられる。南側の壁面西側
には楕円形の土坑が切っている(SA18-SC01)。
これはSA18と近い時期の構築と考えられる。

プラン内からは、土師器の出土は、ほとんど見
られず、縄文土器の出土が目立った。

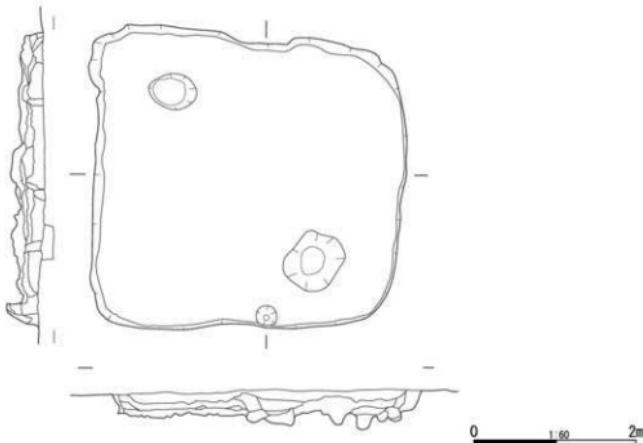
出土遺物

プラン内から、時期が推測されるような土師器・
須恵器の出土はなかった。

C区にはこのSA18に代表されるように、遺構
内に土師器・須恵器の出土が見られないものが多い。
C区には廃棄住居であるSA38が存在する。

SA18も廃絶の際に、土師器類はSA38に一括
投棄したのだろうか。

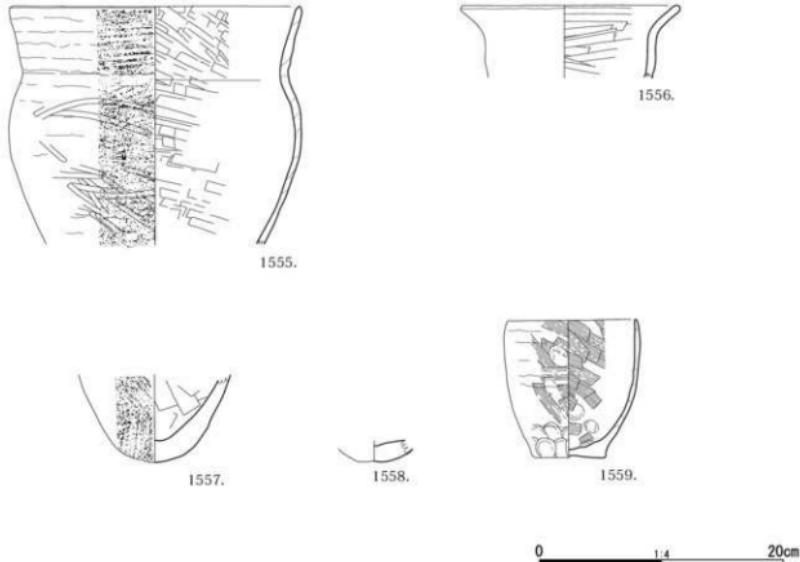
なお、SA18から出土した縄文土器・石器は前



SA09 土層注記

- 1 : 黒褐色 (10 YR 2.5 / 2) 極細砂質土。軟質でやや粘性有り。Ⅲ層ブロック (径3 ~ 15mm) をわずかに含む。
- 2 : 黒色 (10 YR 1.85 / 1.5) 極細砂質土。軟質で粘性有り。Ⅳ層ブロック (径3 ~ 30mm) をわずかに含む。
- 3 : 黒褐色 (10 YR 2.5 / 2) 極細砂～シルト質土。やや硬質で粘性有り。Ⅲ～IV層ブロック (径3 ~ 25mm) をまばらに含む。
- 4 : 黑褐色 (10 YR 3 / 2.5) 極細砂質土。やや軟質 (3層と同程度) で粘性有り。Ⅲ～IV層ブロック (径1 ~ 3mm) をわずかに含む。
- 5 : 黑褐色 (10 YR 1.7 / 1.5) 極細砂質土。軟質 (1層より軟質) で粘性有り。Ⅲ層ブロック (径1 ~ 2mm) をごくわずかに含む。
- 6 : 黑褐色 (10 YR 3 / 3) 極細砂質土。やや硬質で粘性有り。Ⅲ層ブロック (径1 ~ 2mm) をごくわずかに含む。
- 7 : 黑褐色 (10 YR 2.5 / 3.5) 極細砂質土。硬質で粘性有り。IV層ブロック (径1 ~ 20mm) をわずかに含む。
- 8 : 黑色 (10 YR 1.85 / 1.5) 極細砂質土。やや軟質 (中央ほど軟質) で若干粘性に富む。Ⅲ層ブロック (径1 ~ 15mm) をごくわずかに含む。中央付近には焼土塊 (径1 ~ 2mm) をわずかに含む。
- 9 : 黑色 (10 YR 1.85 / 1) 極細砂質土。やや軟質で若干粘性に富む。Ⅲ～IV層ブロック (径1 ~ 30mm) をわずかに含む。
- 10 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2) 極細砂質土。やや軟質 (5層より軟質) で粘性有り。
- 11 : 黑褐色 (10 YR 2.5 / 2) 極細砂質土。やや硬質で粘性有り。
- 12 : 黑褐色 (10 YR 2.5 / 3) シルト～粘土質土。軟質で粘性有り。Ⅲ～V層ブロック (径5 ~ 30mm) をまばらに含む。
- 13 : 黑褐色 (10 YR 3 / 3) 極細砂質土。軟質 (12層より軟質) で粘性有り。
- 14 : 黑褐色 (10 YR 2.5 / 3) シルト～粘土質土。やや硬質で若干粘性に富む。Ⅳ～V層ブロック (径5 ~ 25mm) をまばらに含む。
- 15 : 黑褐色 (10 YR 3 / 3.5) シルト～粘土質土。やや硬質で粘性有り。Ⅳ～V層ブロック (径5 ~ 25mm) を多く含む。
- 16 : 黑褐色 (10 YR 1.85 / 2.5) 極細砂質土。硬質で粘性有り。Ⅲ層ブロック (径1 ~ 5mm) をわずかに含む。
- 17 : 黑褐色 (10 YR 2 / 3) シルト～粘土質土。やや軟質で粘性に富む。Ⅳ～V層ブロック (径1 ~ 10mm) をまばらに含む。
- 18 : 黑褐色 (10 YR 2.5 / 2) 極細砂質土。軟質で粘性有り。Ⅲ層ブロック (径1 ~ 3mm) をごくわずかに含む。
- 19 : 黑褐色 (10 YR 2 / 1.5) 極細砂質土。軟質で粘性有り。Ⅲ層ブロック (径1mm) をごくわずかに含む。
- 20 : 黑褐色 (10 YR 3 / 3.5) 極細砂質土。軟質で粘性有り。
- 21 : 黑褐色 (10 YR 2.5 / 3) 極細砂質土。やや硬質で若干粘性有り。
- 22 : 黑褐色 (10 YR 3 / 3) 極細砂質土。やや硬質で粘性有り。Ⅲ層ブロック (径1 ~ 3mm) をごくわずかに含む。
- 23 : 黑褐色 (10 YR 2.5 / 3) 極細砂質土。やや硬質で粘性有り。Ⅲ層ブロック (径1 ~ 5mm) をわずかに含む。
- 24 : 黑褐色 (10 YR 2 / 3) 極細砂質土。軟質で粘性有り。Ⅲ～IV層ブロック (径5 ~ 25mm) をまばらに含む。
- 25 : 黑褐色 (10 YR 1.85 / 1.5) 極細砂～シルト質土。軟質でやや粘性に富む。Ⅲ～IV層ブロック (径3 ~ 10mm) をわずかに含む。
- 26 : 黑褐色 (10 YR 2.5 / 3.5) 極細砂～シルト質土。やや軟質で粘性強い。Ⅲ～IV層ブロック (径3 ~ 10mm) を一部マーブル状にまばらに含む。
- 27 : 黑褐色 (10 YR 2.5 / 1.5) 極細砂～シルト質土。軟質で粘性強い。IV層ブロック (径1 ~ 25mm) を一部マーブル状にまばらに含む。
- 28 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2) 極細砂質土。軟質で粘性有り。

第 205 図 第 9 号竪穴住居跡 (SA09) S = 1 / 60



第206図 第9号竪穴住居跡出土の土器 S=1/4

節において扱っている。

■第19号竪穴住居跡 (SA19 第212図)

概要 C区南東部から検出された。一辺約3.8mの方形プランを持つ。縄文時代後期の竪穴住居SA43を切っている。北西隅に壁溝の可能性がある土色の変化を確認したが、残存状況は安定しない。床面からは複数のピットが検出されたが、支柱穴などの配列は明らかではない。住居の中央部では焼土と土師器片を含む炉が検出された。

出土遺物

■石器 (第213図)

図示に耐えうる土師器・須恵器の出土は認められなかった。1564は尾鈴山産溶結凝灰岩製の敲石、1565は打欠石錘である。いずれも縄文時代後期の石器と考えられる。台石等は出土していない。

■第23・24号竪穴住居跡

(SA23・24 第214図)

概要 C区南西部調査区間から2軒切りあう状で

検出された。小形の第24号竪穴住居跡が相対的に大きな第23号竪穴住居跡を切る。その際主軸を違える点は、先述したSA15・17の事例と共通する。

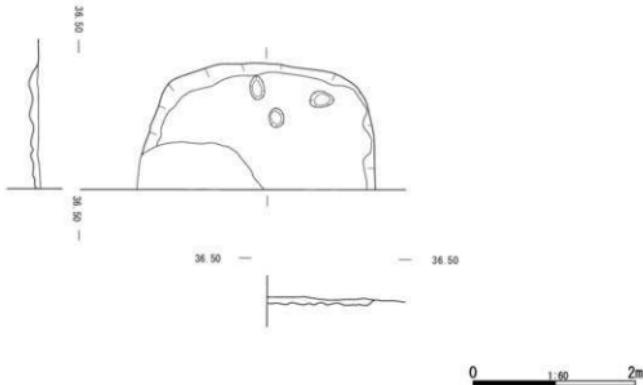
SA23は一辺約4.7mの方形プラン、SA24は一辺約3mのやはり方形プランである。SA23の床面からは複数のピットが検出され、4本の主柱穴とを考えうる配列も見出されるが、ややいびつな四辺形を呈するため、断定はできない。SA24の床面には相対的にピットが少なく、やはり、主柱穴の配列は不明である。

出土遺物

■石器 (第215図)

いずれの竪穴住居跡からも、土師器・須恵器などの出土は少なかった。ここでは一部の石器のみ図示した。

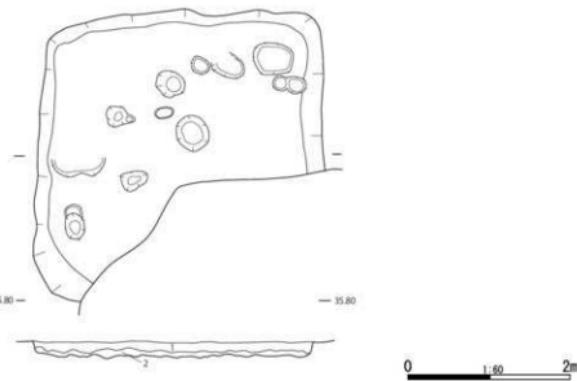
1566はSA23から出土した台石である。表裏両面に敲打痕の集中する範囲が認められる。縄文時代後期遺物の混入である可能性も考えうるが、



SA13 土層注記

1 : 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土。しまりは弱い。

第 207 図 第 13 号竪穴住居跡 (SA13) S = 1 / 6 0

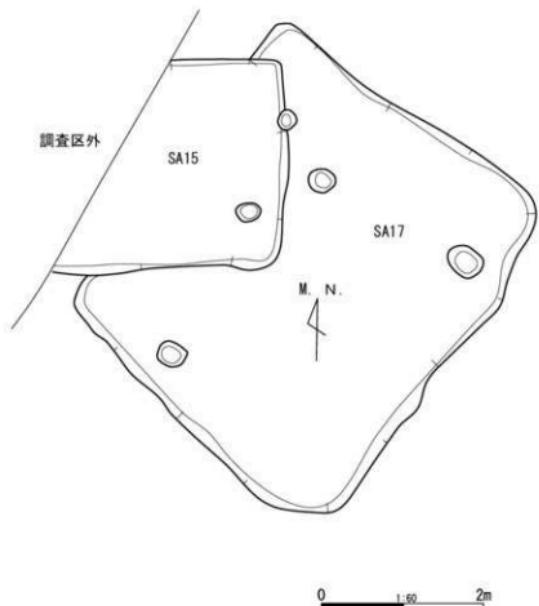


SA14 土層注記

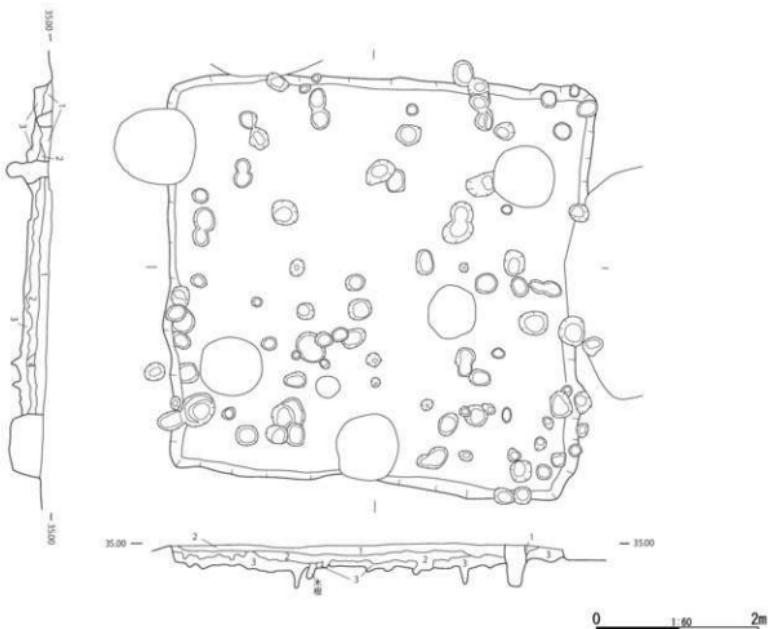
1 : 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土。しまりが強く。

2 : 單褐色 (10YR3/2.5) 粘質土。1よりもしまりが強い。炭化物・焼土粒 (径 1 ~ 2mm) を部分的に含む。

第 208 図 第 14 号竪穴住居跡 (SA14) S = 1 / 6 0



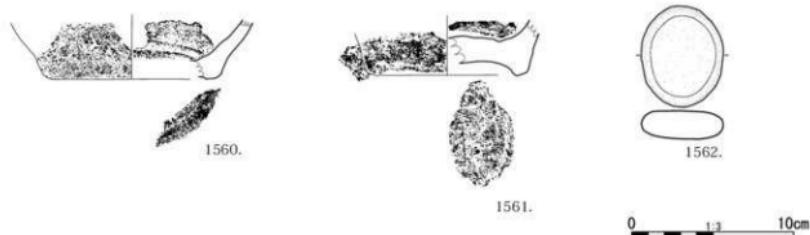
第209図 第15・17号竪穴住居跡 (SA15・17) S=1/60



SA18 土層注記

- 1 : 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土。しまりは普通。
- 2 : 黒褐色 (10YR2/2.5) 粘質土。しまりは普通。第Ⅲ層起源のブロック (径 50mm) をわずかに。炭化物粒 (径 1 ~ 30mm) を多く含む。
- 3 : 暗褐色 (10YR3/4) 粘質土。しまりは普通。第Ⅳ層起源のブロック (径 1 ~ 30mm) を多く含む。
- 4 : 2と同質であるが、若干明るめの色調。

第 210 図 第 18 号竪穴住居跡 (SA18) S = 1 / 60



第211図 第18号竖穴住居跡出土の縄文土器・石器 S=1/3

通時代的・普遍的な石器なので、古墳時代も所産として差し支えないであろう。

■第36号竖穴住居跡 (SA36 第216図)

概要 C区北部中央寄りの位置から検出された。SA37とSA38に挟まれる位置になる。一辺約3.8mの方形プランを有する。床面からは複数のピットが検出されたが、主柱穴の配列は明らかでない。出土遺物

覆土中からは縄文時代後期を中心とする土器・石器が出土したが、時期決定に資するような古墳時代の遺物は見出されなかった。特筆すべき現象として、検出時にプランのほぼ中央の覆土上層に砂岩・尾鈴山産溶結凝灰岩の礫が廃棄された土坑が検出された。SA36の機能時よりも下る時期の人間の行為であろうが、SA36が埋まつた後も、凹地として認識されていたのであろう。

■第37号竖穴住居跡 (SA37 第217図)

概要 C区北部中央寄りの位置から検出された。SA37に隣接する。東側縁辺は先行トレンドにより未記録であるが、一辺4m前後で、隣接するSA36とほぼ同規模の方形プランを有するのであろう。床面からは少數のピットが検出されたが、主柱穴の配列は明らかでない。出土遺物

覆土中からは縄文時代後期を中心とする土器・石器が出土したが、時期決定に資するような古墳時代の遺物は見出されなかった。

■第38号竖穴住居跡 (SA38 第218図)

概要 C区中央部より検出された。一辺約4.6mの中形の方形プランを持つ。床面には複数のピットが検出されたが、主柱穴などの配列は明らかで

ない。床面からそのやや上部にかけて、夥しい量の土器と、それに混じて縄文時代の石器が出土している。

出土遺物

■土器 (第219~224図)

本遺跡の古墳時代竖穴住居跡の中で、最大の遺物出土量を誇る。出土している器種や形態も雑多であり、まさに当遺跡における古墳時代出土土器の縮図である。

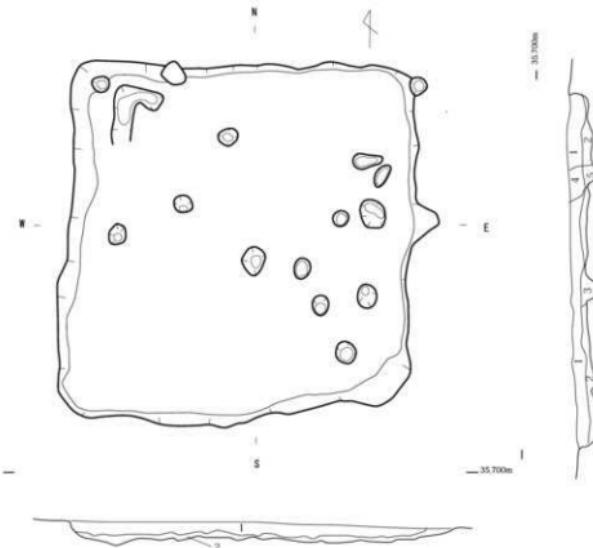
表はA類からC類に至るまで、全てのバリエーションが見られる。一方で、壺や高杯の出土点数は限られており、そのほとんどが碎片で接合が困難であった。

この遺構の廃絶時期であるが、表A類に属する土器が、純粹にこの遺構に作らうものであれば、5世紀初頭~中頃には廃絶されていたことになる。一方で、土器投棄の時期幅としては、表C類で、口縁部の直口化が進行している資料、また高杯で受部が小さく、杯部が深い資料が一定量存在することから、5世紀後半までと推測される。C区には遺物の出土しない古墳時代の住居跡が複数存在するが、これはSA38に廃棄を集中させているためと考えられる。これに砾や縄文時代の石器が一定量混入する現象も、当時の廃棄行為を考えるうえで興味深い。

なお、個別の事実記載は省略しているので、觀察表(第20~23表)を参照されたい。

■第45号竖穴住居跡 (SA45 第225図)

概要 C区北西部から検出された。小形の方形プランを持つ。SA17に接し、SA14と同様の搅乱坑に北辺を切られる。また、中央付近と西側にも

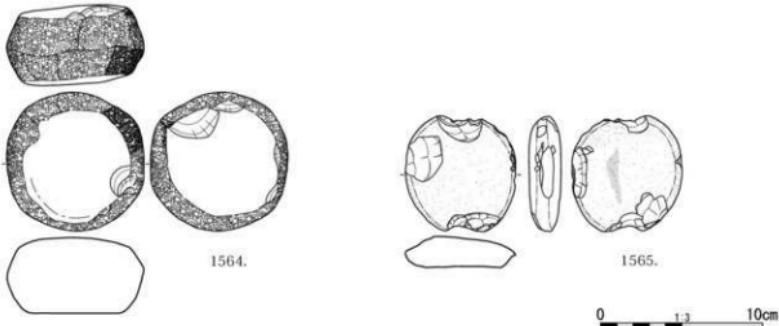


SA19土層注記

- 1 黒色土(Hue10YR2/1.5)シルト質土。粒子が細かく軟質。炭化物を含む。
- 2 黒褐色土(Hue10YR2/2.5)粘質土。1より粒子が大きく硬質。
- 3 黒色土(Hue10YR1.7/1.5)粒子が非常に細かく軟質。やや粘性あり。堆土・炭化物を多く含む。鉄器か?
- 4 黒色土(Hue10YR1.85/1)粒子が非常に細かく硬質。粘性なし。炭化物を若干含む。
- 5 黒褐色土(Hue10YR2/2.5)粒子が非常に細かく軟質。炭化物を含む。

0 1:60 2m

第 212 図 第 19 号竪穴住居跡 (SA19) S = 1 / 60



第213図 第19号竪穴住居跡出土の石器 S=1/3

後続する時期の溝状遺構が走り、遺構の全容は明らかにしがたい。主柱穴の配列などは不明だが、溝状遺構に切られる中央部付近に、焼土の分布する範囲が認められ、火廻と評価できよう。

出土遺物は少なく、図示は割愛した。

■第16-46号竪穴住居跡 (SA46 第226図)

概要 C区北西部から検出された、切り合う2軒の竪穴住居跡である。SA15・17、SA23・24、の切り合い事例と同様に、小さな規模の竪穴住居が、相対的に大きなサイズの竪穴住居跡を切る関係がここでも認められる。なお、SA46は東辺を後続する時期の溝状遺構に切られている。

SA16については床面の主柱穴の様相などは明らかでないが、SA46には直線状に並ぶ三つのピットが検出され、主柱穴の配列に関連する可能性が指摘できる。

出土遺物

□土器 (第227図)

面積の割りに出土量に乏しいが、図示したような遺物が認められた。石製遺物は認められなかった。

■第47号竪穴住居跡 (SA47 第228図)

縄文時代の事実記載でも触れたが、SA47は複数の竪穴住居跡の重複した様相である可能性が高い。このうちSA47-2とした範囲が古墳時代の所産である可能性が高い部分である。ただし、壁面の輪郭などは認められず、土色の変化のみを追って線を引いたものである。

出土遺物

□土器 (第229図)

他の多くの古墳時代中期の竪穴住居跡群とは異なり、1790の甕の器形や、1791の高坏の様相から判断しても、他より古相と評価でき、興味深い。

□石器 (第229図)

凝灰岩製の砥石が1点認められた。他にも複数の石器が出土したが、縄文後期の竪穴住居跡に掘り込んでいる可能性が高いため、その反映と感がられる。

■第57号竪穴住居跡 (SA57)

概要 C区北西端の調査区間から検出された不整形の小規模プランである。一応、土師器片の出土が確認されたが、縄文の遺構に偶発的に入り込んだものである可能性も高い。

■第70号竪穴住居跡 (SA70 第230図)

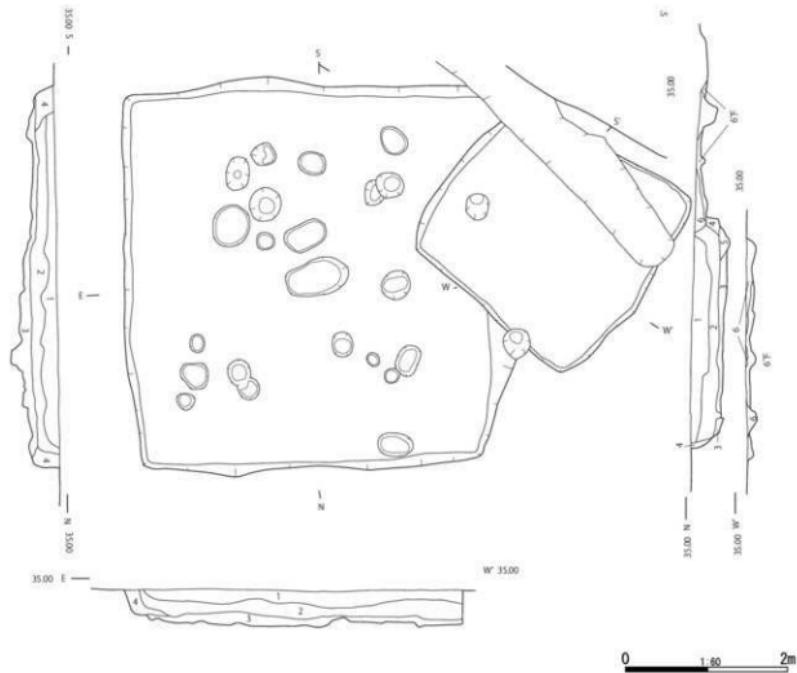
概要 B区の北西部に位置し、SA73とSA74に挟まれる。

一辺約3mの方形プランであり、小形のグループに入る。床面などからピットはわずかのみ検出され、主柱穴などの構造は明らかではない。

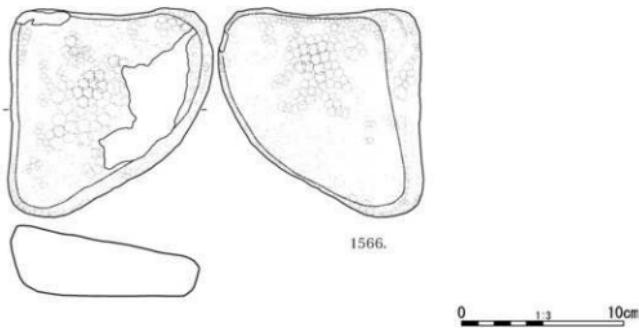
出土遺物

□土器 (第231図)

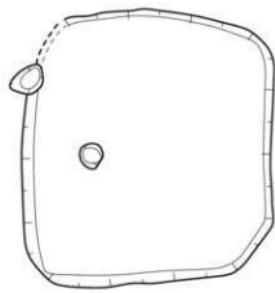
狭い面積に比較して、遺物は割合に豊富である。甕(1646～1648)や大形・小形壺(1649・1650)、高坏(1652～1653)などが認められた。



第214図 第23・24号竪穴住居跡 (SA23・24) S=1/60

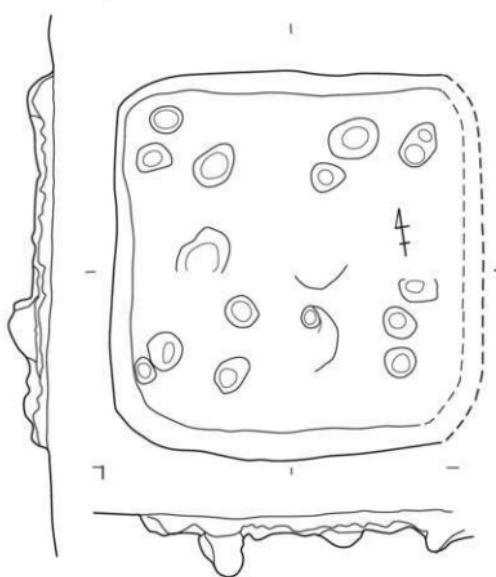


第215図 第23号竪穴住居跡出土の石器 S=1/4



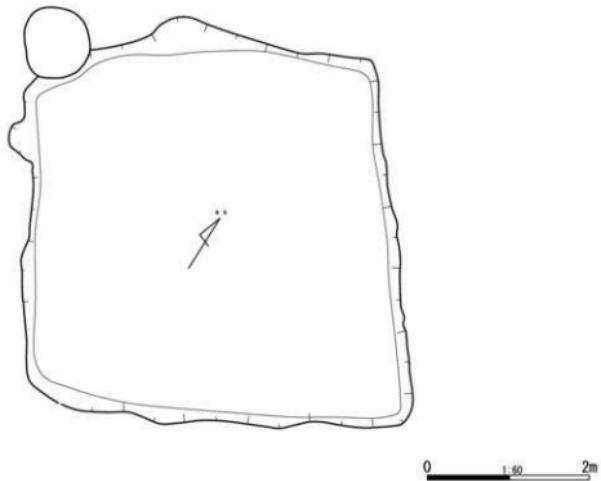
0 1:60 2m

第216図 第36号竪穴住居跡 (SA36) S= 1 / 60

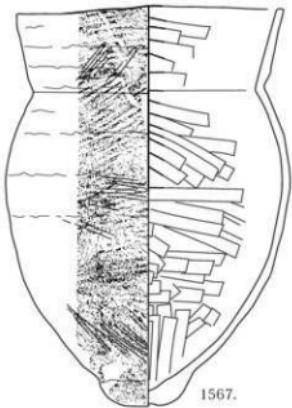


0 1:60 2m

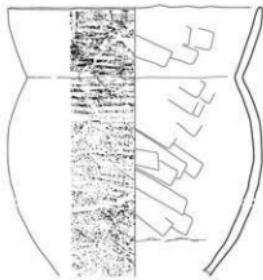
第217図 第37号竪穴住居跡 (SA37) S= 1 / 60



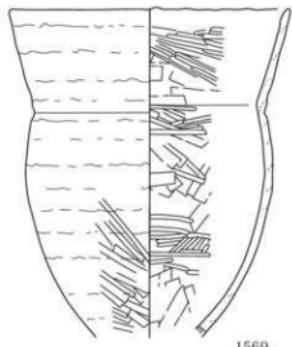
第218図 第38号竪穴住居跡 (SA38) S= 1/60



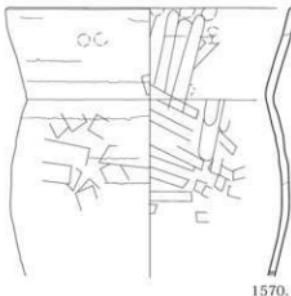
1567.



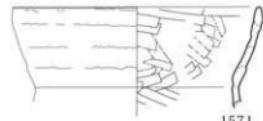
1568.



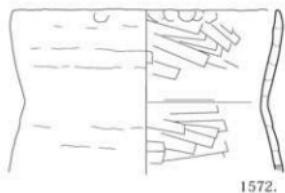
1569.



1570.



1571.



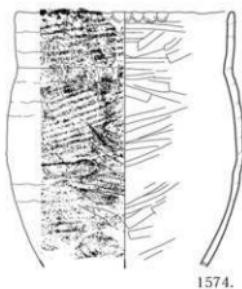
1572.



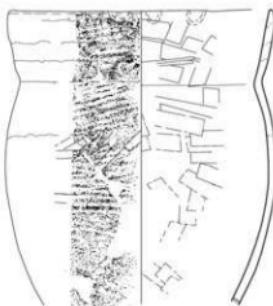
1573.

0 1/4 20cm

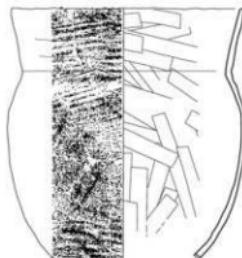
第 219 図 第 38 号竪穴住居跡出土の土器 (1) S = 1 / 4



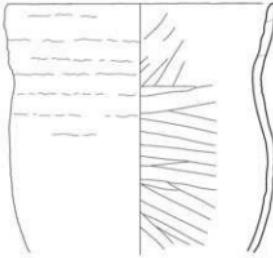
1574.



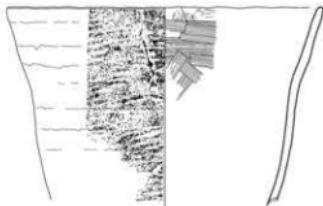
1575.



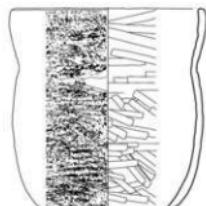
1576.



1577.



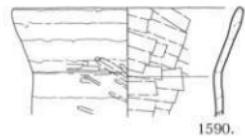
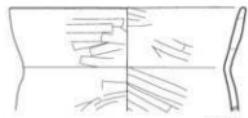
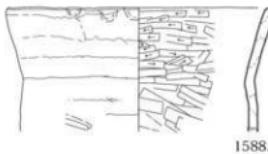
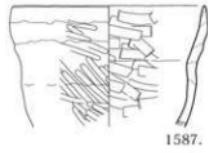
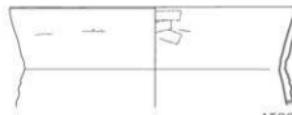
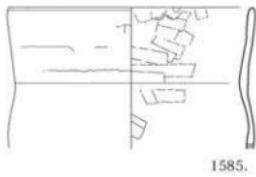
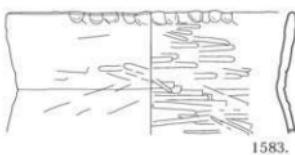
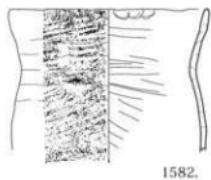
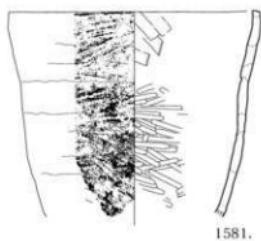
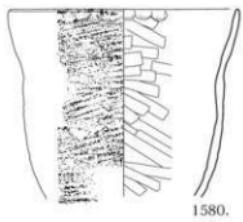
1578.



1579.

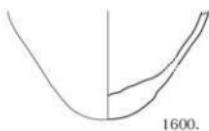
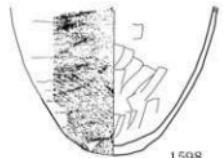
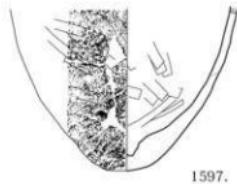
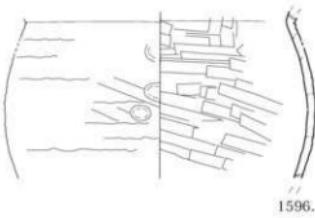
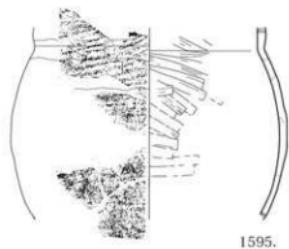
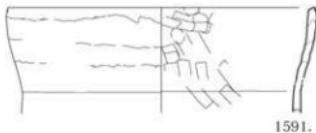
0 1/4 20cm

第 220 図 第 38 号竪穴住居跡出土の土器 (2) S = 1 / 4



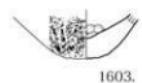
0 1/4 20cm

第 221 図 第 38 号竪穴住居跡出土の土器 (3) S = 1 / 4



0 1/4 20cm

第 222 図 第 38 号竪穴住居跡出土の土器 (4) S = 1 / 4



1603.



1604.



1605.



1606.



1607.



1608.



1609.



1610.



1611.



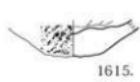
1612.



1613.



1614.



1615.



1616.



1617.



1618.



1619.



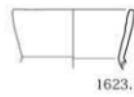
1620.



1621.



1622.



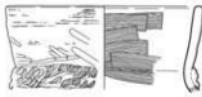
1623.



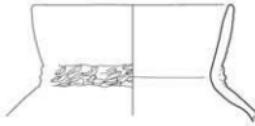
1624.



1625.



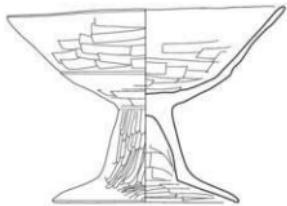
1626.



1627.

0 1/4 20cm

第 223 図 第 38 号竪穴住居跡出土の土器 (5) S = 1 / 4



1628.



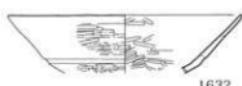
1629.



1630.



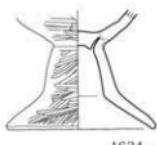
1631.



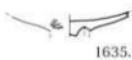
1632.



1633.



1634.



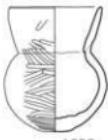
1635.



1636.



1637.



1638.



1639.



1640.



1641.



1642.



第224図 第38号竪穴住居跡出土の土器 (6) S=1/4

■石器（第 231 図）

縄文時代および弥生時代遺物の混入と考えられる資料が若干出土している。1769 は打製石斧有抉群の未成品である。剥片を素材とする。弥生時代と所産である可能性が指摘できるが、古墳時代まで残存した可能性を排除できないため、掲載している。1858 は敲打痕が残る尾鈴山産溶結凝灰岩製の剥片である。縄文時代の磨敲石の破損品か。

■第 71 号竪穴住居跡（SA71 第 232 図）

概要 B 区のほぼ中央部から検出された。一辺が 4 m の方形プランを持つ。床面から検出されたビットには主柱穴の可能性を持つものもあるが、厳密には断定できない。グリッドの土層断面図作成用ベルトにかかった部分では掘り込みの様相がよく観察できた。これによると基本層序第 I 層を上下に分けた場合、第 I 層下部を当時の地山として、第 I 層下部に遺構を掘り込んでいる様子がよくわかる。

遺物は土師器を中心によく残存していた。特筆される資料としては、土師器の壺破片が重ねて置かれたその下に出土した磨製石斧などがある。

出土遺物

■土器（第 233・234 図）

壺（1655～1665）が多く出土し、壺・高环などのセットが揃う。詳細は後頁の該当する観察表を参照されたい。

■石器（第 234 図）

特筆すべき石器として、床面から出土した 9 点の白玉と磨製石斧がある。白玉については他の玉類とまとめて本節に後述する。

□磨製石斧（第 234 図 1859）

淡緑色を呈する綠色岩を用いた全面磨製の石斧である。扁平で側縁も面取りし板状に仕上げている。刃部は多くを欠損するが、両刃に近い。帰属が弥生時代以前に遡る可能性もあるが、床面から出土の土師器壺の下部に重なるように出土しており、SA71 の住人によって存在が認知されていたことは疑いなかろう。

■第 72 号竪穴住居跡（SA72 第 265 図）

概要 B 区中央部で検出された。東西方向に主軸のある方形プランである。一辺約 3.8 m の方形ブ

ランを持ち、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

出土遺物（第 235～241 図）

■土器（第 235～238 図）

土師器は壺・壺・高环でセットを構成する。壺の調整にはバリエーションがあるが、形態的な差異には乏しい。

口唇部を指でつまみあげる事により、細かい波状を呈するものが多い。また外面に粘土紐の輪積痕が明瞭に残る。

1694 は B 類の壺、1696～1700 は 1 類の高环である。

遺構の廃絶時期であるが、壺 B 類の口縁部は緩やかに外反し、まだ直口化していない。C 類とした資料も、直口化しつつも、まだ僅かに口縁部が外反していた面影を残している。これらの点を考慮すると、5 世紀中葉が推測される。

第 235 図 1862 の須恵器大壺は当該住居に伴うと言うよりは、当該住居の廃絶後に投棄されたものと考えられる。当該住居が輪郭が検出されるより以前の段階で、すでに須恵器大壺の出土は確認され、当初は「須恵器片集中区」と認定して記録を進めていたことも、その理由の一つである。

■石器（第 239～241 図）

ほとんどが覆土上層からの出土で、縄文時代の所産であるが、当該 b 住居の廃絶後、一定期間が立ち、覆土の堆積進んだ後に、土師器、須恵器などとともに一括廃棄されたものと想われる。ただし第 241 図 1730・1731 は床面近くの出土状況であることから、この竪穴住居に本来的に伴う可能性が高い。

■第 73 号竪穴住居跡（SA73）

概要 遺構の平面形はやや歪な方形で、一辺約 3 m を測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

出土遺物

■土器

遺構内部から出土した遺物は少なく、固化は行なっていない。

■第 74・75 号竪穴住居跡

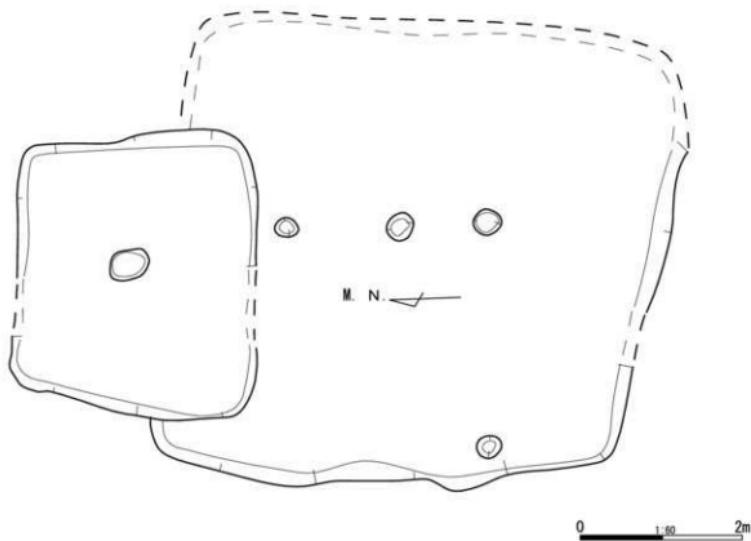
（SA74・75 第 229 図）

概要 B 区北部から検出された。一応竪穴住居の類型として数えたが、いずれも確実ではない。

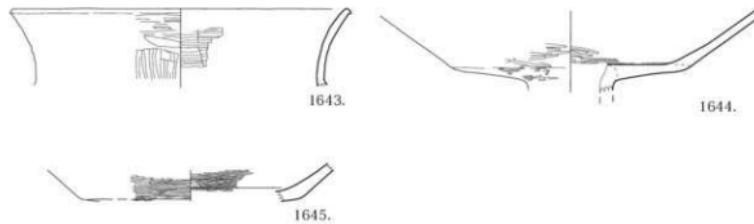


0 1:60 2m

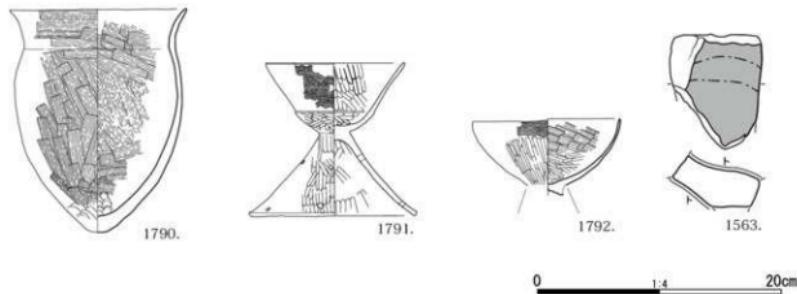
第225図 第45号竪穴住居跡 (SA45) S=1/60



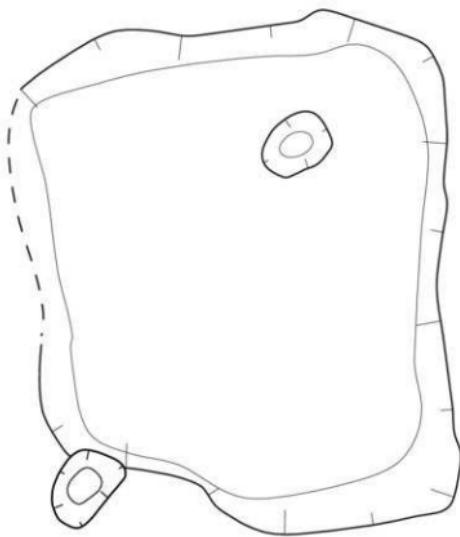
第226図 第16・46号竪穴住居跡 (SA16・46) S=1/60



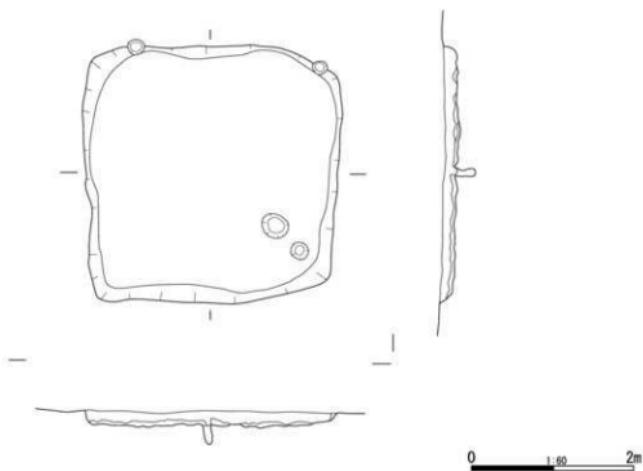
第227図 第46号竪穴住居跡出土の土器 S=1/4



第228図 第47号竪穴住居跡出土の土器 S=1/4



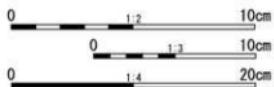
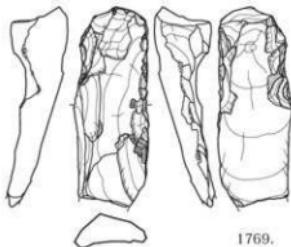
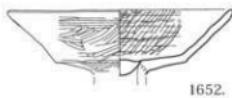
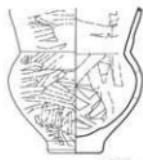
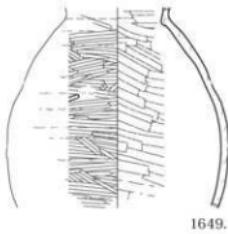
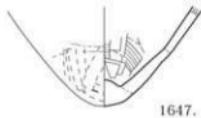
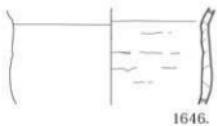
第229図 第74号竪穴住居跡 (SA74) S=1/20



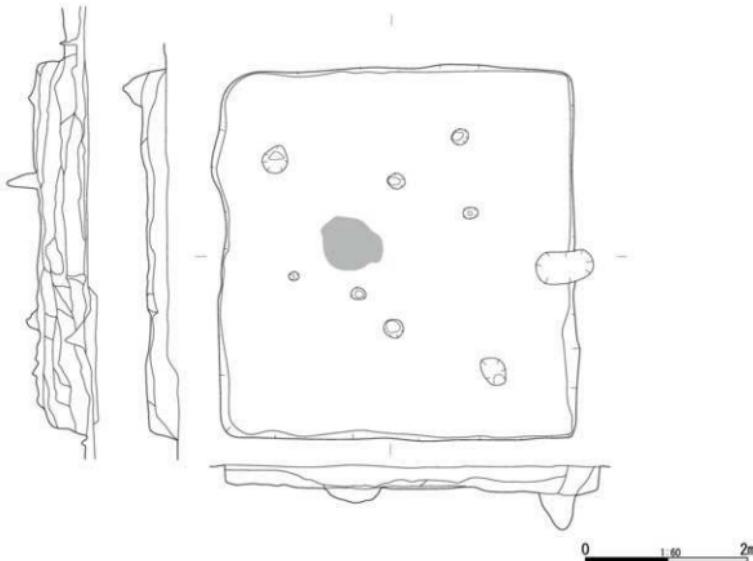
SA70 土層注記

- 1 : 黒褐色 (10 YR 2./2.5) 軟質で、上半部に少量の炭化材 (径 10 ~ 20mm) を含む。
- 2 : 墓褐色 (10 YR 2.5./3) やや硬質で、一部、IV層ブロックをマーブル状に含む。
- 3 : 墓褐色 (10 YR 3./3) 硬質で、一部、IV層ブロックをマーブル状に含む。
- 4 : 墓褐色 (10 YR 3./3) やや硬質で、一部、IV層ブロックをマーブル状に含む。
- 5 : 黒褐色 (10 YR 2./2) 軟質。

第230図 第70号竪穴住居跡 (SA70) S=1/60



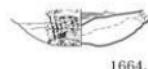
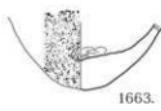
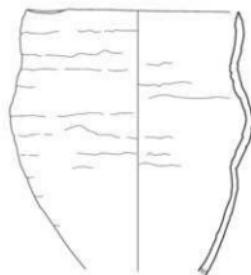
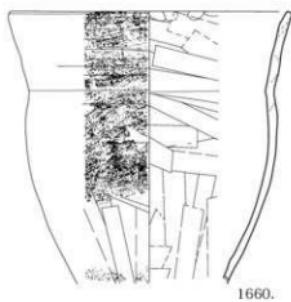
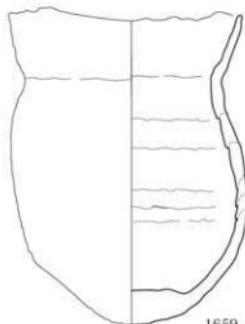
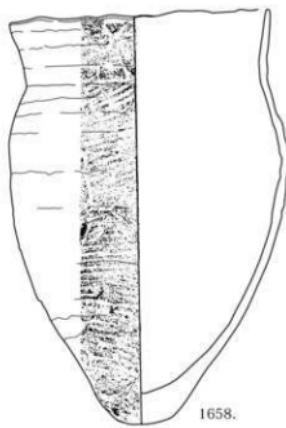
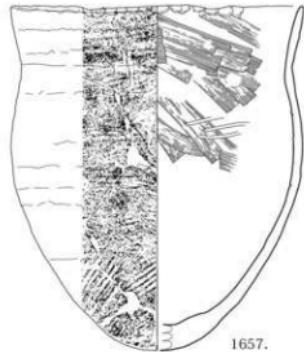
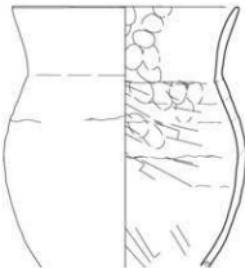
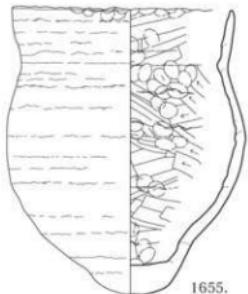
第231図 第70号竪穴住居跡出土の土器・石器 1858: S = 1/2, 1769: S = 1/3, 1646~1653: S = 1/4



SA71 土層注記

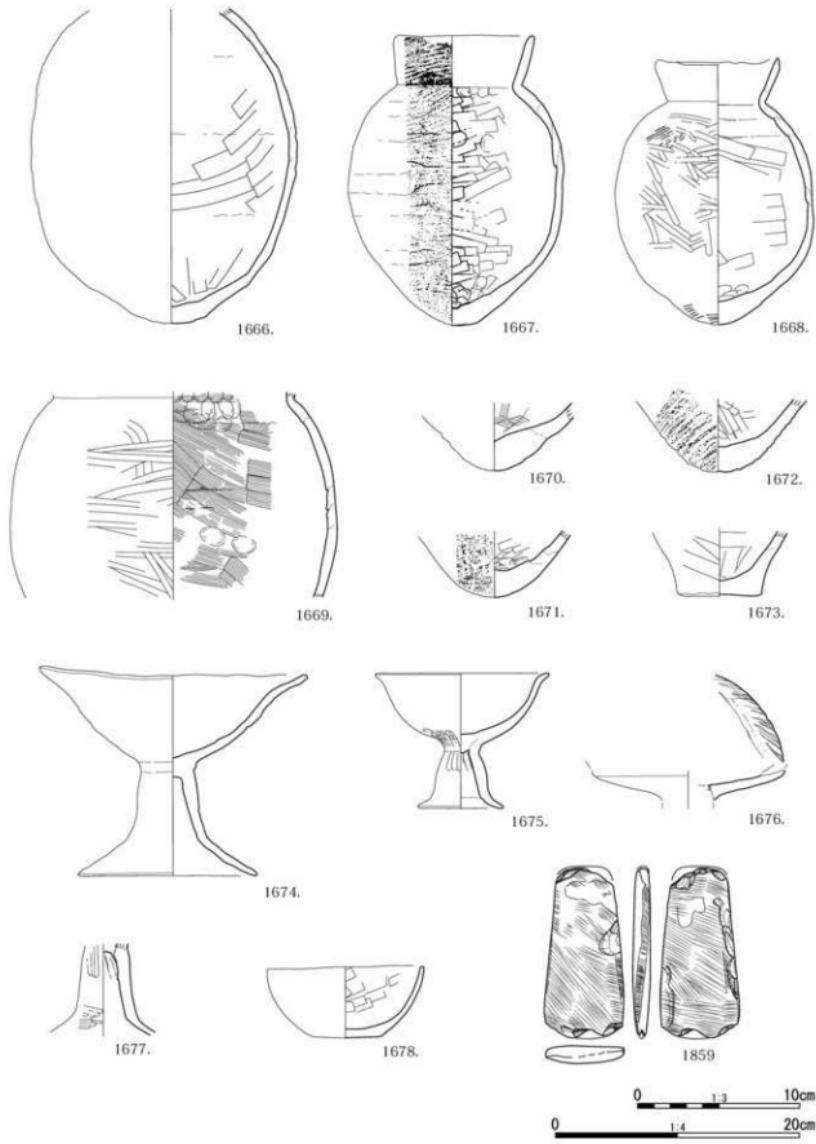
- 1-a : 黒褐色 (10 YR 2 / 3) 基質で粘性に乏しい。炭化物 (径 1 ~ 5 mm) をごく僅かに含む。
- 1-b : 黒褐色 (7.5 YR 3 / 2) やや硬質で粘性に乏しい。炭化物 (径 1 ~ 2 mm), IV 層ブロックを僅かに含む。
- 1: 黒褐色 (10 YR 2 / 2.5) やや硬質で粘性に乏しい。炭化物 (径 1 mm), 焙土粒を僅かに含む。
- 2 : 炭化物 (径 1 m), 焙土粒をごく僅かに含む。
- 3 : 黑色 (10 YR 2 / 2.5) 程より明るい色調。やや硬質で粘性に乏しい。炭化物 (径 1 ~ 3 mm), 焙土粒 (径 1 mm) をごく僅かに含む。
- 4 : 黑褐色 (10 YR 2 / 3) 基質。炭化物 (径 1 ~ 3 mm), 焙土粒を僅かに含む。
- 5 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2.5) 基質で粘性に乏しい。炭化物 (径 1 ~ 3 mm), 焙土粒, IV 層ブロック (径 1 mm) をごく僅かに含む。
- 6 : 黑褐色 (10 YR 2.5 / 3) 基質で粘性に乏しい。炭化物 (径 1 ~ 3 mm), 焙土粒 (径 1 ~ 3 mm), VI 層ブロック (径 10 ~ 40 mm) をごく僅かに含む。
- 7 : 黑褐色 (10 YR 2 / 3) 基質で粘性に乏しい。炭化物 (径 1 ~ 3 mm), 焙土粒 (径 1 mm), VI 層ブロック (径 5 mm) をごく僅かに含む。
- 8 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2) 基質で粘性に乏しく、上の層に比べ、黒味が目立つ。炭化物 (径 1 ~ 3 mm), 焙土粒を僅かに含む。
- 9 : 黑褐色 (10 YR 2.5 / 2.5) 基質で、粘性に乏しい。炭化物 (径 1 ~ 2 mm), 焙土粒をごく僅かに含む。
- 10 : 黑色 (10 YR 2.5 / 3) 基質で、やや粘性に富む。
- 11 : 黑褐色 (10 YR 2.5 / 2) やや軟質で、やや粘性に富む。IV 層ブロック (径 20 ~ 30 mm) を斑状に僅かに含む。
- 12 : 黑褐色 (10 YR 2.5 / 3) やや硬質で、粘性に乏しい。IV 層ブロック (径 10 ~ 15 mm) をごく僅か、炭化物 (径 1 ~ 3 mm) をわずかに含む。
- 13 : 黑褐色 (10 YR 2.5 / 3.5) 基質。IV・VI 層ブロック (径 10 ~ 15 mm) を僅かに含む。
- 14 : 黑褐色 (10 YR 2.5 / 3.5) 13層よりも明るい色調。やや軟質で粘性に富む。
- 15 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2) 基質で粘性に乏しい。焙土粒 (径 1 mm), 炭化物粒 (径 1 ~ 4 mm) をまばらに含む。
- 16 : 黑褐色 (10 YR 2 / 2.5) やや硬質で粘性に乏しい。焙土粒 (径 1 mm), 炭化物粒 (径 1 mm) を僅かに含む。
- 17 : 黑褐色 (7.5 YR 3 / 2.5) 基質で粘性に乏しい。VI 層ブロック (径 20 ~ 30 mm) をまばらに含む。

第232図 第71号竪穴住居跡 (SA71) S=1/60

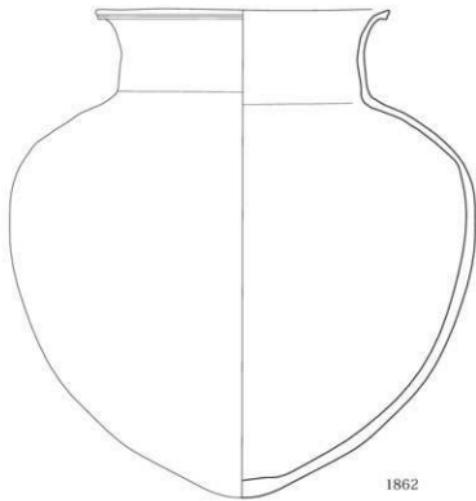
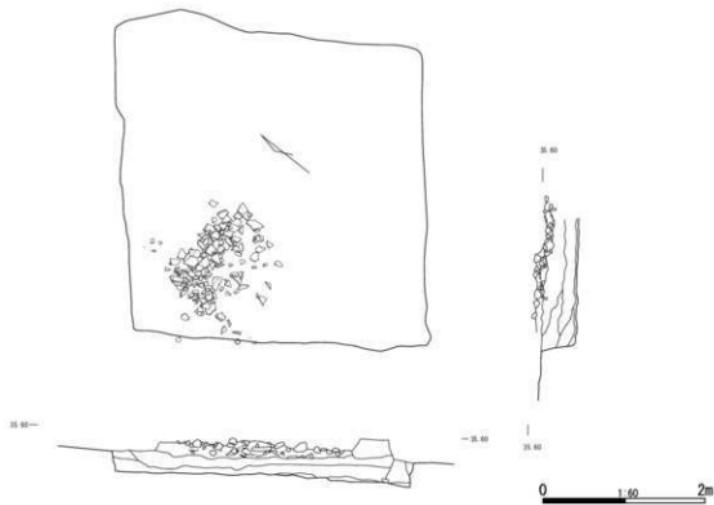


0 1/4 20cm

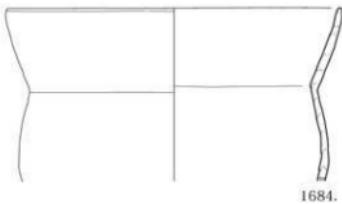
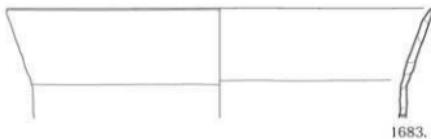
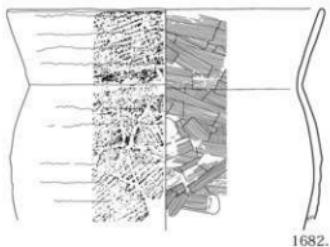
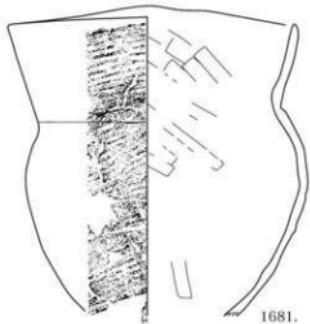
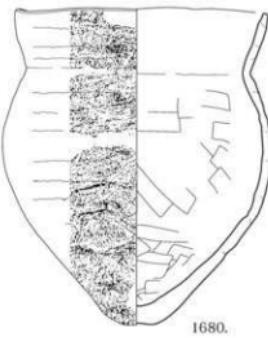
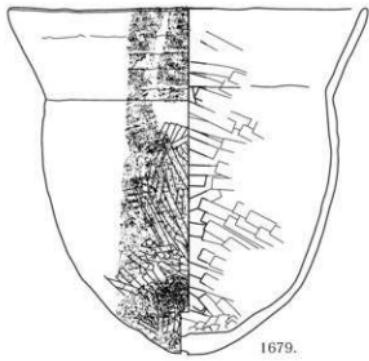
第233図 第71号竪穴住居跡出土の土器(1) S=1/4



第234図 第71号竪穴住居跡出土の土器（2）・石器 1859：S=1/3, 1666～1678：S=1/4

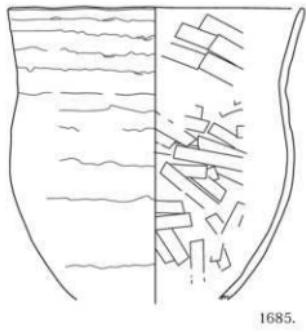


第235図 第72号竪穴住居跡 (SA72) における須恵器大甕とその出土状況 上: S=1/60, 下: S=1/8

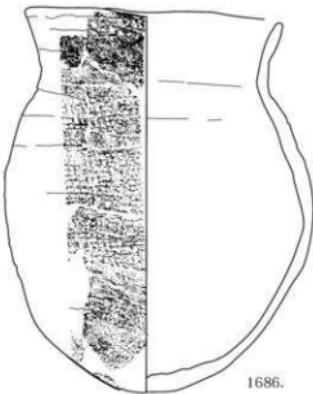


0 1/4 20cm

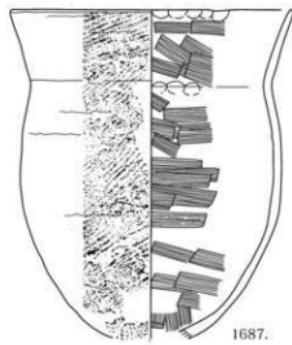
第 236 図 第 72 号竪穴住居跡出土の土器 (1) S = 1 / 4



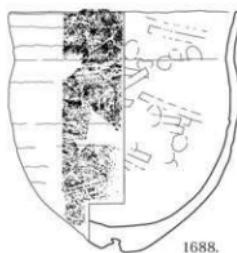
1685.



1686.



1687.



1688.



1689.



1690.



1691.

0 1/4 20cm

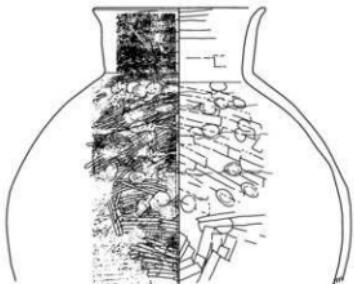
第 237 図 第 72 号竪穴住居跡出土の土器 (2) S = 1 / 4



1692.



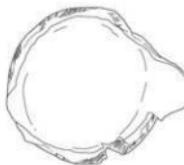
1693.



1694.



1695.



1696.



1697.



1698.



1699.



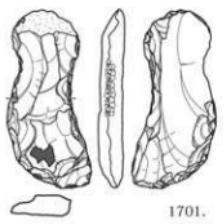
1700.



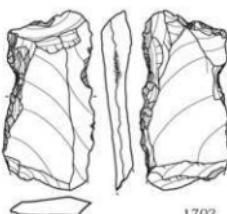
1860.



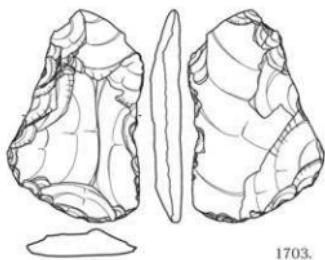
第 238 図 第 72 号竪穴住居跡出土の土器 (3) S = 1 / 4



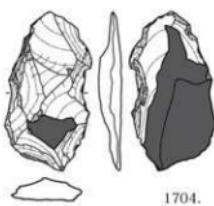
1701.



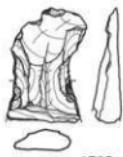
1702.



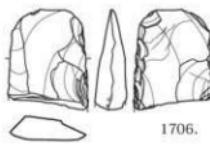
1703.



1704.



1705.



1706.

0 1:3 10cm

第 239 図 第 72 号竪穴住居跡出土の石器 (1) S = 1 / 3



1707.



1708.



1709.



1710.



1711.



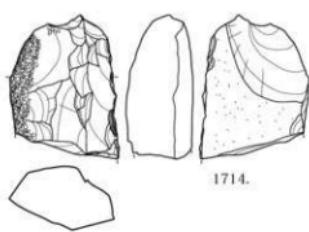
1712.



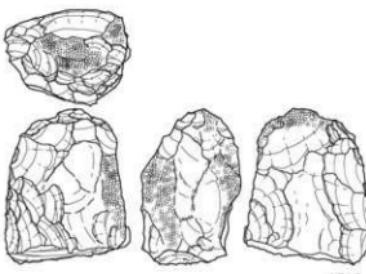
1713.



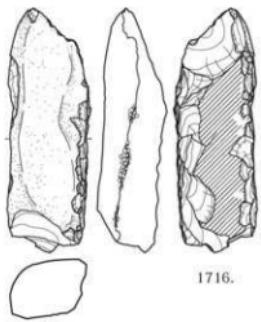
第 240 図 第 72 号竪穴住居跡出土の石器 (2) S = 1 / 3



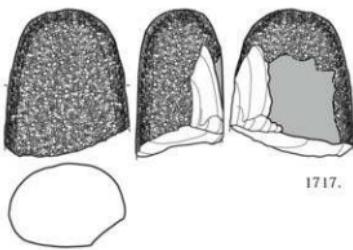
1714.



1715.



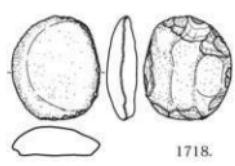
1716.



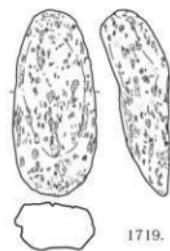
1717.

0 1:3 10cm

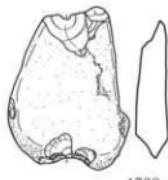
第240図-2 第72号竪穴住居跡出土の石器(2) S=1/3



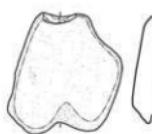
1718.



1719.



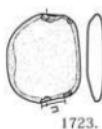
1720.



1721.



1722.



1723.

0 1:3 10cm

第240図-3 第72号竪穴住居跡出土の石器(2) S=1/3



1724.



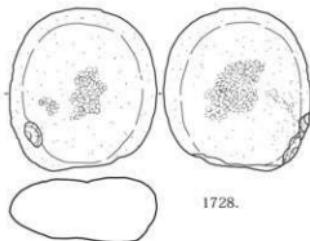
1725.



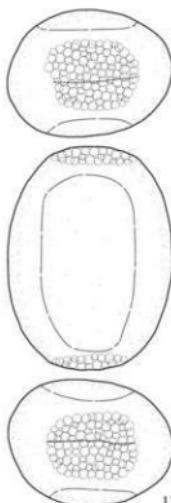
1726.



1727.



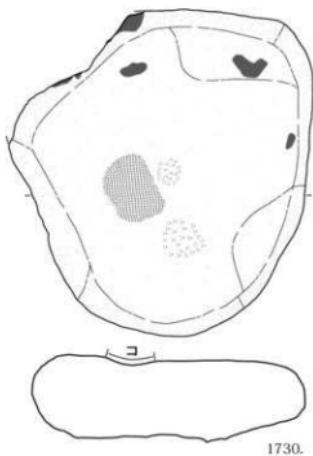
1728.



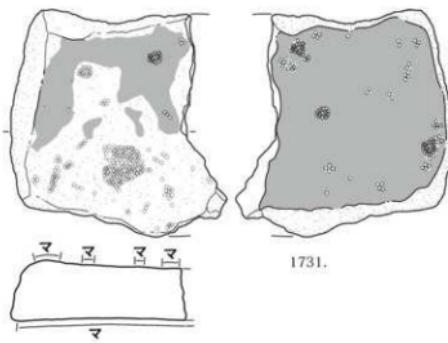
1729.

0 1:3 10cm

第241図 第72号竪穴住居跡出土の石器(3) S=1/3



1730.



1731.



第241図-2 第72号竪穴住居跡出土の石器(3) 1724~1729:S=1/3, 1730・1731:S=1/4

SA74は長軸2m×短軸1.7mの小さな方形プランで、土坑とした方がより適切かもしれない。

SA75は圓化していないが、竪穴住居跡の床面のみが残った可能性があるものであるが、上部が削平されていたわけではないので、厳密には性格不明の土色変化とせざるを得ない。出土遺物もまとまつたものではなく、様相不明である。

第76号竪穴住居跡（第242図）

概要 B区中央部の調査区間にわざかに東隅部をかけた位置から検出された。一辺が約6mの略方形プランであり、A区のSA06や輪郭が不完全ではあるがC区のSA46と並ぶ規模のサイズで、本遺跡最大の面積を誇る竪穴住居跡となる。

床面の周囲には壁溝が巡る。主柱穴は明瞭な配列を見せる4本柱である。壁面は若干傾斜が大きい部分も認められる。

出土遺物

■土器（第243～245図）

床面からはまとまつた量の土師器の出土が確認された。須恵器は出土していない。甕（1732～1739）、壺（1750～1754）、高杯（1755～1763）、鉢（1764～1767）でセットを構成する。詳細は後頁の該当する観察表を参照されたい。

■石器（第245図）

覆土を中心に、縄文時代の所産と考えられる石器類が多く出土したが、床面から出土し、本来に当該住居の帰属と考えられる遺物は少ない。

1768は砂岩製の敲石である。棒状礫を素材とするもので、普遍的な石器であるから、一応この住居に伴う可能性も考えておきたい。

■第77号竪穴住居跡（第246図）

概要 B区南部から検出された。SA79とともに、B区北部・C区の古墳時代集落の中心から離れ、その中間に位置する竪穴住居跡のうちの1軒である。北側縁辺を土層観察用トレンチ掘削の際に、未記録のまま掘り進めてしまっている。

そのため、全容が明らかでないが、床面に残る壁溝の位置から一辺約3mの方形プランを有すると推定される。

床面の北辺、南辺、東西辺の一部には壁溝が巡る。床面からは他に複数のビットが検出されてい

るが、主柱穴の配列は明らかではない。床面の中央部には焼土の分布が確認され、地床炉と評価できよう。壁面は上端ラインと下端ラインの差が大きく、若干傾斜が大きい。

出土遺物

■土器

まとまつた量の土器の出土は確認されなかつた。

■石器（第247図）

1770は強いて抽出したものであるが、磨敲石としたものである。半分に破損しているが、尾鈴山産溶結凝灰岩製の扁平棒状礫を素材とし、その平坦面に磨滅痕、端部に敲打痕が観察される。用途は不明で、無論、縄文時代や弥生時代の所産である可能性は排除できない。

■第79号竪穴住居跡（SA79）

概要 SA77とともに集落の中心から外れた位置から検出された竪穴住居跡である。長軸約3.7m×短軸約3.5mのほぼ方形のプランを持つ。後世の溝状遺構（SE18・19）に切られる。床面の中央には焼土を「含む」土壤の範囲が認められ、地床炉と評価できる。床面からは複数のビットが検出されているが、主柱穴などの配列は明らかでない。

出土遺物

■土器

若干の土師器片が出土しているが、まとまつた量は出土していない。

■石器

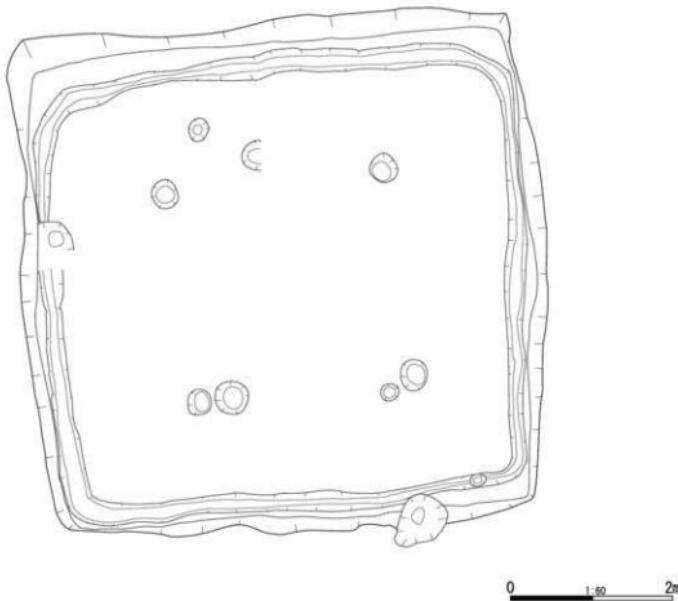
縄文の所産である可能性が高い石器類が覆土中から出土している。

b 溝状遺構（第249～253図）

野首第2遺跡では、A区で2本、B・C区では大小含めて、20本程度の溝状遺構の存在が確認されている。このうち、A区の1本は縄文時代後期の所産である（SE02）。

これらの溝状遺構中からは多くの遺物が出土しているが、縄文時代・古墳時代などの遺物が多く、一部にのみ、より新しい時期の遺物の出土が確認される状況であった。

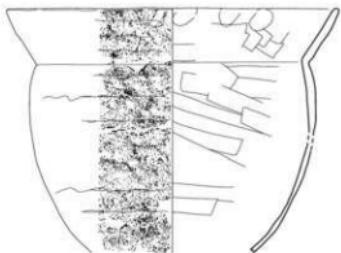
多くの溝は幅が50cmから1m程度のもので、深さも検出面からの高さが50cmを超えるものは



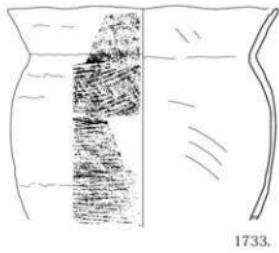
SA76

- 1 : 黒褐色 (10 YR 2/3) 砂質土。軟質で粘性なし。炭化物 (径1~2mm) を少量含む。
- 2 : 黒褐色 (10 YR 2/2) 1層よりやや粒子が細かく硬質で粘性あり。炭化物 (径5mm) を1層よりも多く含む。
- 3 : 黑褐色 (10 YR 2/1.5) 2層とはほぼ同じ粒径で硬質だが、粘性あり。炭化物 (径5~10mm) のものが多い。
- 4 : 黑褐色 (10 YR 2.5/3) 1層とほぼ同じ粒径で、硬質 (1層と同程度)。粘性あり。炭化物 (径1~2mm) を含む。
- 5 : 黑褐色 (10 YR 4/2.8) 硬土。ブロック状 (径50~100mm) で、非常に硬質。堆土の上下において炭化物 (径2~3mm) を多く含む。
- 6 : 黑褐色 (10 YR 3/6) 硬土。ブロック状 (径50~70mm) で、5層よりも濃い色をしている。炭化物 (径2~3mm) を多く含む。
- 7 : 黑褐色 (10 YR 2/1.5) 脂床。シルト質土。非常に硬質で粘性あり。炭化物 (径2~3mm) を多く含む。ところどころに暗褐色 (10 YR 3/3.5) のブロック (径20~30mm) を含む。ブロックの粒子は荒く、硬質で粘性あり。
- 8 : 黑褐色 (10 YR 2/3.5) 粒径はほぼ2層と同程度だが、硬質で粘性に富む。炭化物 (径1~2mm) を多く含む。
- 9 : 暗褐色 (10 YR 3/4) 4層より、粒子は細かく、硬質・粘性は同程度。
- 10 : 黑褐色 (7.5 YR 2/2.5) 壤漠の埋土。粒子はやや大きめで、硬質で粘性に乏しい。炭化物 (径2~3mm) ところどころに含む。

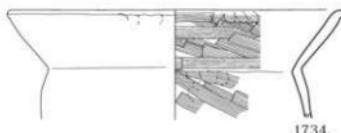
第242図 第76号竪穴住居跡 (SA76) S=1/60



1732.



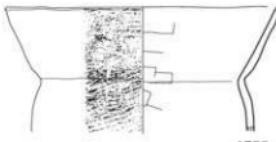
1733.



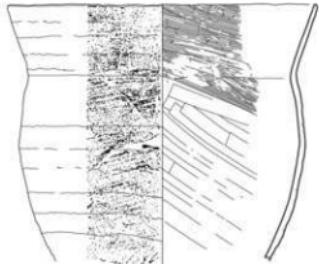
1734.



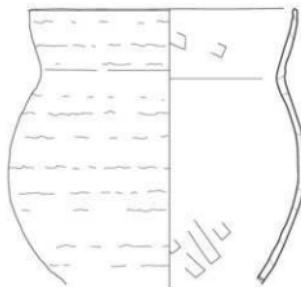
1735.



1736.



1737.



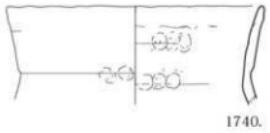
1738.



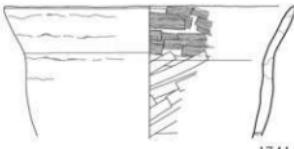
1739.

0 1/4 20cm

第 243 図 第 76 号竪穴住居跡出土の土器 (1) S = 1 / 4



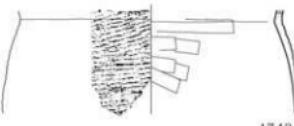
1740.



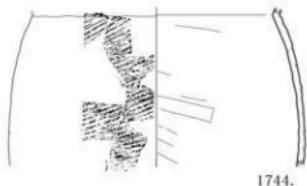
1741.



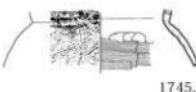
1742.



1743.



1744.



1745.



1747.



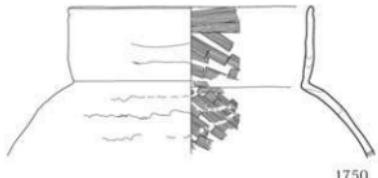
1746.



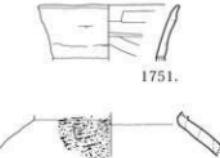
1748.



1749.



1750.



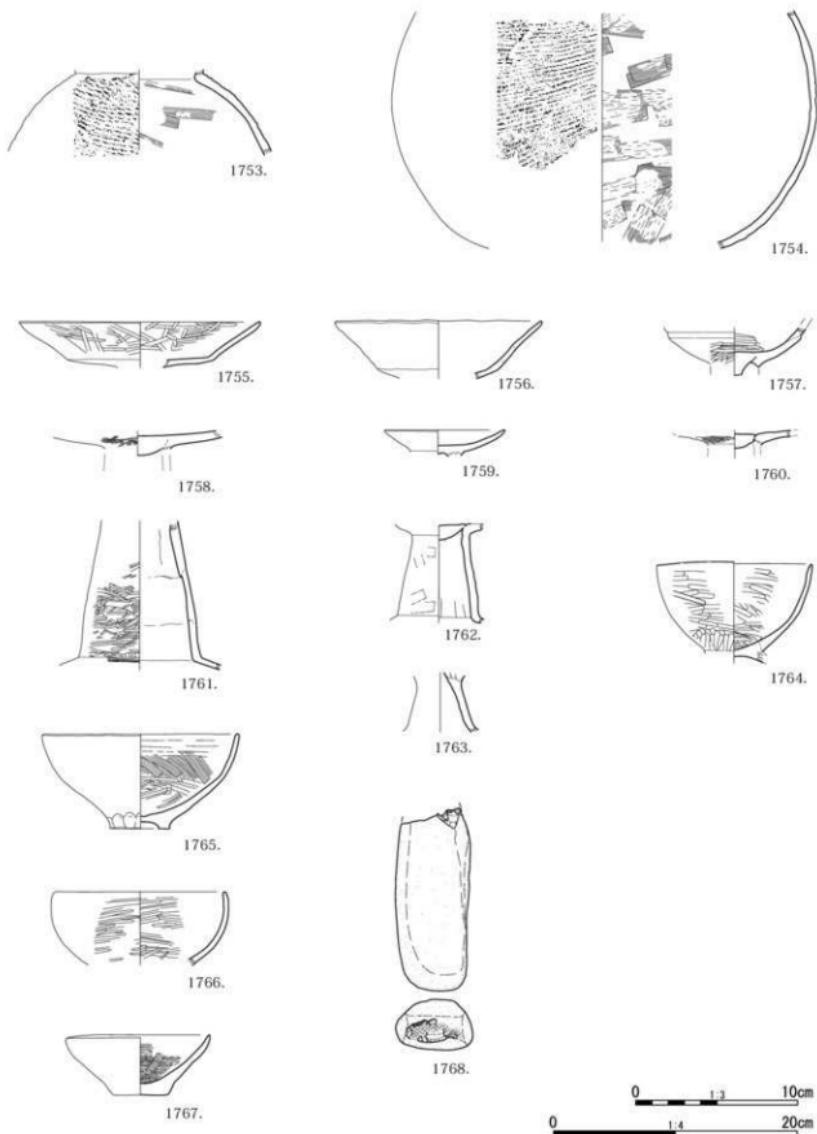
1751.



1752.

0 1/4 20cm

第 244 図 第 76 号竪穴住居跡出土の土器 (2) S = 1 / 4



第245図 第76号竪穴住居跡出土の土器（3）・石器 1768: S=1/3, 1753~1767: S=1/4

まれであった。

なかには若干の硬化面が確認されるものもあるが、基本的には道の機能は担っていないようと思われる。

(3) 包含層・その他の遺構出土の遺物

■土器・土製品

□土師器（第 254・255 図）

包含層中の土師器は、ほとんどが小片であり、形態的にも住居中より出土した土師器から逸脱するものは少ない。

1771～1779 が甕である。

1780 は丸底の壺。1781～1785 は高壺、1786～1788 が椀である。

第 128 図 1292～1293 は SA47 の埋土中より出土した甕と高壺である。先述のとおり、SA47 はその大部分が縄文時代に該当する遺構であり、その覆土中より出土したという事は、古墳時代住居が切り合った可能性とともに、住居埋没途中にあって、何らかの理由によりこれらの土器を埋納した可能性も考慮する必要がある。

■土製品（第 255 図）

1789 は、C 区の第 I 層から出土した管状土錘である。土師質で、比較的大きい。

■石製品

□玉類（第 256 図）

概要 弥生時代以降の所産と考えられる玉は総計 18 点出土した。玉の種類には白玉、小玉、勾玉、不定形垂飾が認められた。19 点中 12 点は古墳時代中期の竪穴住居跡からの出土であり、この時期の所産と考えられる。白玉はほとんどが 0.1g 以下の極小の資料群である。

観察所見 以下、遺構出土資料は遺構ごとに、包含層出土資料は類型ごとに説明を加える。

■第 7 号竪穴住居跡出土の玉類

（第 256 図 1783）

床面からやや浮いた覆土からの出土である。検出後、周辺を精査したが資料の追加は無かった。濃緑色の蛇紋岩製で算盤玉状を呈する。白玉全点中最もサイズが大きい。

第 9 号竪穴住居跡出土の玉類（第 256 図 1784）

床面北西部中央の焼土中から出土した黒色の滑

石ないし蛇紋岩製の白玉である。土壤のフローテーションの過程で検出されたもので、被熱したものか表面が変色している。調査中には気付かなかったものあり、他にも資料が存在したおそれがある。垂直・水平いずれの方向も破損するが、形態的には後述する第 71 号竪穴住居跡出土資料と同一類型である。

■第 70 号竪穴住居跡出土の玉類

（第 256 図 1785）

住居跡床面からの出土である。濃緑色の蛇紋岩製の白玉であり、竪穴住居跡第 9・71 号住居跡出土資料群と技術・形態的には同類であるが、サイズはやや大きい。直径は第 7 号竪穴住居跡出土資料に等しい。側縁もよく研磨され線状痕は観察されないが、元は算盤玉状であったことを示す稜が 1 条観察される。

注目されるのは中央の穿孔とは別に、環部にも穿孔が 1 箇所観察される点である。

■第 71 号竪穴住居跡出土の玉類

（第 256 図 K 1786～1794）

住居跡床面に設置された台石の下から出土した計 9 点の白玉であり、本来は一連の装飾品であった可能性があるが、それにしては数量が少ない。

また石材はいずれも滑石ないし蛇紋岩を用いるが、色調には黒色・黒灰色・濃緑色と変異が認められ、同一母岩である可能性は低い。サイズの点ではバラつきがあり、特に 1796・1797 は径・厚さが他の一群よりも大きい。1803・1804 は破損品である。

製作途上で算盤玉状であったことを示す稜はいくつかの資料に認められる（玉 26・28～32）。

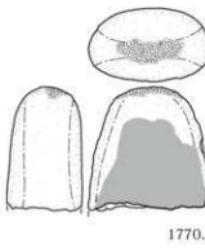
■第 76 号竪穴住居跡出土の玉類

（第 256 図玉 1809・1810）

ボタン大の扁平で不定形なシルエットを有する不定形垂飾が、住居跡覆土中から 2 点確認された。いずれも蛇紋岩中の緑色部分を利用したものを推定され、1809 は淡黄緑色、1810 は淡青緑色の色調で、よく研磨されている。いずれも穿孔は両側から施される鼓形を呈する。

第 81 号土坑出土の玉類

（第 256 図玉 1805・1806）



1770.



第 247 図 第 77 号竪穴住居跡出土の石器 S= 1 / 3

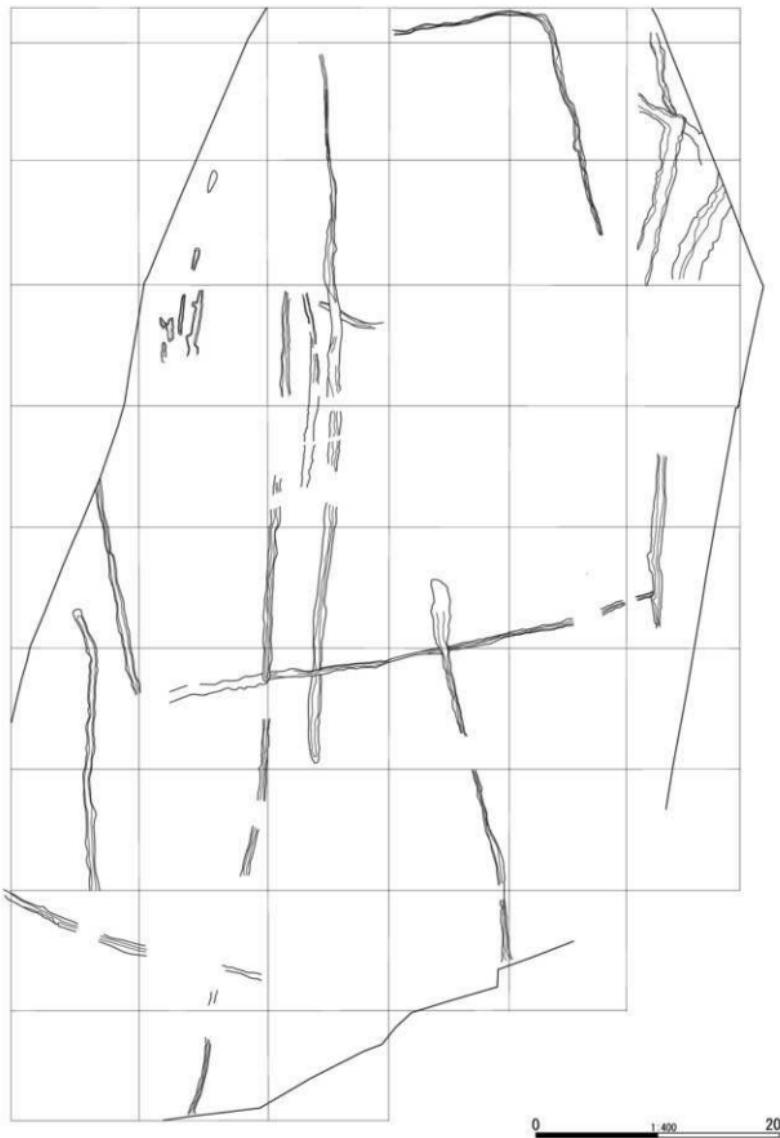
2 点を土坑覆土中から確認した。1805 は暗緑灰色の滑石製小玉である。石材的には縄文時代の紡錘形小形垂飾と同質の石材で、形態的にも片側からの穿孔である可能性が高く丸玉に近い。1805 は古墳時代中期の竪穴住居跡から出土した白玉類と同類の資料であり、同時期の所産である可能性が指摘できる。なお、第 81 号土坑では時期決定に資する上器類は共伴していない。

第 I 層・表土出土の玉類（第 256 図 1807・1808・1811）

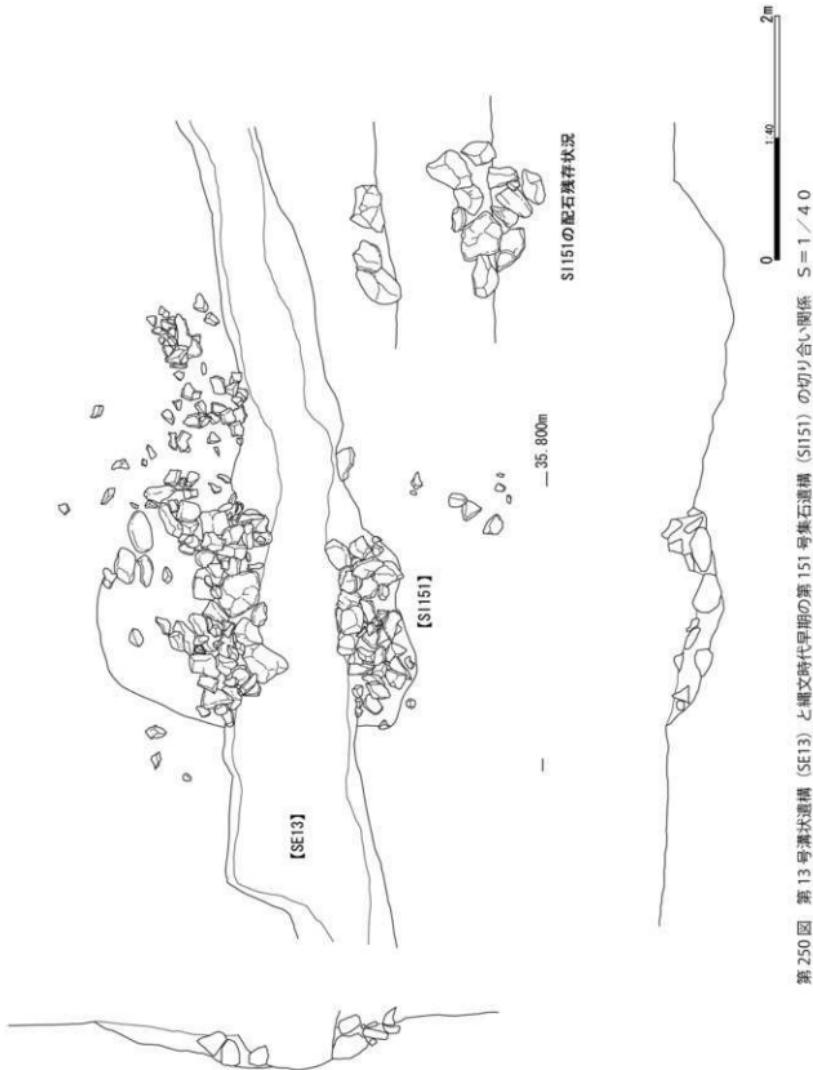
1811 は C 字形の平面形で、穿孔は片側からのみなされる。丁寧な研磨整形がなされ、研磨作業単位の痕跡である稜線も消去されている。B 区の表土からの検出であり、厳密な時期比定は困難で、あるいは縄文時代の所産である可能性も残すが、形態から判断して弥生時代以降の可能性を推したい。当該時期では唯一ヒスイ輝石を用いる。

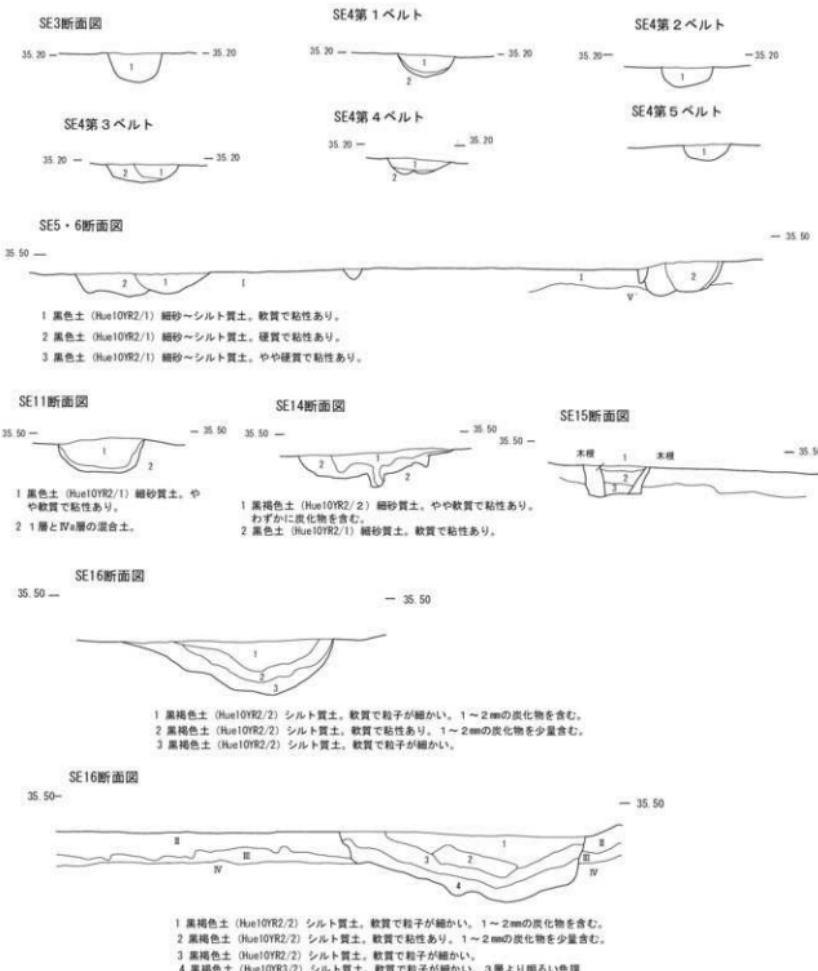
1807 は暗緑灰色の滑石ないし蛇紋岩を用いた小玉であり、側面の整形は線状痕を残した算盤玉状である。技術・形態的な特徴から竪穴住居跡出土の白玉と共通性が看取されることから、古墳時代の所産である可能性が考えられよう。概報 II（文献 26）図 9 の 4 で蛇紋岩製と表記した資料である。

1808 は蛇紋岩製の扁平不整棒状の資料で、よく研磨されるが穿孔は施されない。表土中からの出土で、厳密な時期は不明である。



第249図 B (D)・C区における古墳時代以降の溝状以降 (SE03～18) S=1/400





第251図 溝状遺構断面図 (1) S=1/20

SE20土層断面図

35.80 — — 35.80



SE20土層断面図

38.10 — — 38.10



SE20土層断面図

35.80 —

— 35.80



SE20土層注記

- 1 黒褐色 (Hue7 SYR3/1) 硬質でやや粘性あり。炭化物をわずかに含む。
- 2 黒褐色 (Hue7 SYR3/1) 軟質でやや粘性あり。炭化物をわずかに含む。
- 3 黒褐色 (Hue7 SYR3/1) 若干硬質でやや粘性あり。IV層のブロックをわずかに含む。
- 4 黒褐色 (Hue7 SYR3/1) 軟質でやや粘性あり。炭化物をわずかに含む。2層より明るい色調。

SE22土層断面図

SE21土層断面図

36.90 —

— 36.90



36.90 — — 36.90



SE23土層断面図

36.90 —

— 36.90



- 1 黒褐色 (Hue7 SYR3/1) 硬質でやや粘性あり。炭化物をわずかに含む。

SE24土層断面図

36.90 —

— 36.90



- 1 黒褐色 (Hue7 SYR3/1) 軟質でやや粘性あり。炭化物をわずかに含む。

SE25土層断面図

36.90 —

— 36.90



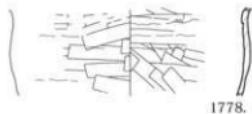
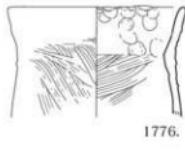
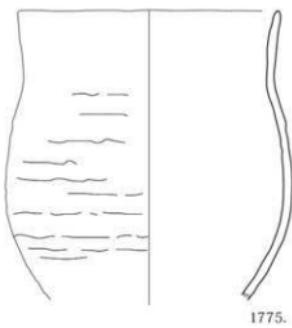
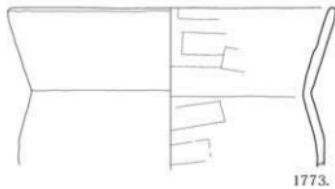
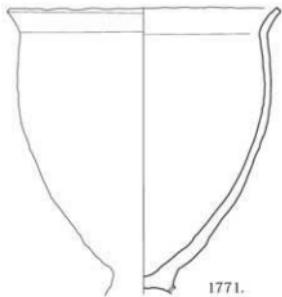
SE26土層断面図

36.90 —

— 36.90

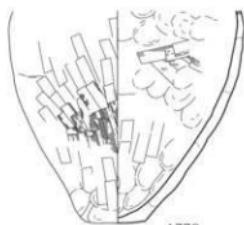


第 253 図 溝状遺構断面図 (3) S = 1 / 20

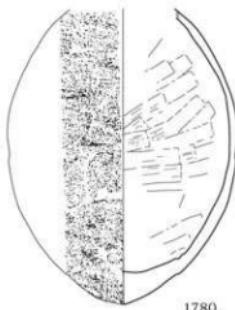


0 1/4 20cm

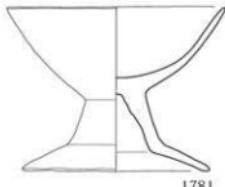
第254図 包含層出土の土師器 (1) S=1/4



1779.



1780.



1781.



1782.



1783.



1784.



1785.



1786.



1787.



1788.



1789.



第255図 包含層出土の土師器(2) 1789: S=1/3, 1779~1788: S=1/4

第16表 竪穴住居跡出土の土師器観察表（1）

機種	規格	種類	部品番号	取扱番号	出土・調査・文様 地点・層位 外観	法寸 (cm)			色調 外観	地土 内面	指考
						口径	底径	高さ			
1457 土師器 調査	口部	Eベルト	SA2	ヘラナデ	ヘラナデ	(22.4)	—	—	褐色	褐色	赤褐色
1458 土師器 貴	底部	Wベルト	SA2	タタキ・ミガキ	ヘラナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色類。砂粒② 内面凹凸有
1459 土師器 貴	底部	Zベルト	SA2	ヘラナデ	ヘラナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色
1460 土師器 調査付底	底部	Wベルト	SA2	ヘラナデ	ヘラナデ	—	6.6	—	褐色	褐色	赤褐色
1461 土師器 貴	頭部～ 側面～ 側面	コカF 4.9 + 273 + 653 側面～ 側面	SA2	タタキ	ナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色
1462 土師器 貴	底部	708	S A 2	タタキ	ナデ	—	4.4	—	褐色	褐色	赤褐色
1463 土師器 高杯	杯部	142	SA2	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色
1464 土師器 小型丸底	頭部～ 側面	コカ1 W + コカ1 H + 側面 側面	SA2	ミガキ	ミガキ	10.8	—	—	褐色	褐色	赤褐色
1465 土師器 小型丸底	頭部～ 側面	コカ1	S A 2	ミガキ	ナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色
1466 土師器 三ニチヨウ	ア 底部	Eベルト	S A 2	ケズリ	ナデ	3.2	1.7	4.6	褐色	褐色	赤褐色
1467 土師器 三ニチヨウ	ア 底部	Eベルト	S A 2	ナデ～ケズリ	コビオサエ	6.5	—	3.3	褐色	褐色	赤褐色。砂粒①
1468 土師器 貴	底部	Wベルト	SA2	ナデ	ナデ	—	6.2	—	褐色	褐色	赤褐色
1469 土師器 貴	底部	Eベルト	S A 2	ナデ	ナデ	—	5.5	—	褐色	褐色	赤褐色
1473 土師器 貴	口部～ 側面	コカ3 + 420	S A 3	ミガキ～ ナデ	ヘラナデ	8.3	—	—	褐色	褐色	赤褐色
1474 土師器 高杯	受部	96	S A 3	ミガキ	ミガキ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色
1475 土師器 楔	口部～ 底部	512 + 62 + 829 + 025 +コカ50 コカF16 + 57 + 58	S A 3	ミガキ・ナデ	ミガキ	—	(5.4)	—	褐色	褐色	赤褐色
1476 土師器 楔	底部	721	S A 3	ミガキ	ヘラナデ	0.5.9	—	5.5	褐色	褐色	赤褐色。砂粒①
1477 土師器 楔	口部～ 底部	5.6.1 + コカ1.3.8	S A 3	ミガキ	ミガキ	15.1	2.3	6.1	褐色	褐色	赤褐色。砂粒①
1478 土師器 貴	口部～ 底部	コカF11 + コカF15 + 2 Eベルト	S A 4	タタキ	ナデ	26.5	4.0	31.8	褐色	褐色	赤褐色。砂粒① 外面にススキ有。内面に炭化物有
1479 土師器 貴	頭～ 底	コカ43	S A 4	タタキ	ヘラナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色。砂粒② 外面凹凸有
1480 土師器 貴	頭	46	S A 4	斜口突起文～ハゲ	ヘラナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色。砂粒②
1481 土師器 貴	頭～底	—	S A 4	ハゲ	ハゲ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色
1483 土師器 貴	底部	コカ17	S A 4	タタキナデ	ヘラナデ～ナデ	—	5.1	—	褐色	褐色	赤褐色
1484 土師器 高杯	頭部	コカ40	S A 4	ミガキ	ナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色
1485 土師器 小型丸底	頭部～ 底部	コカ98 + 87 + 92 + 176	S A 4	ミガキ	頭部ヘラナデ～ ナデ	(10.0)	—	—	褐色	褐色	赤褐色

第17表 穴居住跡出土の土師器観察表（2）

第18表 穴穴住居跡出土の土師器観察表（3）

編 號	種 別	器 種	取上番号	出土区・ 地点・層 位	調査・文様 外面	法 規(cm)			色 調		底土	備 考	
						内面	口径	底径	高さ	外面	内面		
1510	土師器	小型圓 盤形	口縁～ 底部 K3L-1段	SWベルト- 2+NNW S A 5	ヘラナデ-コビナデ→ ミガキ	13.4	—	—	粉色	粉色	赤褐色	外蓋又付着	
1511	土師器	圓	口縁～ 底部 SWK	S A 5	ヘラナデ、口縁部主 みあげ	16.3	—	9.6	粉色	粉色	赤褐色		
1512	土師器	圓	底部 SWK+NWK	S A 5	タタキ	ハケ	—	—	粉色	粉色	赤褐色		
1513	土師器	圓	底部 NEK	S A 5	タタキ	ハケ	—	29	—	粉色	粉色	赤褐色	外蓋又付着
1514	土師器	圓	底部 SWK	S A 5	タタキ-ナデ	ハケ	—	—	粉色	粉色	赤褐色		
1515	土師器	圓	底部 203+SWK+NWK	S A 5	タタキ-ミガキ	ハケ	—	1.3	—	粉色	粉色	赤褐色	外蓋又付着
1516	土師器	圓	底部 NWK	S A 5	ナデ	ナデ	—	—	粉色	粉色	赤褐色		
1517	土師器	圓	底部 Sベルト	S A 5	タタキ	ヘラナデ	—	—	粉色	粉色	赤褐色		
1518	土師器	圓	底部 NWK	S A 5	タタキ	ヘラナデ	—	—	粉色	粉色	赤褐色		
1519	土師器	圓	底部 NWK	S A 5	タタキ	ヘラナデ	—	4.0	—	粉色	粉色	赤褐色	
1520	土師器	圓	製造～ 底部 56	S A 5	ヘラナデ-指ナデ 一部ハラミガキ	ヘラナデ-指ナデ —	—	—	粉色	粉色	赤褐色		
1521	土師器	圓	口縁～ 底部 NEK	S A 5	タタキ、口縁部ヘラ ナデ	ハケ	13.1	—	—	粉色	粉色	赤褐色	外蓋又付着
1522	土師器	圓	小型丸底 口縁～ 底部 100+NWK	S A 5	ミガキ	側部ハケ-口縁～口縁 部分ミガキ、底部コビナデ(14.3) サエ	2.4	17.9	粉色	粉色	赤褐色		
1523	土師器	高杯	底部 399+S EK	S A 5	ミガキ	丁寧なナデ	16.2	—	—	粉色	粉色	赤褐色	
1524	土師器	高杯	底部 NWK	S A 5	ミガキ	ナデ	—	—	粉色	粉色	赤褐色		
1525	土師器	高杯	底部 Wサブトレ	S A 5	ミガキ	ミガキ	—	—	粉色	粉色	赤褐色		
1526	土師器	小型丸底 口縁～ 底部 S C 7	S C 7	S A 5	風化著しい	口縁部ハケ	9.5	1.6	12.7	粉色	粉色	赤褐色	
1527	土師器	小型丸底 口縁～ 底部 NWK2レイヤー	NWK2レイヤー	S A 5	ミガキ	ハケ-ナデ	8.5	1.4	—	粉色	粉色	赤褐色	内外面赤紅
1528	土師器	小型丸底 口縁～ 底部 S C 1	S C 1	S A 5	ミガキ	コビオサエ	—	—	—	粉色	粉色	赤褐色	
1530	土師器	圓	口縁～ 底部 コカF 5.4	S A 6	タタキ	ハケ	22.8	—	—	粉色	粉色	赤褐色	外蓋又付着
1531	土師器	圓	口縁～ 底部 コカ2+81+84+ 86+88	S A 6	タタキ-口縁部ナデ	ハケ	24.6	—	—	粉色	粉色	赤褐色	外蓋又付着
1532	土師器	圓	口縁～ 底部 コカ4	S A 6	タタキ-ケズリ、口縁 部底いミガキ	ハケ	14.2	1.2	14.2	粉色	粉色	赤褐色	
1533	土師器	圓	底部 1744+1711	S A 6	タタキ-ヘラナデ	指ナデ、指押さえ-ヘ ラナデ	—	—	—	粉色	粉色	赤褐色	外蓋又付着 内面碳化物付着
1534	土師器	圓	底部 SWベルト	S A 6	タタキ-ヘラ	ヘラ	—	0.4	—	粉色	粉色	赤褐色	外蓋又付着

第19表 竪穴住居跡出土の土師器観察表（4）

名	種	別	器	部	位	取上番号	出土区・調査・文様		寸 法 (cm)			色調		地土	備考		
							地点・層	外觀	内面	口径	底径	高さ	外觀	内面			
1535	土師器	高环	口縁	~	494	S A 6	ヘラナデ	ヘラナデ	(22.2)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外面部付着		
1536	土師器	高环	側面	外観	Nベルト	S A 6	ミガキ	ミガキ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色			
1537	土師器	ミニチャウ	口縁	ア	底部	コカ21	S A 6	コビオサエ	ユビオサエ	5.3	—	4.1	褐色	褐色	赤褐色		
							1010 + 1099 + 1200 + 1208 + 1211 + 1242 + 1202 + 1237 + 1240 + 1200 + 1202 + 1207 + 1234 + 1238 + 1204 + 1207 + 1239 + 1204 + 1210 + 1248 + 1207 + 1208 + 1209 + 1230 + 1207 + 1209	SAT	ヘラナデ	ヘラナデ	22.7	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外面部付着
1538	土師器	廣	口縁	~	底部	コカ22	S A 6	ミガキ	ミガキ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外面部付着	
							1210 + 1254 + 1260 + 1274 + 1261 + 1266 + 1267 + 1269 + 1232 + 1269 + 1260 + 1270 1230 + 1262 + 1263 + 1265 + 1241 + 1251 + 1252 + 1253	SAT	ヘラナデ	ヘラナデ	21.3	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外面部付着、 表面化粧付着
1539	土師器	廣	口縁	~	底部	コカ23	S A 6	ミガキ	ミガキ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外面部付着、 表面化粧付着	
							1210 + 1254 + 1260 + 1274 + 1261 + 1266 + 1267 + 1269 + 1232 + 1269 + 1260 + 1270 1230 + 1262 + 1263 + 1265 + 1241 + 1251 + 1252 + 1253	SAT	ヘラナデ	ヘラナデ	21.3	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外面部付着、 表面化粧付着
1540	土師器	圓錐	口縁	~	底部	コカ24	S A 7	ヘラナデ	ヘラナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外面部付着、 底部付着	
							1210 + 1254 + 1260 + 1274 + 1276 + 1280 + 1282 + 1287 1422 + 1426 + 1428 + 1503 + 1504 + 1505 + 1506 + 1507	SAT	ヘラナデ	ヘラナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外面部付着、 底部付着
1541	土師器	廣	口縁	~	底部	コカ25	S A 7	ナデ→ミガキ	ハケ	(20.0)	—	—	褐色	褐色	赤褐色		
1542	土師器	錐	口縁	~	底部	コカ26	S A 7	ヘラナデ→口縁部つまみ	ヘラナデ→口縁部つまみ	7.9	5.8	8.5	褐色	褐色	赤褐色		
1543	土師器	錐	口縁	~	底部	コカ27	S A 7	ミガキ	ミガキ→口縁部付着	ミガキ→口縁部付着	16.4	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外面部
1544	土師器	錐	口縁	~	底部	コカ28	S A 7	ミガキ	ミガキ→口縁部付着	ミガキ→口縁部付着	18.0	—	5.7	褐色	褐色	赤褐色	
1545	土師器	錐	口縁	~	底部	コカ29	S A 7	口縫ヘタケリ	口縫ヘタケリ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色		
							308 + 228 + 260 + 265 + 290 + 237 + 260 + 265 + 410 + 260 + 265 + 261 + 307 + 309 + 250 + 301 + 238 + 224		口縫ヘタケリナデ、 口縫ヘタ、出張、鉢形(27.7) 鉢形押さえ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外面部付着	
1547	土師器	錐	口縁	コカ1	底部	S A 8	ナデ、口縫部つまみあ げ	口縫部つまみあ げ	口縫部つまみあ げ	29.5	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外面部付着	
1548	土師器	廣	口縁	コカ1	底部	S A 8	タタキ	ハケ	(19.0)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外面部付着		
1549	土師器	廣	周一周 溝	コカ2 + コカ3 + 5	E区	S A 8	タタキ	ハケ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外面部付着		
1550	土師器	廣	周一周 溝	コカ2 + 305 + 311	S E区	S A 8	タタキ	ハケ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外面部付着		
1551	土師器	廣	周一周 溝	コカ2 + 305 + 311	S E区	S A 8	ハケ	ハケ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色			
1552	土師器	廣	側部	コカヒット7	—	S A 8	タタキ	ハケ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外面部付着、 面上に鉄錆		
1553	土師器	高环	口縁	—	—	S A 8	施化著しい	施化著しい	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色			
1554	土師器	高环	側面	—	—	S A 8	施化著しい	施化著しい	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色			

第20表 穴住居跡出土の土師器観察表(5)

番号	種別	部位	取上番号	出土区・地點・層位 外觀	調査・文様 内面	法 墓 (cm)			色調		施土	備考
						口径	底径	高さ	外觀	内面		
1555	土師器	甕	C環～ 輪郭	ヨカ33	S A 9 タタキ～ヘラナデ 縁部ナデ	23.5	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外蓋スズ付着
1556	土師器	甕	C環～ 輪郭	10 + 14 + 170	S A 9 ヘラナデ	17.5	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1557	土師器	甕	底部	S Eベルト	S A 9 タタキ～ナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	砂粒①
1558	土師器	甕	底部	872	S A 9 タタキ	—	2.2	—	褐色	褐色	赤褐色	
1559	土師器	盆	C環～ 底部	ヨカ1 + S Eベルト	S A 9 ハケ、底部付近に削痕 ナデ	13.0	5.6	11.3	褐色	褐色	赤褐色	
1560	陶文土器	深鉢	C環	—	S A 18 ヘラナデ	—	—	—	に深い褐色	に深い褐色	赤褐色	
1561	陶文土器	深鉢	C環	—	S A 18 ナデ	—	—	—	褐色	褐色	白色透明感、砂粒③、 黑色透明感	
1562	陶文土器	碗	底部	208	S A 18 ナデ	—	—	—	褐色	灰褐色	透明感	外蓋スズ付着
1567	土師器	甕	C環～ 底部	N K	S A 38 タタキ～ナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1568	土師器	甕	C環～ 底部	N K	S A 38 タタキ～ナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1569	土師器	甕	C環～ 底部	N K	S A 38 タタキ～ナデ、C環部つまみ出しひけ	26.0	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外蓋スズ付着
1570	土師器	甕	C環～ 底部	N K	S A 38 ヘラナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1571	土師器	甕	C環～ 底部	S K 38	S A 38 ヘラナデ	23.3	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外蓋スズ付着
1572	土師器	甕	C環～ 底部	N K	S A 38 タタキ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1573	土師器	甕	C環～ 底部	N K	S A 38 タタキ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1574	土師器	甕	C環～ 底部	105 + 113 + 115 + 144 + 157 + 192	S A 38 タタキ～ヘラナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外蓋スズ付着
1575	土師器	甕	C環～ 底部	N K	S A 38 ヘラナデ、C環部つまみ出しひけ	22.3	—	—	褐色	褐色	赤褐色	砂粒②
1576	土師器	甕	C環～ 底部	N K	S A 38 タタキ～ヘラナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外蓋・内蓋スズ付着
1577	土師器	甕	C環～ 底部	N K	S A 38 タタキ～ナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	砂粒①・外蓋スズ付着
1578	土師器	甕	C環～ 底部	W K	S A 38 タタキ、C環部つまみ出しひけ	21.7	—	—	褐色	褐色	赤褐色	砂粒①・外蓋スズ付着
1579	土師器	甕	C環～ 底部	W K	S A 38 タタキ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	砂粒①
1580	土師器	甕	C環～ 底部	53 + 54	S A 38 タタキ～ヘラナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	砂粒①・外蓋スズ付着
1581	土師器	甕	C環～ 底部	W K	S A 38 タタキ、C環部つまみ出しひけ	23.4	—	—	褐色	褐色	赤褐色	砂粒①・外蓋スズ付着
1582	土師器	甕	C環～ 底部	51	S A 38 タタキ～ナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	砂粒①・外蓋スズ付着
1583	土師器	甕	C環～ 底部	N K	S A 38 タタキ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外蓋スズ付着

第21表 穴穴住居跡出土の土師器観察表(6)

品種	固有種別	部位	取上番号	出土区・調査・文様 地点・層 位 外番	法 周 (cm)			色調		地土	備考	
					内面	口縁	底盤	唇	外番	内面		
1584 土師器 貴	口縁~ 底盤	W14	S A 38	ナデー口付底つまみだ し	ヘラナデー口付底つま みだし	(23.0)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外壁スズ付有
1585 土師器 貴	口縁~ 底盤	W14	S A 38	タタキ	ヘラナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1586 土師器 貴	口縁~ 底盤	N14	S A 38	タタキ+ナデ	ヘラナデー+ナデ	(20.0)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外壁スズ付有
1587 土師器 貴	口縁~ 底盤	7.3±7.8	S A 38	タタキ	ヘラナデ	(23.0)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1588 土師器 貴	口縁~ 底盤	W14	S A 38	ナデ+ミガキ	ヘラナデ	(15.0)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1589 土師器 貴	口縁~ 底盤	N14	S A 38	タタキ+一箇工具によるナデ	ケズリ、二種類の工具 によるナデ	(21.0)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外壁スズ付有
1590 土師器 貴	口縁~ 底盤	S14	S A 38	ヘラナデ	ヘラナデ	24.0	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1591 土師器 鋼鉢	口縁~ 底盤	N14	S A 38	タタキ+ヘラナデ	ヘラナデ	(18.0)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1592 土師器 貴	口縁~ 底盤	N14	S A 38	タタキ+ナデ	ヘラ状工具によるナデ →鉛押さえ	(25.0)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外壁に磁化物付 着
1593 土師器 貴	口縁~ 底盤	E14(3カ 所)	S A 38	タタキ+ナデ、口付底 つまみだしが	ヘラナデ	20.5	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外壁スズ付有
1594 土師器 貴	口縁~ 底盤	S14	S A 38	タタキ	ヘラナデ	24.0	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1595 土師器 貴	口縁~ 底盤	N14	S A 38	タタキ	ヘラナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外壁スズ付有
1596 土師器 貴	口縁~ 底盤	W14	S A 38	タタキ	ハケ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1597 土師器 貴	底盤~ 底盤	N14	S A 38	タタキ+ヘラナデ→指 押さえ	工具によるヘラナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外壁にスズ付有
1598 土師器 貴	底盤~ 底盤	S14(3カ 所)	S A 38	タタキ→板状工具によ るナデ	板状工具によるナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	内面底部分ねじ 丸
1599 土師器 貴	脚~底 部	E14	S A 38	タタキ	ヘラナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外壁スズ付有
1600 土師器 貴	底盤	N14	S A 38	タタキ	ヘラナデ	—	2.3	—	褐色	褐色	赤褐色	内面底部分付有
1601 土師器 貴	底盤	W14~W14上縁	S A 38	風化質しい	ヘラナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1602 土師器 貴	底盤	N14	S A 38	無いミガキ?	ヘラナデ	—	(7.0)	—	褐色	褐色	赤褐色	
1603 土師器 貴	脚~底 部	E14	S A 38	ハケ	ハケ	—	(5.0)	—	褐色	褐色	赤褐色。白色透明 釉	
1604 土師器 貴	底盤	N14	S A 38	タタキ	ナデ	—	1.9	—	褐色	褐色	赤褐色。	
1605 土師器 貴	底盤	W14上縁	S A 38	ヘラナデ+コビナデ	ヘラナデ	—	(0.7)	—	褐色	褐色	赤褐色。砂粒①	外壁スズ付有
1606 土師器 貴	底盤	N14	S A 38	タタキ	ヘラナデ	—	3.2	—	褐色	褐色	赤褐色。白色透明 釉	外壁スズ付有
1607 土師器 貴	底盤	E14	S A 38	風化質しい	コビオサエ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色。砂粒①	
1608 土師器 貴	脚~底 部	193	S A 38	ヘラナデ+ナデ	ヘラナデ+ナデ	—	0.8	—	褐色	褐色	赤褐色	内面底部分付有

第22表 穴穴住居跡出土の土師器観察表（7）

編 號	種 別	器 種	位 置	取上番号	出土地・ 調査・文様 位置・形 外觀	内面	法 規(cm)			色調		底土	備 考
							口径	底径	高さ	外觀	内面		
1609	土師器	甕	底部	W14	S A 38 タタキ	ヨビオサエ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1610	土師器	甕	底部	E14+カ	S A 38 タタキ+ナデ	ナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1611	土師器	甕	底部	N14	S A 38 タタキ+ラナデ	ヘラナデ	—	0.8	—	褐色	褐色	赤褐色	内面ス付有
1612	土師器	甕	底部	N14	S A 38 ナデ	ナデ	—	5.5	—	褐色	褐色	赤褐色	
1613	土師器	甕	底部	N14	S A 38 タタキ	ヘラナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	内面ス付有
1614	土師器	甕	底部～ 腹部	S14	S A 38 タタキ+工具によるナ デ	工具によるナデ	—	1.2	—	褐色	褐色	赤褐色	
1615	土師器	甕	底部	N14	S A 38 タタキ+ミガキ	ヘラナデ	—	3.7	—	褐色	褐色	赤褐色	外腹ス付有
1616	土師器	甕	底部	N14	S A 38 タタキ	ヘラナデ	—	4.3	—	褐色	褐色	赤褐色	
1617	土師器	甕	底部	E14	S A 38 ヘラナデ	ヘラナデ	—	4.2	—	褐色	褐色	赤褐色	
1618	土師器	甕	底部	E14	S A 38 ミガキ	ヘラナデ	—	5.5	—	褐色	褐色	赤褐色	
1619	土師器	甕	底部	W14	S A 38 ナデ	ヘラナデ	—	7.2	—	褐色	褐色	赤褐色	
1620	土師器	甕	底部	E14+カ	S A 38 ミガキ	ミガキ	—	1.3	—	褐色	褐色	赤褐色	
1621	土師器	甕	底部	W14	S A 38 脱化質しい	ヘラナデ?	—	5.5	—	褐色	褐色	赤褐色	
1622	土師器	甕	底部～ 腹部	E14	S A 38 ヘラナデ+ヨビナデ	ヘラナデ+ヨビナデ	—	6.0	—	褐色	褐色	赤褐色	
1623	土師器	甕	底部	I14	S A 38 ハケ	ハケ	(14.0)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1624	土師器	甕	底部	E14	S A 38 欠壺	欠壺	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	115と合併
1625	土師器	甕	底部	E14	S A 38 ミガキ+ナデ	ヨビオサエ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1626	土師器	甕	底部～ 腹部	E14+カ	S A 38 脱化質+ヨビナデ+ ナデ	ヘラナデ	(14.0)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1627	土師器	甕	底部～ 腹部	N14	S A 38 ヘラナデ+頭部に凹 字模様、ナデ	ヘラナデ	(16.0)	—	—	褐色	褐色	赤褐色、白色透明 質	
1628	土師器	甕	底部～ 腹部	E14	S A 38 ミガキ+頭部に凹字 模様、ナデ	ハケ	15.8	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1629	土師器	高环	底部	N14	S A 38 ミガキ	ヘラナデ	Q2.8	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1630	土師器	高环	环部	95	S A 38 ミガキ	ミガキ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	内面赤
1631	土師器	高环	环部	315	S A 38 ミガキ	ミガキ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1632	土師器	高环	底部～ 腹部	56+N14	S A 38 ミガキ	ミガキ	17.4	—	—	褐色	褐色	赤褐色	内・外面赤
1633	土師器	高环	环部	49	S A 38 ミガキ	ミガキ	Q4.0	—	—	褐色	褐色	赤褐色	

第23表 穴穴住居跡出土の土師器観察表(8)

編 號	種 別	器 種	取上番号	出土区・ 地点・層 位	調査・文様 外面	内面	法 規(cm)			色 調		底土	備 考
							口徑	底径	高さ	外面	内面		
1634	土師器	高杯	杯部 N区	S A 38	ミガキ	ヘラヌダ	19.0	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1635	土師器	高杯	受~瓶 蓋 N区	S A 38	ミガキ	ヘラヌダ	—	(11.6)	—	褐色	褐色	赤褐色	
1636	土師器	高杯	受部 W区	S A 38	ミガキ?	ミガキ?	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1637	土師器	高杯	瓶部 W区	S A 38	ミガキ	ミガキ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1638	土師器	高杯	瓶部 E区(カ)	S A 38	ミガキ	ミガキ	—	(14.6)	—	褐色	褐色	赤褐色	
1639	土師器	小型丸底口縁~ 瓶	E区	S A 38	ミガキ	ナダ	7.4	1.5	10.2	褐色	褐色	褐黑	外面部
1640	土師器	小型丸底口縁~ 瓶	68	S A 38	ミガキ	ナダ	5.9	—	7.9	褐色	褐色	褐黑	外面部
1641	土師器	小型丸底口縁~瓶 蓋	5区	S A 38	ミガキ	ミガキ	—	—	—	褐色	褐色	褐黑	
1642	土師器	小型丸底口縁~瓶 蓋	56	S A 38	タタキヘラヌダ	ヘラヌダ	—	—	—	褐色	褐色	褐黑	
1643	土師器	三二子口縁~ ア	5区	S A 38	ナダ~透鏡形面直 つまみ面有り	透鏡つまみ上げ面有り	4.4	4.1	—	褐色	褐色	褐黑	
1643	土師器	口縁部	336	S A 46	ナダ	ナダ	20.0	—	—	褐色	褐色	褐黑(?)	
1644	土師器	高杯	受部 310	S A 46	ミガキ	ミガキ	—	—	—	褐色	褐色	褐黑	
1645	土師器	高杯	杯部 67 + 92	S A 46	ミガキ	ミガキ	—	—	—	褐色	褐色	褐黑	
1646	土師器	廣	瓶部~ 底部 Y365	S A 70	ヘラヌダ	ヘラヌダ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外面部にスズ付着
1647	土師器	廣	瓶部~ 底部 Y368 + Y368	S A 70	ヘラヌダ	ナダ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1648	土師器	廣	底部 Y355	S A 70	ヘラヌダ	ヘラヌダ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1649	土師器	廣	瓶~瓶 底部 329 + 330 + 334 + 336 + 355 + 360	S A 70	ミガキ	ミガキ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1650	土師器	口縁部 瓶	杯底~ Y359 底部	S A 70	ミガキ	ヘラヌダ~ナダ	—	4.0	—	褐色	褐色	赤褐色	
1651	土師器	廣	底部 Y361	S A 70	タタキ~ナダ~一部ミガ キ	ヘラヌダ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外面部にスズ付着
1652	土師器	高杯	杯部 1266	S A 70	ミガキ	ミガキ	18.2	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1653	土師器	高杯	瓶部 Y332	S A 70	ミガキ、ヘラ	ヘラ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1654	土師器	杯	口縁~ Y(3.0 4 + 310 + 316 底部 + 320 + 324)	S A 70	ヘラヌダ	ナダ、指押え、ヘ ラヌダ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1655	土師器	廣	口縁~ 底部 446 + 448	S A 71	ナダ	ヘラヌダ	(18.0)	—	23.8	褐色	褐色	赤褐色	
1656	土師器	廣	口縁~ 391 + 393 + 442 + 464 + 509 + 514	S A 71	タタキ	ヘラヌダ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外面部不規則

第24表 穂穴住居跡出土の土師器観察表（9）

番号	種別	部位	出土場所	出土区分・調査・文様		法寸（cm）			色調		施土	備考		
				地點・層位	外觀	内面	口径	底径	底高	外觀	内面			
1657	土師器	費	上層～底部	—	S A 71	タクキ→ナデ	ハケ	23.8	2.0	23.3	褐色	褐色	赤褐色	外面スズ付有
1658	土師器	費	上層～底部	1274	S A 71	タクキ→ナデ、指押さえ有り	ハラ→ナデ、指押さえ有り	(21.0)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外面スズ付有
1659	土師器	費	上層～底部	445	S A 71	全体タクキ→口縁部ナデ→ヘナナデ→底部E云々	ハラ→ナデ、指押さえ有り	18.9	1.2	26.0	褐色	褐色	赤褐色	外面スズ付有
1660	土師器	費	上層～底部	441 + 939 + 1099 + 1110 + 1186	S A 71	タクキ→ヘナナデ、II 内面つまみあげ	ハラナデ	23.0	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外面スズ付有
1661	土師器	費	里～側面	691 + 982 + 1122 + 1141 + 1182 + 1183 + S A 71	タクキ	ハラナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色		
1662	土師器	費	上層～底部	444 + 446 + 447 + 467 + 468 + 564 + 856	S A 71	ナデ、口縁部つまみあげ	ハラナデ、ナデ、口縁部つまみあげ	17.3	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1663	土師器	費	底部	—	S A 71	タクキ	ユビオサエ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1664	土師器	費	底部	1147	S A 71	タクキ	ハラナデ	—	3.4	—	褐色	褐色	赤褐色	
1665	土師器	費	底部	471	S A 71	タクキ	ハケ	—	2.7	—	褐色	褐色	赤褐色	
1666	土師器	非	底部～底部	444	S A 71	風化著しい	ハラナデ	—	0.9	—	褐色	褐色	赤褐色	外面スズ付有
1667	土師器	非	上層～底部	1248	S A 71	タクキ	ハラナデ→口縁部ナデ	(11.0)	1.3	23.8	褐色	褐色	赤褐色	外面スズ付有
1668	土師器	非	上層～底部	446 + 454	S A 71	口縁部ナデ、脚部タキ→ミガキ	ハラナデ→ナデ	(9.0)	—	21.8	褐色	褐色	赤褐色	外面スズ付有
1669	土師器	費	里～側面	517 + 550 + 633 + 840 + 842 + 843 + 846	S A 71	タクキ→ハラナデ	ハケ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外面スズ付有
1670	土師器	費	底部	1040	S A 71	タクキ→ナデ	ハケ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1671	土師器	費	底部	360	S A 71	タクキ	ハラナデ	—	12.9	0	褐色	褐色	赤褐色	外面上久付有
1672	土師器	費	底部	400 + 401	S A 71	タクキ	ハラナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1673	土師器	費	底部	391	S A 71	ハラナデ	ハラナデ	—	4.6	—	褐色	褐色	赤褐色	
1674	土師器	高杯	上層～底部	446	S A 71	風化著しい	風化著しい	(22.0)	14.8	17.3	褐色	褐色	赤褐色	
1675	土師器	高杯	上層～底部	431	S A 71	ミガキ	丁寧なナデ	(13.9)	7.0	11.0	褐色	褐色	赤褐色	
1676	土師器	高杯	受部	1109	S A 71	風化著しい	風化著しい	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1677	土師器	高杯	底部	443	S A 71	ミガキ	ミガキ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1678	土師器	非	上層～底部	422	S A 71	ナデ	ハラナデ	(12.9)	5.5	5.9	褐色	褐色	赤褐色	
1679	土師器	費	上層～底部	833 + 824 + 790 + 793	S A 72	口縁・タクキ→脚部ナデ 脚部・ハラナデ→脚部ナデ 脚部・ハラナデ	口縁・ハラナデ→脚部ナデ 脚部・ハラナデ	(29.0)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外面上久付有

第25表 竪穴住居跡出土の土師器観察表（10）

品種	原基部位置	出水式・ 地点・樹 外型	調整・文様		法線(cm)			色調		地土	備考	
			内面	口徑	底径	高さ	外型	内面	外型			
1680 土師田 貴	口縁~ 底部	800 + 813 + 1120 + 1125 + 1208	S A 72. ナデ	ヘラナデ	(29.7)	2.7	21.0	褐色	褐色	赤褐色		
1681 土師田 貴	口縁~ 底部	1342 + 1141 + 1631 + 1270 + + 1253 + 1028 + 1028 + 1270 + 1098 + 1010 + 1055 + + 974 + 973 + 97 [C + 1840] + 981 + 1425 + 1399 + 929 + 1404 + 1625 + 938 + 1425 + 1425 + 1425 + 1823 + 1762 + 1010 + 2005 + + 2100 + 102 + 1030 + 2184 + 1775 + 1531 + 1533 + 1636 + 1633 + 1625 + 1630 + 1625 + 1630 + 1630 + 1630 + 1630 + 1720 + 1333 + 1307 + 1307 + 1307 + + 877 + 2104 + 2175 + 1774 + 2070 + 1680 + 1838 + + 1633 + 1142 + 1702 + 1634 + 1631 + 1631 + 1634 + + 1629 + 1630 + 1548 + 1544 + 1425 + 1341 + 17 + 1347.1582.1636	S A 72. タタキーナデ	ヘラナデ	23.2	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外茎ス付着	
1682 土師田 貴	口縁~ 底部	929 + 1100 + 1049 + 1171 + 1172 + 1173	S A 72. タタキ	ハナ	(25.6)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外茎久次付着	
1683 土師田 貴	口縁~ 底部	1061	SAT2	タタキ	ハナ	(34.8)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1684 土師田 貴	口縁~ 底部	451 + 1001	SAT2	タタキ	ハナ	(27.2)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1685 土師田 貴	口縁~ 付近	1516 + 1132 + 1518 + 1968 + 1938	S A 72. タタキ~剥離江綱	ヘラナデ, 剥離江綱	(24.3)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外茎ス付着	
1686 土師田 貴	口縁~ 底部	1097 + 1551 + 1146 + 2172 + 2193 + 1779 + 1922 + 1165 + 1114 + 922 + 1145 + 1148 + 1421 + 1989 + 1917 + + 1117 + 1000 + 1108 + + 1846 + (7.995) + 2132 + 1785 + 18.6 + 1810 + 1964 + 2130 + S A 72. 猫目タタキーナデ	板根へによるナデ	21.2	49	31.2	褐色	褐色	赤褐色	外茎ス付着		
1687 土師田 貴	口縁~ 底部 付近	1100 + 2044 + 1136 + 1101 + 1139 + 2146 + 1841 + 1825 + 1166 + 1051 + 929 + 984 + 1158 + 2148 + 1116 + 1161 + 2149 + 2122 + 1072 + 996	板根へによるナデ	21.2	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外茎ス付着		
1688 土師田 貴	口縁~ 底部	807 + 867 + 93 + 1503 + 1177 + 1529 + 981 + 1514 + 1496 + 1495 + 1505 + 97	S A 72. タタキ~剥ナデ	剥離きさく~ハナナデ	(22.7)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外茎ス付着	
1689 土師田 貴	口縁~ 底部	821 + 820 + 811 + 948 + 1904	S A 72. タタキ	ヘラナデ, ナデ	(18.4)	—	19.9	褐色	褐色	赤褐色	外茎ス付着	
1690 土師田 貴	口縁~ 底部	—	S A 72. タタキ	ヘラナデ, ナデ	(11.0)	—	—	褐色	褐色	赤褐色		

第26表 穴穴住居跡出土の土師器観察表(11)

編 種 別 器 種 類 取 手 取 手 番 号	出 土 区 域 地 点 層 位 外 面	調 整 文 様	法 規 (cm)			色 調		底 土	備 考
			内 面	口 徑	底 径	底 高	外 面		
1691 土師器 貴 丸部 —	SAT2	圓化著しい	底化著しい	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色
1692 土師器 貴 丸部 —	SAT2	ナデ	ナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色
1693 土師器 貴 丸部~1134+1164	SAT2	ヘラナデ→ナデ	工具によるナデ→ナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色
1694 土師器 前 丸部~948+1049+1073+1076+2038	W区~459+929+956+1049+1073+1076+2038	口縁~ヘラナデ 側面~タカキ 底~ミガキ	口縁~ヘラナデ 側面~タカキ 底~ミガキ	ヘラナデ→ナデ, 開 神さん	(13+6)	—	褐色	褐色	赤褐色
1695 土師器 前 丸部 25+394	SAT2	タタキ	ナデ	—	(3.2)	—	褐色	褐色	赤褐色
1696 土師器 高环 丸部 —	SAT2	ミガキ	ミガキ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色
1697 土師器 高环 丸部~1040+1041	S A 72	圓化著しい	圓化著しい	22.6	14.8	16.5	褐色	褐色	赤褐色
1698 土師器 高环 丸部~NWK	28+32+357+367+NWK	S A 72	ミガキ	ミガキ	153	—	—	褐色	赤褐色
1699 土師器 高环 丸部~1969	SAT2	ヘラミガキ→ナデ	ヘラナデ→ナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色, 砂粒①
1700 土師器 高环 丸部 60	SAT2	圓化著しい	圓化著しい	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色
1701 土師器 貴 丸部 —	SAT2	ナデ	ナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色
1732 土師器 貴 丸部~1226	S A 76	タタキ→ナデ	ヘラナデ	Q2.0	—	—	褐色	褐色	赤褐色, 外面スズ付着
1733 土師器 貴 丸部~181+734+848+347	S A 76	タタキ→側面ナデ, ハケ	(22.3)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1734 土師器 貴 丸部~347	S A 76	ナデ	ハケ	Q2.0	—	—	褐色	褐色	赤褐色, 砂粒①
1735 土師器 貴 丸~側 215	S A 76	タタキ	風化	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色, 砂粒①
1736 土師器 貴 丸~側 297+1074	S A 76	タタキ	ヘラナデ	Q2.0	—	—	褐色	褐色	赤褐色, 砂粒①, 外面スズ付着
1737 土師器 貴 丸部~270	S A 76	タタキ→側面ナデ	口縁部ハケ→ヘラナデ	Q2.0	—	—	褐色	褐色	赤褐色, 砂粒①, 外面スズ付着
1738 土師器 貴 丸部~848+57.5+43.5+5.3+3.3+8.8+8.8+13.6.2	SWK+57.5+43.5+S5.3+3.3+8.8+8.8+13.6.2	SAT2	タタキ→ナデ	ヘラナデ→ナデ	Q2.0	—	—	褐色	赤褐色, 砂粒①, 内面スズ付着
1739 土師器 貴 丸部~242+NWK	S A 76	タタキ	ハケ	20.6	—	—	褐色	褐色	赤褐色
1740 土師器 貴 丸部~5WK	S A 76	圓化著しい	圓化著しい	(20.0)	—	—	褐色	褐色	赤褐色
1741 土師器 貴 丸部~468+5WK	S A 76	ナデ	口縁部ハケ→側面ヘラナデ	(23.0)	—	—	褐色	褐色	赤褐色
1742 土師器 貴 丸部~545+546+548	S A 76	タタキ	ナデ	19.8	—	—	褐色	褐色	赤褐色
1743 土師器 貴 丸~側 248+355+1148	S A 76	タタキ	ヘラナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色, 外面スズ付着

第27表 穴住居跡出土の土師器観察表(12)

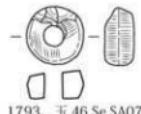
品 種 名	形 状	寸 法	地 点	調 整・文 様	内 面	法 量(cm)			色 調		地 土	考 査
						口 径	底 径	高 度	外 面	内 面		
1744 土師器 貴	瓶~削 部	956 + 1082	S A 76	タタキ	ハラナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1745 土師器 貴	瓶~削 部	771 + 1023	S A 76	タタキ	ハケ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1746 土師器 帯	削部	560	S A 76	タタキ	ハケ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外壁又付帯
1747 土師器 貴	底部	617 + 1076 + 1153	S A 76	タタキ	ハケ	—	2.2	—	褐色	褐色	赤褐色	
1748 土師器 貴	底部	33 + 40	S A 76	ヘラナデ	ハケ	—	0.4	—	褐色	褐色	赤褐色	
1749 土師器 貴	底部	1177	S A 76	ヘラナデ?	ハラナデ	—	(3.4)	—	褐色	褐色	赤褐色	
1750 土師器 帯	削部~ 底部	570 + SWK	S A 76	ヘラナデ	ハケ	(19.6)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1751 土師器 帯	削部~ 底部	102 + 205 + 818	S A 76	ナデ	ハラナデ	(11.6)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1752 土師器 帯	削~削 部	193	S A 76	タタキ	ハケ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1753 土師器 帯	削~削 部	281 + 377 + 508 + 511 + 512 + 570	S A 76	タタキ	ハケ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外壁又付帯
1754 土師器 貴	削部	574	S A 76	タタキ	ハケ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	外壁又付帯
1755 土師器 高杯	杯部	388 + 390 + 611	S A 76	ヘラナガキ	ヘラナガキ	(19.6)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1756 土師器 高杯	杯部	1127	S A 76	丁寧なナデ	丁寧なナデ	(17.0)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1757 土師器 高杯	杯部	780	S A 76	ミガキ	ミガキ	(51.0)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1758 土師器 高杯	受部	663	S A 76	ミガキ	ミガキ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1759 土師器 高杯	杯部	513 + 829 + 830 + 839	S A 76	ナデ	ナデ	(9.8)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1760 土師器 高杯	受部	—	S A 76	ミガキ	ナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1761 土師器 高杯	脚部	299 + 571 + NEIC	S A 76	ミガキ	ナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1762 土師器 高杯	杯部~ 脚部	1022	S A 76	ヘラナデ~ナデ	ヘラナデ~ナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1763 土師器 跡	削部~ 底部 近	501 + 502 + 515 + 603 + 1092	S A 76	削いミガキ	削いミガキ	(2.5)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1764 土師器 跡	削部~ 底部	409 + 602 + 844 + 1090 + 1091 + 1300 + S A 76	S A 76	丁寧なナデ	ハケ~底部付ミガキ キ、口縁部ナデ	16.0	4.8	7.8	褐色	褐色	赤褐色	
1765 土師器 跡	削部~ 底部	302	S A 76	ミガキ	ミガキ	(13.6)	—	—	褐色	褐色	赤褐色	
1766 土師器 跡	削部~ 底部	1277 + SWK	S A 76	ナデ	ハケ	11.7	4.2	5.0	褐色	褐色	赤褐色	
1767 土師器 跡	削部~ 底部	988	S A 76	ヘラナデ~ナデ	ヘラナデ~ナデ	(22.0)	—	(23.3)	褐色	褐色	赤褐色	外壁にスヌ付着

第28表 穴住居跡出土の土師器観察表(13)

編 號	種 別	器 種	取上番号	出土地・層 位	調査・文書 番号	内面	法 規(cm)			色 調		胎 土	備 考
							口径	底径	高さ	外 面	内 面		
1771	土師器	甕	11 番～ 底部	C区	ナデ	ナデ	—	—	—	褐色	褐色	砂質、白色透明	
1772	土師器	甕	11 番～ 底部	C区	ヘラナデ	ヘラナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色紅	
1773	土師器	甕	11 番～ 底部	B区 I 層	タクホ	ヘラナデ、ユビオサエ 多数	23.4	—	—	褐色	褐色	赤褐色紅	外底スズ付有
1774	土師器	甕	9番～10 番	C区	ヘラナデ	ヘラナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色紅	外底スズ付有
1775	土師器	甕	11 番～ 底部	C区	—	—	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色紅	
1776	土師器	甕	11 番～ 底部	C区	胴部ハケ～口縁部ナデ 脇部ハケ～C区底部ナデ ～D区底部つまみだし ～E区底部つまみだし	14.2	—	6.2	褐色	褐色	赤褐色紅		
1777	土師器	甕	9番	—	ハケ	ナデ	—	—	—	褐色	褐色	砂質	
1778	土師器	甕	9番	C区	—	—	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色紅	
1779	土師器	甕	9番	C区	ハケ	ハケ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色紅	
1780	土師器	甕	9番～底 部	C区	タクホ	ハケ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色紅	
1781	土師器	甕	9番～底 部	B区 I 層	タクホ？	ハケ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色紅	
1782	土師器	高环	11番～ 底部	B区 I 层	ミガキ	ミガキ	(17.8)	15.4	13.7	褐色	褐色	赤褐色紅	
1783	土師器	高环	11番	B区 I 层	ミガキ	ミガキ	(21.2)	—	—	褐色	褐色	赤褐色紅	
1784	土師器	高环	9番～ 底 部 S 1	S X 1	ミガキ	風化著しい	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色紅	
1785	土師器	高环	9番	—	ミガキ	ミガキ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色紅	
1786	土師器	甕	11 番～ 底部	B区 I 层	ヘラナデ	ヘラナデ	—	—	—	褐色	褐色	赤褐色紅	
1787	土師器	甕	11 番～ 底部 5731	B区 I 层	ヘラナデ	ヘラナデ	(11.5)	—	6.9	褐色	褐色	赤褐色紅	
1788	土師器	甕	底部	B区 I 层	タクホナデ	ヘラナデ	—	(4.0)	—	褐色	褐色	赤褐色紅	
1789	土師器	甕	底部	B区 I 层	ナデ	風化	—	6.2	—	褐色	褐色	赤褐色紅	
1790	土師器	器底土継	—	B区 I 层	—	—	3.5	—	10.6	褐色	褐色	赤褐色紅	
1813	土師器	甕	9番 ～底部	T I 土	11 底ナデ	風化著しい	—	8.0	—	褐色	褐色	砂質	
1814	土師器	甕	底部 TPB	C区	細粒ナデ	細粒ナデ	—	—	—	褐色	褐色	砂質	
1815	土師器	甕	11番～ 底部 42	C区	—	細粒ナデ、底部ハ ラによる切り離し、底 部に板状瓦砾有り	12.6	7.0	4.1	褐色	褐色	砂質	
1816	土師器	甕	底部	0.7 層	11 底ナデ、底部ハ ラによる切り離し	細粒ナデ	—	0.4	—	褐色	褐色	砂質	

第29表 穴住居跡出土の土師器観察表(14)

品種別	器種	部位	取上番号	出土区・ 地点・層 位	調整・文様	法 線(cm)			色調		胎土	備考	
						内面	口径	底径	高さ	外面	内面		
1817	土師器	III	底部	—	N.Sベルト 回転ナデ。底部へ向 ける切り離し	回転ナデ	—	5.9	—	褐色	褐色	褐色	
1818	土師器	III	口縁～ 底部 43	C区	回転ナデ。底部へ向 ける切り離し	回転ナデ	8.6	7.2	1.8	褐色	褐色	褐色	
1819	土師器	III	口縁～ 底部 41	C区	回転ナデ。底部へ向 ける切り離し	回転ナデ	8.2	6.7	1.6	褐色	褐色	褐色	
1820	土師器	III	口縁～ 底部 40	C区	回転ナデ。底部へ向 ける切り離し	回転ナデ	8.0	6.3	1.1	褐色	褐色	褐色	
1821	土師器	II	口縁～ 底部	C区	回転ナデ	回転ナデ	—	—	—	褐色	褐色	褐色	
1822	土師器	II	口縁～ 底部	C区	回転ナデ	回転ナデ	—	—	—	褐色	褐色	褐色	
1823	土師器	器	口縁～ 底部 TPB	C区	回転ヘラケズリ ナデ	回転ヘラナデ→スビ ナデ (13.8)	—	—	—	褐色	褐色	褐色	
1824	土師器	器	口縁～ 底部 E6-1	B区	回転ヘラケズリ、回転 ヘラナデ	回転ヘラナデ→スビ ナデ (12.8)	—	—	—	褐色	褐色	褐色	
1825	土師器	II	口縁～ 底部	M9 I II	回転ナデ	回転ナデ	(13.2)	7.0	—	明褐色	明褐色	褐色	
1826	土師器	II	底部	—	M9	回転ヘラナデ	回転ナデ	—	(7.8)	—	灰白	灰白	褐色
1827	土師器	II	底部 TPB	C区	回転ヘラナデ	回転ヘラナデ	—	6.9	—	灰白	灰白	褐色	
1828	土師器	II	器 底部	CIC B II	風化著しい	回転ナデ	—	6.4	—	明褐色	明褐色	褐色	
1829	土師器	II	器 底部	B区	風化著しい	回転ナデ	—	—	—	灰白	灰白	褐色	
1830	土師器	器	器 TPB	C区	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	—	—	—	灰白	灰白	褐色	
1831	土師器	大腹	底部 LG-4	C区	回転ナデ	回転ナデ	—	—	—	灰白	灰白	褐色	
1832	磁器	碗	底部	—	C区	草花文	—	—	—	灰白	灰白	褐色	



1793. 玉 46 Se SA07



1794. 玉 40 Ta SA09



1795. 玉 23 Ta SA70



1796. 玉 26 Se/Ta SA71



1797. 玉 27 Se/Ta SA71



1798. 玉 28 Se SA71



1799. 玉 29 Se SA71



1800. 玉 30 Ta SA71



1801. 玉 31 Ta SA71



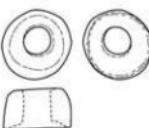
1802. 玉 32 Ta SA71



1803. 玉 33 Ta SA71



1804. 玉 34 Ta SA71



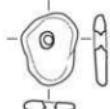
1805. 玉 21 Ta SC81



1806. 玉 22 Ta SC81

1807. 玉 19 Se
A区 I ~ II層

1808. 玉 47 Se B区表土



1809. 玉 24 Se SA76



1810. 玉 25 Se SA76



1811. 玉 4 Jad 表土



第256図 弥生時代以降の玉類 1793～1807: S=x2, 1808～1811: S=1/1

第30表 弥生時代以降の玉類表

掲載No.	器種No.	注記	石材	種類	色調	サイズ	分類基準			時代・時期	備考
							未分析	形態	穿孔数 穿孔直径 穿孔位置		
1793 玉	46	ノクビ2 A	SA7	963	濃緑	Se	不明	未分析	5.9 (3.3)	内・扁平	白玉
1794 玉	40	ノクビ2 A	SA9	369	黒灰	Ta	不明	滑石	5.0 (1.5)	内・扁平	古墳
1795 玉	23	ノクビ2 B	SA70	スカ369	濃緑・白斑	Se	不明	滑石	5.7 (5.5)	内・扁平	古墳
1796 玉	26	ノクビ2 B	SA71	904-1	濃緑	Se/Ta	不明	その他	4.1 (4.1)	内・扁平	古墳
1797 玉	27	ノクビ2 B	SA71	904-2	灰緑	Se/Ta	不明	滑石	4.3 (4.1)	内・扁平	古墳
1798 玉	28	ノクビ2 B	SA71	904-3	灰緑	Se	不明	滑石	5.0 (5.0)	内・扁平	古墳
1799 玉	29	ノクビ2 B	SA71	904-4	濃緑	Ta	不明	滑石	5.0 (4.7)	内・扁平	古墳
1800 玉	30	ノクビ2 B	SA71	904-5	黒灰	Ta	不明	滑石	4.7 (4.6)	内・扁平	古墳
1801 玉	31	ノクビ2 B	SA71	904-6	黒灰	Ta	不明	滑石	3.3 (3.2)	内・扁平	古墳
1802 玉	32	ノクビ2 B	SA71	904-7	黒灰	Ta	不明	滑石	4.4 (4.4)	内・扁平	古墳
1803 玉	33	ノクビ2 B	SA71	904-8	黒灰	Ta	不明	滑石	13.6 (12.2)	内・扁平	古墳
1804 玉	34	ノクビ2 B	SA71	904-9	灰	Ta	不明	未分析	13.1 (11.3)	内・扁平	古墳
1805 玉	21	ノクビ2 B	SC81	-22	暗緑・黄	Ta	不明	滑石	6.7 (6.4)	内・扁平	小玉
1806 玉	22	ノクビ2 B	SC81	-35	黒・白斑	Ta	不明	滑石	4.1 (4.1)	内・扁平	古墳
1807 玉	19	ノクビ2 A	-	I ~ II	暗緑	Se	不明	滑石	5.2 (4.1)	内・扁平	古墳
1808 玉	47	ノクビ2 B	表土	-	濃緑	Se	不明	未分析	43.7 (48.1)	内・扁平	その他
1809 玉	24	ノクビ2 B	SA76	-1265	浅緑灰	Se	不明	滑石	14.5 (14.7)	内・扁平	古墳
1810 玉	25	ノクビ2 B	SA76	-1330	淡青緑	Se	不明	その他	15.8 (15.7)	内・扁平	古墳
1811 玉	4	ノクビ2 B	表土	15-3	白・鮮緑	Jad	ヒヌイ	ヒヌイ	15.4 (15.4)	内・扁平	勾玉

第6節 古代

(1) 概要

総計4軒の掘立柱建物跡、2条の溝・道路状遺構（波板状硬化面）が検出された。遺物としては、土師器、須恵器、綠釉陶器、布目瓦の出土が確認された。

■掘立柱建物跡（第257・258図）

SB02・03は2棟の切り合う掘立柱建物跡である。2間×3間で、面積もほぼ同規模である。時間的先後関係は不詳だが、先行した1棟の廃絶後間も無く建て替えられたものであろう。C区北側から検出された。

■溝・道路状遺構（第259図）

いわゆる波板状硬化面を有する溝・道路状遺構が2条確認された。C区北側中央付近から同区南西方向に向かうにつれ、痕跡が途切れる。

(2) 包含層出土の土器・陶磁器

■土師器（第260図）

包含層中より、わずかながら壺・皿が出土している。底部はいずれもヘラによる切り離しであり、

中には製作台のものと思われる圧痕が残されている資料がある。

1813・1814が高台付の壺、1815～1817が壺、1818～1820が皿である。

■須恵器（第260図）

包含層中より、わずかながら出土しているが、その出土数は非常に少なく、出土した全点を図示したといつても過言ではない。

1823・1824が蓋、1825～1829が壺、1830・1831が壺である。

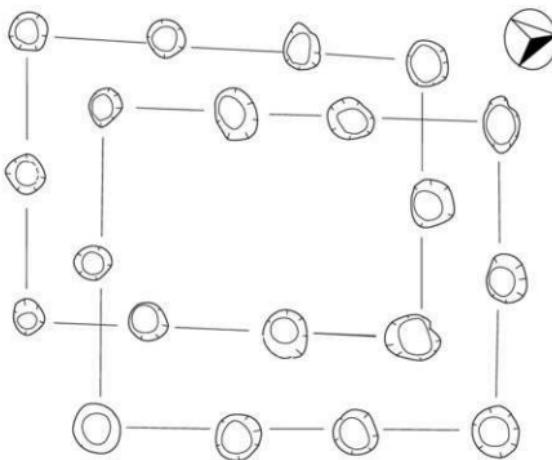
■綠釉陶器（第260図）

数点の出土を確認した。うち2点を図示した。

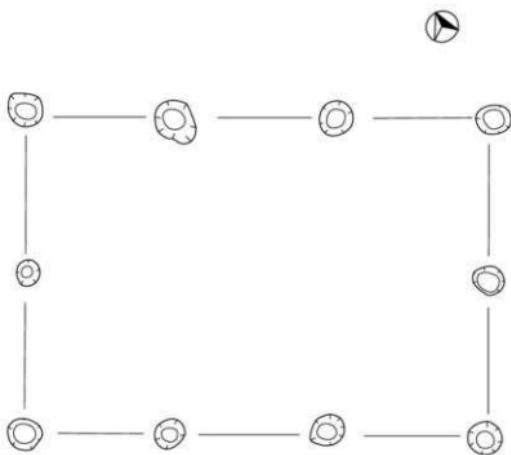
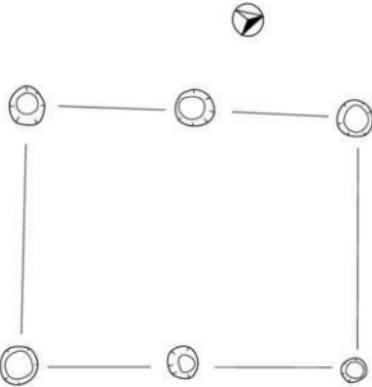
1821は高台付の壺、1822が壺である。いずれも畿内系と推定される釉と胎土の特徴を持つ。

■布目瓦

図示は割愛したが、数点の出土が確認された。いずれも小片であり、C区とB(D)区の境界付近を中心、他の近接する時期の遺物と分布範囲を重ねる。

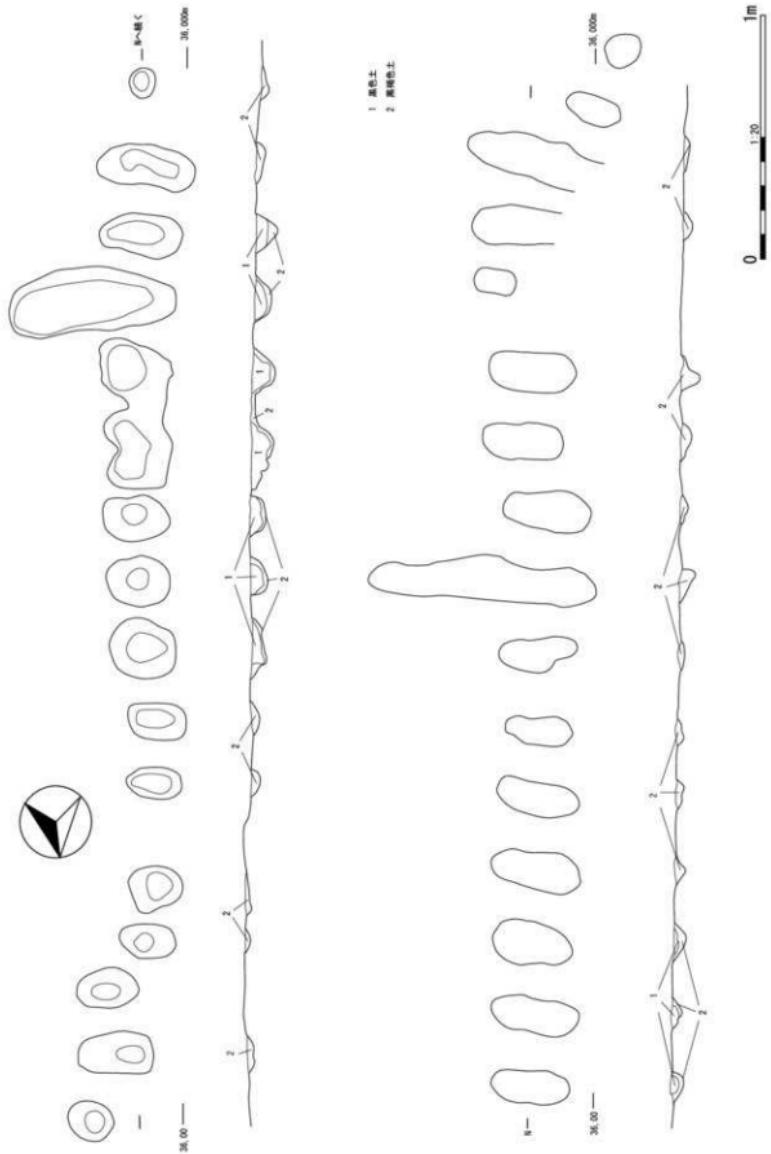


第257図 古代の遺構（1） 第2・3号掘立柱建物跡（SB 2・3） S=1/40

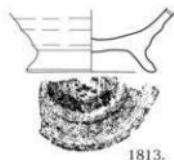


0 1:40 2m

第258図 古代の遺構（2） 第4・5号掘立柱建物跡（S B 4・5） S=1/40



第 259 図 道路状構 (波板状道構) 断面図 (1) S = 1 / 29



1813.



1814.



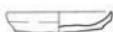
1815.



1816.



1817.



1818.



1819.



1820.



1821.



1822.



1823.



1824.



1825.



1826.



1827.



1828.



1829.



1830.



1831.

0 1/4 20cm

第 260 図 古代の遺物 S = 1 / 4

第7節 中・近世以降

(1) 概要

遺物としては、中・近世および近・現代の陶磁器類、銭貨、滑石製品、砥石、煙管、火打石、ガラス瓶などが出土した。

中・近世に属する可能性のある遺構としては、墓穴と考えられる土坑が1基あり、その他多数あるピット群の一部が候補に挙がるが厳密に捉えきれたものはない。また、後述するようにE区では火打石が2点出土したT8-2区の搅乱が近世に属するものであった可能性が高い。

近・現代に属する遺構としては、C区から検出された階段付き土坑が挙げられる。人一人が通ることができるほどの幅で、地下2mほど掘り下げており、地山削り出しの階段を備えていた。内部からは薬品のアンプル瓶、ガラス製注射器などが出土したが、安全衛生上の配慮から大半は廃棄し、遺構の記録も平面図のみの実測とレベリングのみにとどめた。

(2) 遺構

第115号土坑 (SC115 第261図)

長軸1.3m、短軸0.9mを測る略長方形の土坑である。形態から墓穴である可能性が考えられる。南端に落ち込みが認められた。底面からは磁器が1点出土している。

(3) 遺物

a 出土遺物の概要

遺物はB区およびE区を中心に出土し、C区からも若干の遺物を確認している。

b 遺物詳説

■陶磁器 (第262図)

近世に遡る資料で図示に耐えうるものには、1832の染付けがあるが、量は多くない。

■銭貨 (第262図)

総計6点が確認された。

1833は新寛永通寶である。銭径22.8mm、穿径7.0mm、輪厚1.1mm、重量1.62gを測る。若干拉げている。

1834も新寛永通寶である。銭径25.0mm、穿径5.6mm、輪厚1.8mm、残存重量2.44gを測る。上辺の一部を欠損する。

1835も若干銘に不明瞭な部分があるが新寛永通寶であろう。銭径23.9～24.2mm、穿径5.8mm、輪厚1.5mm、残存重量2.66gを測る。

非掲載資料の銭貨4は明治7(1874)年銘の半錢青銅貨である。銭径22mm、重量2.86gを測る。後述の煙管1と同一四半グリッドからの出土である。非掲載資料として、他に2枚の新寛永がある。

■滑石製品 (第263図 1837)

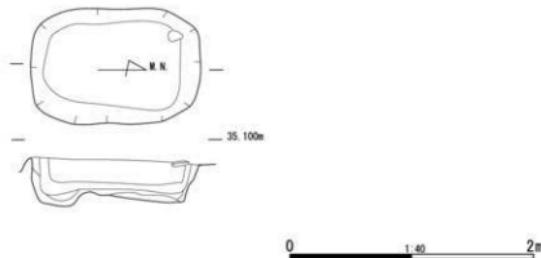
1点のみ確認した。黒灰色の滑石を用いる。側面觀が若干湾曲することから、石鍋の破片を再利用した可能性が指摘できる。C区N9グリッドの搅乱中からの出土である。研磨により整形され、全体に線条痕が残る。両端にくびれが設けられる。注目されるのは図上半に顕著に付着する煤で、縦・横方向に緊縛した痕跡が看取される。用途は不明だが、類品のある福岡県博多108遺跡では漁労に関わる石錐と報告されている(文献38)。宮崎県内では都城市正坂原遺跡にも類例があり、棒状製品と報告されている(文献39)。緊縛して使用した事実からすると、いずれにせよ重量が重視された道具であったと推定される。したがって権衡に関わる可能性も排除できない(文献40)。厳密な時期比定は困難だが、博多108・正坂原両遺跡の成果からすれば、12世紀代の所産である可能性も指摘できよう。

■砥石 (第263図)

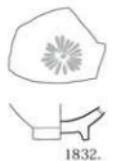
C区南西端に設けたE区と向かい合う扯張区表土中から出土した。淡橙灰色の凝灰岩を素材とし、両面が使用的結果、わずかな凹面を呈する。図上・下辺ともに人为的に刻みを入れる整形加工が施され、両端は欠損する。本来は長方形であったものか。残存するのは、完形時のほぼ中央に近い部位と推定される。

■火打石 (第264図)

総計17点確認された。主な分布はB区とE区の大きく二つに分かれる。B区ではI～K・4～7グリッドの範囲に収まり、E区ではT8-2区の搅乱中から2点がまとまって出土した点が注目される。この他、C区から1点のみ大形品(1850)の出土が確認された。石材は、B区でチャート・玉髓・石英、E区で玉髓とチャートC区でチャート



第261図 第115号土坑 S=1/40



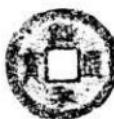
1832.



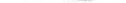
1833. 錢貨1 C区I層



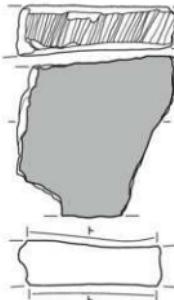
1834. 錢貨2 E区



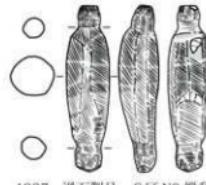
1835. 錢貨3 E区攪亂



第262図 磁器・錢貨 1832:S=1/3, 1833~1835:原寸



1836.



1837. 滑石製品 C区N9攪亂



第263図 磁石・滑石製品 S=2/3

第31表 近世の火打石観察表

掲載No.	器種No.	注記	石色調	材質	種類	サイズ				備考
						長軸(mm)	短軸(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	
1838	火打石2	ノクビ2 B K4-1/2	I	白	良	Ca	17.9	13.2	12.1	3.01
1839	火打石11	ノクビ2 B 16011	I	灰白	良	Ca	23.4	14.5	10.8	3.72
1840	火打石12	ノクビ2 B 16339	I	灰	良	Ca	18.2	17.2	12.4	4.05
1841	火打石1	ノクビ2 B J4-2	表土	黒灰+灰	良	Ch	21.0	19.2	11.6	3.88
1842	火打石3	ノクビ2 B I7-3	I	暗緑灰	良	Ch	17.9	15.6	9.8	3.45
1843	火打石13	ノクビ2 B K7-3	I	暗緑灰	良	Ch	18.0	15.3	11.8	2.69
1844	火打石6	ノクビ2 B K6-2	表土	黒灰	良	Ch	25.9	19.9	12.5	7.20
1845	火打石5	ノクビ2 B K6-2	表土	黒灰	やや粗	Ch	29.7	17.9	13.9	7.74
1846	火打石15	ノクビ2 B —	表土	黒灰+灰	良	Ch	30.1	19.7	13.8	6.58
1847	火打石14	ノクビ2 B 16-4	表土	淡青灰	良	Ch	23.0	21.0	16.5	9.55
1848	火打石7	ノクビ2 B J5-3	表土	白	粗	Qu	20.9	19.0	9.8	3.90
1849	火打石8	ノクビ2 B I5-4	I	白	粗	Qu	27.9	18.1	8.1	5.86
1850	火打石17	ノクビ2 C 5213	I	暗灰褐色+灰白	粗	Ch	35.1	33.8	26.1	47.29
1851	火打石9	ノクビ2 E T8-2	カクラン	灰	良	Ca	16.2	13.3	12.7	3.41
1852	火打石10	ノクビ2 E T8-2	カクラン	灰	良	Ca	14.9	14.3	7.2	1.81
1853	火打石16	ノクビ2 E T5・6・7	表土	灰褐色	良	Ca	19.1	11.9	9.1	1.90
1854	火打石4	ノクビ2 E カクニン340	III	淡緑灰	良	Ch	28.7	20.3	13.3	7.47

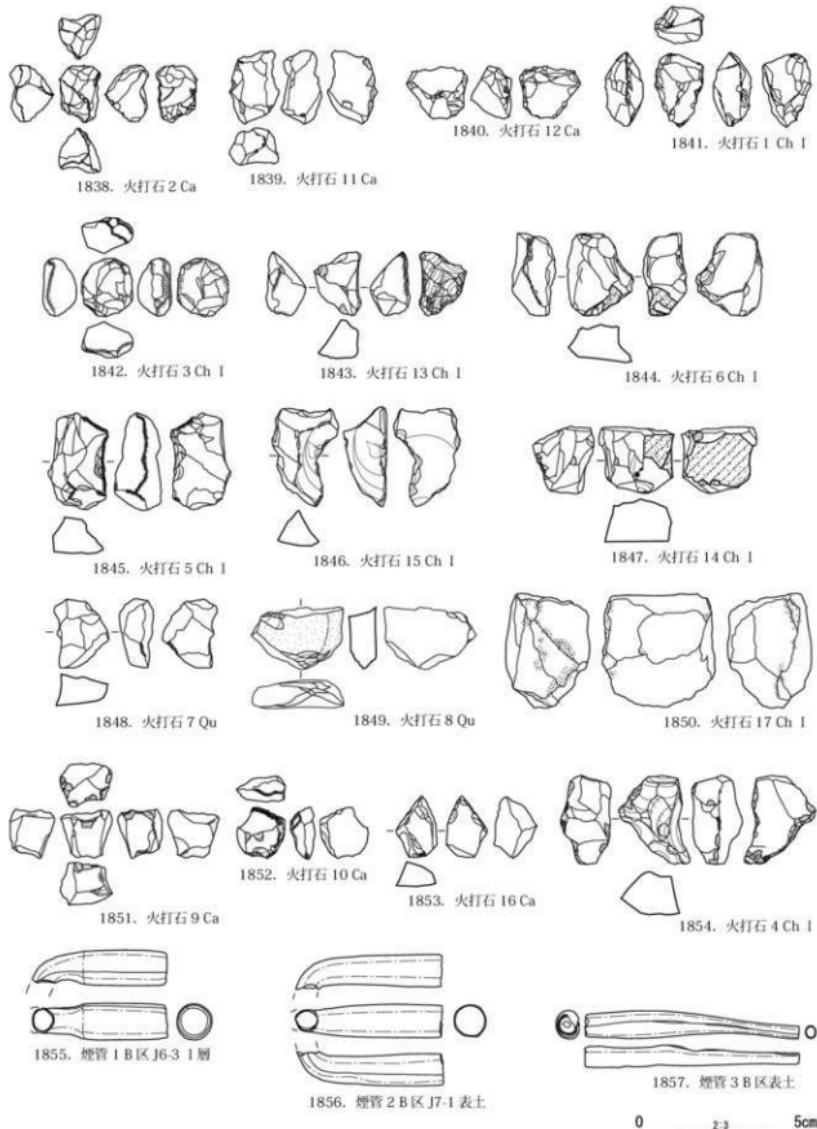
トが認められた。出土層位はE区の1点(1854)のみ、縄文時代早期包含層である第III層から出土したが、他は第I層・表土・撹乱中からの出土である。1854は暗灰緑色チャート製で石核形状の資料である。長軸2辺に細かな剥離痕と潰れが多く観察され、他の稜上にも複数の潰れが認められる。縄文時代の石核の可能性も排除できないものの、鉄錆の付着もみられることから、ここでは火打石の可能性を推したい。B・E区出土の他のチャート製資料も黒褐色、暗灰色、暗青灰色など地味な色調で占められる。隣接する野首第1遺跡(文献5)から出土した、いわゆる徳島県阿南市大田井産の青緑色チャート(文献41・42)は認められない。本遺跡の資料の石質は節理が多く入る石質もあることから、流通品としても、そう遠くない産地が想定され、ごく近傍地産の可能性も考えられる。唯一C区から出土した1850も、剥片石器生産には向かない粗質のチャートである。一方、玉髓製は飴色がかった灰色の色調と石質で齊一性が高く、チャートに比較してより広域に流通した製品である可能性も指摘できる。ただし、1851のみは他の資料に比べ、透光性が低く石英に近い特徴を有する。ただ、1852とともに撹乱からの出土であるため、これも玉髓の変異に取まるか。石英製資料2点は、火打石との認定が

やや心許ない。1848はわずかな鉄錆が観察されるが、使用痕に乏しい。同質の1849も使用痕に乏しいが、表面全体に手擦れらしき磨耗痕が残る。軟質であるが、一応火打石の可能性を考えたい。

■煙管(第264図)

統計2点の雁首と1点の吸口が確認された。全て銅製である。雁首2点の火皿はいずれも欠損し、B区の比較的近接した位置から出土した。吸口もB区からの出土であるが、厳密な位置は特定できない。1855は肩付きで、短い首部との境界は不明瞭である。安芸毬子氏による江戸遺跡出土資料の編年案(文献43)に従えば、雁首の形態分類B1類ないしB2類に相当し、18世紀後半～19世紀前半の所産と推定される。図上面の如く、肩から首部にかけて一体に製作した接合痕が観察される。1856は肩が付かないもので、安芸編年に従えば、形態分類A1類に相当し、19世紀後半(明治期)の所産と理解される。首部の下には二次的な凹みが観察される。使用に伴うものか。

1857は内部に羅字の残存する吸口である。厳密な時期は決定できないが、形態的特徴から19世紀以降の所産と考えられる。煙管2と同様に、複数箇所に凹みが観察される。



第264図 火打石・煙管 S=2/3

第IV章 成果と課題

第1節 繩文時代後・晚期土器の時間的評価

(1) 本節の目的

第II章では本遺跡出土の繩文時代後・晚期に該当する土器群の分類を行ない報告した。

本節においては、これら分類した土器群と、從来使用されてきた土器編年との比較を行なうこと、で、野首第2遺跡の繩文時代後・晚期土器群の時間的評価を行う。

(2) 後期土器の時間的評価

a 丸尾式並行期

第1群は丸尾式に相当する。深鉢と脚台付皿形土器でセットを構成している。基本的にはA区を中心に出土し、わずかにC区において散見される。土器類型ごとの出土比率は高くはない。

深鉢はA区を中心にC区でもわずかに認められる。有文土器と無文土器に二分されるが、基本的な器形や調整等に差異は認められない。有文深鉢の中でも、口縁部の断面形状が三角形のもの(319など)は、口縁部の断面形状が「くの字」形のものよりも時間的に先行するという指摘があり(文献44・45)これに拠るならば、当遺跡の該当期には数段階が存在することになる。

脚台付皿形土器の分布はA区とC区に偏在している。これは後期の住居の分布域と同様である。の中でもA区のSX01からは脚台付の浅鉢が12個体まとまって出土しており、その大多数が赤彩されている。しかしながら深鉢等の日常雑器と思われる器種の出土は極少数に限られ、また後期の集落からも離れた位置に存在している事から、非日常的な施設とも想定される。

b 西平式並行期

第2群1類は從來西平式と呼称された土器の一群である。おそらく西平式並行期に属するものと考えられる。

深鉢と塊でセットを構成している。胸部小片などは、後続する土器型式との識別が困難であり、認識できた出土総量は多くない。

c 太郎迫式並行期

第2群2類は太郎迫式にほぼ該当する。深鉢、浅鉢と高环でセットを構成している。磨消繩文を施す最終土器型式であるが、野首第2遺跡からは磨消繩文土器はごく少数の出土に限られる。

d 三万田式

第6群1類は、富田紘一の三万田式(文献46ほか)、宮内克巳の三万田II式(文献47)にほぼ該当すると考えられる。後続する鳥井原式と共に野首第2遺跡の主体となる土器型式である。

深鉢と浅鉢、注口土器という器種構成である。その中でも線刻羽状文などが施された有文土器は極僅かであり、ほとんどが無文深鉢で占められている。三万田式の器種構成において無文深鉢が多数を占める点は、宮崎平野共通の事象である。

この無文深鉢は一見すると同じ器形・文様要素だが、詳細に観察すると、ごく微妙な差異を共有するグループに分ける事ができる。このグループ差は時間的な前後関係を示すものでは無く、作り手の個性が表象した可能性も捨てきれないが、詳述していきたい。

■フェイズ1 三万田式に先行する太郎迫式の口縁部形態をほぼ踏襲しているものをフェイズ1とした。内面は無文のものと、1条の沈線を持つものがある。

内面の沈線は、この時期にあらたに出現する要素だと考えられる。

胸部は球形状を成すものが多く、器形の点からも三万田式の有文深鉢との関連性が窺える。調整は丁寧なミガキ・ナデが施されている。

■フェイズ2 口唇部の傾斜が緩くなる段階である。内面は無文と沈線が1条施されたものがある。

胸部は球形状の丸みを帯びる。

■フェイズ3 口縁部が外反し、口唇部を平坦に仕上げるものフェイズ3とする。無文のものが大多数を占めるが、先行するフェイズ2からの系譜である1条沈線を持つものと、2条沈線を持つものがある。

胸部は球形状の丸みを帯びるのは稀であり、ほとんどが口縁部から頸部にかけてゆるやかに屈曲し、そのままゆるやかに底部に至るものと推測される。

有文土器との関係性で明確なセットが理解できるのはフェイズ2までであり、フェイズ3の土器群は後続する鳥井原式にまで伴う可能性がある。

以上のように、無文深鉢は3類に分類可能である。器形の全体像が把握できず、口縁部が主体となった分類であるが、先に論述したとおり各フェイズの形態は先行する土器型式との関連で説明する事が可能である。

底部形態に関しては完形資料に乏しく不明瞭な点が多いが、出土している底部を観察すると形態変化に乏しい事から、フェイズ1～3まで同じ形態の底部を有する可能性が高い。

e 鳥井原式土器並行期

第4群1・2類は富田紘一氏の鳥井原式（文献46）、宮内克巳氏の三万田Ⅲ式（文献47）にほぼ該当するものと考えられるが、タイプサイトをはじめとする西九州地方とは異なる点もあることから、鳥井原式並行期とよびたい。深鉢と2種類の浅鉢という器種構成である。その中で出土量の大半を占めるのが浅鉢である。

この鳥井原式並行期の器種構成には深鉢と浅鉢があるが、その文様構成も含め、いずれも前段階の三万田式からの系譜を辿ることができる。

文様要素としては、口縁部に施された凹線文があるが、これには先の分類にもあるとおりa類とb類に2分する事が可能である。凹線文を施す際には丁寧にミガキ上げているが、この施文技法は関西地方に広く分布する宮滝式にも共通する要素であり、西日本レベルでの野首第2遺跡のあり方を考える上で重要な指標となりうる。

f 御領式

第91図469は御領式に該当すると考えられる。いずれも口縁部資料だが、胴部片では明確に御領式と判断できるものは無かった。後続する天城式にも共通する事であるが、タイプサイトの資料と異なり胴部最大径に沈線文を持たないものも多い。

g 天城式並行期

第4群1類A、3類は天城式並行期もしくは上加世田式並行期に該当する。胴部片は他型式との差異に乏しく明確に天城式と認識できるものは少

数に限られた。

深鉢・浅鉢でセットを構成するが、その中で多数を占めるのは浅鉢である。口縁部付近を観察する限りにおいては天城式・上加世田式のタイプサイト資料と大きな差異は持たないが、本来型式判断の指標の一つとなる胴部最大径に施される沈線文が、本遺跡出土資料においては消失している。

またタイプサイト資料は黒色磨研処理が施されているものが大半を占めるのに対し、本遺跡出土のものは半磨研ともいいくべきものや、磨研処理が施されていないものが大半を占めている。

また土器製作に使用される胎土は、ヴァリエーションに富んでおり、三万田式の様に齊一性は高くない。

この時期以降は晩期の黒川式中段階まで、土器型式はかろうじて連続するものの、個体数・分布とともに散漫であり、主体的にこの領域の使用は行われていないと考えられる。

(3) 晩期土器の時間的評価

a 晩期開始期

本遺跡においてはB区において2個体ながら、櫛原文様を持つ土器が出土している（第90図462・463）。これは滋賀里Ⅱ式の文様モチーフとして知られている。滋賀里Ⅱ式は近畿地方においていわゆる晩期開始期の亀ヶ岡式との共伴事例が知られている。この共伴関係を辿ると、南九州においては入佐式新段階との共伴関係が知られており、この土器型式をもって晩期の開始期と考えられる（水ノ江48、泉49、清田50）。

本遺跡の資料においては、これまで主体的に使用されていた天城式並行期の深鉢に文様を施している。これは広田式同様に文様の補完完形が成立していたものと考えられる。

b 入佐式

第4群4類は入佐式に該当する。浅鉢でセットを構成し、深鉢の出土は認められなかった。

c 黒川式

第4群5類、第5群は黒川式に該当する。深鉢、精製浅鉢、粗製浅鉢でセットを構成している。黒川式に関しては堂込により詳細な研究がなされている（文献51）。以下、その研究内容に依拠し詳

述していきたい。

■新段階 粗製深鉢、精製浅鉢、粗製浅鉢でセットを構成している。

その中で圧倒的に目を引くのが無刻目突帯文を持つ深鉢である。東九州地方において上菅生B式とも称されるこの一群は、突帯の貼り付け諸法により3類に分類する事が可能である。なお深鉢の調整は荒い条痕で行われている場合が多い。

なお、無刻目突帯文と孔列文を併用する土器が多い。その場合、孔列文は突帯の下部に施されるものが多数を占めている。

d 刻目突帯文土器

晩期終末～弥生初頭の刻目突帯文土器がわずかながら出土している。中には刻目突帯文と孔列文の双方を使用している資料が出土している。

(4) 第6群土器の時間的位置付け

本遺跡において最大出土比率を誇るのが、無文土器の集合体である第6群である。うち1類に関しては三万田式並行期という時間的位置付けを行う事ができたが、残り2・3類の編年的位置付けは不明瞭なままである。

これら土器群の類例を求めるとするならば、平畠遺跡がある。平畠遺跡は市来式から天城式にかけての土器にともない一定量の無文土器が出土している。

これらの土器の大部分は三万田式に伴う無文土器の器形に類似し、その近縁性が窺える。しかし、平畠遺跡においては三万田式の一定量の出土は無く、この型式に伴うとは考え難い。後続する御領式～天城式にかけて、三万田式の系譜を継ぐ粗製深鉢を使用し続けていたと捉えたい。

これに拠るならば、本遺跡の無文土器群は御領式～天城式の、タイプサイトに存在する深鉢を補完する存在であると推測できる。

(5) 総括

以上、簡単ながら縄文土器の時間的位置付けについて考察を行なった。出土資料とタイプサイトとの差異が大きく、明確な型式名を用いず、並行期と呼称しているものが多い。

野首第2遺跡の縄文時代後期は丸尾式からスタートする。これには数段階が認められるが、数

的なまとまりに欠け、散布地的な様相が濃い。この中でも第90図459のように北久根山式の出土が認められるなど、わずかではあるが、外的な接触が看取される。

この外的な接触よりもたらされた土器が主体となるのが西平式並行期である。これは後続する三万田式期および鳥井原式期にピークを迎える。この時期にはタイプサイトと同様な資料が客観的にあるものの、在地的色彩が強い土器が主体的に使われている。換言すれば、西日本全体における、土器様式の齊一化のもとに、成熟した土器文化が花開いているとも言える。

しかし、御領式以降は土器の出土量は極端に減少する傾向にあり、セット内における深鉢の欠落が目立つようになる。浅鉢には2次的な焼成痕がないことから、他に煮沸具があった事は確かであるが、それがどの資料を指すのかは推測の域を出なかった。

宮崎県内において、滋賀里並行期の資料が出土する事は稀であるが、本遺跡においては少数ながら出土が認められる。晩期においては、各型式とも、その出土量は少なく散布地的な域をでるものではない。

このように本遺跡の土器群の様相として、各時期において常に外的な土器型式が少数ながら存在する事が挙げられる。おそらく日向灘から小丸川を経て持ち込まれたであろう、これらの文物が、野首第2遺跡が西日本全域と同様の文化基盤を作るに至った一助となったのであろう。

第2節 土器製作の動作連鎖と土器の使用実態

(1) 本節の目的

本遺跡では複数時期に亘る集落の造営を背景に、土器の大量出土が認められた。集落跡の調査報告では土器の帰属時期のみが注目され、根元的な問題がなおざりにされる場合が多い。そうした問題の一つが、土器製作方法とその使用である。

そこで本節では、土器の肉眼観察を中心として各時代・時期の土器製作過程を可能な限り復元するとともに、その使用方法も検討してみたい。

(2) 用語の規定

本節において使用する用語の定義を行う。

本節における動作連鎖とは、土器製作における一連の作成戦略であり、その結果としての製作工程も含んでいる。

本節における胎土とは、土器製作において使用される粘土と混和材の総体である。

本節における整形とは、土器製作工程中の器形形成過程を指す。この工程で、土器の基本的なプロポーションが形成される。

本節における調整とは、土器製作工程中の調整工程を指す。この過程で残された痕跡が調整痕であり、施文時につけられる文様とは区別される。

(3) 繩文土器製作の動作連鎖

a 深鉢

■胎土 最もバリエーションに富む器種だけに、その胎土は多種多様である。とはいって、ベースとなる粘土には共通性が多く、かつ縄文時時代早期土器に使用された粘土に類似するものも多い。以下、類型毎に記述する。

□第1群 A類の有文土器と無文土器における粘土の差は看取れない。ただし、混和材として金色粒を使用するものがあり、これらは搬入品の可能性が高い。

B類に関しては白色系の粘土の使用が目立つ。焼成の状態は堅緻とは言い難く、視覚的には発泡したような器面であるが、調整の精緻さがそれを補っている。なお、この白色系粘土は第一分冊に掲載した第II群と類似する。

□第2群 全ての類型に共通するが、黒色磨研処

理が施されたものと、それ以外では胎土が異なる。基本的には褐色系の粘土が使用されるが、これは第一分冊において掲載した第III群と類似する。

□第4群 第2群と同じ様相である。

□第5群 褐色系の粘土が使用されるが、最も多用されるのは白色系の粘土である。これに砂粒・小礫・褐色粒を混和材として使用する。傾向としては、無刻目突帯文が施されるものは、褐色系の粘土を使用し、孔列文が施されるものは白色系の粘土を使用する。全体的に、他の土器群とは異質な胎土という印象がある。

□第6群 雜多な胎土であるが、これは複数時期・式の土器を内包する結果と推測される。より詳細に胎土の観察を行なうことで第6群の各類型と、他の土器群との関係を類推する事が可能となろう。

胎上面では、第2群と第4群に共通の属性が多い。これらは時間軸上の前後関係にあり、先行する土器製作の伝統基盤を引き継いだ結果、このような事象が起こったものと推測される。

■整形 粘土紐の上に円盤状の粘土を重ねて底部とし、その上に粘土紐を輪積みで器形を形成する。平底の資料は円盤状の粘土の外側に粘土紐を巻きつけ底部とし、その上に粘土紐を重ねてゆく。これら円盤状の底部から、粘土紐が剥落した資料が第107図641～642である。

土師器の甕と比べると、器形のたわみが小さく、無文土器であっても、精緻に作られている。

頸部は、粘土紐の接合痕が観察できる資料が多い。接合痕の観察の容易さは、土器作成時における、粘土紐を輪積みする時間に比例すると考えられる。すなわち、先行する粘土紐が乾燥した状態で、新たに粘土紐を重ねると、明瞭に粘土紐の輪積み痕が観察できる傾向にある。これに依拠するならば、深鉢の場合、底部と頸部の形成時には、他の部位の形成よりも時間（手間）が掛かっている事になる。

■調整 全ての土器群に共通するが、器形整形時の粘土紐輪積痕が観察される資料は数少ない。後述する土師器と比較すると、非常に精緻な作り・調整が施されたといえる。

■使用法 器面全体にススが付着したものが多い。この事実は、この器種が煮沸具として使用されたことを示す傍証となろう。ススの付着部位についてさらに言及するならば、底部付近にはスス・炭化物が観察できないものが多い。土器の底部付近を埋設して使用した結果だと考えられる。

この結果は、熊本県御領貝塚において土器の分析を行なった坪井清足の報告と合致しており（文献52）、同時期の他の遺跡においても同様の事例が報告されている。この点は、当時期の土器の使用状況を復元する上で非常に興味深い。

口縁部～胴部に炭化物・ススの付着が集中し、底部にそれが見られないという事は、地面上に穴を掘り、土器の下半を埋設して、火を焚き土器の内容物を加熱した可能性が高く、地床炉もしくは、これに類する施設の存在が考えられる。しかしながら、本遺跡の豊穴住居跡からは同様の施設は確認されず、住居の屋外も同様であった。縄文時代後期後葉～晩期における火廻の検出は、今後の課題であろう。

b 浅鉢

■胎土 基本的には深鉢に準ずる。ただし第4群第4・5類は、明らかに精選された粘土を用い、混和剤の含有量が少ない。

■整形 粘土紐の輪積みで形成される点は深鉢と変わらない。胴部最大径、頸部～口縁部のボイントは粘土紐の輪積痕が断面で明瞭に観察される場合が多い。

■調整 器面は丁寧に調整され、土師器のように粘土紐が観察される事はない。器形の変化が多い場所は、特に入念に調整が施されている。

■使用法 第2群第4・5類に関しては、二次的な焼成痕は観察されなかった。第2群第1・3類は、外面に二次的な焼成痕が認められる資料が比較的多かった。これらの類型に伴う深鉢の存在は明らかではないが、浅鉢が深鉢の機能を一時的にせよ補完していた可能性が指摘できる。

c 台付皿

■胎土 ベースとなる粘土は、乳白色粘土と褐色粘土に大別される。これに多数の混和材を加えることで土器製作の粘土をしている。

乳白色の粘土が、セット関係をなす深鉢において使用される事は稀であり、特定器種と粘土との親和性が看取される。

この粘土の親和性の背景としては、脚台付皿の彩色がある。この器種は赤色や白色で彩色された資料が多いが、本遺跡出土資料に関しては赤彩されたものがほとんどで、白彩された資料は18のみである。つまり白色の粘土を用いることで、白彩と同じ効果を狙ったとも考えられる。

■調整 皿部と脚部で異なる調整を施すものが多い。また皿部外面や脚部内面など、人目に触れない部分は、粗雑な調整が施されている。

皿部内面は、まず器面全てに貝殻条痕などの調整を施す。その後、文様を施す部分のみミガキやナデ調整を行なう事により、最初の調整痕を隠し、文様が視覚的に見えるような技法を多く用いる。

皿部に突帯文を施すものは、11に見るよう、器面全体に調整を行なった後に、粘土紐の貼り付けを行なう。粘土紐の貼り付けには、333のようにユビでなでつけるものや、334のように工具により行なうものがある。突帯文を施した後に、再度、突帯文の整形（貼り付け）過程を隠す意味での調整は行なわれていないようである。

■使用法 内外面にススや炭化物が付いた資料は出土していない。このことから、煮沸具やこれに類する使用法がとられたとは考えにくい。

d 注口土器

■胎土 第2類と同じ胎土を用いている。水さらしなどを行ない精選された粘土を、特に選んで使用しているわけではない。

■整形 胴部の整形は、深鉢と大差はない。537を例にとるならば、胴部最大径と同様に上部の部分も丁寧に調整が施されている点から、輪積みにより器形を作りあげてから調整を行なうのではなく、段階的に輪積みを行ない、その度ごとに器面の調整を行なったと推測できる。

注口部の整形は、確認された2例とも異なる技法を用いる。536は輪積みで細長い棒状に整形した後に、棒状の工具で穿孔したものと思われる。

注口部と胴部の組合せこそが、注口土器作成のハイライトとも思われるが、その部分は未出土

であり検討できなかった。

■調整 注口部・胴部ともに丁寧なミガキ調整が施される。

(4) 土師器製作の動作連鎖

統いて、土師器の製作工程を検討したい。

a 瓢

■胎土 橙色系の粘土を用いた資料が多い。混和材として、褐色粒を多用する傾向にある。この胎土構成は、第一分冊において報告した第Ⅱ群の胎土と近似している。

■整形 底部は粘土の積層で形成されるものと、粘土紐の中央部に粘土塊をつめ込むもの、型作りの三者が認められる。胴部から口縁部にかけては、粘土紐の輪積みである。その際、底部から胴部にかけてと、頸部から口縁部にかけては、普遍的に輪積痕が観察される。したがって、底部・胴部・口縁部それぞれ調整を行なった後に、他の部位を形成する粘土を積みあげ、最後に最終的な調整を行なった可能性が高い。なお、頸部と口縁部の接合は、ユビオサエが多用される。口唇部の整形としては、ユビでナデるもの、工具を用いるもの、ユビでつまみあげるものという三つの技法のうち、いずれか一つを選択している。

■調整 内外面とも同じ調整を行なっているものと、内外面で異なる調整を施すものに二分される。内面・外面で複数の調整痕が観察される資料も多い。この場合、ハケとヘラの併用が最も良く見受けられるパターンである。この場合、口縁部と胴部など、器形の大きな変化がある場所で調整具が異なる場合が多い。しかしながら、調整具の幅 자체には変化が無いことが多い点には注意が必要であろう。すなわち、調整具の製作者には「一定の規格の調整具を作る」という考えはあっても、「ハケとヘラ」の調整具としての別は無い可能性がある。この点は、同じ調整ながらも、調整具の幅が異なる場合にも当てはまろう。

調整方向は、口縁部・頸部・胴部最大径上部、胴部最大径下部、底部で異なるものが多い。

口縁部・胴部という部位の差は関係なく、内面は外面よりも丁寧に調整が施されるものが多い。

印象として、時期が下るほど、粗雑な作りが多

い。言い換れば、多くの需要を満たすために、使用に耐えうる最低限の品質で土器の供給を行なっているともとれる。

■使用法 器面にはススがついているものが多く、煮沸具としての使用が考えられる。

ススが付着する部位は底部以外であることから、底部を埋設し、煮沸を行なったと推測できる。

一方で、器面にススが付いていない資料が存在する事も確かである。これは、何らかの貯蔵具として使用されたものであろうか。

b 高坏

■胎土 白色系の粘土と、橙色系の粘土が多用される。混和材が含まれないものが多い。

■整形 坏部・脚部それぞれの部位を整形した後に、これら二つの部位を接合する事により器形を構成している。以下、各部位毎に整形手法の観察所見を記載する。

□坏部 基本的には粘土紐の輪積みで基本的なプロポーションが形成される点は、甕などと同様である。しかしながら、坏の下部から口縁部の立上がり部分のパーツを接合する際に、独特の整形手法を用いている。受部の口縁部接合箇所に、粘土の接地面や強度の確保を目的に、筋状の掘り込みを入れており、第234図1676などがその典型例といえる。

□脚部 脚部は基本的に輪積により器形が形成される。器形整形後、坏の下部に設けた舌状部と脚部中央に開いた部分を組み合わせる事により初めて、高坏の器形となる。この時、坏部と脚部の接合を強固するために、脚部の上端を、しづりあげている。また、舌部は、指で押さえて脚部に接着するものと、そのままの状態で処理するものがある。この舌部の処理は同じ器形の高坏で見られるものであり、この異なる技法が共存していたと考えられる。なお、本遺跡出土高坏においては、舌部の処理を行なわないものが圧倒的に多く、処理を行なうものでも、粗雑なものが多い。

■調整 器面全体に丁寧なミガキ調整が施されたものが多い。ただし、脚部内面は簡単にナデられたものが多い。一部の資料は赤彩されている。

坏部内面の中央部（受け部）は口縁部に向かっ

て、放射状に調整されるが、受け部～口縁部は横方向の調整が行なわれる。

■使用法 器面に二次的な焼成痕が付着した資料は存在しなかった。そのため、煮沸具としての使用は想定し難い。

c 壺

■胎土 貌と同じ胎土が用いられる。混和材として小礫、褐色粒を含む資料が多い。

■整形 粘土紐の輪積みで器形を構成する。胴部最大径付近で器形がたわむ資料が多く、器形形成の困難さを物語っている。頸部の調整は粗雑なものが多く、輪積み痕が観察できるものが多い。

■調整 貌の調整と似る。

■使用法 貯蔵具としての使用が主たる目的の器種であろうが、器面にススが付くものが一定量存在する（小型の壺に多い）。何らかの要因で貌と同じ使用をしたものと思われる。

d 小型丸底壺

■胎土 非常に精選された粘土を用いている。混和材なども含まれないものが多い。

■整形 粘土の輪積みにより器形を構築する。胴部と口縁部の境目においては、粘土の輪積み痕が観察されるのだが、それ以外の部分で、粘土紐痕を観察する事は非常に困難である。

■調整 整形・調整パターンとしては、①器形全体を作った後、調整を行なう、②器形の部位毎に輪積み→調整を繰り返し、最後に全体的な調整を行なうという二者に大別される。

①の場合、外面は丁寧にミガキが施されることが多いに対し、内面はユビ押さえなど粗雑な調整が多く、輪積みの際の粘土紐が明瞭に観察される。また、調整が困難だと思われる頸部付近は、粘土のたるみが見られるなど、人目に触れない部分での粗雑な作りが特徴となる。

②に関しては、内外面ともに精巧な作りが多い。頸部においても、胴部と接合する際に生じたたるみなどは丁寧に調整が施されており、その痕跡を窺い知る事はできない。

■使用法 器面にススが付着した資料は皆無である。よって煮沸具等として使用されていたとは考え難い。

（5）まとめ

a 隔世遺伝的に使用される粘土

たとえば、型式ごとに使用される粘土が異なる事例は無い。混和材の組み合わせも同様である。第一分冊に掲載した縄文時代早期の土器と同様の胎土を用いる土器は、土師器にも存在する。

ただし、型式的に同じ系統に属する資料では共通する胎土を用いる事が多い。そのなかの、異なる胎土で作られた土器の存在こそが、各時代における他地域との交流を物語っているといえよう。

b 基本的には変化のない土器整形技術と使用法

土器の基本的な構造は粘土紐の輪積みによって成される。輪積みの幅や、粘土紐のナデつけなどの整形技法は大局的には変化ない。

そのなかで、縄文時代晩期の圧痕土器や土師器の底部の型作りなど、それまでの、技術的発想からは生まれないであろう技術が存在する点が注目される。

c 規格化された調整具

土師器作成に用いられる調整具は規格性が非常に高い。これはハケとヘラが同じ大きさの調整原体である可能性の高さを物語る。

第3節 繩文時代後・晩期の石器 および石製品について

(1) 石器組成と石材利用について

当該期の石器の出土量はきわめて多い。それぞれ破損品・未成品も含むが打製石斧・十・X字形石器・円盤形石器・横刃形石器などが1500点以上、磨製石斧1000点以上の出土が確認されている。打製石鏃も600点あまり、尾鈴山産溶結凝灰岩素材を主とした磨石・敲石・磨敲石も完形品のみで700点以上が出土した。打欠石錘にいたっては実に4000点を越える出土量を誇る。玉類も一定量を認め、石刀を含む磨製石製品も80点以上を数える。その他に石匙、異形石器、筋砥石、凹石、石皿、台石など多様な石器器種が確認された。

これらの石器類を用途論的に評価するならば、開墾（土壤掘削）および除草が想定される打製石斧や横刃形石器、木材伐採が想定される磨製石斧、狩猟あるいは漁労に用いた石鏃、漁労ないし屋内労働に用いた打欠石錘、食物加工や石器製作が推定される磨石、敲石、磨敲石、石皿、台石、その他の石錐や石匙などの加工工具など、多岐に亘る人間活動の証拠とみることができる。これらの石器群は、一部に後期中葉（丸尾式）および晩期前葉（入佐・黒川式）・後葉（刻目突帯文）の資料を含むものの、竪穴住居跡や遺構、包含層中の資料の様相からみて、大半は後期後葉の土器群（三万田・鳥井原式）に伴うものと推定される。

県内において本遺跡と匹敵する規模の事例としては、宮崎市平畑遺跡（文献7）がある。平畑遺跡の集落は複数時期の累積の結果を示すが、これに三万田・鳥井原式期の竪穴住居跡を含む。正確な出土量は不詳であるものの、100点以上の石鏃、60点以上の磨製石斧、20点あまりの打製石斧、打欠・切目合わせて200点あまりの石錘、その他に筋砥石、石皿、凹石、磨製石器類、玉類など野首第2と酷似した石器組成を示す。

九州島内に視野を広げて類例を求めるに、佐賀県鳥栖市蔵上遺跡（文献53）が比較に好適である。両端抉入石製品や糸巻形石器など地域色の強い石器も組成するが、30点以上のX字形石器、20点

あまりの円盤形石器（石製円盤）、500点あまりの石鏃、30点あまりの磨製石斧、その他に石匙、打製石斧、玉、石棒などが認められる。これらの石器の帰属時期は包含層中の土器から判断して、西平・太郎迫・三万田・鳥井原・御領・広田式の存続期と推定され、なかでも三万田式の出土量が多い。やはり後期後葉の集落遺跡と評価できる。

この他、熊本県域にも比較可能な遺跡がいくつかかる。梶尾町鶴羽田遺跡（文献54）は三万田・鳥井原式を含みつつ量的には御領・天城式にピークを持つ集落であり、石鏃33点、磨製石斧17点、打製石斧52点、十・X字形石器3点、円盤形石器（円盤状石器）8点以上に加え、敲石、磨石、凹石、石皿、砥石、石棒、双刃石斧などが確認されている。また太郎迫・妙見遺跡（文献55）においても、繩文後期の磨消繩文から晩期の刻目突帯文段階まで存続する集落が確認された。報告書には玉類以外の石器・石製品は掲載されていないが、あとがきには打製石斧をはじめとする石器類が10万点を越えると記される。

実はこうした後期後葉の集落遺跡の石器組成には、後期前・中葉の集落と比較して興味深い様相差が看取される。近年あいついで刊行された東南部九州の後期前・中葉の集落遺跡の事例を中心にその石器組成を概観してみよう。

宮崎県宮崎市（旧田野町）本野原遺跡（文献56～58）では集落の存続期を、中期前葉の並木式に代表される1期から後期後葉の御領式に相当する15期まで区分し、それぞれの時期の遺構・遺物の多寡に基づく集落・土地利用の変遷を描き出している（文献59）。これによれば大半の竪穴住居跡が2期（宮之迫1・阿高1式期）～5期（宮之迫4・本野原1式・南福寺・福田K2宿毛・門川南町式期）に帰属し、6期（本野原2・成川K2・出水・福田K2宿毛式期）～9期（市来II・浜シ洲タイプ・北久根山内陸・北久根山1式期）にも集落は存続するが、竪穴住居跡は減少し窪地遺構を含めた土地利用形態も変容をきたす。続く10期（丸尾A・宮下辛川I・納曾1式期）～13期（納屋向・西平式後期・中岳1式期）には竪穴住居跡は確認されず、窪地遺構は祭祀的空間とし

検出で、また出土状況が安定しておらず、特に前者は弥生時代以降の所産である可能性を考慮せねばならない。

1811は、腹部が滑らかなラインで象られる勾玉である。鹿児島県上加世田遺跡などにみられる九州に特有の形態といわれる「コの字勾玉」（文献20）とは特徴が明らかに異なる。形態に限つて縄文時代後期・晚期の類例をしいて求めれば、県内では宮崎市右葛ヶ迫遺跡の勾玉3点が挙げられる（文献65）。だが、より広く時間軸上に対象をとれば、むしろ類例は古墳時代に多い印象がある（文献66）。右葛ヶ迫例にしても、古墳時代の集落遺跡でもあり、砂丘上立地であることも手伝って包含層出土資料の厳密な帰属時期を絞り込めない感みがある。このため、1811については、今後、さしあたり県内の弥生・古墳時代遺跡から出土する勾玉の石材利用動向や穿孔・成形・整形技術との比較検討を通じて評価を絞り込む必要があろう。

一方、エンタシス形の管玉である703は、弥生時代以降に類例を求めるよりは、熊本県乾原・迎八反田遺跡群の縄文時代晚期前半とされる例なども考慮して、およそ後期終末～晚期前半の幅で理解するのが妥当と考える。

丸玉・小玉に関しては、出土状況が不安定なものと含むとはいえ、技術・形態的にはきわめて齊一性の高い資料群を構成している。706が出土した第2号溝状遺構は三万田式並行期などの土器が出土し、704が出土した第33号住居跡は三万田式併行期、710が出土した第47号住居跡もおよそ同時期であるから、これら3点以外の丸玉・小玉も概ね縄文時代後期後半～終末までの所産と推定できよう。

小珠の701は、第1号凹地状遺構（SX01：竪穴住居跡）の床面から出土しており、共伴する土器は丸尾式にはほぼ特定できる。したがって、縄文時代後期中葉の事例として評価できよう。垂玉である702は、サイズこそ異なれ、穿孔方法や成形・整形技術が701と共に、近接した時期と推定可能である。大坪氏が指摘するように、当時、両者は同じカテゴリーの事物として扱われていたも

のと考えられる（文献19）。平面不整形という形態上の特徴や、穿孔された穴の大きさがほぼ同じでありながら、本体のサイズにみられる701と702の格差は、今後、分割・再加工といった可能性（文献67）も視野に入れた検討の必要を考えさせる。

（3）紡錘形小型垂飾について

本遺跡ではヒスイ輝石製以外にも、縄文時代に属する玉類が多く出土している。

特筆すべきものとして、紡錘形小型垂飾とした一群がある。類例は、福岡県アミダ遺跡（文献68）、同県北古賀遺跡（文献69）、同県四箇東遺跡（文献70）、熊本県ワクド石遺跡（文献71）、同県大久保遺跡（文献72）などに認められ、宮崎県内は主要な分布域からは外れる。他遺跡の事例の多くが後期後葉に位置付けられていることから、本遺跡についても、概ね同時期の土器に共伴するものと考えられる。これらの小型垂飾の出自に関しては、大坪志子氏が縄文時代中期以前の石製装身具に系譜を求めその小形化したものとする考え方を示している。

ところで、丸玉・小玉については、イモガイの殻頂部を素材とした丸玉の材質転換形態説がすでに提出されているが、これらの小型垂飾についても何らかの祖形を想定し得るのではないか。九州と沖縄の縄文時代装身具の集成（文献73）を参考するならば、その候補として、①マッコウクジラ・シャチなど歯鯨類の歯を用いた垂飾（福岡県天神橋貝塚、同県新延貝塚、佐賀県菜畑遺跡、長崎県佐賀貝塚、鹿児島県麦之浦貝塚）、②タケノコガイなど長身の巻貝を用いた垂飾（鹿児島県神野貝塚、同県下山田II遺跡、沖縄県浜崎貝塚、同県平安名貝塚A地点、同県クマヤー洞穴遺跡）、③ジュゴンなど海獣の肋骨を用いた垂飾（鹿児島県上城遺跡、沖縄県シヌグ堂遺跡、同県地荒原貝塚、同県砂辺貝塚）の三つの可能性がさしあたりの候補として考え得る。いずれの可能性にせよ、これらは海洋の生業と関連する遺物である。これら非石製の小型垂飾が出土する遺跡の分布状況を巨視的にみると、①は九州島の西岸（東シナ海沿岸）、②・③は鹿児島県域南半～南島地域に主要

検出で、また出土状況が安定しておらず、特に前者は弥生時代以降の所産である可能性を考慮せねばならない。

1811は、腹部が滑らかなラインで象られる勾玉である。鹿児島県上加世田遺跡などにみられる九州に特有の形態といわれる「コの字勾玉」（文献20）とは特徴が明らかに異なる。形態に限つて縄文時代後期・晚期の類例をしいて求めれば、県内では宮崎市右葛ヶ迫遺跡の勾玉3点が挙げられる（文献65）。だが、より広く時間軸上に対象をとれば、むしろ類例は古墳時代に多い印象がある（文献66）。右葛ヶ迫例にしても、古墳時代の集落遺跡でもあり、砂丘上立地であることも手伝って包含層出土資料の厳密な帰属時期を絞り込めない感みがある。このため、1811については、今後、さしあたり県内の弥生・古墳時代遺跡から出土する勾玉の石材利用動向や穿孔・成形・整形技術との比較検討を通じて評価を絞り込む必要があろう。

一方、エンタシス形の管玉である703は、弥生時代以降に類例を求めるよりは、熊本県乾原・迎八反田遺跡群の縄文時代晚期前半とされる例なども考慮して、およそ後期終末～晚期前半の幅で理解するのが妥当と考える。

丸玉・小玉に関しては、出土状況が不安定なものと含むとはいえ、技術・形態的にはきわめて齊一性の高い資料群を構成している。706が出土した第2号溝状遺構は三万田式並行期などの土器が出土し、704が出土した第33号住居跡は三万田式併行期、710が出土した第47号住居跡もおよそ同時期であるから、これら3点以外の丸玉・小玉も概ね縄文時代後期後半～終末までの所産と推定できよう。

小珠の701は、第1号凹地状遺構（SX01：竪穴住居跡）の床面から出土しており、共伴する土器は丸尾式にはほぼ特定できる。したがって、縄文時代後期中葉の事例として評価できよう。垂玉である702は、サイズこそ異なれ、穿孔方法や成形・整形技術が701と共に、近接した時期と推定可能である。大坪氏が指摘するように、当時、両者は同じカテゴリーの事物として扱われていたも

のと考えられる（文献19）。平面不整形という形態上の特徴や、穿孔された穴の大きさがほぼ同じでありながら、本体のサイズにみられる701と702の格差は、今後、分割・再加工といった可能性（文献67）も視野に入れた検討の必要を考えさせる。

（3）紡錘形小型垂飾について

本遺跡ではヒスイ輝石製以外にも、縄文時代に属する玉類が多く出土している。

特筆すべきものとして、紡錘形小型垂飾とした一群がある。類例は、福岡県アミダ遺跡（文献68）、同県北古賀遺跡（文献69）、同県四箇東遺跡（文献70）、熊本県ワクド石遺跡（文献71）、同県大久保遺跡（文献72）などに認められ、宮崎県内は主要な分布域からは外れる。他遺跡の事例の多くが後期後葉に位置付けられていることから、本遺跡についても、概ね同時期の土器に共伴するものと考えられる。これらの小型垂飾の出自に関しては、大坪志子氏が縄文時代中期以前の石製装身具に系譜を求めその小形化したものとする考え方を示している。

ところで、丸玉・小玉については、イモガイの殻頂部を素材とした丸玉の材質転換形態説がすでに提出されているが、これらの小型垂飾についても何らかの祖形を想定し得るのではないか。九州と沖縄の縄文時代装身具の集成（文献73）を参考するならば、その候補として、①マッコウクジラ・シャチなど歯鯨類の歯を用いた垂飾（福岡県天神橋貝塚、同県新延貝塚、佐賀県菜畑遺跡、長崎県佐賀貝塚、鹿児島県麦之浦貝塚）、②タケノコガイなど長身の巻貝を用いた垂飾（鹿児島県神野貝塚、同県下山田II遺跡、沖縄県浜崎貝塚、同県平安名貝塚A地点、同県クマヤー洞穴遺跡）、③ジュゴンなど海獣の肋骨を用いた垂飾（鹿児島県上城遺跡、沖縄県シヌグ堂遺跡、同県地荒原貝塚、同県石辺貝塚）の三つの可能性がさしあたりの候補として考え得る。いずれの可能性にせよ、これらは海洋の生業と関連する遺物である。これら非石製の小型垂飾が出土する遺跡の分布状況を巨視的にみると、①は九州島の西岸（東シナ海沿岸）、②・③は鹿児島県域南半～南島地域に主要

な分布域がある。こうした分布論的観点と、形態的な類似度も考え併せたうえで、仮に材質転換形態説を採用するならば、石製小型垂飾の祖形として歯鯨類の歯を用いた装飾品が第一候補に考えられそうである。

今一つ興味深いのは、九州島から遠く離れて、長野県大町市一津遺跡においても、本遺跡の小型垂飾B類あるいは福岡県四箇東遺跡と類似する例の出土が報じられていることである（文献74）。

本州島にも類例があるとなると、もう一つの材質転換形態モデルとして、根挟みも考えられる。奈良県滋賀里貝塚から出土した、胸部と基部が連続して、断面形が扁平な事例などとの類似が指摘できる（文献75）。時期的にも本州島において根挟みが盛行するのは縄文時代後期後葉～晩期中葉であり、本遺跡の様相と合致する。

第4節 縄文時代後期から晩期における集落の形成過程

(1) 集落構成と変遷

本項では、本章第1節において検討した縄文土器の編年に基づき、野首第2遺跡における集落構成の検討を行ないたい。

とはいへ、前章において報告したように、遺物が出土した遺構は数少なく特定時期における竪穴住居跡の帰属軒数については不明瞭な点が多い。

a 第1期：丸尾式段階（第265図）

A区においてSX01が存在するのみである。当該期の土器の分布域は調査区全体で散漫に確認され、SX01の存在を除くと、散布地的な性格が強い。

近接する遺跡においては、この時期の遺物は確認されているが、遺構は検出されておらず、現状においてはSX01の性格の不可解さが印象的である。

この時期に伴う土器片錐が出土しており、野首第2遺跡における漁労の開始期でもある。

b 第2期：西平式～太郎迫式段階（第266図）

SA39に代表される、円形プランの竪穴住居を構築する時期であるが、この時期の集落の規模は非常に小さい。

遺物はC区を中心に出土しており、先行する時期に対して、遺跡内における居住範囲が変化している。

c 第3期：三万田式～鳥井原式段階（第267図）

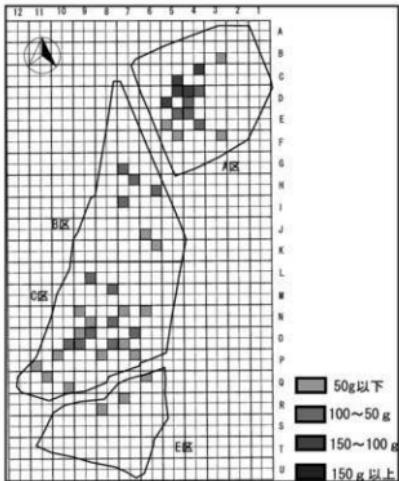
本遺跡の中心となる時期である。竪穴住居はSA33などに代表される円形プランである。出土遺物からは、さらに時期が細分される可能性もある。

遺物はC区を中心に出土しており、先行する段階の居住空間をほぼ踏襲している。

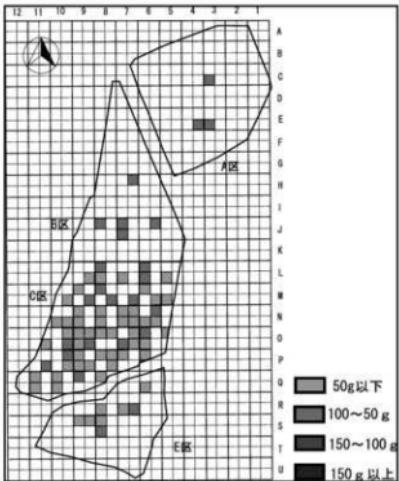
近接する遺跡においては、この時期の遺物が存在しても遺構は検出されていないことから、本遺跡は拠点的な集落として機能したと考えられる。

d 第4期：天城式並行段階（第268図）

遺構の検出は見られず、散布地的様相が濃い。土器の分布はC区を中心として、わずかにA区・B区に散見される。



第265図 第1期：丸尾式段階の土器分布



第266図 第2期：西平～太郎迫式段階の土器分布

e 第5期：黒川式並行期（第269図）

遺構は検出されていない。碎片のため掲載は見合わせたが、組織痕を有する資料を含む土器群はA区西側を中心にB区・C区において出土している。その中で、分布の中心はA区である。なお、遺物分布差は型式差と合致しない。

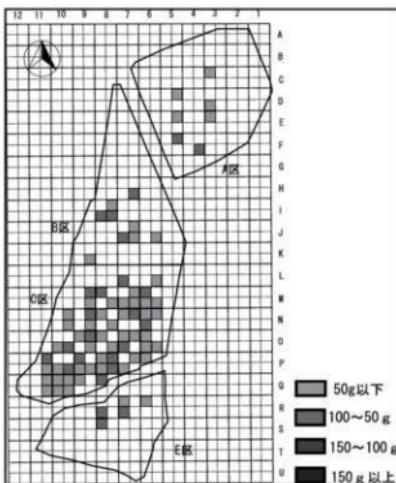
(2) 住居の構造

SA25がプラン内に棚状の施設を持つ可能性を持つ他は円形プランが中心である。

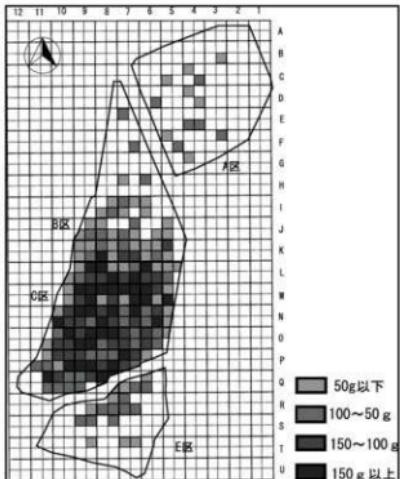
プランの平面形を見てゆくと、円形を基調とした不整形プラン（第1期）→円形プラン（第2期以降）となる。

住居の規模は約3×3m、床面積約9m²程度の小規模のものが多く、約5×5m以上、床面積約25m²の中・大形住居が一定数存在する。

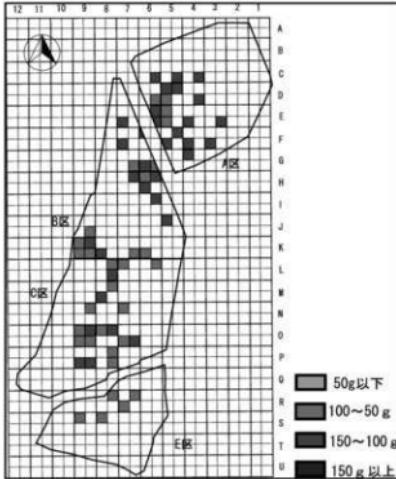
住居の構造としては、壁面の立ち上がりが皿状になるものが多く、主柱穴が検出されないものが大半を占める。一方で、SA43のようにプラン外周にピット群が巡る住居跡もあり、総合的な上屋構造の理解にまでは至らなかった。住居床面は平



第268図 第4期：天城式並行段階の土器分布



第267図 第3期：三万田～鳥居原式段階の土器分布



第269図 第5期：黒川式並行段階の土器分布

坦であり、わずかに硬化面もみられるが、焼土痕などが見られる住居跡は少なかった。

(3) 住居における器種構成

結論として、深鉢の出土が卓越しており、以下、浅鉢が続く。SX01は出土土器型式のセット内に含まれる脚台付皿形土器が出土している。

出土深鉢の大半は、外面にススが付着しており、煮沸具として使用されたと考えられるが、住居内に炉としての機能を有するような施設は確認されなかった。

(4) 土壌堆積の過程

第Ⅲ章で明らかにしたように、本遺跡ではB(D)・C区において、縄文時代後期後葉と古墳時代中期を中心とした集落が確認された。古墳時代中期の堅穴住居跡群に関しては、A区も含めて調査区全域に展開する様相が窺われるが、縄文時代後期の堅穴住居跡群は、概ねC区を中心としてB(D)区にわずかにかかるように分布し、調査区北半(AおよびB(D)区の大部分)やE区には展開しない。唯一A区の第1号凹地状遺構(SX01)を確認するが、C区を中心とした後期後葉の集落とは時期が異なり、後期中葉の丸尾式期の所産である。

もっとも縄文時代後・晚期の遺物包含層はA・B(D)・C・E区と調査区全域に披がる。ただし、出土遺物の様相は均一ではなく、土器の編年的位置付けや、石器組成、また礫の多寡などの点で、有意な分布差が確認された。

このような縄文時代後期後葉の集落を擁する本遺跡において、調査中から注意をひいた地形と土壤堆積上の特徴をいくつか挙げることができる。以下に具体的な特徴を三つ挙げておこう。

- ① 縄文後時代期後葉の集落が展開する範囲の地形は、J9グリッド付近がおよそ36mと最も高く、南東方向に向かって緩やかに傾斜する。
- ② 全調査区を通じて、K-Ah(喜界アカホヤ火山灰)の堆積がほとんど認められない。ごくわずかにC区南端部に二次堆積層と思し

き部分が確認され、あるいはピットの埋土中にわずかなK-Ah粒子が観察されるのみであった。

縄文時代後・晚期や古墳時代に属する堅穴住居跡の覆土中にも明確なかたちでK-Ahが観察された事例はない。

- ③ 基本土層第II層(MBO)以下は地質学的に整合的な堆積と判断されるが、第I層下面は不整合な堆積を呈しており、この現象はとりわけC区において顕著である。すなわち、第I層直下と接する基本土層が場所ごとに違った状況が観察され、第I層を除去した地面では平面的に分層が可能であった。なお第I層下部には主として縄文時代後・晚期の遺物が包含されている。

上記した三つの事実から、第I層に包含される遺物の上限時期である縄文時代後期以降から現代に至るまでのいずれかの時点において、本来は傾斜がより急であった旧地形を浸食・削平するような作用が及ぼされた可能性が指摘できる。検討課題は大きく二つに絞られよう。

第一に、こうした現象が人為的なものなのか、それとも自然の作用によるものなのか(課題1)。

第二に、人為・自然為を問わず、こうした現象が縄文時代後期以降のどの時点で起こったもののか(課題2)。

以下、それぞれの課題について個別に検討する。

■課題1 人為・自然為の判断

人為的な可能性としては、集落地確保のための意図的な削平・造成などいわゆる土木工事(文献76~78)が考えられる。これを肯定する立場からは、さらにその地形変化行為が一回なのか、複数回なのかについても検討する必要がある。また、除去した堆土の行方についても説明する必要がある。

一方、自然現象である可能性としては地形的要因や雨水などによる土壤の流出などが考えられる。これを肯定するには、普遍的にそうした現象が地質学的・堆積学的に観察されることが条件となる。

あるいは人為と自然為双方の要因が組み合わさった状況を考える必要もある。たとえば、本来的にゆるやかな起伏のある地形が、集落として選地されたことによって住居などの構築による地面の掘削、清掃、伐採、植物栽培など様々な人間の働きかけによってデフォルメされることなどが考えられる。以上に整理したように、課題1については、大きく三つの可能性が考えられる。

■課題2 不整合堆積の開始時期の限定

課題の追究にあたり考慮を要する事柄として、以下のようなものがある。

① 繩文時代後・晚期の竪穴住居跡、古墳時代の竪穴住居跡ともに、その覆土中からはK-Ahの存在が確認できない。

② 繩文時代後期・晚期の竪穴住居跡のなかには非常に浅く、形態は皿状を呈して検出されたもの多い。

①から少なくとも縄文時代後期後葉～晚期前葉の時期に竪穴住居が廃絶された時点には、集落の周囲にはK-Ahの堆積がみられなかったことが窺える。このことはこの時期に前述の現象が起こったことを支持する要因といえる。

②の竪穴住居の検出状況については二つの可能性を指摘できる。一つは本来I層中に検出面が存在するものの、確認が著しく困難であり、結果的に第I層を除去した段階で検出したことによって浅くなったとする考え方である。二つには、古墳時代以降に削平・浸食現象が起こり、縄文時代後・晚期の生活面が失われたとする考え方がある。後者は古墳時代において前述の現象が起ったことを支持する考え方となる。

本遺跡のみの検討ではいずれかの可能性に絞ることは望めないが、他遺跡の事例も含めて、総合的に評価するならば、縄文時代後期後葉前後の時期とするほうが、より妥当といえようか。

(5) 総括

以上、本遺跡における縄文時代集落の構造・変遷およびその立地状の特性について検討した。

当遺跡からは30軒を越える縄文時代後期竪穴住

居跡が検出されたが、これは遺構重層の結果であり、本来は5～6軒程度から成る小集落が継続的に存在したものと考えられる。

丸尾式に代表される、後期中葉は、A区に竪穴住居跡が1軒存在する他は、B・C区に遺物が散漫に分布している。

後期後葉に入ると、C区において活発集落運営を進めている。当該期の土器分布も、C区を中心としており、A区においては、ほとんど見られない。

集落の運営期間は、土器型式にして3～4型式の幅に収まるものと考えられる。

後期末葉に入ると、B・C区を中心に一定量の土器出土が見られるが、これらに伴う遺構は検出されなかった。

晩期においては、遺物の分布はA・B区中心となり、C区においては散漫な出土状況を見せ、遺跡全体のあり方として、散布地的な様相が色濃い。

また、人為にせよ自然為にせよ、本遺跡の地形や土壤の堆積環境が、一筋縄では理解できないものであることは確かである。今後、他の遺跡の事例も交えて、多角的な検討が必要とされる課題であろう。

第5節 古墳時代の集落構成

野首第2遺跡においては34軒の竪穴住居跡が検出された。本来ならば、これらから出土した遺物の時間軸をもとに、1時期あたりの集落構成を復元していくわけだが、遺物の出土が見られない住居跡が多く、集落の復元を考察するまでに至らなかった。各住居跡の推定廃絶時期に関しては、各項目において記載しており、そちらを参照されたい。

遺構廃絶時期の推定は土師器、特に甕の編年に依拠している（文献80）。

甕は最も個体数が多い器種であるが、本遺跡出土甕の基本的なスタイルは、第Ⅲ章第4節の分類にあるように、形態的・製作技術的なバリエーションには乏しいともいえる。それ故に時期的には、ごく狭い枠内に収まる事は予想に難くない。

基本的な甕の変遷に関しては、口縁部形態に関しては「くの字に大きく屈曲」→「直立気味に外反」→「口縁部が短く屈曲」という流れで構成されており、底部に関しては「平底」→「レンズ状平底」→「尖底」→「丸底」→「平底」という流れで構成されている。

これを踏まえ、野首第2遺跡出土資料に緩用した場合、口縁部A類→口縁部B類という変遷が仮定できる。口縁部から底部まで連続した資料が少ないため、器形の全体像から変遷を捉え難いが、口縁部と底部の組み合わせに関しては、一部明確な相関関係が見出せない資料が存在する。これは、タタキ調整の存在と併せて、特定地域における土師器のあり方として理解したい（作的に破片を図示していないため、本文中では目立たないが、本遺跡においては、相当数のタタキ調整が施された甕が出土している）。なお、本遺跡出土甕は、今塩屋・松永編年の第2期～第5期の範囲内に該当するが、これは概ね5世紀初頭から5世紀末～6世紀初頭の枠内に収まるものと考えられる。

この検討により、野首第2遺跡における集落の時期幅は5世紀初頭から5世紀末～6世紀初頭という比較的短い期間に収まることが推測される。

この枠内で竪穴住居が構築されていたわけであるが、1時期あたり3～4軒単位の小集落が継続的に存在したものと推測される。

このうち5世紀中頃～後半期において、集落造営はピークに達したと考えられる。この時期は、須恵器の編年にてはめるとTK208～TK47並行期であり、甕・壺流入前夜であり、須恵器が竪穴住居内から出土すると共に、土師器の器種が細分化し、合わせてこれらの器種・施設の登場により甕が長胴化する時期でもある。この事象を裏付けるかのように、当遺跡においては甕の出土は無く、住居跡中から甕も検出されなかった。

須恵器の流入に関して言及するならば、SA07においてTK23相当の須恵器が出土しているが、1個体のみであり、出土量は非常に少ない。しかしながら、椀という銘々器が合わせて出土しており、食膳形態の変化が見て取れる。他に須恵器が出土している竪穴住居跡はSA72がある。この遺構において出土したのは大甕であるが、覆土中からの出土であり、明確に住居跡に伴うものか判断に苦しむ。SA72からは、格子目タタキの痕跡を残す甕が出土しており、須恵器製作技術の影響が見て取れる。なお、野首第2遺跡からは模倣杯は出土していない。

住居跡の土器器種構成としては、全ての住居跡から甕が出土している。住居内のセット構成比率も甕が最も高く、以下、高环・小型丸底壺・壺が続く。

住居内出土の甕には、二次的な焼成痕が無い資料も存在しており、甕には煮沸器としての機能の他に、保有量の少ない、貯蔵具としての壺の役割も与えられていたと考えられよう。

なお、小型の甕は、大型の甕よりもスス・炭化物が付着している資料が多かった。

野首第2遺跡における竪穴住居跡は、その全てが方形プランである。平均規模は1辺3～3.5m、床面積10.5m²である。規模が最大の住居跡がSA76、最小のものがSA24である。

遺構の構造としては、床面は貼床がされており、

平坦なものが多かった。床面には焼土が見られる住居跡もあり、当時は地床炉が使われていたと推測されるが、焼土中より土器がまとまって出土した住居跡は存在しない。

また、主柱穴が確認されなかった住居跡が多い。プラン中には、多数のビットが存在したものもあるが、これらがどのような柱構成をとり、上屋構造を持つのか不明瞭な点が多い。

本文中で、再三指摘した事ではあるが、遺物が出土しない住居跡が存在する中で、SA05、SA38やSA76に代表される、遺物の大量出土が見られる住居跡が存在した。これらの住居中からは、確かに複数時期の遺物が出土するものの、特定時期に該当する土器の集中的な投棄が見て取れる。

また、これらの住居の出土土器の時期幅が微妙に異なっている点も注意が必要であろう。つまり、住居跡を廃絶する際に、特定の住居に遺物を集中的に廃棄するというシステムの下に、野首第2遺跡の集落は成り立っていた可能性がある。その結果として、遺物の出土しない住居跡が存在するに至ったと推測されよう。

竪穴住居の他に、集落を構成する遺構として、土坑があげられる。土坑の帰属時期は不明瞭な点が多く、その機能も判然としない。そのような中で、袋状の貯蔵穴が検出されている。これらの遺構は、住居跡の付近に構築される場合が多いようである。

溝状遺構に関しては、住居跡が完全に埋没した後に構築されているものであり、古墳時代の集落を構成する要素としては考え難い。

以上、簡単ではあるが、古墳時代の集落構成について概観した。本遺跡の集落は5世紀～6世紀という、時間的に限られた範囲で営まれたものである。その1時期あたりの構成単位としては竪穴住居2～4軒と貯蔵穴としての土坑の存在があげられる。

第V章 おわりに

終章では、これまで本書に示した内容に加え、昨年度刊行した第一分冊（文献1）の成果および補遺資料にも基づき、野首第2遺跡とその周辺の歴史的変遷を素描したい。

野首第2遺跡の歴史は後期旧石器時代から始まる。AT下位～上位にかけて多くの石器と礫群が出土した。これらは細分すると、AT下位3、AT上位4の計七つの時期に分かれる。

最も古い石器群（第I期）は石器組成は安定しないものの、後期旧石器時代の初頭に遡る可能性がある。AT下位黒色帯MB2・3から出土した2時期の石器群（第II・III期）は台形様石器の接合例や石刃製二側縁加工ナイフ形石器などを含む成果となった。

AT上位では、層位的にはAT直上からの切出形石器（狸谷型ナイフ形石器）が一定量まとまって出土した（第IV期）。今後は、これに伴う他の器種組成などを追究する必要がある。AT上位黒色帯MB1から出土した大形ナイフ形石器、角錐状石器、国府型ナイフ形石器を主要な組成とする石器群（第V期）は、大形・鋸歯縁加工を特徴とする槍先主体の石器群と評価できる。これに剥片尖頭器を1点も伴わないことが重要である。MB1～kr-kbにかけての層位からはいわゆる“ナイフ形石器文化終末期”に関わる石器群（第VI期）が接合資料を含み多く出土した。基部加工ナイフ形石器や台形石器を組成する。これとほぼ同じ層位からは細石刃石器群（第VII期）も出土しているが、時期的には分離される可能性が高い。

基本層序第II層（MBO）～第III層にかけては、早期の押型文土器期の遺構・遺物が多く確認された。集石遺構や炉穴がそれぞれに150基以上あるが、そのほとんどを報告できていない点は大きな反省点である。小丸川を挟んで対岸に位置する尾花坂上遺跡などでも、深い掘り込みを有する集石遺構が確認され、本遺跡や隣接する野首第1遺跡の同遺構の在り方と比較する良い材料となる。

いずれにせよ、大規模な集石遺構が密集する地域は、宮崎県内でも一定の地理的範囲に集中して分布する傾向が看取される。今後は、さああたり、小丸川流域とその周辺の台地を対象とした地域研究が要求されよう。

本書に報告した後・晚期の遺構・遺物も貴重な成果である。特に後期中葉の第1号凹地状遺構とした竪穴住居跡の孤立的な様相と、後期後葉に至って、盛んな生活痕跡と土地変容の可能性を示す痕跡の対照的な在り方は印象的である。また、ほぼ間違いなく北陸地域からの流通品であろうヒスイ輝石製の玉類が数多く出土したことも特筆される。

ただ大きな反省点としてC区の記録の不備がある。C区の調査については、諸事情から調査を中断した時間が長く、こうした状況に至ったこともあるが、無論、調査者の力量不足が最大の原因である。取り返せない部分も多いが、今後もこれを補う努力は継続したい。

弥生時代の人々の生活痕跡がほとんど残されず、古墳時代中期に至って再びこの地に集落が営まれた変遷も興味深い。小丸川を挟んだ対岸には、弥生時代の集落遺跡も多く、盛んな人類活動が展開されている点からすると、まことに対照的な土地利用の在り方といえる。

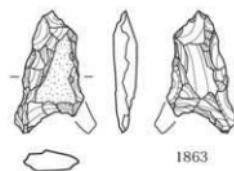
古代の状況も、紙数を尽くすべきであったが、果たせていない。土師器や縄釉陶器、布目瓦などの遺物や、道路状遺構・掘立柱建物との関係など、追究すべき部分は多い。

中・近世には弥生と同様、この土地利用の痕跡は乏しくなる。ただし、近世の所産と理解される火打石が一定量あることと裏腹に、同時期の陶磁器がほとんど見当たらない点はやや不可解であった。隣接する野首第1遺跡が主要な生活空間として利用され、本遺跡が廃棄空間だったにしても、本遺跡に火打石だけが目立つ理由は不明である。

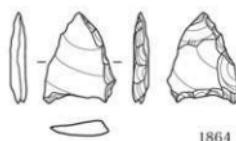
以上に述べた諸点以外にも課題が多い。今後も折に触れ、本遺跡に残された課題を果たすことを期したい。

繩文時代早期・後期旧石器旧石器時代 棚遺資料

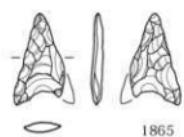
第一分冊では、掲載できなかった資料を一部ではあるが、ここで掲載しておく。資料の中心は、縄文時代早期では、石鏃・石匙などのトゥール類、後期旧石器時代では、最も資料数の多い第V期の石器群を主体とした。



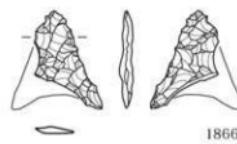
1863



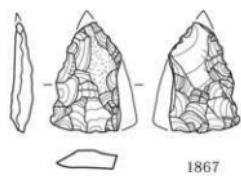
1864



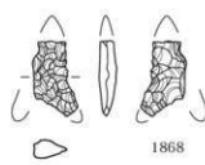
1865



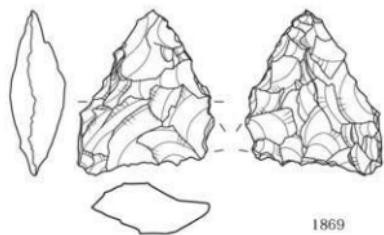
1866



1867



1868



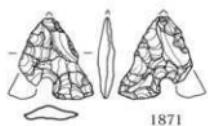
1869



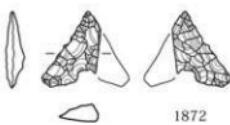
1870

0 1:1 3cm

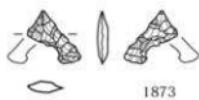
第270図 縄文時代早期の石器遺物（1）原寸



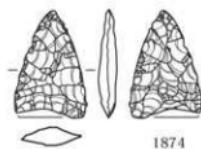
1871



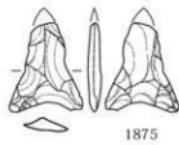
1872



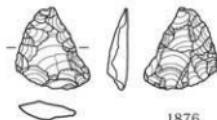
1873



1874



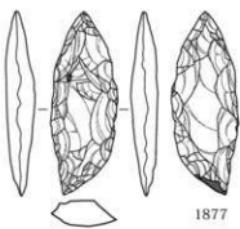
1875



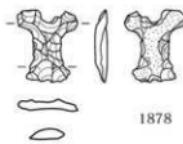
1876

0 1:1 3cm

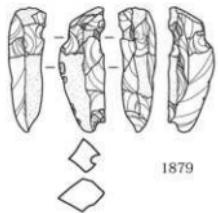
第271図 縄文時代早期の石器補遺(2) 原寸



1877



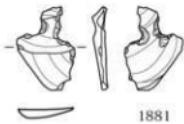
1878



1879



1880



1881



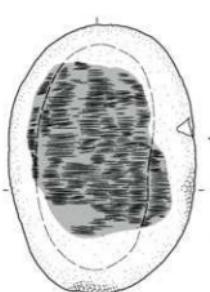
1882



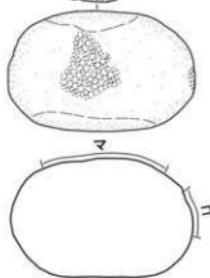
1883

第272図 縄文時代早期の石器遺物（3）原寸

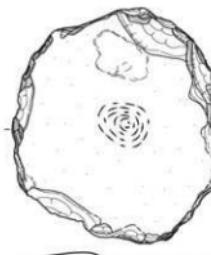
0 1:1 3cm



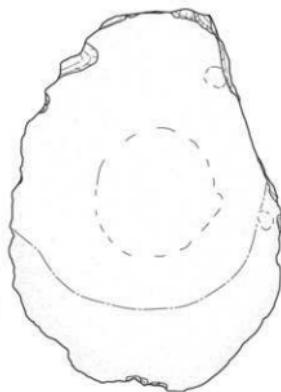
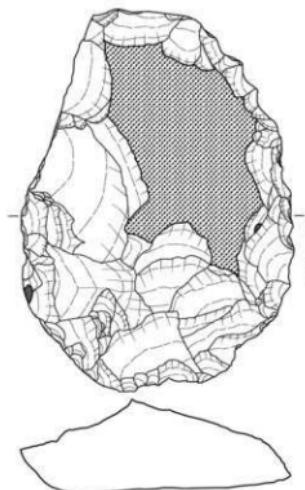
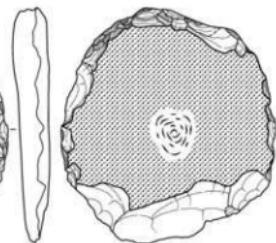
1884



マ



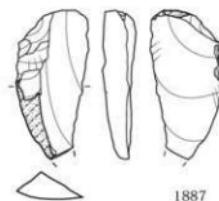
1885



1886

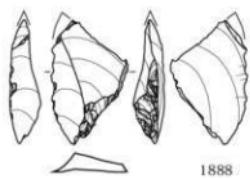


第273図 縄文時代早期の石器補遺 (4) S=1/2

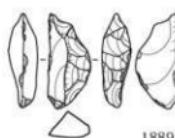


1887

第 274 図 ナイフ形石器石器群補遺 (1) 第 II ~ III 期の石器群 S= 1 / 2



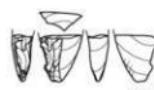
1888



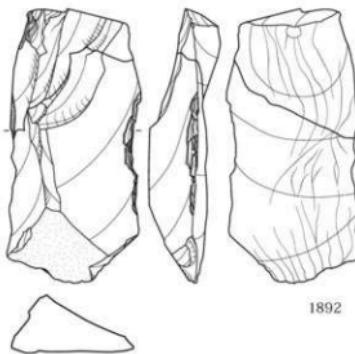
1889



1890



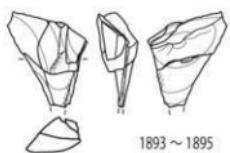
1891



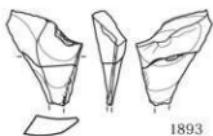
1892

0 1:2 10cm

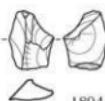
第 275 図 ナイフ形石器石器群補遺 (2) 第 V 期の石器群① トゥール類 S= 1 / 2



1893 ~ 1895



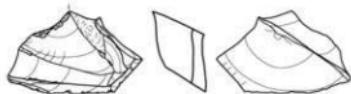
1893



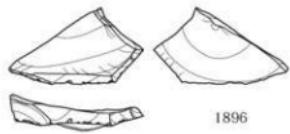
1894



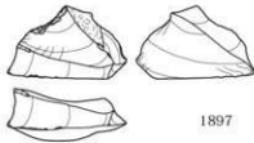
1895



1896 + 1897



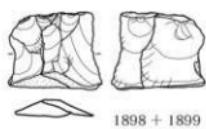
1896



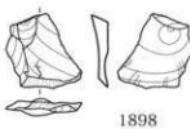
1897



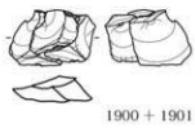
第 276 図 ナイフ形石器石器群補遺 (3) 第 V 期の石器群② 母岩資料No. 63 S= 1 / 2



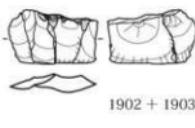
1898 + 1899



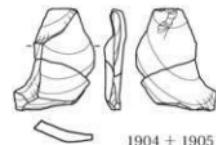
1898



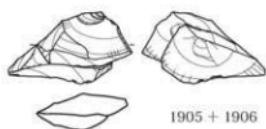
1900 + 1901



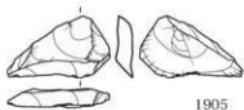
1902 + 1903



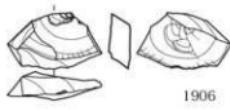
1904 + 1905



1905 + 1906



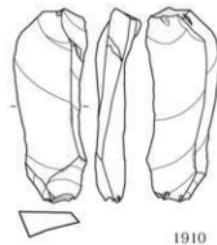
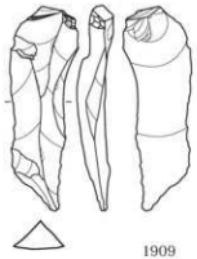
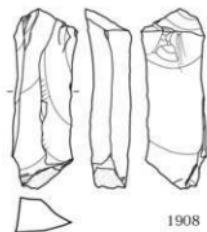
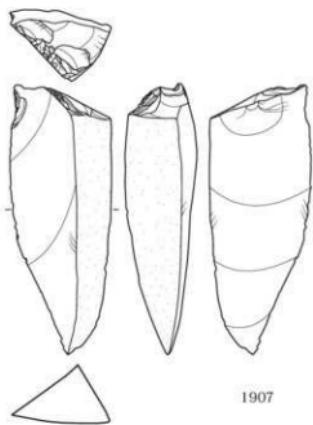
1905



1906

0 1 2 10cm

第277図 ナイフ形石器石器群補遺 (4) 第V期の石器群③ 母岩資料No.63 S=1/2



0 1:2 10cm

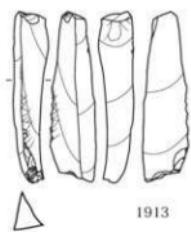
第278図 ナイフ形石器石器群補遺(5) 第V期の石器群④ 石刃 S= 1 / 2



1911



1912



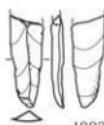
1913



1914



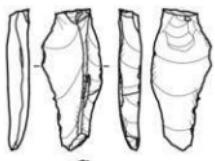
1915



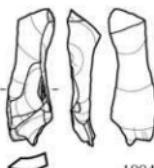
1902

0 10cm

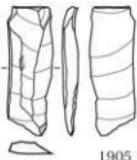
第279図 ナイフ形石器石器群補遺(6) 第V期の石器群⑤ 石刃 S=1/2



1903



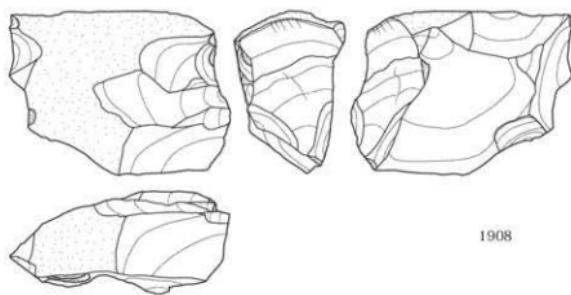
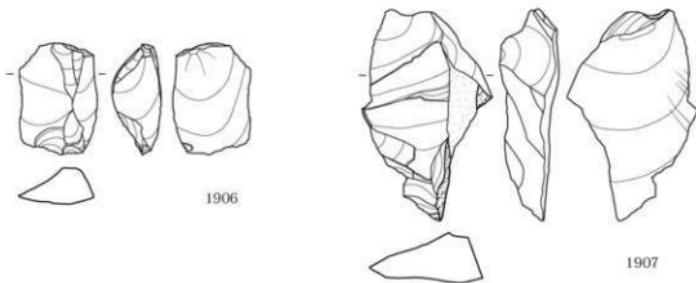
1904



1905

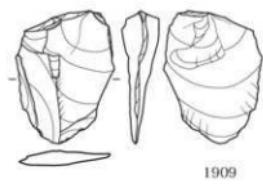
0 1:2 10cm

第280図 ナイフ形石器石器群補遺(7) 第V期の石器群⑥ 石刃 S=1/2

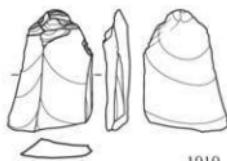


0 2.3 5cm

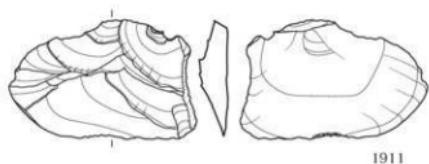
第 281 図 ナイフ形石器石器群補遺 (8) 第 V 期の石器群⑦ 有底・一般剥片, 石核 S= 2 / 3



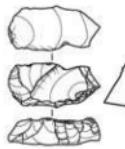
1909



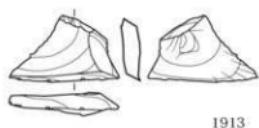
1910



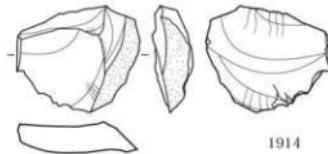
1911



1912



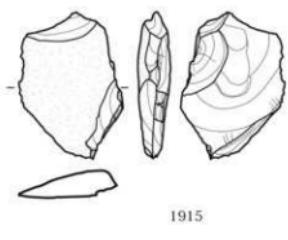
1913



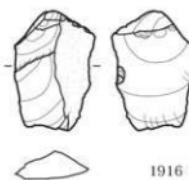
1914

0 2.3 5cm

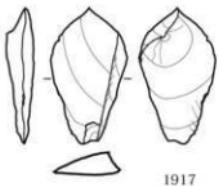
第 282 図 ナイフ形石器石器群補遺 (9) 第 V 期の石器群⑧ 有底・一般剥片, 石核 S= 2 / 3



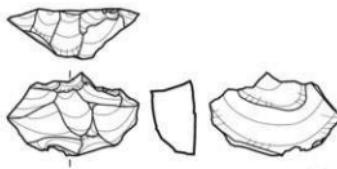
1915



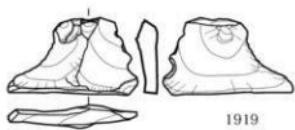
1916



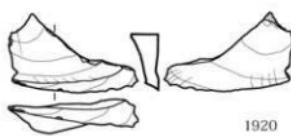
1917



1918



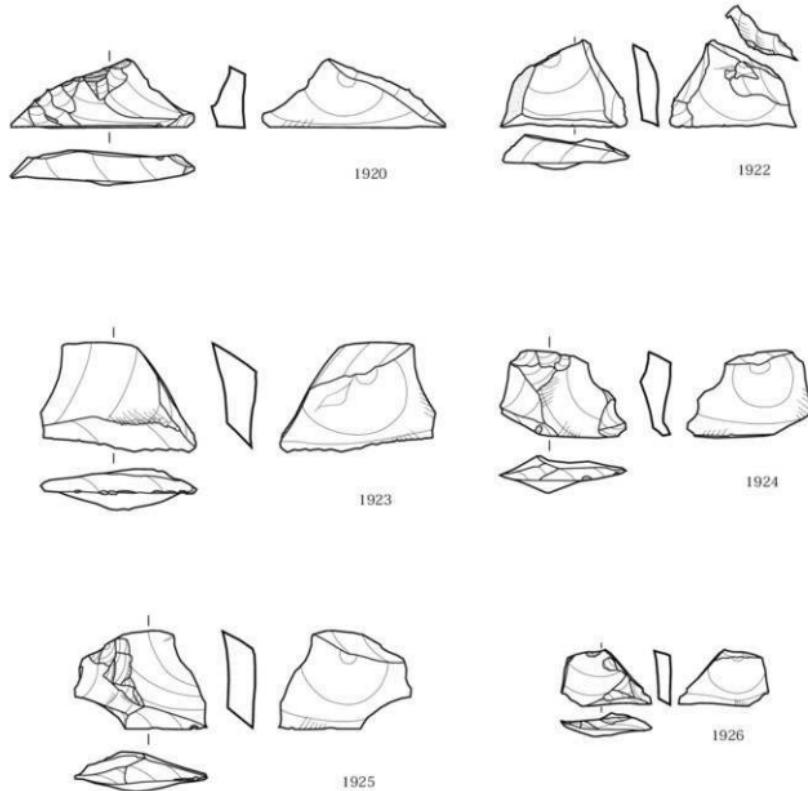
1919



1920

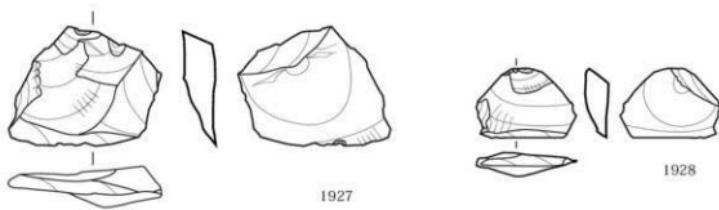
0 2.3 5cm

第283図 ナイフ形石器石器群補遺 (10) 第V期の石器群⑨ 有底・一般剥片, 石核 S= 1 / 2



0 1:2 10cm

第284図 ナイフ形石器石器群補遺 11) 第V期の石器群⑩ 有底・一般剥片, 石核 S= 1/2

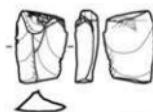


0 2.3 5cm

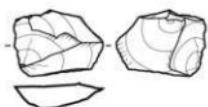
第285図 ナイフ形石器石器群補遺 (12) 第V期の石器群① 有底・一般剥片、石核 S= 2 / 3



1935



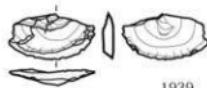
1936



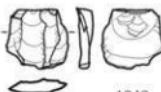
1937



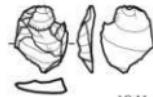
1938



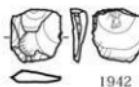
1939



1940



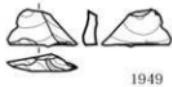
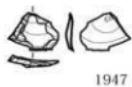
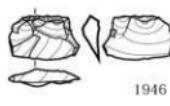
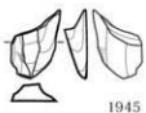
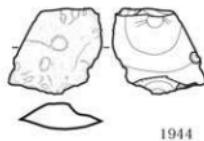
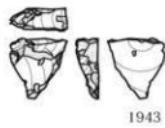
1941



1942

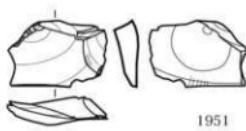


第 286 図 ナイフ形石器石器群補遺 (13) 第 V 期の石器群⑫ 有底・一般剥片, 石核 S= 1 / 2

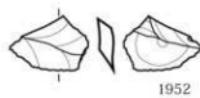


0 1:2 10cm

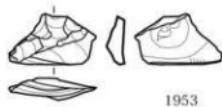
第287図 ナイフ形石器石器群補遺 (14) 第V期の石器群⑬ 有底・一般剥片、石核 S= 1 / 2



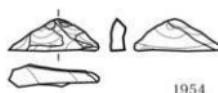
1951



1952



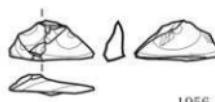
1953



1954



1955



1956



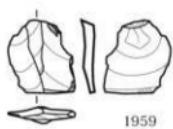
1957



1958



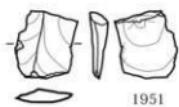
第288図 ナイフ形石器石器群補遺 (15) 第V期の石器群⑩ 有底・一般剥片, 石核 S=1/2



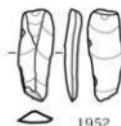
1959



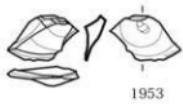
1960



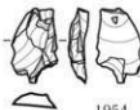
1951



1952



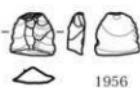
1953



1954



1955



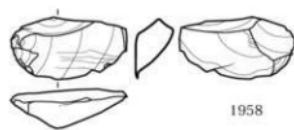
1956

0 2.3 5cm

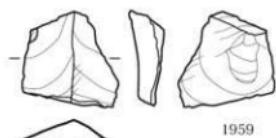
第289図 ナイフ形石器石器群補遺 (16) 第V期の石器群⑯ 有底・一般剥片, 石核 S= 2 / 3



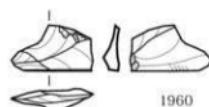
1957



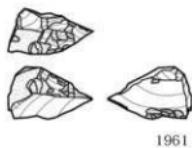
1958



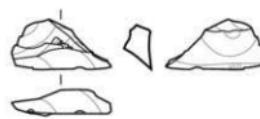
1959



1960

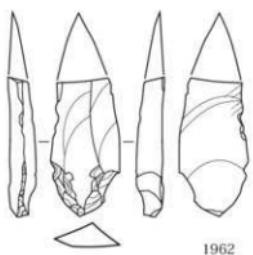


1961

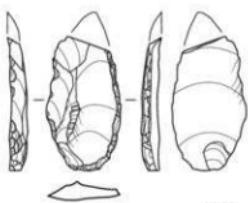


0 1:1 3cm

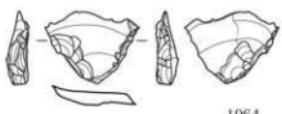
第 290 図 ナイフ形石器石器群補遺 (17) 第 V 期の石器群⑫ 有底・一般剥片、石核 原寸



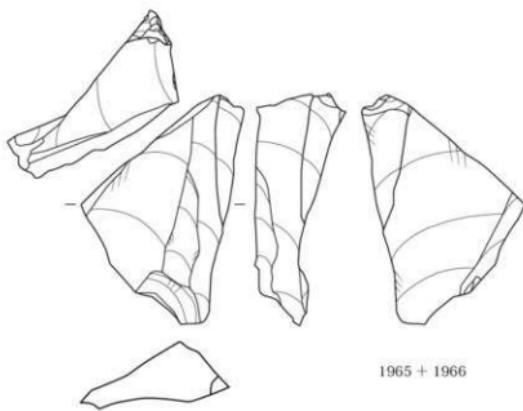
1962



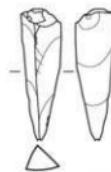
1963



1964



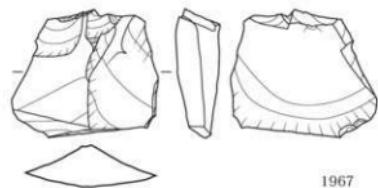
1965 + 1966



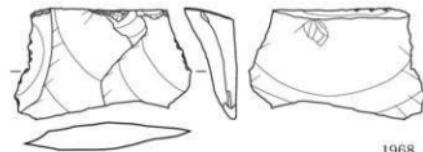
1966



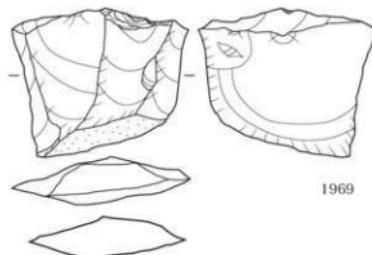
第291図 ナイフ形石器石器群補遺(5) 第VI期の石器群 原寸



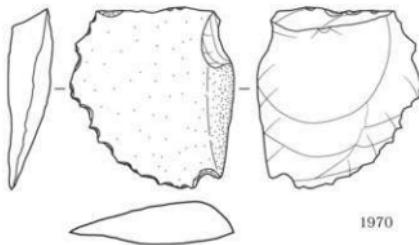
1967



1968



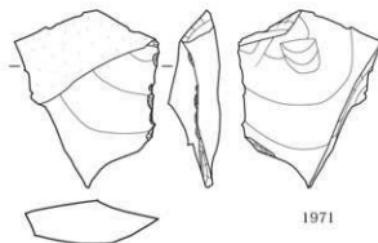
1969



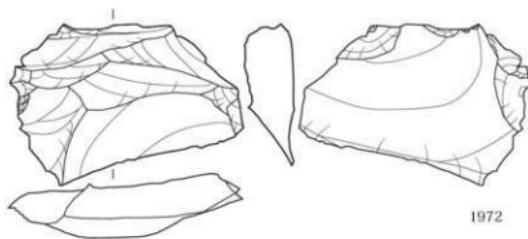
1970

0 1:1 3cm

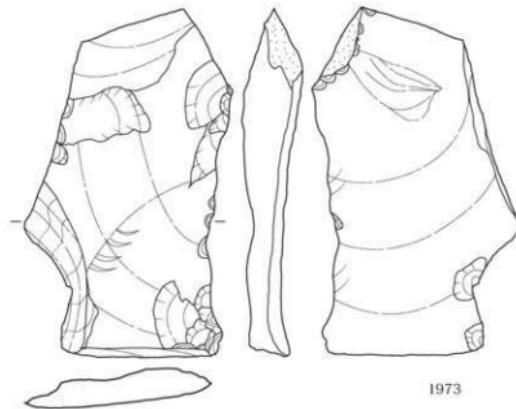
第292図 第Ⅰ層中の旧石器（1）有底・一般剥片、石核 原寸



1971



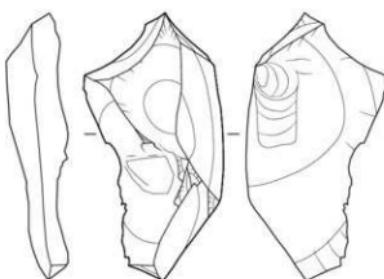
1972



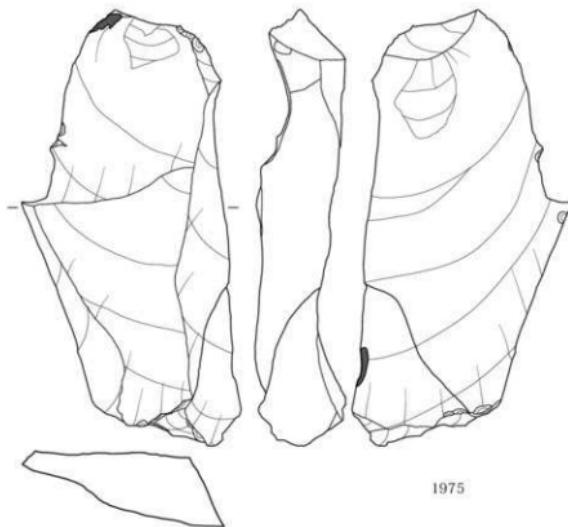
1973

0 1:1 3cm

第293図 第Ⅰ層中の旧石器(2) 有底・一般剥片、石核 原寸



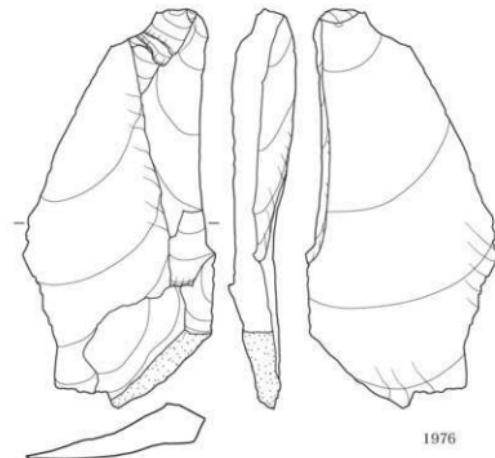
1974



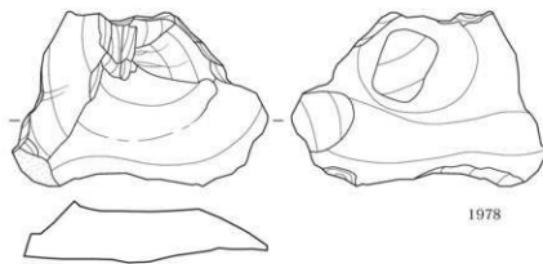
1975

0 1:1 3cm

第294図 第Ⅰ層中の旧石器(3) 有底・一般剥片、石核 原寸



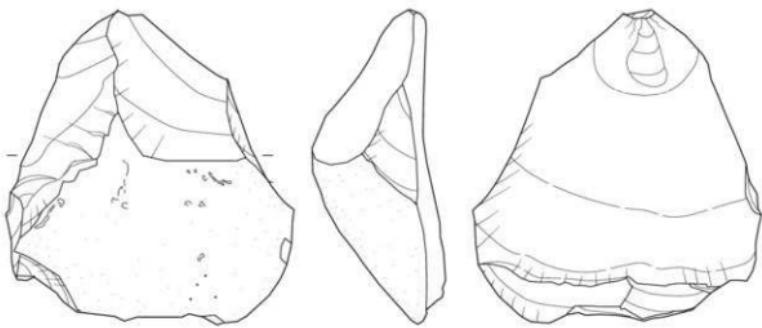
1976



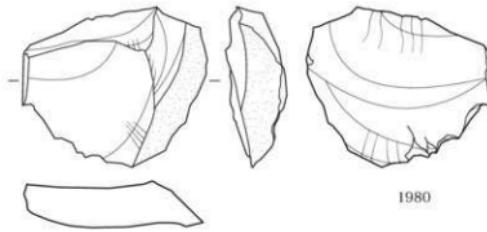
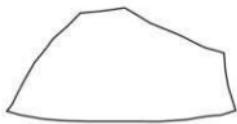
1978

0 1:1 3cm

第295図 砥群に伴う旧石器（1）原寸



1979

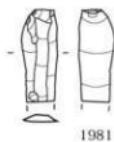


1980

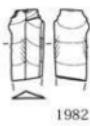


0 1:1 3cm

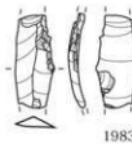
第296図 磚群に伴う旧石器（2） 原寸



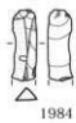
1981



1982



1983



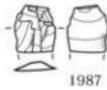
1984



1985



1986



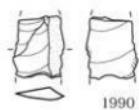
1987



1988



1989



1990



1991



1992

A scale bar with markings at 0, 1:1, and 3cm.

第297図 細石刃 原寸

引用・参考文献 付章：自然科学分析の成果

引用・参考文献

<引用文献>

- 文献 1：尾園賢二・重留康宏・松本茂編 2007『野首第2遺跡 第一分冊：後期旧石器時代～縄文時代早期編 東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 51』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第158集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 文献 2：奥野充・福島大輔・小林哲夫 2000「南九州のテフラクロノロジー－最近 10 万年間のテフラ－」『人類史研究』第 12 号 人類史研究会
- 文献 3：白岩修編 2000『石河内本村遺跡 県営中山間地域総合整備事業に伴う石河内本村遺跡発掘調査報告書』木城町文化財調査報告書第 6 集 木城町教育委員会
- 文献 4：田中光・藤木聰・飯田博之編 2004『野首第1遺跡 県道木城高鍋線高速開通道路・河川等緊急整備事業（青木地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 86 集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 文献 5：堀田孝博編 2007『野首第1遺跡Ⅱ 東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 50』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 157 集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 文献 6：阿部直人・竹田亨志編 2005『老瀬坂上第3遺跡 東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 23』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 118 集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 文献 7：北郷泰道ほか編 1985『平畠遺跡の調査』『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第 2 集 宮崎県教育委員会
- 文献 8：今塙屋毅行・都成量・永田和久編 2006『下耳切第3遺跡 東九州自動車道建設（都農～西都間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 30』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 125 集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 文献 9：永友良典編 1993『南中原遺跡』『宮崎県文化財調査報告書』第 36 集 宮崎県教育委員会

- 文献 10：堀口悟史編 2007『南中原第1遺跡（一次） 東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 54』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 162 集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 文献 11：山本格編 1995『中尾・牛牧地区遺跡 農村基盤総合整備パロット事業尾鉢 2期地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高鍋町文化財調査報告書第 7 集 高鍋町教育委員会
- 文献 12：山本格編 1991『町内遺跡発掘調査報告書 老瀬坂上第2遺跡 高鍋城跡』高鍋町文化財調査報告書第 6 集 高鍋町教育委員会
- 文献 13：今塙屋毅行 2003『野首古墳群・山王古墳群・牛牧古墳群ほか』『第 29 回九州古墳時代研究会古墳見学会資料』第 29 回九州古墳時代研究会実行委員会
- 文献 14：日高正晴ほか編 1979『お染ヶ丘地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告上ノ別府遺跡』宮崎県教育委員会
- 文献 15：岩永哲夫・戸高真知子編 1991『大戸ノ口第2遺跡』高鍋町文化財調査報告書第 5 集 高鍋町教育委員会
- 文献 16：江川雅章・永友良典編 1989『高鍋町遺跡詳細分布調査報告書』高鍋町文化財調査報告書第 4 集 高鍋町教育委員会
- 文献 17：鈴木克彦 2004『硬玉研究序論 一玉研究の現状と諸問題－』『玉文化』創刊号 日本玉文化研究会
- 文献 18：大坪志子 2004『九州地方の縄文時代硬玉製品』『玉文化』創刊号 日本玉文化研究会
- 文献 19：大坪志子 2004『九州地方の玉文化』『季刊考古学』第 89 号特集 縄文時代の玉文化 雄山閣
- 文献 20：松本直子 1998『玉類の分析からみた縄文時代後晩期における文化動態の一侧面 一情報伝達にかかる認知的・社会的要因－』『人類史研究』第 10 号 人類史研究会
- 文献 21：藤井哲男 2004『縄文時代出土玉類産地の科学分析成果』『季刊考古学』第 89 号特集 縄文時代の玉文化 雄山閣
- 文献 22：福永裕曉編 1996『上加世田遺跡』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書（13）鹿児島県加世田市教育委員会

- 文献 23：東和幸・野間口勇・閑明恵・森雄二・長崎慎太郎・宮田栄二・八木澤一郎・川口雅之・山元真美子・上床真 2005『大坪遺跡 九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 上巻』鹿児島県立埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書(79) 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 文献 24：尾園賢二・松本茂 2002『第Ⅲ章 第2節 高鍋町内の遺跡 47 野首第2遺跡』『平成13年度 東九州自動車道(都農～西都間)関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第64集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 文献 25：齊藤基生 1992『石錐 一岐阜県中津市内の遺跡を例として』『愛知女子短期大学研究紀要人文編』第25号 愛知女子短期大学
- 文献 26：板倉有大 2007『打製石斧と横刃型石器の器種認定 一桑飼下遺跡出土資料の再検討』『考古学研究』第53卷第4号 考古学研究会
- 文献 27：後藤信祐 1986『縄文後晩期の石剣形石製品の研究(上)』『考古学研究』第33卷第3号 考古学研究会
- 文献 28：遠部慎 2001『九州石刀・石剣小考』『唐澤考古』第20号 唐澤考古会
- 文献 29：隈昭志 1962『九州の縄文時代石刀・石剣(四) 牛深市天附出土の石刀様石器』『九州考古学』第16号 九州考古学会
- 文献 30：坪根伸也・遠部慎 2001『(3) 九州地域(大分県)の概要と集成』小林青樹(編)『縄文・弥生移行期の石製呪術具2』考古学資料集17 平成12年度文部科学省科学研究費補助金特定研究A(2)『日本人および日本文化の起源に関する学際的研究』公募研究成果報告書 研究課題番号 10115209
- 文献 31：三宅宋悦 1936『肥後出土の二石器』『考古学』第7卷第3号
- 文献 32：福富裕和 1980『石器』『黒丸遺跡 長崎県大村市黒丸町所在黒丸遺跡の調査報告』大村市黒丸遺跡調査会
- 文献 33：渡辺徹也 1998『南部九州の軽石製加工品による祭祀の変遷』『人類史研究』第10号 人類史研究会
- 文献 34：藤木聰 2003『宮崎県域の鍾具の変遷と分
- 布付、『宮崎県内水面漁具図譜』にみる鍾具の紹介』『先史学・考古学論究』IV 考古学研究室創設30周年記念論文集 龍田考古会
- 文献 35：村松佳幸 1999『山梨県内出土の石錐について』『山梨考古学論集』IV-山梨県考古学協会20周年記念論文集一 山梨県考古学協会
- 文献 36：本橋恵美子 1989『縄文時代の有溝砥石の研究 一軽石素材を中心として』『東国史論』第4号 群馬考古学研究会
- 文献 37：東和幸 1998『特集 地域ごとの石器使用の終焉 九州』『考古学ジャーナル』No.433 ニュー・サイエンス社
- 文献 38：藏富寛 2006『博多 108 一博多遺跡群 第150次調査報告一』福岡市埋蔵文化財調査報告書第894集 福岡市教育委員会
- 文献 39：矢部喜多夫・横山哲英 1993『久玉遺跡第5次発掘調査 油田遺跡 正坂原遺跡』都城市文化財調査報告書第25集 都城市教育委員会
- 文献 40：吉村靖徳 1995『権衡に関する一考察 一福岡県内出土権状製品の検討と課題一』『九州歴史資料館研究論集』20 九州歴史資料館
- 文献 41：森本嘉訓 1992『大田井の火打石採掘遺跡とその用具および伝承』『徳島民具研究』第四号 徳島民具研究会
- 文献 42：渡邉修 1998『土佐・阿波の火打道具調査メモ』『民具集積』4号 四国民具研究会・事務局
- 文献 43：安芸毬子 2005『江戸遺跡出土のキセル 一東大橋内遺跡における時期別様相一』『東京大学 本郷構内遺跡 医学部附属病院外来診療棟地点』 東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書5 東京大学埋蔵文化財調査室
- 文献 44：本田道輝 1978『西之表市納曾遺跡一出土土器』『鹿児島考古』第12号 鹿児島考古学会
- 文献 45：前迫一 1992『異系統土器文化の一接点』『南九州縄文通信』No.6 南九州縄文研究会
- 文献 46：富田乾一 1994『三万田式土器』『縄文文化の研究』4 雄山閣
- 文献 47：宮内克乙 1981『三万田式土器の研究』『古文化談叢』8 古文化研究会
- 文献 48：水ノ江和同 1997『北部九州の縄紋後・晚期土器 一三万田式から刻目突帯文土器の直前まで一』『縄文時代』第8号 縄文時代文化研究会

- 文献 49：泉 拓良・山崎純男 1989「凸帯文系土器様式」『縄文土器大観 4 後期 晩期 続縄文』小学館
- 文献 50：清田純一 1998「縄文後・晩期土器考－中九州の縄文後・晩期土器とその並行型式について－」『肥後考古』第 11 号肥後考古学会
- 文献 51：堂込秀人 1997「南九州縄文晩期土器の再検討－入佐式と黒川式の細分－」『鹿児島考古』第 30 号 鹿児島考古学会
- 文献 52：坪井清足 1965「御領貝塚の発掘調査」『城南町史』城南町
- 文献 53：久山高史編 2000「祓上遺跡Ⅲ 縄文時代遺構・遺物編 蔵上土地区西整理事業関係埋蔵文化財調査報告書(4)」鳥栖市文化財調査報告書第 61 集 鳥栖市教育委員会
- 文献 54：坂田和弘編 1998「鶴羽田遺跡(仮称)梶尾ニュータウン造成工事に伴う理藏文化財調査」熊本県文化財調査報告第 168 集 熊本県教育委員会
- 文献 55：竹田宏司編 1999「太郎追遺跡・妙見遺跡 寺迫地区農村活性化環境整備事業に伴う理藏文化財の調査」熊本県文化財調査報告第 186 集 熊本県文化財保護協会
- 文献 56：森田浩史・金丸武司編 2004「本野原遺跡一宮崎における縄文時代大規模集落の調査」田野町文化財調査報告書第 48 集 宮崎県宮崎郡田野町教育委員会
- 文献 57：森田浩史・金丸武司編 2006「本野原遺跡二」田野町文化財調査報告書第 52 集 宮崎県宮崎郡田野町教育委員会
- 文献 58：森田浩史・金丸武司編 2006「本野原遺跡三」宮崎市文化財調査報告書(田野町文化財調査報告書第 53 集) 宮崎市教育委員会
- 文献 59：金丸武司 2006「第Ⅳ章 集落の変遷」『本野原遺跡三』宮崎市文化財調査報告書(田野町文化財調査報告書)第 53 集 宮崎市教育委員会
- 文献 60：金丸武司編 2000「高野原遺跡(E~G 区) 平成 7 年度県営農地保全整備事業元野地区に伴う理藏文化財発掘調査報告書」田野町文化財調査報告書第 36 集 宮崎県宮崎郡田野町教育委員会
- 文献 61：長津宗重・菅付と樹編 1990「丸野第 2 遺跡 県営農地保全整備事業七野地区に伴う理藏文化財発掘調査報告書」田野町文化財調査報告書第 11 集 宮崎県宮崎郡田野町教育委員会
- 文献 62：上村俊雄・中園聰編 2005「屋久島横峯遺跡」鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告第 2 集 鹿児島国際大学国際文化学部博物館実習施設考古学ミュージアム
- 文献 63：中園聰 2005「第 2 節 考察」『屋久島横峯遺跡』鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告第 2 集 鹿児島国際大学国際文化学部博物館実習施設考古学ミュージアム
- 文献 64：太川裕晴編 2007「仲野原遺跡 町営住宅仲野原団地建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書」日向市文化財調査報告書 日向市教育委員会
- 文献 65：日高広人・久木田浩子編 2000「石菖ヶ迫遺跡 一般国道 220 号青島バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 21 集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 文献 66：大賀克彦 2004「弥生・古墳時代のヒスイ玉文化研究の現状と課題」『玉文化』創刊号 日本文化研究会
- 文献 67：栗島義明 2004「硬玉製大珠の交易・流通」『季刊 考古学』第 89 号 特集 縄文時代の玉文化 雄山閣
- 文献 68：福島日出海編 2005「アミダ遺跡 嘉穂地区遺跡群Ⅶ」嘉穂町文化財調査報告書第 10 集 嘉穂町教育委員会
- 文献 69：野田恒親・濱田彰久 1999「古閑北遺跡 産業展示場建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」熊本県文化財調査報告書第 184 集 熊本県教育委員会
- 文献 70：二宮忠司・渡辺和子編 1983「四箇周辺遺跡 調査報告書(5)」福岡市文化財調査報告書 福岡市教育委員会
- 文献 71：古森政次編 1994「ワクド石遺跡」熊本県菊池台地における縄文時代後期集落の調査 県営烟地帯総合土地改良事業に伴う文化財調査 熊本県文化財調査報告書第 144 集 熊本県教育委員会
- 文献 72：吉田正一編 1994「大久保遺跡 七城町林原所在の縄文遺跡」熊本県文化財調査報告第 143 集 熊本県教育委員会
- 文献 73：九州縄文研究会 2005「九州の縄文時代装身具 発表要旨・資料集」第 15 回 九州縄文研究会・沖縄大会 九州縄文研究会・沖縄大会実行委員会
- 文献 74：島田哲男構成 2004「長野県一津遺跡」『季

刊『考古学』第89号特集「縄文時代の玉文化」雄山閣

- 文献75：末永雅雄ほか 1961『櫛原』奈良県史跡名勝
天然記念物調査報告第17冊 奈良県教育委員会
- 文献76：金丸武司 2005『九州における縄文の大土木工事』『南九州縄文通信』No.16 南九州縄文研究会
- 文献77：金丸武司 2006『南九州縄文後期遺跡における斜面堆積の再検討』『大河』第8号 大河同人
- 文献78：阿部芳郎 2002『縄文のくらしを掘る』岩波ジュニア新書 419 岩波書店
- 文献79：松永幸寿 2001『宮崎平野における弥生時代後期中葉～古墳時代中期の土器』『宮崎考古』第17号 宮崎考古学会
- 文献80：今塙屋毅行・松永幸寿 2002『日向における古墳時代中～後期の土師器—宮崎平野部を中心にして—』『古墳時代中・後期の土師器—その編年と地域性—』第5回九州前方後方墳研究会実行委員会

<参考文献>

- 小林久雄 1931『阿高貝塚及び御領貝塚の土器について』『地歴研究』7-3～8 熊本地歴研究会
- 後藤晃一 2004『縄文時代後期の東北部九州—縄文時代後期後半の土器編年—』『考古論集』河瀬正利先生追官記念事業会
- 竹田宏司編 1999『太郎追遺跡・妙見遺跡』熊本県教育委員会
- 富田紘一編 1981『上南部遺跡発掘調査報告書』熊本市教育委員会
- 富田紘一 1983『太郎追遺跡の縄文土器（1）』『肥後考古』4号 肥後考古学会
- 富田紘一 1987『太郎追遺跡の縄文土器（2）』『肥後考古』6号 肥後考古学会
- 富田紘一 1996『北久根山』肥後上代文化研究会
- 前追亮一 2002『南の磨消縄文土器』『四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古稀記念論文集刊行会
- 前追亮一 2004『南の北久根山式土器—干追遺跡出土資料の位置づけ—』『鹿児島考古』第38号 鹿児島考古学会
- 吉本正典 1995『宮崎平野出土の土師器に関する編年的考察』『宮崎考古』第14号 宮崎考古学会

付章 自然科学分析の成果（承前）

第1節 放射性炭素年代測定とその結果

当該期に関わる自然科学分析は旧石器時代の礫群、縄文時代早期の集石遺構・炉穴などから採取した炭化物を対象に実施した放射性炭素年代測定分析がある。その結果の一部と評価については、すでに第一分冊に触れるところがあった。本書では、火山灰分析の結果も合わせて、古環境研究所による詳細な結果を表にして提示しておく。

第2節 火山灰分析とその結果

火山灰分析の結果については、C区における縄文時代後期後葉の集落の形成過程の解明に向けて

も、貴重な情報となるため、以下に古環境研究所の調査報告書の記載を収録する。

(1) 野首第2遺跡の土層とテフラ

1.はじめに

宮崎県中南部に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、姶良、鬼界、阿蘇などのカルデラ火山や、桜島や霧島などの成層火山に由来するテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで野首第2遺跡においても、土層や遺物などの層位や年代を明らかにするために、テフラ組成分析と屈折率測定を行い、指標テフラの検出同

付章第1表 放射性炭素年代測定（第1回）の試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	SP-53	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No. 2	PSI-27	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No. 3	SP-19-②C1	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No. 4	SP-19-②PIC3	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No. 5	SP-19-②PIC2	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No. 6	SP-97(Ⅲ層)	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No. 7	PSI-28-③C2	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No. 8	PSI-37C1	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No. 9	SI配石間埋土	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No. 10	SI-93C1	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No. 11	SI-70・93	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No. 12	SI-5C1	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No. 13	SI-79C4	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No. 14	SI-80	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No. 15	SI-3	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No. 16	SP-87C3	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No. 17	SP-67-③C1	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No. 18	SI-25C1	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法

付章第2表 放射性炭素年代測定（第1回）の結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	曆年代（西暦）	測定No. (Beta-)
No. 1	8380±40	-25.5	8370±40	交点: cal BC 7480 1 σ : cal BC 7510~7450, 7390~7370 2 σ : cal BC 7540~7340	171637
No. 2	22380±120	-25.4	22370±120	—	171638
No. 3	8150±40	-27.3	8110±40	交点: cal BC 7070 1 σ : cal BC 7090~7060 2 σ : cal BC 7170~7050	171639
No. 4	8420±40	-28.5	8360±40	交点: cal BC 7470 1 σ : cal BC 7500~7450, 7400~7360 2 σ : cal BC 7530~7330	171640
No. 5	8360±40	-27.0	8330±40	交点: cal BC 7450, 7390, 7370 1 σ : cal BC 7480~7340 2 σ : cal BC 7510~7310	171641
No. 6	8250±40	-25.0	8250±40	交点: cal BC 7310 1 σ : cal BC 7340~7190 2 σ : cal BC 7450~7390, 7370~7140	171934
No. 7	8250±40	-26.3	8230±40	交点: cal BC 7290 1 σ : cal BC 7320~7170 2 σ : cal BC 7430~7420, 7350~7090	171935
No. 8	28010±220	-25.1	28010±220	—	171644
No. 9	8340±40	-25.8	8330±40	交点: cal BC 7450, 7390, 7370 1 σ : cal BC 7480~7340 2 σ : cal BC 7510~7310	171645
No. 10	8300±40	-25.8	8290±40	交点: cal BC 7340 1 σ : cal BC 7450~7390, 7370~7310 2 σ : cal BC 7480~7190	171646
No. 11	8250±50	-25.6	8240±50	交点: cal BC 7300 1 σ : cal BC 7340~7170 2 σ : cal BC 7460~7080	171647
No. 12	8340±50	-26.0	8320±50	交点: cal BC 7450, 7400, 7360 1 σ : cal BC 7480~7320 2 σ : cal BC 7520~7280, 7230~7190	171648
No. 13	8340±50	-26.1	8320±50	交点: cal BC 7450, 7400, 7360 1 σ : cal BC 7480~7320 2 σ : cal BC 7520~7280, 7230~7190	171649
No. 14	8400±60	-26.2	8380±60	交点: cal BC 7490 1 σ : cal BC 7530~7450, 7400~7360 2 σ : cal BC 7560~7320	171650
No. 15	8350±40	-25.2	8350±40	交点: cal BC 7470 1 σ : cal BC 7500~7430, 7420~7350 2 σ : cal BC 7530~7320	171651

付章第3表 放射性炭素年代測定（第1回）の結果（2）

試料名	¹⁴ C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ¹⁴ C 年代 (年BP)	暦年代（西暦）	測定No. (Beta-)
No.16	8370±40	-23.8	8390±40	交点 : cal BC 7500 1 σ : cal BC 7530~7470 2 σ : cal BC 7550~7430, 7420~7350	171936
No.17	8300±40	-26.0	8280±40	交点 : cal BC 7330 1 σ : cal BC 7450~7400, 7360~7300 2 σ : cal BC 7470~7180	171937
No.18	8130±40	-25.7	8120±40	交点 : cal BC 7080 1 σ : cal BC 7100~7060 2 σ : cal BC 7180~7050	171938

付章第4表 放射性炭素年代測定（第2回）の試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	SC-55	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.2	SI-143	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.3	SI-146, 配石	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.4	SI-149, 5層	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.5	SI-149, 5層下部	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.6	SI-153, C 2	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.7	SI-153, C 4	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.8	SI-155, 5層	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.9	SI-155, 配石	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.10	SI-156, R 9	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS

定を試みることになった。調査分析の対象となつた地点は、C区東壁とC区西壁の2地点である。

2. 土層の層序

(1) C区東壁

C区東壁では、本遺跡の基本的な土層をよく観察することができた(図1)。ここでは、下位より黄灰色土(層厚7cm以上、X層)、黄色軽石混じり橙褐色軽石層(層厚10cm、軽石の最大径12mm、石質岩片の最大径11mm、IX層)、橙褐色軽石混じり黄褐色土(層厚12cm、軽石の最大径9mm、VII層)、灰褐色土(層厚10cm)、暗

灰褐色土(層厚25cm、以上VII下層)、灰色粗粒火山灰混じり灰褐色土(層厚14cm)、灰色粗粒火山灰を多く含む暗灰褐色土(層厚12cm)、灰褐色土(層厚9cm、以上VII上層)、黄色軽石混じり黄色粗粒火山灰層(層厚13cm、軽石の最大径5mm)、黄色粗粒火山灰混じり灰褐色土(層厚10cm、以上VI層)、若干灰色がかった褐色土(層厚19cm、V層)、橙色軽石混じり暗灰褐色土ブロック混じり褐色土(層厚13cm、軽石の最大径2mm、IV b層)、灰褐色土(層厚12cm、IV a層)、暗灰褐色土(層厚7cm)、暗灰褐色土(層厚7

付章第5表 放射性炭素年代測定（第2回）の結果

試料名	測定No. (Beta-)	¹⁴ C年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ¹⁴ C年代 (年BP)	曆年代（西暦）
No. 1	187167	1850±40	-25.6	1840±40	交点: cal AD 150 1 σ : cal AD 120~230 2 σ : cal AD 80~250
No. 2	187168	9170±50	-25.8	9160±50	交点: cal BC 8300 1 σ : cal BC 8430~8360, 8340~8280 2 σ : cal BC 8480~8270
No. 3	187169	8280±40	-25.3	8280±40	交点: cal BC 7330 1 σ : cal BC 7450~7400, 7360~7300 2 σ : cal BC 7470~7180
No. 4	187170	8430±50	-25.0	8430±50	交点: cal BC 7530 1 σ : cal BC 7550~7490 2 σ : cal BC 7580~7450, 7390~7370
No. 5	187171	8350±40	-25.4	8340±40	交点: cal BC 7460 1 σ : cal BC 7490~7340 2 σ : cal BC 7520~7320
No. 6	187172	8360±40	-26.3	8340±40	交点: cal BC 7460 1 σ : cal BC 7490~7340 2 σ : cal BC 7520~7320
No. 7	187173	8350±40	-26.2	8330±40	交点: cal BC 7450, 7390, 7370 1 σ : cal BC 7480~7340 2 σ : cal BC 7510~7310
No. 8	187174	8230±40	-25.9	8220±40	交点: cal BC 7280, 7230, 7190 1 σ : cal BC 7320~7160 2 σ : cal BC 7340~7080
No. 9	187175	8230±50	-26.2	8210±50	交点: cal BC 7190 1 σ : cal BC 7320~7100 2 σ : cal BC 7430~7420, 7350~7070
No. 10	187176	8340±50	-27.6	8300±50	交点: cal BC 7340 1 σ : cal BC 7470~7310 2 σ : cal BC 7500~7180

cm)、黒灰褐色土(層厚7cm、以上Ⅲ層)、黒色土(層厚11cm、Ⅱ層)、わずかに灰色がかった黒色土(層厚10cm、Ⅰ層)、暗灰褐色土(層厚15cm)が認められる。

発掘調査では、これらのうちⅥ層上部、V層上部～IV b層、IV a層～Ⅲ層下部から旧石器時代、Ⅲ層中部下部～Ⅱ層から縄文時代早期の遺物が検出されている。

(2) C区西壁

C区西壁では、砂質黄灰色土(層厚3cm以上)の上位に、下位より灰褐色土(層厚33cm)、色調がとくに暗い暗灰褐色土(層厚21cm)、若干色調が暗い灰褐色土(層厚17cm)、若干色調が

暗い灰褐色土(層厚21cm)が認められる。これらのうち、色調がとくに暗い暗灰褐色土からは、古墳時代の遺物が検出されている。

3. テフラ組成分析

(1) 分析試料と分析方法

C区東壁およびC区西壁において基本的に土層ごとに採取された試料のうち、16点について、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析を合わせたテフラ組成分析を行った。分析の手順は次の通りである。

1) 試料 15g を秤量。

2) 超音波洗浄により泥分を除去。

3) 80°Cで恒温乾燥。

- 4) 分析篩により、 $1/4 \sim 1/8\text{mm}$ の粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で 250 粒子を観察し、火山ガラスの色調形態別比率を求める（火山ガラス比分析）。
- 6) 偏光顕微鏡下で重鉱物 250 粒子を観察し、重鉱物組成を求める（重鉱物組成分析）。

(2) 分析結果

C 区東壁および C 区西壁におけるテフラ組成分析の結果を、ダイヤグラムにして図3と図4に示す。また火山ガラス比分析と重鉱物組成分析の結果の内訳を表1と表2に示す。C 区東壁では、試料 13 で中間型などの火山ガラスが出現しはじめ、試料 10 および試料 9 に無色透明のバブル型ガラスの出現ピークが認められる。また試料 2 や試料 1 にも多くの火山ガラスが含まれている。これらの試料には、無色透明のバブル型ガラスのほか、淡褐色や褐色など有色のバブル型ガラスも認められる。

一方、重鉱物組成では、試料 17 のテフラ層に斜方輝石や單斜輝石が多く含まれている。また試料 13 にも、斜方輝石や單斜輝石の出現ピークが認められる。試料 10 や試料 9 には、角閃石が若干ながらより多く含まれる傾向にある。

以上のことから、試料 17 や試料 10 のテフラ層、さらに試料 7 に含まれる橙色軽石のほか、試料 13 付近に中間型ガラスや、斜方輝石および單斜輝石で特徴づけられるテフラ、試料 2 付近に有色のバブル型ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準のある可能性が指摘される。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

テフラ組成分析の対象となった 16 試料について、位相差法（新井、1972 など）をもとに開発された温度変化型屈折率装置（RIMS86）により、テフラ粒子の屈折率測定を試みた。

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を表3に示す。C 区東壁の試料 18 については、測定対象となる粒子が非常に少なく測定が困難であった。C 区東壁の試料 17 に含まれる斜方輝石の屈折率 (γ) は、 $1.704 \sim 1.707$ である。試料 16 および試料 14 に

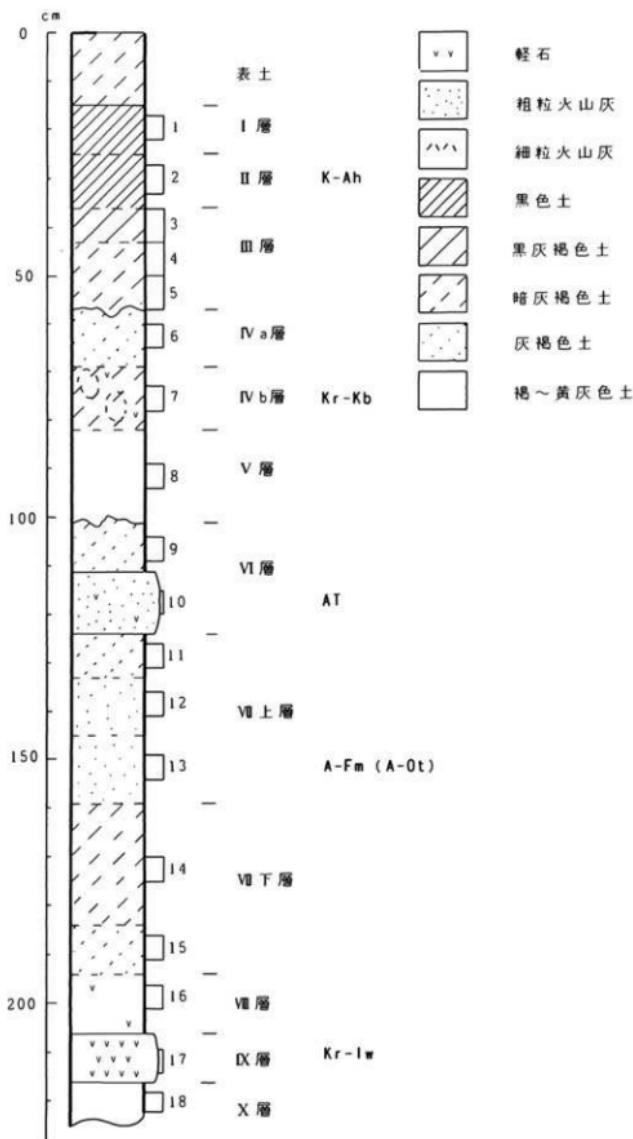
含まれる斜方輝石の屈折率 (γ) は、 $1.705 \sim 1.707$ である。試料 13 および試料 12 に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は、 $1.498 \sim 1.501$ である。試料 10 に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は、 $1.499 \sim 1.500$ である。試料 9 および試料 8 に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は、 $1.499 \sim 1.501$ である。試料 7 に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は、 $1.500 \sim 1.501$ である。試料 6 に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は、 $1.498 \sim 1.501$ である。試料 4 に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は、 $1.497 \sim 1.499$ と $1.506 \sim 1.509$ である。試料 2 に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は、 $1.497 \sim 1.499$ と $1.506 \sim 1.512$ である。試料 1 に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は、 $1.496 \sim 1.501$ と $1.505 \sim 1.512$ である。

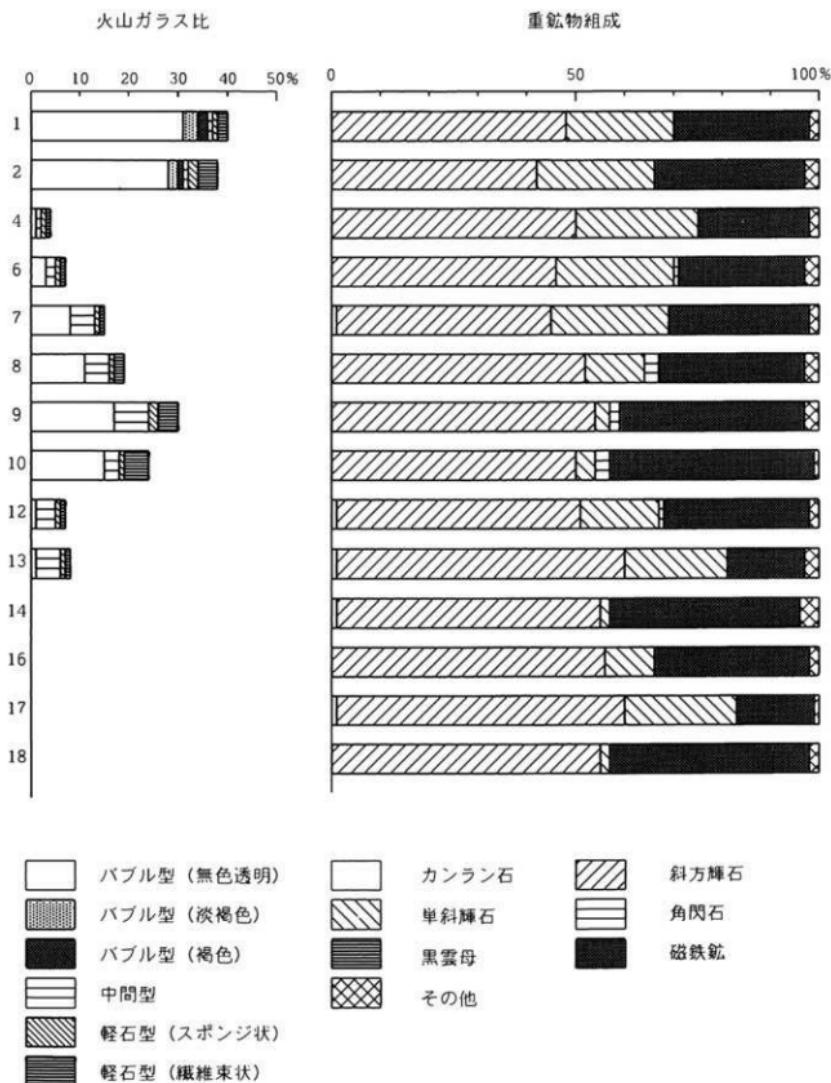
C 区西壁の試料 3 に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は、 $1.496 \sim 1.500$ と $1.508 \sim 1.509$ である。また試料 2 に含まれる火山ガラスの屈折率は、 $1.496 \sim 1.501$ と $1.507 \sim 1.508$ である。

5. 考察

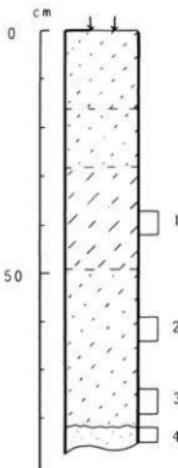
試料 17 (IX 層) のテフラ層は、層相や重鉱物の組み合わせ、さらに斜方輝石の屈折率などから、約 $4 \sim 4.5$ 万年前に霧島火山から噴出したと推定されている霧島イワオコシテフラ (Kr-Iw、遠藤ほか、1962、町田・新井、1992、2003) に同定される。試料 13 (VII 上層下部) 付近に降灰層準があると思われるテフラについては、火山ガラスの形態や屈折率などから、約 3 万年前 *1 の姶良大塚テフラ (A-Ot、長岡、1984、町田・新井、1992、奥野ほか、2000、長岡ほか、2001) あるいは約 2.65 万年前 *1 の姶良深港テフラ (A-Fm、Nagaoka、1988、町田・新井、1992、奥野ほか、2000、長岡ほか、2001) と考えられる。本遺跡とその周辺では後者の方がより厚く分布していることから、後者に由来する可能性がより高いようと思われる。

試料 10 (VI 層下部) のテフラ層は、層相や火山ガラスの特徴などから、約 $2.4 \sim 2.5$ 万年前 *1 に姶良カルデラから噴出した姶良 Tn 火山灰 (AT、町田・新井、1976、1992、松本ほか、1987、村山ほか、1993、池田ほか、1995) に

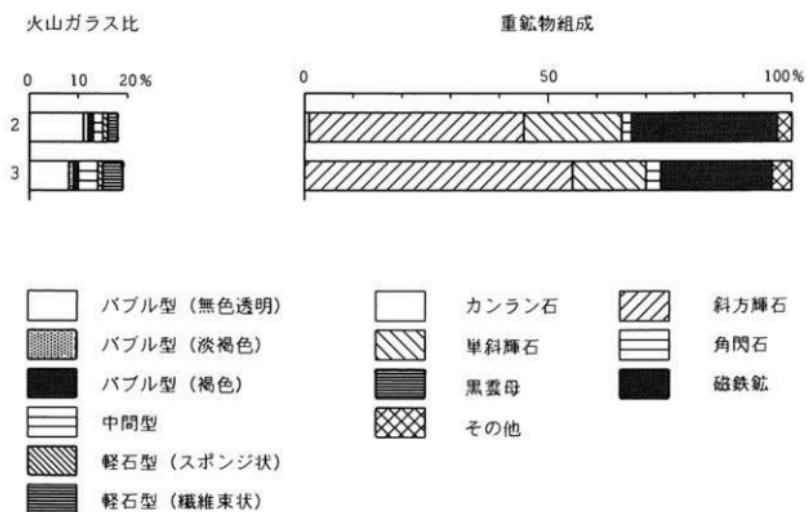




付章第2図 C区東壁のテフラ組成ダイヤグラム



付章第3図 C区西壁の土層柱状図（数字はテフラ分析の試料番号）



同定される。また試料7(IV b層)に含まれる橙色軽石については、層位や岩相などから、約1.4～1.6万年前*1に霧島火山から噴出した霧島小林軽石(Kr-Kb、伊田ほか、1956、町田・新井、1992、早田、1997)に由来すると考えられる。試料2(II層)に多く含まれるテフラは、火山ガラスの形態や色調さらに屈折率などから、約6,300年前*1に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah、町田・新井、1978)に由来する火山ガラスが混在していると考えられる。なお試料4(III層中部)にも、K-Ah起源の火山ガラスが混在している可能性もあるが、K-Ahより下位の桜島起源の完新世テフラも混在しているかも知れない。

C区西壁の試料3および試料2には、火山ガラスの形態や色調さらに屈折率などから、ATのほかにK-Ahに由来する火山ガラスが含まれていると考えられる。またこれらの試料に含まれる角閃石については、その層位から約4,200年前に霧島火山から噴出した霧島池野軽石(Kr-M、町田・新井、1992)に由来するのかも知れない。

以上のことから、VI層上部から検出されている石器はATのすぐ上位、V層上部からIV b層の石器はKr-Kb層準付近、IV a層からIII層下部の石器はKr-Kbより上位でK-Ahの下位、III層中部からII層にかけて検出されている石器は、K-Ahの上下に層位があると考えられる。

6. 小結

野首第2遺跡において採取した試料を対象に、テフラ組成分析と屈折率測定を行った。その結果、本遺跡には少なくとも下位より霧島イワオコシテフラ(Kr-Iw、約4～4.5万年前)、姶良深港テフラ(A-Fm、約2.65万年前*1)、姶良Tn火山灰(AT、約2.4～2.5万年前*1)、霧島小林軽石(Kr-Kb、約1.4～1.6万年前*1)、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah、約6,300年前*1)やそれらに由来するテフラを検出することができた。

*1 放射性炭素(14C)年代。おもな旧石器時代の指標テフラの歴年較正年代は次のように考えられている(長岡ほか、2001、町田・新井、2003)。

姶良Tn火山灰(AT): 約2.6～2.9万年前

姶良深港軽石(A-Fm): 約3.1万年前

姶良大塚軽石(A-Ot): 約3.25万年前

文献

- 新井房夫(1972)斜方輝石・角閃石によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究、11, p.254-269.
- 遠藤尚・杉田剛・法元紘一・児玉三郎(1962)日向海岸を構成する段丘について。宮崎大学学芸紀要、14, p.9-28.
- 伊田一善・本島公司・安国昇(1956)宮崎県小林市付近の天然ガス調査報告。地調報告、no.168, p.1-44.
- 池田晃子・奥野充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫(1995)南九州、姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による14C年代。第四紀研究、34, p.377-379.
- 町田洋・新井房夫(1976)広域に分布する火山灰—姶良Tn火山灰の発見とその意義。科学、46, p.339-347.
- 町田洋・新井房夫(1978)南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰。第四紀研究、17, p.143-163.
- 町田洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス。東京大学出版会、276p.
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗(1987)姶良Tn火山灰(AT)の14C年代。第四紀研究、26, p.79-83.
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村真・安田尚登・平朝彦(1993)四国沖ビストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討—タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の14C年代。地質雑誌、99, p.787-798.
- 長岡信治(1984)大隅半島北部から宮崎平野に分布する後期更新世テフラ。地学雑誌、93, p.347-370.
- Nagaoka, S.(1988) The late Quaternary tephra layers from the caldera volcanoes in and around Kagoshima Bay, southern Kyushu. Japan. Geogr. Rept. Tokyo Metropol. Univ., 23, p.49-122.
- 長岡信治・奥野充・新井房夫(2001)10万～3万年前の姶良カルデラ火山のテフラ層序と噴火史。地質雑誌、107, p.432-450.

付章第6表 火山ガラス比分析結果(上)・重鉱物組成分析結果(下)

地点	試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
C区東壁	1	77	8	4	2	1	4	154	250
	2	71	5	3	2	6	9	154	250
	4	3	0	0	1	2	3	241	250
	6	8	0	0	6	1	3	232	250
	7	19	0	0	13	1	3	214	250
	8	27	0	0	14	1	4	204	250
	9	44	0	0	17	4	9	176	250
	10	39	0	0	7	1	12	191	250
	12	1	0	0	11	2	2	234	250
	13	1	0	0	13	1	3	232	250
	14	0	0	0	0	0	0	250	250
	16	0	0	0	0	0	0	250	250
	17	0	0	0	0	0	0	250	250
	18	0	0	0	0	0	0	250	250
	2	28	1	1	4	1	5	210	250
	3	8	1	1	11	1	11	205	250

数字は粒子数。bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, cl: 無色透明, pb: 淡褐色, br: 褐色, sp: スポンジ状, fb: 織維束状。

地点	試料	ol	opx	cpx	ho	bi	mt	その他	合計
C区東壁	1	0	121	54	0	0	70	5	250
	2	0	106	60	0	0	77	7	250
	4	0	123	63	0	0	60	4	250
	6	0	116	59	2	0	67	6	250
	7	3	110	61	0	0	73	3	250
	8	0	131	29	9	0	75	6	250
	9	0	136	8	5	0	95	6	250
	10	0	125	11	9	0	103	2	250
	12	2	124	41	1	0	76	6	250
	13	3	147	52	0	0	41	7	250
	14	2	137	4	0	0	98	9	250
	16	0	141	26	0	0	79	4	250
	17	1	149	58	0	0	40	2	250
	18	0	139	5	0	0	101	5	250
	2	2	111	50	4	0	77	6	250
	3	0	138	36	8	0	58	10	250

数字は粒子数。ol: カンラン石, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, ho: 角閃石, bi: 黒雲母, mt: 磁鐵鉱。

付章第7表 屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス (n)	斜方輝石 (γ)
C区東壁	1	1.496-1.501, 1.505-1.512	-
C区東壁	2	1.497-1.499, 1.506-1.512	-
C区東壁	4	1.497-1.499, 1.506-1.509	-
C区東壁	6	1.498-1.501	-
C区東壁	7	1.500-1.501	-
C区東壁	8	1.499-1.501	-
C区東壁	9	1.499-1.501	-
C区東壁	10	1.499-1.500	-
C区東壁	12	1.498-1.501	-
C区東壁	13	1.498-1.501	-
C区東壁	14	-	1.705-1.709
C区東壁	16	-	1.705-1.709
C区東壁	17	-	1.704-1.707
C区東壁	18	-	-
C区西壁	2	1.496-1.501, 1.507-1.508	-
C区西壁	3	1.496-1.500, 1.508-1.509	-

屈折率の測定は、温度変化型屈折率測定装置 (RIMS86) による。

奥野 充・福島大輔・小林哲夫 (2000) 南九州のテブロクロノロジー最近 10 万年間のテフラ、人類史研究、12、p.9-23。

第3節 炭化種実同定とその結果

本遺跡では、古墳時代の竪穴住居跡 (SA03・05・09) および縄文時代早期の集石遺構 (SI75) の配石間から採取した土壌について、ウォーター フロー テーションを実施し、一定の炭化物を得た。

これらの一部について炭化種実の可能性を検証するため、センターにおける選別作業を経た 21 ケースのサンプルについて、古環境研究所に炭化種実同定業務を委託した。

結果から述べると、ほとんどのサンプルが種実ではない炭化物片であったが、栽培植物であるアワ、二次林要素のカラスザンショウなどの同定結果も得られた。ここでは、表のみを次頁に示し報告とする。

付章第8表 炭化種実同定結果

No.	遺構種別	分類群	和名	部位	個数	備考
1	S43-B7	Zanthoxylum ailanthoides Sieb. et Zucc.	カラスザンショウウ	種子片	1	種実ではない。
2	S43-E6		炭化物片		4	種実ではない。
3	S43-G5		炭化物片		2	種実ではない。
4	S45-NE区中央	<i>Setaria italica</i> Beauv. <i>Hypoxis aurea</i> Lour.	アワ ヨキンバイザサ	果実 種子	1 1	種実ではない。 種実か、どうか不明
5	S45-NE区中央下層	Unknown	炭化物片		4	種実ではない。
6	S45-NE区中央上層	Unknown	炭化物片		1	種実か、どうか不明
7	S49-B9		炭化物片		1	種実ではない。
8	S49-C8		炭化物片		1	種実ではない。
9	S49-D2		炭化物片		3	種実ではない。
10	S49-E2	<i>Setaria italica</i> Beauv.?	アワ? アリ?	果実 不明	1 1	種実か、どうか不明 種実か、どうか不明
11	S49-E4	Unknown	炭化物片		1	種実か、どうか不明
12	S49-E7		炭化物片		2	種実ではない。
13	S49-F7	Zanthoxylum ailanthoides Sieb. et Zucc.	カラスザンショウウ	種子	1	種実ではない。
14	S49-F8	Unknown	炭化物片		4	種実ではない。
15	S49-G4		炭化物片		1	種実か、どうか不明
16	S49-G5		炭化物片		3	種実ではない。
17	S49-H5	Unknown	炭化物片 不明種実		1	種実ではない。
18	S49N区中央焼土		炭化物片		4	種実ではない。
19	S49中央灰		里縫		2	種実ではない。
20	SC2下層		炭化物片		1	種実ではない。
21	SI7西石下塔		炭化物片		1	種実ではない。



1. 縄文後期中葉の竪穴住居跡（1）SX01 床面



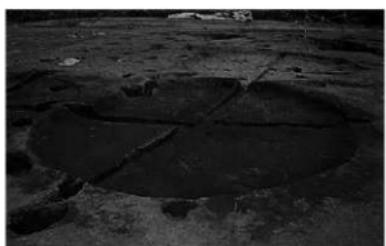
2. 縄文後期中葉の竪穴住居跡（2）SX01 遺物



3. 縄文後期後葉の竪穴住居跡（1）SA20 遺物



4. 縄文後期後葉の竪穴住居跡（2）SA20 完掘



5. 縄文後期後葉の竪穴住居跡（3）SA21 床面



6. 縄文後期後葉の竪穴住居跡（4）SA22 完掘



7. 縄文後期後葉の竪穴住居跡（5）SA26 床面



8. 縄文後期後葉の竪穴住居跡（6）SA26 遺物

巻末図版 2



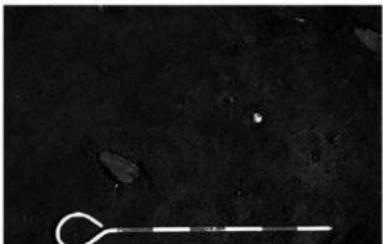
9. 縄文後期後葉の竪穴住居跡（7）SA26 磚



10. 縄文後期後葉の竪穴住居跡（8）SA30 床面



11. 縄文後期後葉の竪穴住居跡（9）SA33 床面



12. 縄文後期後葉の竪穴住居跡（10）SA33 遺物



13. 縄文後期後葉の竪穴住居跡（11）SA35 床面